三月一日發行

明治卅三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十五年二月廿三日印刷納本
（毎月一回廿三日印刷納本）

女學世界



第十二巻
第四號

博文館


レート白粉
東京
大阪
平尾賛平
オヤいゝ匂ひ
桃の花でもあるのか知らと
窓開かけて氣がついた
先き自分で化粧した
レート白粉の
その薫り！

四月一日より

第廿三回新柄陳列會

寄切見切反物大賣出し

懸賞裾模様圖案の陳列

東西諸大家新作畫幅展覧會

懸賞募集寫眞「山と水」の陳列

右の通り特別盛大に開會仕り間御來遊被下度尚

五月一日より

第四回兒童博覽會

をも開會可仕、賑々しく御來遊の程奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

女學世界

第十二卷第四號

三月號目次

クラブ新聞

◉大火事と女の顔

何だか三題話めいて聞えるが實は此程大阪に大火のあつた折煙と火焔に追捲られた婦人連が騷ぎの鎭つた後石鹼で顔を洗つて見ると煤烟と塵埃が火氣の爲めに顔に燒付いて思ふやうに落ちなかつたが斯かる時こそと試にクラブ洗粉を使つて見たらば難なく綺麗サツパリとなつたのでクラブは石鹼よりも利目があると益々評判を高めて居る。

▲齒磨に種々あり然れども最も完全に衞生に適ひ齒牙の淸美を整ふるものはクラブ齒磨

◉●●●美しい子

美しき夫婦の間に美しき子孫の生まるゝは原則によりて明かなり、クラブ齒磨、クラブ白粉、クラブ洗粉によりて皮膚の美しくなりたる夫婦の間に生れし子孫は、又其皮膚の美しき事論を俟たず。

豪い違ひ

賢一「文ちやんやつしてるね
文子「アラやつしやしないわ
賢一「だつてクラブの香がしてるよ
文子「だけどクラブ白粉の美しい化粧はおしやれやなくつてよ
賢一「だつて僕が昨日鼻の先きに白粉をつけたらお母樣がおしやれつて仰在つたよ
文子「男が白粉をつけるとさうだけれども姉ちやんのはおしやれじやなくつて身嗜なみと云ふものよ
賢一「さうだれおしやれと身嗜とは全く違ふんだなあ



目引袖引

夜目遠目傘の内で白て美いから成駒屋だの、高砂屋だのと大向ふから聲がかかりがする、然し素人が之を眞似て、白晝大道を歩行かうものなら、夫こそ狂人扱にせられるお化だ、狂的だとは、往かう人の目引袖引噂する處に違ない、最も分明やすい事實は、市川齋入がお染の役に扮して其七十の老體が、尚、觀客から、二八あまり、油屋の娘に見るでは無いか、俳優の化粧なるものは、彼等が持役を生ず處の一つの扮裝技術である。（石川天風）

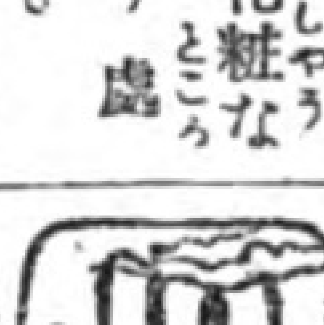
倶樂部川柳

面笑子撰

新夫婦聞けばクラブの愛用者
洗面の水に洗紛も添へて出し
石鹼で落ないからと洗粉にて
名物の水とクラブで磨き上げ
一致してクラブを使ふ新家庭
洗粉の素顔で受ける姉藝妓

◉美しい顔

顔の輪廓には好不好があつて瓜實顔が好いと云ふ人と丸ポチヤが好いと云ふ人があつて一定した規準がないが美しい顔は肌理が細かで血色が鮮やかで光澤があつて而して初々しく見へると云ふ四要件を備へればならぬ事には何人も異論もないが此の四要件を完全に充實せしめるにはクラブ洗粉クラブ白粉クラブ齒磨の愛用が何よりも大切である。



東京だより

●●●●上中流の婦人化粧はこれ迄區々なりしが近來素人化粧は高尙ならざる可らずとの見解倍に勢力を得ると同時にクラブの薄化粧は殆んど一般の流行となりつゝあり▲●●●●各女學生間に於ても俳優式化粧は心ある婦女子の排斥すべきものなりとの議論漸く高くなつたる爲め俳優利用の化粧品に對する好尙次第に薄らぎ專ら高尙なるクラブ化粧品を愛用する傾あり▲●●●●三越白木屋等の各大吳服店を始め市内至る處の化粧店小間物店に於ても上記の關係よりクラブ化粧品の賣行益々盛況を極めつゝあり。

造花術は近來長足の進歩を
なし造花は將來益々流行せんとす

造花材料書籍

科目 一 造花器具及材料。造花及半製品。摘細工材料
一 袋物材料。刺繡材料。造果材料。瓶細工材料

實用造花自在（正價金壹圓廿錢 郵稅八錢）

實用造花圖譜（正價壹圓 郵稅六錢）

造花自在は造花の秘術を說き盡す造花秘術の鍵にして造花圖譜は七十一花種の瓣、葉、萼等の切形に一々鮮麗なる石版數度刷の着色を施したるを以て斯技に從事する者必携の好著なり

◉造花材料營業目錄及營業見本等御入用の方は左下方の切取に郵券二錢を添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

東京九段坂 造花原料商 **吉住商店**

特長電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番

切取線

女學世界三月號

筝曲通信教授所御撰定 琴曲大家御證明付
新案特許願六六四三八五號

坂本式

琴糸しめ機

先着壹千組限特價特製金四圓 並製金三圓 送料八錢

本機の特色

一 此琴糸しめ機は從來の物と異なり機械完全用方最も簡便にして御婦人方は勿論子供にても易くしめ得らるゝ樣に出來て居りますから如何に素人のお方でも僅か二三分時間にて十三の糸を自身の思ふまゝにしめたりゆるめたりする事が出來ます

一 此機は少しも琴の糸をいためる事なく且つ其形を傷くる事もなく之を裝置すれば反て裝飾となり從來の優美なる琴の形に一層の光輝を添ふる者で有ります

一 此機械を裝置すれば琴の音色が著しく良くなります例へば十圓の琴は二十圓以上の音色となります

一 此機は二三分時間にて糸をしめ又はゆるめる事が出來ますから演奏會などにて三絃尺八其他の樂器と合奏を成す場合に琴柱を動かさずして自由に調子の上げ下げが出來ますから大なる便利を得られます且つ音色が良くなると調子の自由が利きますから假令半琴をお持ち遊ばしても其効力は本間のお琴と異なる事はありません

此他種々の特長を有し從來琴の缺點を補ひて餘りあり専門家及び愛琴諸賢の希望者日に多きを加ふ日進月歩の照代速に之を備へて斯界の指導者と成り給へかし

發賣元 福岡縣福岡橋口町 **勝野樂器店** 振替福岡四四四四番

女(いの一)



(いの四)

花咲く頃



最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより(隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進)して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て(有効簡便に使用する適當の婦人藥)なきに因る一大缺點なり

而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を達するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は(直に輕快全癒する驚くべき卓効)ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尙ほ梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

定價

八球入五拾錢〇
拾八球入壹圓〇
四拾球入貳圓〇
特製百拾個入五圓
〇內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神町一丁目五十三番地

唯一丸發行所　中西葆光堂藥局

振替貯金東京口座、千五百番)電話(下谷五四七番)

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

女(ろの一)

造花術獨習の唯一機關出でたり
此際入會者に限り種々の特典を與ふ

造花の修得は 家庭の幸福

造花術は花簪、花輪、花籠、及教育參考品たる植物の標本室内の裝飾各種の徽章或は冠婚葬祭贈答に適すべき花卉其他の美術品を製作するものにして婦人日常の娯樂として修得せらるべきは勿論一般の家庭に内職として有利の業なり

新學期開始

美術 造花講義錄

造花の修得は 婦女の優技

速成貳ケ月卒業

會費 全學期分 金三圓也

本會發行の講義錄は本會講師が多年苦心の結果完成せる最新式のものにして講義錄の外二十餘種の原料十餘種の器械に製品見本十數種を添へて會員に頒つものにして是れによつて修得せば僅々二ケ月にして男女の別なく老幼を問はず容易に熟達し得るものなり

製品見本つき 規則書郵券拾錢送れ送附す

東京市神田區西小川町一ノ一 振替口座東京九一四八番 美術造花講習會

◎繪葉書目錄◎ 無代進呈◎三重縣桑名郡香取◎繪葉書俱樂部本部 貸本俱樂部會則◎等各ハガキで申込次第

●●色白くなりたき人、にきび、そばかす、ふきでもの等を治さうと思ふ方は 一博士三學士の研究になる最新治療書 美容の鏡 を見られよ此際郵券六錢封入東京京橋本湊町六濟生堂宛申込あれば無代進呈●

月やく下し

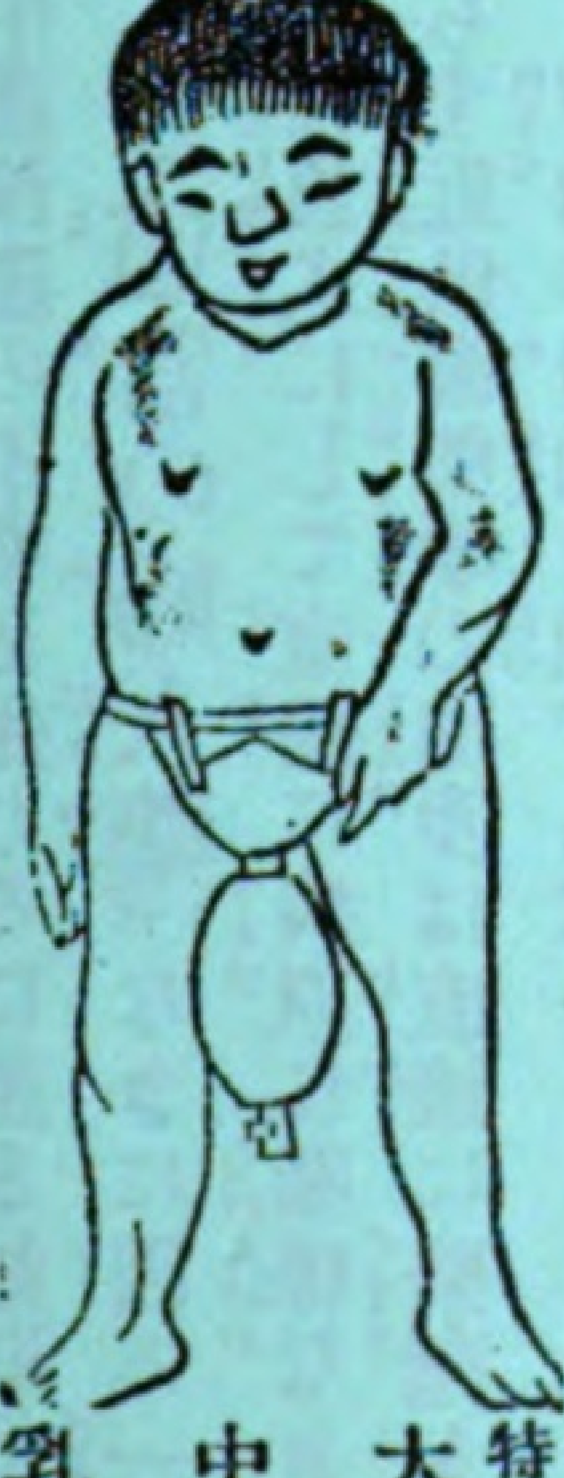
產科婦人科專門大醫 大和田宗順先生方劑
帝國大學藥學專攻藥劑士 玉應勝海謹製

快月丸は子宮を痛めずいか程長き月經とまりも容易に流下す二三ヶ月滯りは一劑又は二劑にてすぐ下る請合なり又半年以上のとまり又は血塊には特製を服用せば快く下る子宮病血之道を治し血液を增加す

定價一劑六拾五錢 二劑壹圓貳拾錢 特製貳圓 郵券代用一割增

東京市小石川大塚辻町十七番地 天信堂藥局

男女 ●ね小便袋●



●子のある親病人ある家には必ず一器を備へられよ本品は舶來特種のゴム製品故永久使用し得らる洗濯の世話なく蒲團衣裳を汚せず、ね、をきたち、すわり自由

特製大人用 二圓
大人用 一圓九十錢
中人用 一圓十錢
乳兒用 九十錢

◎本品に男女の別あり御指定を乞ふ 送料八錢

大阪南區内安堂寺町壹丁目 振替口座大阪九七五〇番 小塚春光堂

千代田香油



（嬉しいこと）
美ちやんの．．赤い毛も
花ちやんの．．縮れ毛も
芳ちやんの．．脱毛も頭垢も
皆美しくなりました、
之れ全く千代田香油の
賜と喜んで居ります。

定價
七十錢
三十五錢
二十五錢
十七錢

英國製スワン石鹸日本一手發賣元

本舗 東京日本橋區馬喰町四丁目 山岸三之助

振替口座東京二〇五〇〇番　電話浪花三七九三番

英國製 スワン浮石鹸

如何に寒さが烈しくも決して肌の荒るゝことなく少なく使ふて泡立ちの心知よさ偽物ありスワン鳥に御注意を希ふ

家庭用

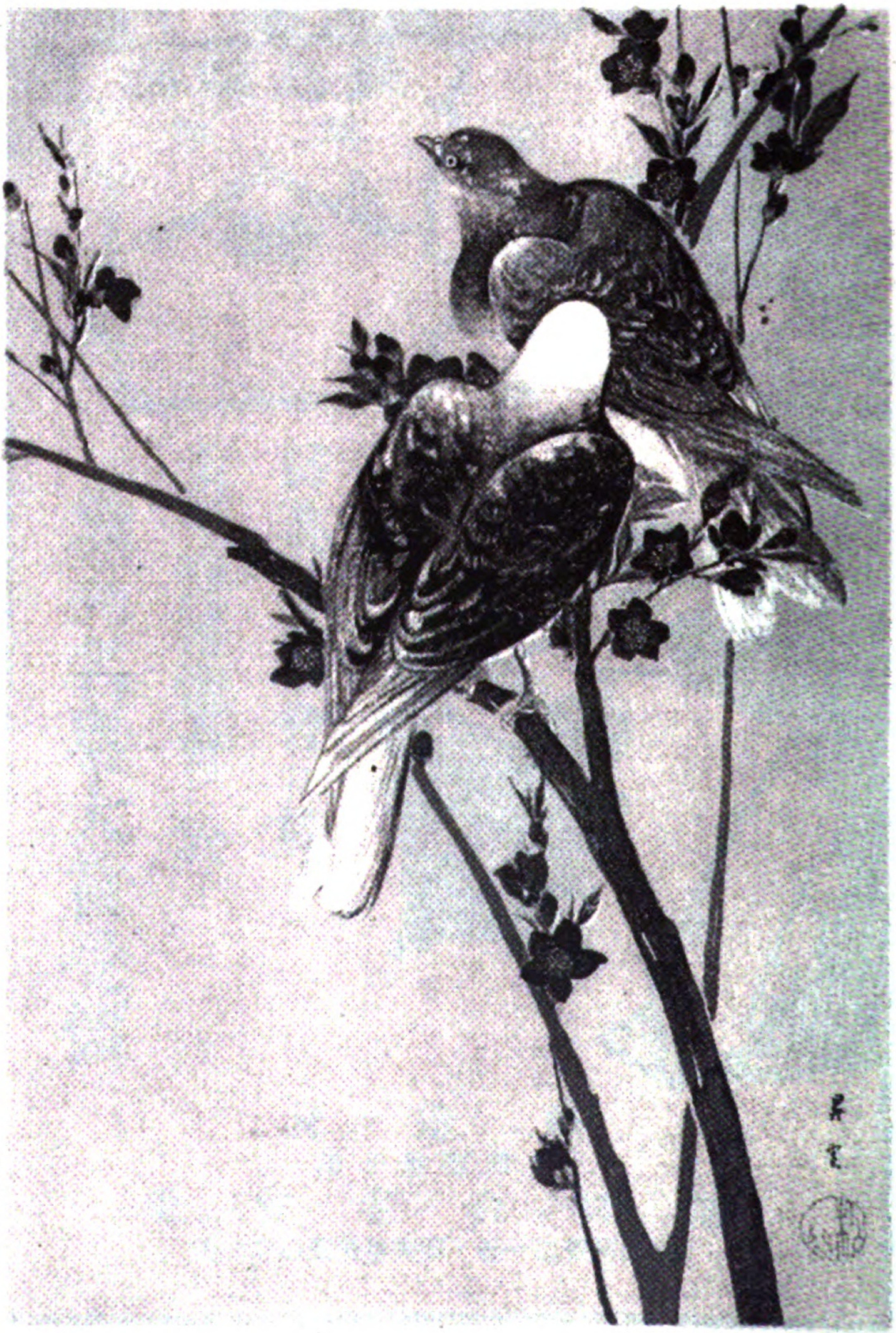


千代田香油本舗
山岸三之助

價安くて泡立ちよく高評なり

（その四）

うらゝか



山本昇雲筆


最上醤油
元祖
上
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番 振替口座五〇二一一番

(はの一)

羽仁もと子主筆

婦人之友

三月號　定價一冊　十八錢（郵税一錢五厘）　半年分郵税共一圓八錢　一年分郵税共二圓十錢

◎如何に娘を教育すべきか

■私の娘を教育する方針　安部磯雄
■女學校卒業後の躾け　山脇房子
■出來るだけ働かせる主義　早川きた子
■家事練習の時間に同し　岡山陽子
■學校教育信ずべからず　某夫人
■娘はノンビリと育てたい　目賀田逸子
■三人の娘を斯して躾けました　岩下幽香子
■娘の體格問題　井上友子

◎婦人の男性……文學博士　三宅雪嶺

◎運不運は天命か……　羽仁もと子

▽若き女の權威　宮田脩
▽生活難を救ふの道　寺田勇吉
▽算盤以外の生活法　山路愛山
▽子供と入浴　醫學博士　加藤照麿
▽子供の頭腦をよくする育て方(三)　羽仁もと子
▽女中の躾け方(二)　加藤常子

●復習のさせ方　羽仁もと子
●各畫にあらはれし子供　倉橋惣三
●油繪のかけ方　高村光太郎
●學校行の子供の袴　齋藤春代
●裾廻しの研究　記者
●子供をつれて雛を見にゆく記　笹木幸子
●小さいお客樣へ　水町たづ子
●三月のお惣菜
●文藝其月日　河井酔茗
●家政問答　羽仁もと子

東京小石川雜司ケ谷町　婦人之友社　電話番町三六九八番　振替東京一一六〇〇番

大(はの二)

全治確證
わきが
新治療藥ピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及肉の組織に吸收せられ其組織にある**毒素を潔清驅逐**して**惡臭を根底より全滅**せしむる作用を有し難症とする最近發見の特種の新劑にして如何程**頑固劇烈**の重症も甲價特別製を用ひよ必ず全治し**決して再發**或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ●いんきん●たむし●ひぜん●なまづ●くさ●しらくも●等すべて類似の皮膚病に對し効驗あり丙價七拾錢乙價壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢

月經新劑
月やく下し
藥名メリンピル

本劑は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三ヶ月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は**血塊**にには特製を用ひよ安全に**流經**す本劑は効能極て**強烈**なる**毫も**子宮**身體に害なく**たやすく下る月經不順より起る子宮病血の道を全治し古血を一掃す近頃紛しき類似藥續々顯る用藥者深く注意を乞●半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢

全治確證
無痛全治する特効藥
ぢを治す
Haemorrhoidal

從來迂遠なる内服藥に治績を委ね適切なる治方を講ずる者少し本劑は近世醫學界の貴重なる新藥を以て座藥に調製し之を肛門内に挿入するも少しも**疼痛**を覺えず體溫の爲め徐々適切に溶解し直接病患部に作用し**穴痔いぼ痔烈痔**蓮痔脱肛又は痔瘻の初期等痔病一切に對して偉大なる効顯を奏す價半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

にきびそばかす
Comedo-Galbe

コメトザルベーは男女青春の時期に多く發生する**ニキビ、ソバカス**吹出物に對し最も特効を有する合劑なる事は專門大家の等しく認むる所にして是れを顔面に塗擦するも芳香無色にして人に知らるゝ憂なく**皮脂の分泌**を速にしニキビを治し又皮膚の新陳代謝を盛んならしめソバカスを除き病因を根本的に全治せしむ速に用ひて天賦の美貌を全ふせよ●輕症用五拾錢●重症用壹圓●頑固症用貳圓

注意―各藥共に小包料拾貳錢と●ラビヨン●ハンドコロン●ベクネス●ニキビ藥●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合拾五錢藥價の外に拂込下され度▲爲替は神田猿樂町局振宛

色の白くる
ハンドコロン容液

本劑は歐米貴紳淑女紳士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし**本劑の力**は皮膚の新陳代謝を盛にし且つ**漂白性**あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に**白色艶美**となる價A印並製壹圓B印特製壹圓五拾錢

毛のはへる
毛髮生養液
原名ベグネス

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ價並製壹圓卅錢特別製貳圓

獨逸撰方効驗一夜に顯る
りん病
新治療藥キローン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病にせうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分惡性慢性には特製を用よ速に奏効す本劑を内服すれば強度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を驅逐し人知れず病根を斷絶す輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

根治確證
新治療藥
梅毒
ギーネル
GIINEL

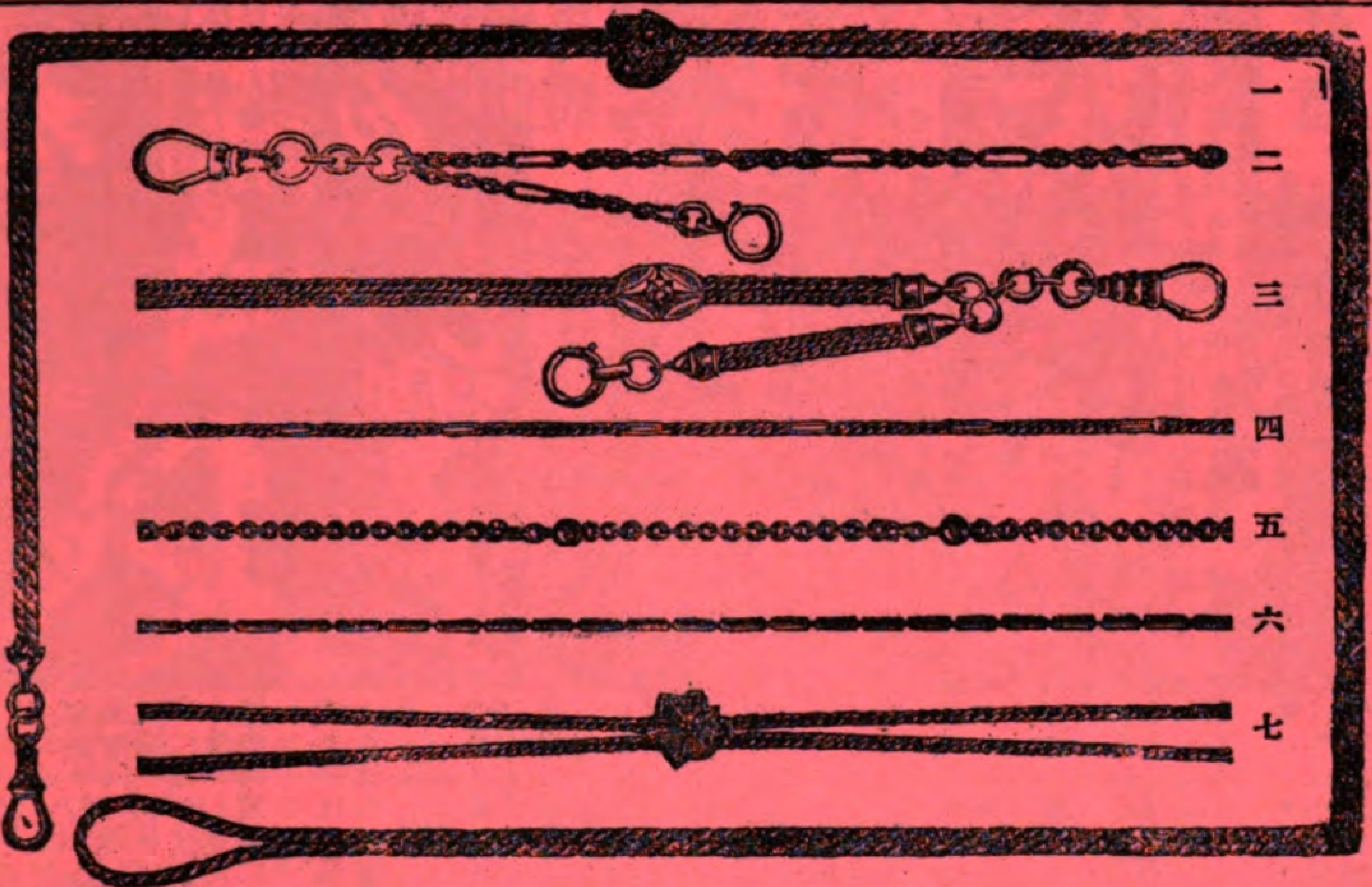
本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小便にとり**如何なる劇烈の**梅毒●そう毒●かさり●ふきでもの●よこね●かんそ●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必大効あり輕症は半劑惡性重症は二劑用よ誓て奏効す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

新治療藥
らい病
ダービンの發見
DERVIN

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者なる本劑に優る者なしとして其有効**確實**し試に一劑分丈けも用ゐ見よ**必ず大効**あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

專賣
東京神田區小川町四十
オリエンタル藥館

女(はの三)



御婦人用時計鎖

(一) 九金製〆縄緒締眞珠入首掛鎖　金拾九圓

(二) 十八金製一本立　金拾七圓

(三) 十八金製〆縄緒締ダイヤ入首掛鎖　金八拾圓

(四) 十八金製一本立　金拾五圓

(五) 十八金及白金製眞珠ツナギ一本立　金三拾圓

(六) 十八金管ツナギ一本立　金拾貳圓

(七) 十八金及白金製ダイヤ入首掛鎖　金五拾七圓

此外各種の御鎖り幷に流行の御時計類は弊店雑誌（よそほひ）に洩なく相掲げ候間御一覧の上御好の品御用命奉願上候

振替口座東京九二九三番

東京京橋南傳馬町

大西白牡丹

電話京橋三〇番　三一番



若草

北野恒富筆


◉藥學士藤本先生新發明
毛髮脫落者の福音として新に發明せらる本液「ピローゲン」は藥事界の耆宿藤本氏が、在來世に流行する毛生劑の不完全なるの餘り多年の研鑽により て些の毒劑を加ふる事なくして全く生毛の實を得る本液を發明せられたり
◉ピローゲンは主として身體中毛の生ずべき部分に毛のなき難者よ塗布して直ちに効驗を顯はす早く試見よ譬へば御婦人紳士の
◎薄毛◎はげ◎眉毛、◎ひげ◎禿頭病◎生惡き人◎ぬけ毛を止め◎毛をはやし◎陰毛の缺陷したる等其他あるべき所毛なきに用て毛はへる新藥特擧用て奏効確實なるを保證す
各紳士御婦人よりの禮狀無數なり
本液ピローゲン御注文は收入印紙一錢にて宜ろし振替東京四千五百十四番亦は「かはせ」で注文あれ着金直に送附す
何々雜誌の廣告を見しと御申添の方へ限り壹圓以上は送費無料
定價 大壜金壹圓 小壜金六十錢 特製金貳圓 送費各四錢
東京兩國橫山町三丁目
ピローゲン發賣元
賣藥問屋
玉置文治郞藥房
(電話浪花 五〇一〇番 一五四二番)
不思議の奇藥
眞に嬉い餘り
はへる事請合
生毛液
ピローゲン
はげへくすり


美髮料
髮油
薰司
くんし
香油 壹円 五十錢 三十錢
薰司本舖
東京淺草駒形
百助商店
三越吳服店其の他到る所に特約販賣す
髮の毛のよきは美人たるの生命
薰司に香油と煉梨の二種あり
煉梨 五十錢

表(にの一)

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術よを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する禿膏丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛きを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割増の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●

らい病

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●

・取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ

・醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ヂノサール 一ケ月分 貳圓

複方ヂノサール 一ケ月分 參圓

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ケ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする賣藥者主義の賣藥に非ず

振替口座東京貳參壹壹

電話 刈谷參拾貳番

三河國碧海郡刈谷町

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最確實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ケ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢



博士賞贊良藥

改良 女月丸

◉肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折美愛ぶと〳〵と賞せられし人も年頃になりてより肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は窈窕たる艶白となり誓て美顏美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價		
一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	送料
二劑二圓九十錢	四劑五圓半	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 小宮愛生堂

女（にの二）

新女學

三月一日第三號發行　一冊廿八錢　郵税二錢五厘　半年前金郵共一圓六十八錢　一年前金郵共三圓廿四錢

（卷頭裝飾）

◉至尊兩陛下御製の御歌　坂正臣謹書
雛の組立圖　石版極彩色刷
◉兜巾形琴爪入の型紙　木版
◉椿の花造花參考寫生圖
◉御題入選者植松德子女史と
◉坂本芳子女史の筆蹟

●天々たる桃の三月（市川桃園）●おひゐ樣と手毬●殘雪●石橋と寶船引人形●雛祭●古代雛と銀製の雛道具●美人と折鶴●摘草と潮干狩●水影の富嶽と六阿彌陀詣●編物小供掛布團●手提袋編●物帽子シャツ其等寫眞各種

懸賞募集　臺所設計圖案

▲地震、雷、火事、親父　自心、神也、家事、親父……龜井櫻悟
▲潮の滿干は何に原因するか……佐藤傳藏
▲ツバメの話……石川千代松
▲彼岸のいはれ……島地大等
容貌美と精神……後藤省吾
▲潮干狩から得た海の智識……速水不洗
▲初めて小學校に入學さすべき兒童を有する家庭の心得……村田文次郎
流行に就ての注意……山中甲子
▲簡易なる箏曲の獨習法（六段の調樂話）……淺山紫紅
▲一休和尚と蜷川新左衛門……骨皮道人

▲簡單にて優美なる女兒洋服の仕立方……伊澤峰子
▲八重椿の花の造り方……金子支江子
▲體裁好き兜巾形琴爪入の拵方……加藤長次郎
▲歐米流行新形ハイカラ手提袋の拵へ方……本田きみ子
▲歐米の御料理……金風樓主人
▲中春の質素なる室內裝飾法……契月逸人
昔は雛遊今は雛祭……女かみつれ史
▲此月の摘むべき若菜……小村千代子
▲桃の花……唐橋翠雲
▲お臺所の改良を望む……櫻井ちか子
●歌御會講式●子供に就て可笑かつた實例●花籠●室內遊戲のいろいろ●誌友俱樂部●讀者の聲●編輯部より●三月曆等

雜誌に讀まれず雜誌を讀むべし……理學博士　一戶直藏

此母に此子……文學士　三輪田元道

趣味ある家庭を作れ　東京高等工業學校長　共立女子職業學校長　手島精一

發行所　東京日本橋通　**大倉書店**　振替貯金東京二三八　賣捌　全國各書店雜誌店

女（にの四）

こぶしの花



平福百穂筆

乙鳥



河崎蘭香筆

最見易き琴の譜本

井上胡蝶著

生田流 箏曲新譜

三版卷一定價壹圓參拾錢送料六錢
卷貳卷三定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢
代金引換各金拾六錢増

曲譜目次

卷壹（四季の花 門松 鶴の聲 黑髮 六段 亂 八段 金剛石 夕顏 新高砂 越後獅子 千鳥 茶音度 春の曲 小督の曲）

卷貳（春日影 朝外出 六段 前歌 難波獅子 末の契 松竹梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲）

卷三（松壽萬歲 八千代獅子 雪 九段 巖上の松 新雪 月花凱旋喇叭の曲 四季の詠め 夏の曲 秋の曲）

新譜 箏曲之栞 第一輯

生田流 山田流

定價金壹圓送料六錢 代金引換十六錢増

曲譜（門松 ことぶき 春雨 六段 七草 瀧盡し 御製の曲 水は器 千鳥 菊水 那須野 御國の譽 外數曲）

山田流譜本

江の島	定價三十五錢
櫻狩	同 四十錢
住吉	同 三十五錢
那須野	同 四十錢
菊水	同 三十錢
松上の鶴	同 三十五錢

送料各貳錢宛何れも説明附の頗る美本なり此分に限り郵券代用を諾す但し小爲二册以上は替送金の事

本書の特色と購求者の便利

一 以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一 此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏せらるる事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一 本書の購求者は曲中の不詳は返信料添へ質義あれば無料之が説明教授をなすべし

苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の満足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛 特製貳圓並一圓半 送料各八錢代金引換十四錢増

發行所 福岡縣福岡市外馬出電車通一一〇三番地 箏曲通信教授所

女（ほの一）

女子文壇化粧問題顧問
藤波芙蓉先生實驗發明

純植物性 **あらひ粉**

美髪劑

美顔 **コールドクリーム**

美顔 **艶肌劑**

●あらひ粉定價 七十五瓦入卅貳錢 百五十瓦六拾錢送 小包八錢市內四錢

●美髪劑定價 小三拾錢中五拾錢 大瓶壹圓特製美髪油壹圓五拾錢各小包八錢市內四錢

●クリーム定價 五十瓦入金壹圓 小包八錢市內四錢

●艶肌劑定價 五十瓦入金六拾錢 小包八錢市內四錢

▼本品は皆先生實驗發明御自慢の化粧料なれば有効疑なし速に試みよ

專賣元 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七貳九 女子文壇社代理部

新式記憶術

速成通信教授 會費金壹圓貳拾錢

●本會の新式記憶術は心理應用精妙無限の新案にして、本術に依れば數十百個の事物にても單に一回の見聞を以て直に之を記憶し得るが故に本術を利用する學生諸氏は何程困難なる暗記問題にても默讀一過直ちに且つ永久に之を記憶するを得べし、而して本術には、何人にても容易に習得するを得ること、練習を要せずして直ちに用ひ得らるゝこと實地に應用して偉効を奏し得べきこと、の三大特色を有す。

教授概目

▲從來の記憶術▲現今の記憶術▲新式記憶術の原理▲原則的記憶術▲例外的記憶術▲數學、外國語、法律、地理、歴史及び其他の諸學科に對する各特種記憶術▲各種業務用記憶術▲娯樂的記憶術▲其他數十項

●詳細説明書は此廣告掲載雜誌名記入の上申込あれば無料進呈す

大阪市南區周防町御堂筋南へ入

大阪記憶學會

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗る多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン 定價壹圓 特製參圓 內地送料十五錢 海外三十五錢

飲(ん)で色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠 壹劑壹圓 參劑半參圓 內地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地

百合園製藥所

女(その二)

女（ほの三）



女(ほの四)

名流貴婦人



伯爵世嗣有馬賴寧氏夫人貞子（北白川宮成久王御令妹）

周布男爵家の新粧



樞密顧問官周布公平男令息兼道氏夫人鑑子（副島道正伯令妹）



定價表目錄は御一報次第贈呈

東京銀座一丁目　長電話京橋九七八 九七九

三光堂本店

桃の節句に祝ふ御雛様も
五人囃子あり
樂しき家庭は三光堂の蓄音器
と象印兩面音譜を備へられよ。

支店

東京市淺草區駒形町
長電下谷九八八
大阪市南區順慶町四丁目
電話東一三八三

福岡市博多下西町
電話五〇一
北海道小樽區色内町
電話三二三

女(への一)

婦人世界

三月一日發行　七巻第三號　一册拾五錢　郵税一錢五厘　一年分郵税共二圓五錢

◎舊思想の親と女學生　下田歌子

×手紙の書き方……渡邊白水

×優等生の家庭

私は未亡人として何をするか……鳩山春子

×生徒は悉く四十五圓の月給取の妻……一記者

殘り物でおいしい料理ができる……櫻井ちか子

×子供の叱り方……倉橋惣三

×園藝だより

▼▼空前の大好評を博したる子寶はます／＼佳境に入れり

▼家庭小説『子寶』……村井弦齋

▼▼源次姉弟はいかにせし、その母は如何、必讀せられよ

×古菜漬の始末……婦人記者

×滑稽百話

新婦人國記　福島縣出身の婦人……蘇川漁郎

×納豆を賣って子供を中學に通はす……山田とり子

おとなしい娘は縁遠い……嘉悦孝子

×子供の看護法……加藤博士

×裁縫と迷信

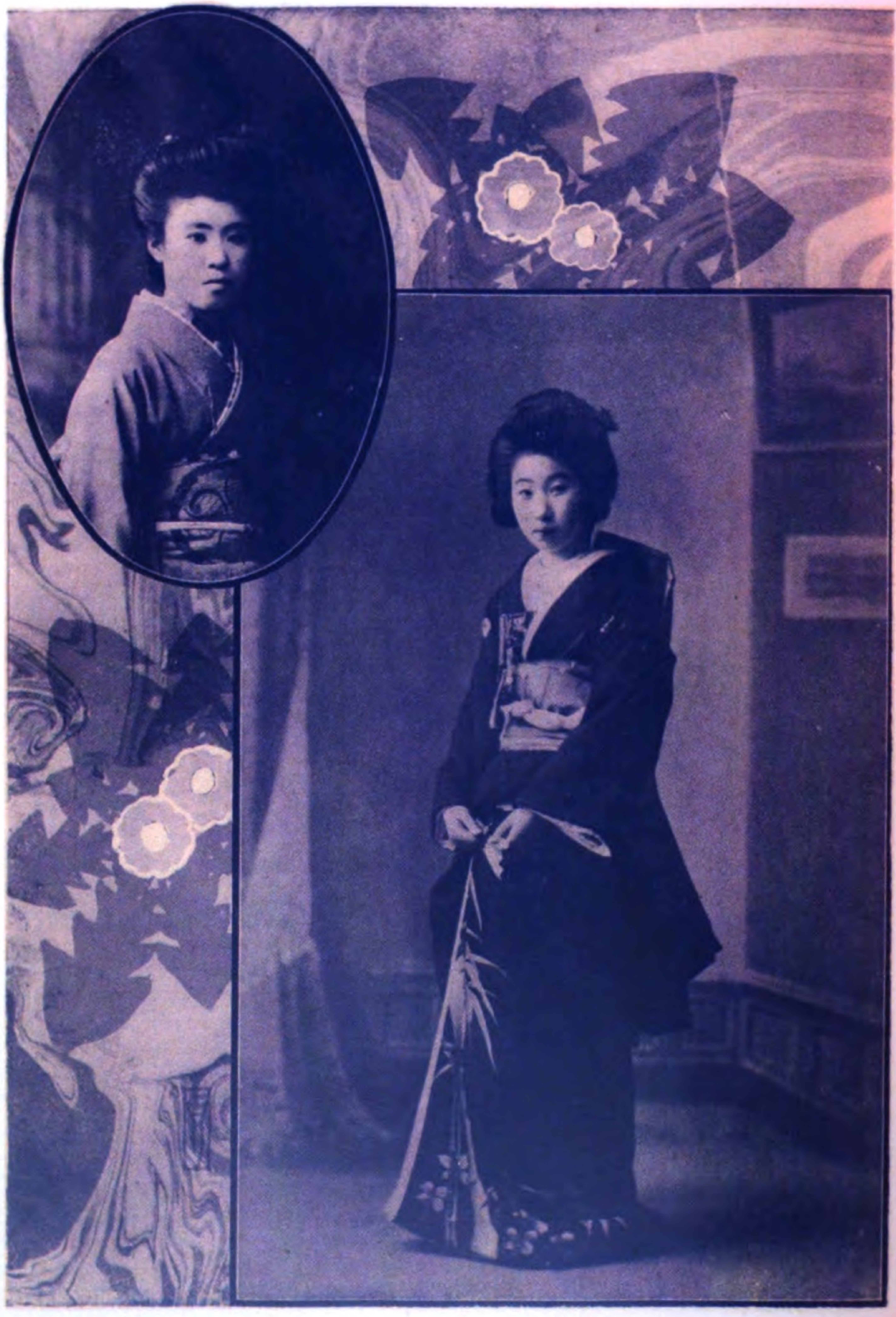
◎破鏡に泣く名家の婦人　慘風悲雨紅涙潸々の大文字

發行所　東京京橋南紺屋町　實業之日本社　賣捌全國書店

女（への三）

六(への門)

春の野



左圖、紳商鈴木三郎助氏令息夫人ひさ子

右圖、紳商久富楠太郎氏夫人たか子

女子大學の三教授



上圖　井上秀子女史、右　手塚かれ子女史、左　篠木幸子女史



◉うへつ方の御用たも蒙る化粧料

高等香油 **チヱリーオイル**

(特効)毛の發育を補く

定價 大八十五錢、中四十五錢、小廿五錢

ふけを去り艶を出しちゞれ、くせ毛を直し

高等 **煉香油チヱリー**

定價 中金三十錢、小二十錢

(特効)フケ取りつやを出し、チヂレクセ毛を直す

舶來煉製 **フヱスおしろい**

定價 金三十五錢 金二十五錢

特本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし

發賣本舖 東京日本橋本町 高橋初次郎 (特電話本局四一三)

宮内省御用達

天下一品

最上醬油

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女(との一)

河岡潮風君著

五々の春

奮闘と大膽と健康增進法を教ゆる快著

▲本書の著者は自成的人物(セルフメードマン)也。早稲田の學園を出でたるも在學中講義を聽かんとせず、附屬圖書館に入り浸りゐき、自ら善謔して早稲田大學圖書館出身と云ふ。

▲卒業後中央新聞記者たる十二日半にして文界に去る爾來五年一種の筆致はよく人目を引きしが、其間奇病に囚はれて、醫學界のレコードを破り、一度びは苦痛のあまり自殺せんとせし事すらあり。危機一髮、悟得して、こゝに勇ましく死の神と戰つて、つひに勝ち、今や癒えて滿二十五の春を迎へんとす。

▲『人生五々の春』と云ひけむ、男性の二十五は智力充實の齡也。全册を三部に別ち、上編『再生記』は自傳と病床錄と信仰錄を聚め。中編『筆硯五年』は文章集也。下編『わが詩わが舌』は支那革命の新體詩と演說筆記を收む。彼の名を知る者は必ず讀むべし。また病める者、惱める者、逆境の者は讀んで慰藉と元氣とを得らるべし。

三月八日廿五回誕生日發行
四六版クロース上製五百餘頁
寫眞版一百個三色版石版數葉
定價金八十五錢　郵稅金六錢

▲發賣元　東京日本橋區本町三丁目　博文館



女（その三）

惡戯して御褒美



君ちやんは本年六歳になります可愛いゝ兒ですが惡戯が好きで時々母親さんや姊樣達を困らせます。今も何やら白壁に惡戯書をして居りますから母親さんは又かと思つて叱らうとして見ると如何にも上手い字で到底も六歳の小兒の書いたものとは思はれません、不思議に思つてよく〳〵聞いて見ますと姊樣達が日頃から習つて居る帝國習字速成學會の專賣特許の習字速成法で稽古したのださうです、母親さんは叱る代りにかへつて褒美を遣りました。――實際同會の習字速成法は小兒でさへこの通りうまくなるのですからどんなに字の拙い人達でも二三ヶ月練習すれば見違へる程上達します、手本は有名な小野鵞堂先生ですから御婦人には適當です、同會へ入りたい方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會へ『ハガキ』で（電話なら下谷三〇一一番か三二一〇番へ）御申込みになれば直く見本つき會則を無代で送つて參ります。



女（との四）

令嬢かゞみ



左圖、男爵小澤武雄氏令嬢綺子　中圖、海軍大佐榊原忠三郎氏令嬢操子　右圖、紳商小橋愷吉氏令嬢とう子

春かすみ



肺結核新藥

グアヤコーゼ

グアヤコーゼは肺結核唯一の治療藥として公認せられたるグアヤコーゼの最も無毒なる化合物を卓越ノ滋養品として賞讃せらるゝソマトーゼに配合したるものなれば、食慾と消化を催進し清鮮なる血液を作り咳嗽を鎭め喀痰を容易にし盜汗を防止するを以つて肺結核の症狀を速かに改善すべし

（説明書進呈）

一回四乃至五瓦
一日三回
食後服用

發賣元
横濱市山下町百八十三
神戸市明石町四十七
フリードリッヒ、バイエル合名會社

産後の御方に

産後の衰弱を早く回復したい方
御乳の出が少なくて困る方

には是非ソマトーゼを召し上る樣御勸めいたします、ソマトーゼはごく服用し易い滋養品で、食慾を進め、消化を助け、健康の血液と筋肉を作りますから忽ち健康を回復いたします。

又乳の出ぬ方は必ず量が增して成分が濃厚になり、御子樣が丸丸と發育する樣になります

ソマトーゼはすべて身體神經の衰へた方に大効のある滋養強壯劑です全國の藥店にて販賣します



女（ちの一）

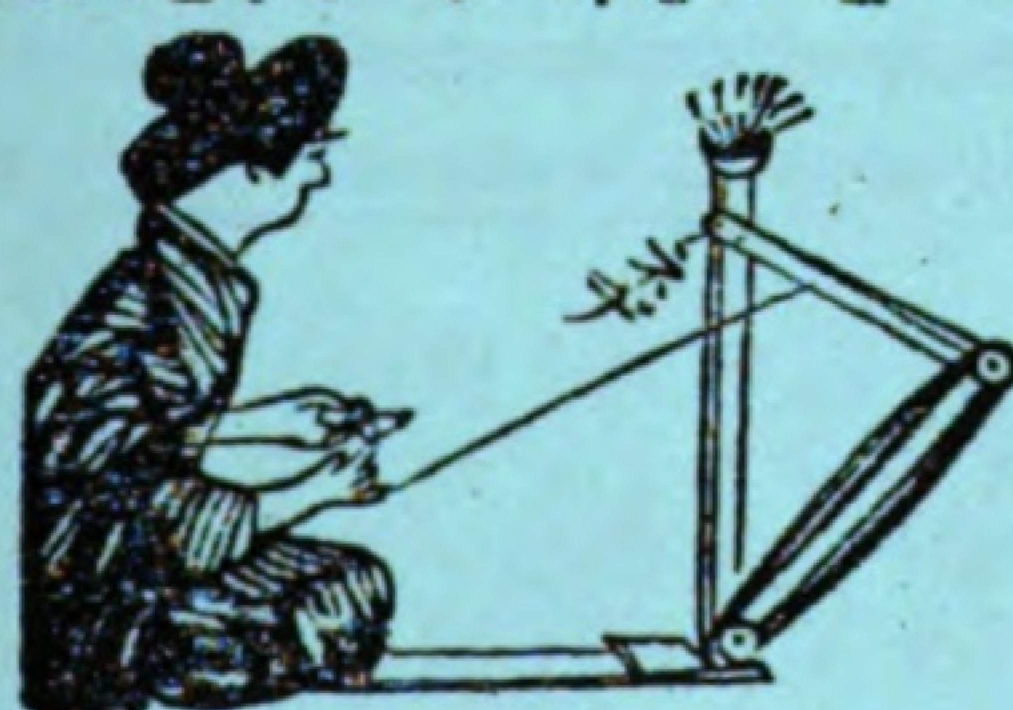
特許竹中式絲掛付絎臺

●御婦人方の新福音！

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絲を糸巻にまき取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリ」「ミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマヘ」得る樣に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



定價

御誂朱塗製	金七十錢
御誂黒塗製	金六拾錢
特製	金參拾錢
上製	金廿五錢
並製	金貳拾錢

美麗なる箱入なれば進物用に好適也●市内は一本にても御一報次第無料配達す●送料地方は拾錢●朝鮮臺灣は三十錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店

電話芝二八八四番 振替東京三二二二三

●特約販賣 御望の方は御照會あれ

ライラツク水



〔日本政府登錄 美顏術實驗有效〕

美しくなる素！

コレが有名なライラツク化粧水ヨ！
お母さんや姉さんや私の艶々して美しいのは！自慢じやないけれど…
コレの御蔭です
ソレニお父さんも兄さんも四角張ッていらしッても内々大の愛用家なのヨ
「男だつて綺麗に成り度いからナー」だつてホヽヽヽ

家庭の必要！

定價一瓶金五拾錢
送費金八錢

新橋竹川町十二番地
ライラツク東洋總代理店
理容白粉本舖
理容館

電話新橋二三〇二番
振替口座東京一四一〇〇番

女(ちの二)

三月の卷發行

定價　一冊貳拾八錢郵税貳錢五厘　六冊前金郵税共壹圓七拾錢

新婦人

現代式化粧研究號

化粧の江戸女　大隈伯爵
化粧せぬ美　田結醫學士
化粧と皮膚の價値　鈴木顧問
化粧上の齒の衞生は　藤間房子

寢おしろいはわるい……　柴田環子

姿の化粧法

姿の式……　鹽崎逸陵
化粧品の指輪……　佐々木玄兵衛
化粧品の選擇……　門田きみ
髮の毛の豫防……　篠原炳德
純日本式刈方……

化粧は生命　東花枝
女の家庭美顏法　遠藤初子
洗粉の性質と用途　中山太一
衣服の着方……　安達藤藏
婦人の服裝……　飯野三二
身の廻りの嗜み……　幾度永
新ダイヤ全盛期　大西秋作
石鹼は濟世の具　山岸荷葉
鼠の尻尾髮……　大場秀吉

流行製造者……　櫻井法學士
髮毛と地毛……　田中金三郎
椿油と頭髮　木村とら子
結って居る頭　尾張屋みつ
間は人の髮……　多田たつ
大阪の髮は生涯の修業　佐々木ひさ
調和は髮の命……　關口ぶん
結髮時の氣分……　高城つろ
刈り惜い高田式　小坂巳之助
束髮變遷史……　松田幸次郎

繪畫及寫眞版

大森土產……　川村清雄筆
書中の嬌聲　娓々として相語れるは何ぞ……　鰭崎英朋筆
汐干狩　海中に足跡のある好い天氣……　コロタイプ　實寫眞

北白川姬宮　殿下
德川公爵令孃●長谷場文部大臣夫人●大島陸軍少將令孃●海江田子爵夫人●伊集院法學士夫人●藤澤千枝子孃●諏訪子爵令嗣夫人●京都河邊照子孃●伊藤跡見女學校講師

新橋髮結の名手關口ぶん女●東花枝孃●岩崎辯護士夫人
畑仙齡氏夫人及令孃
甲府鈴木いその

卷末附錄　家庭日記　三月分
溫度表晴雨表獻立表來客控●九星舊曆添

見本郵券二十錢　一冊賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所　東京市本郷區龍岡町　振替東京三〇五八番　聚精堂　電話下谷一六七二番　電話下谷(四)〇七九番

女(ちの三)

家庭の栞

三月節句の献立



桃の節句の雛祭り、可愛らしい膳部の献立は何か〳〵、煮〆、汁物、其他種々のご献立も雛様は唯ながむるばかり、お下りは姫様や孃様のご賞翫、アラそんなにお美味ないワと、お友達に云はれては女の身の顔に火の出る思ひ、是れが原因にて口爭にてもあらんには、あたら友垣の遂には仲差ひのことも起ろべし、此憂なからんには

万上味淋は

是非お備になるべき唯一の調味料です、之を御使ひになれば、御趣向も御工夫もいりません、思ひのまゝにお好み通のおいしい御料理が直ちに出來ます

それに白酒のご自製又白酒のわりには

万上味淋に

超すべき味淋は他にありませぬ

優等くせなほし



化粧界の大革命！
婦人界の大福音！

此癖直し「のびる」は能くちゞれ毛くせ直し艶を善くし用法頗る簡便にして今や「のびる」は婦人社界に於て使用せざるものなきに至れり

定價
廿回分繰入
金十五錢
送料二錢

東京市京橋區中橋廣小路

しらが染
のびる（くせ直し）

本舗 川上化粧品部

電話京橋九四二一振替東京四六一四

取次店 全國小間物雑貨店

女(ちの四)

團欒



圖は甲府富豪若尾別家繁四郎氏の家庭にして夫人惠以子は若尾民造氏の第一令嬢、主人繁四郎氏は子爵小笠原動一氏の叔父なり

繪日傘



圖は浮世畫派の名手歌川若榮女史が美術雜誌スタヂオ社長ホーム氏の招きに應じて其庭園にて撮影せしものにして中央右は若榮女史左はホーム氏夫人なり

女一代の衛生

久我侯爵‖伊東元帥‖東久世伯爵題字‖産科婦人科專門醫學士佐藤得齋先生述

處女の煩悶
年頃になつても月經の來潮せぬ時、又は有ても經血の量が不規則で一定せず、或は來潮期が齟齬したり或は月經時に痛を感ずる樣な事があつた場合には如何に處置す可きものか

新婦の恐怖
新婚前後に於て最も罹り易き病氣の、原因及徵候は如何なるものか、若し醫療を乞ふ事の出來ぬ場合は手前療治で治す方法が有らうか、又良人に淋疾あれば何うして豫防するか

主婦の悲嘆
夫婦共丈夫で居て結婚後幾年經ても妊娠せぬ婦人、只一回妊娠して途中流產し其後妊娠しない婦人、又幾回も妊娠するが何時も流產する婦人は何うすれば滿足に子寶を得られるか

婦人病者の心得
無代進呈
實驗報告書添附

‖申込所‖東京市京橋區新榮町‖笹岡省三

ハガキにて申込あれば直ちに送本致します

妊婦の心配
妊娠に惡阻は附き物の如く誤解して打捨ておく爲めに、早產流產死產等の不幸を招き甚だしきは命迄も失ふ婦人が尠くないが、其原因は如何なるもので何んな手當が必要か

病婦の苦痛
永年子宮病血の道で醫者通ひ病院歩きこの藥あの妙藥と頭から浴びる程飲んでも一向効なく年中蒼白い顏して、ブラ〳〵不愉快な月日を送つて居る婦人は何うすれば治るか

老女の誤解
月經閉止期前後に時々出血したり下物が有たり、足腰が冷へ、又は浮腫などの出來る樣な事が有ても老人だから子宮病ではあるまいなど〻平氣で居る婦人は何う云ふ危險が伴ふか

女(り)の一こ

發賣壹週年紀念景品付大賣出し

新案登録第二〇六三〇號 都はり箱

女學生必携



郵税 市内無料 内地十二錢 臺、樺、清、朝、二十錢 代金引替又は郵券代用は拾錢增

此都はり箱は旅行及び學生携帶又家庭用としても便利です其内に起伏伸縮自在なるくけ臺を取付け又はさみこてへら二つ折尺度つまみ形袖形針々差指貫に至る迄の裁縫具が一切入れて有ます又五色の絲は自働的に回轉する頗る重寶な針筥です今回高貴の方の御買上げの榮を賜りたれば併て其紀念として左の景品を附ます景品は福引法に依らずして（現品金銀寶石入指輪數十個其他縮緬半衿羽二重流行帶〆）を各一個毎に漏れなく封入密封の上封印がして有ます

定價

漆塗金蒔繪特製 金貳圓五十錢
同 上製 金貳圓
神代杉金文字入 金壹圓五十錢
同 上 金壹圓
クロースブック形 金壹圓

製造發賣元 東京市淺草區西三筋町四十三 安井都堂 振替口座東京第二壹五七六番

特約販賣 白木屋呉服店 大西白牡丹 百助商店 發明館 新橋上野博品館内 帝國座内 銀座伊藤屋玩具店 尾張町吉川商店 新橋金盛堂 昌平橋外伊勢惣 木挽町二ノ宮 川仲見世 みすや 神樂坂東華堂 表神保町海運堂 小日向水道町喜多川 馬喰町坪内廣喜堂 檜町日本便達會社内 其他各所

春と婦人衛生

婦人科專科某病院長の談話（安全堂主人筆記）

若い令孃方が初期の月經を見るのは多く此春季ですが此際には餘程御注意なさらないと意外の病氣に罹る事がマ、御座い升、初は誰も親に話すのが恥かしい者ですから、不潔な物で用をたして病毒に侵され子宮病やヒステリー等に罹るのが多ふムい升、私の患者にもコンナのが澤山有升、ソシテ其人達は皆良家の令孃方なのです、其一人は病毒を含むだ手巾から（多分其家になる痳疾の方が有たのでせう）若い身空で消渇になつて居るのです、其他月經初期の婦人でなくとも不完全な防經を爲さるゝ爲めに傳染性の病氣に罹る人が澤山有升、併乍ら予が友藤川藥學士の發明された安全帶は歐米婦人の月經帶と同一ですから是を御常用になれば前陳の危險より全然脱する事ができます



本舗 東京下谷區池ノ端七軒町四二 安全堂

關西代理店 大阪阿波座上一電車道角 洋々堂分店

定價 安全帶●甲壹圓廿錢●乙八拾錢●並五拾錢（各一本で四五年使へます）安全衣●壹打金四拾錢●内地送料一組（帶・衣共）金十二錢、餘は一組毎に貳錢增し

女子文壇

三月一日發刊 （第八年第三號） **三月普通號** 百五十餘頁充實す ○口繪原色版寫眞版數葉挿 （本社揃在）

◎婦人と食物の知識……農學博士 澤村眞

◎習字の手本は良書を選べ 文學士 久保天隨

◎女性の姙孕力（三）……大阪高等醫學教授 田中祐吉

◎雪の山路……吉江さだ子

◎私は佛教を信じてゐます 子爵夫人 小笠原秀子

◎七分三分の見立……番附

●小説『不如歸論』……知名文士數名

◎衣通姫……澤田撫松

◎耳袋……猿丸太夫

◎白日……三ヶ島葭子

◎木の芽時……長曾我部菊子

◎神戸の港……柴井やよ

◎碁盤……夢殿守

◎其儘應用の出來ぬ家政學……岩崎延枝子

◎年始……たへ子

◎化粧問答……藤波芙蓉

此次の四月號は二倍大の**特別號**です

定價
特別號金參拾錢 送料二錢五厘
普通號金拾五錢 送料壹錢五厘

東京市京橋大鋸町十二 **女子文壇社出版** （振替貯金口座東京第壹七貳九番） 賣捌各地書店

女（リの三）



春漸く來らんとして
白木屋は賑かなり

御好評を博し候餘興「ひなまつり」引續き
御高覧に供し尚中旬より差替新曲入御覧候

東京日本橋

白木屋呉服店


女學世界
第十二巻第四號
三月

常識教育　新鶉衣「三」

曙内侍



ノライズム論

抑もノライズムとは、如何なる意味にやあるらん。蟹の這ふ横文字の本も讀まず　たゞその音に依つて想像しけるに、最初は終日のらりくらりと仇に歳月を過すなる懶惰主義のことかと思へりしは、顔も赤らむばかりに當らざりけり。さらば野良に住へる田園生活の意義かと



悟りしに、これも當らず。さては野良を轉じて、何時ぞや流行りし自然主義のことならんとや、文學的、解釋せしに、人々それを聞きて、皆な笑ひぬ。我れ今聞きしばかりのことを受賣りせんに、ノライズムとは自覺したる女の意義ぞかし。此は元と一篇の脚本なるが、ノラと云へる女の、痛く夫の利己心つよきに愛想を盡して、女も自覺せざる可からずと　夫を棄て、子を棄て、家を棄てゝ、出でゝゆくといふ筋なり。

されば此の演劇を見たる者は、ノラに同情するもの甚だ多く、そゞろ男の利己心を歉らず思へりしに、また其れに對して一方には、かゝる演劇を見せしめては婦人教育の爲めに好からずと、ノライズムを排斥するもの甚と多しとかや。各々言ふ所に一理あれば、急には決し難かりなん。我れ今腦を冷して考ふるに、たとひ此の思想の我が國に來ればとて、然までに驚くこともなければ、又歡迎するにも及ばざるべし。夫れ人間たるや、名は萬物の靈長たりと云へども、我儘も亦た萬物の靈長なれば、時に利己心つよき夫に連れそふ女もあるべく、或は亦た我儘の妻の爲めに一生を犧牲に供する男もあるべし。是れ出雲の神の寵薄かりしのみ。さるを一々理窟の柄をすげて、ノライズムとやらん、自覺せる女とやらん、事難かしげに言ひ罵りて、女は男を咒ひ、男は女を咒ひ、縱しや互ひに背中合せに背むけばとて、三千世界の男女が悉く僧尼に身を窶すこともならねば、何時かは極り惡げに元の鞘に納まるの外なからん。甚だ愚かなる爭ひならずや。さりながら菅の根の長き春日のつれ

づれには、かき餅燒く隙に、出るの入るのゝ一幕も、樂みの一つなるべし。

青柳の糸くりかくる春しもそ亂れてはなの綻びにける　（貫之）

壁の解

夫れ一家に就て云へば、柱は鴨居を支へ、鴨居は屋根を支ふ。共にその任いと重かるに、壁は此等の間に介在しながら、欄子窓の明もなければ、障子紙門の開閉自在なる妙もなく、徒らに一室を區劃りて陰鬱ならしむること、誠に小人閑居の面影に似たり。されば、達磨は九年の間この物と睨みあひて、空しく手足を落したる他に、更に格別の利益もなければ、況してこの物の耳を賴りに、愚痴なる訴訟をなさばとて、元より爭で効能のあるべき　俚言に壁から松茸が生ゆるど云へど、一向に見たる人もあらねば、果して信ずべきか、疑ふべきか。偶々守宮の這へるに遭ひ、座頭の幽靈に腰を拔かさば、却つて人の物笑ひとやならん。さればこそ古へより聖人君子と稱へらるゝ人は、必ず壁書に箴言を書して、己れを愼み他を警むること、厠にアルボースを振撒くが如く爲にけり。



石地藏の贊

南無や此の淋しき野路に立たせたまへる地藏尊こそ、言ふばかりなく尊くは在すれ。石の御體軀ひややかに渡らせらるれども、溫かき御情は眼元口元に其

れと表はるれば、夕陽野末に傾ける頃、疲れし足を曳きつゝ差掛かる旅人にも、如何ばかり懷しうは思ふやらむ。元より六道の辻に迷へるものを導きたまふ御身なれば、榮耀榮華の慾望といふものさらさらなく、たとひ一宇の草堂、屋根は毀れて雨の洩るとも、軒は傾きて月の照らすとも、一切空寂、唯だ端然として佇立みたまふのみかは、春は痴蝶の面前に戯るゝを餘所に見過し、秋は蜻蛉の頭に止るを知らぬ顔なれば、道理知らぬ村里の輩は、偏へに地藏尊をお人好と思ひて、知らぬは佛の諺さへ作れるは、何ぼう淺猿しき心なるらん。縱しや彼等の眼には、杖は痴氣に惱みしとも見るべく、涎掛は中氣に顋綏みしとも見るべけれど、そは唯だ彼等が思ふに任せん、己れを以て他を推すは一切衆生小人の常なり誰れか無爲にして化する老子が秘法を知らんや。



うらやまし倶に老きと思へども花は今年も初花にして　（景樹）

マントの説

近ごろ婦人のマントを着たるもの甚と多し。その姿ヌーボー式の見好げならねど、寒さを拒ぐに重寶なる上、木枯にも裾を捲くられねば、蜜柑を携へても人に笑はるゝ憂へなし。その功、寧ろ吾妻コートに越えたり。昔は伊達に薄着を矜りし負惜みもありけるが、今は斯かる女の跡も絶えて、愚かなる感冒に無益の藥料を費さんよりは、縱しや男子に身を

擬ふとも、この一着は纏はざるべからず。莫遮、來ん冬には、更に如何なる物の流行らんとかすらん。若し男子にも女子にも、全く同じ扮裝にて事濟みなば、夫婦一着の曠着に、簡易生活の模範とやなるべき、

田樂の賦

田樂々々、我れ久しく汝に親しまざりき。汝は時代に遅れし哀れなるものと思へりしに我れも亦た汝の跡を追はんとはすなる。我れ故郷を辭してより小指屈なふれば、早や十歳あまり過ぎけり。都の文明に遅れてはならじと、元祿趣味の流行りける頃には神田川の樓にも登りぬ。泰西趣味の盛んなる頃には精養軒の欄にも倚りぬ。されど文明は脚疾くして、我が短脚の及ぶところにあらず。少時ライスカレーの混沌として行方を見失ひしが、聞くならく、近くは南歐風の吹きすさむものから、偏へに珈琲店の賑ひぬとかや。今に於て、我れは再び文明の跡を追はん勇氣なしいざ歸りなん。我が元來江戸前の漆濃さをも好まず、歐米の膩臭きをも好まず、我れは早や故郷に歸りて、細流霞に濕める時、葉山番山に時鳥鳴く時、柳散り水涸るゝ時滿山落莫として斧の香に匂ふ時、たゞ一味の田樂に親しみて、煩雜限りなき文明より脱れなん。あはれ我が故郷は、今や山村水郭酒旗の風。



我宿に菫のはなの多かれば來やと人やあると待かな　（詠人不知）

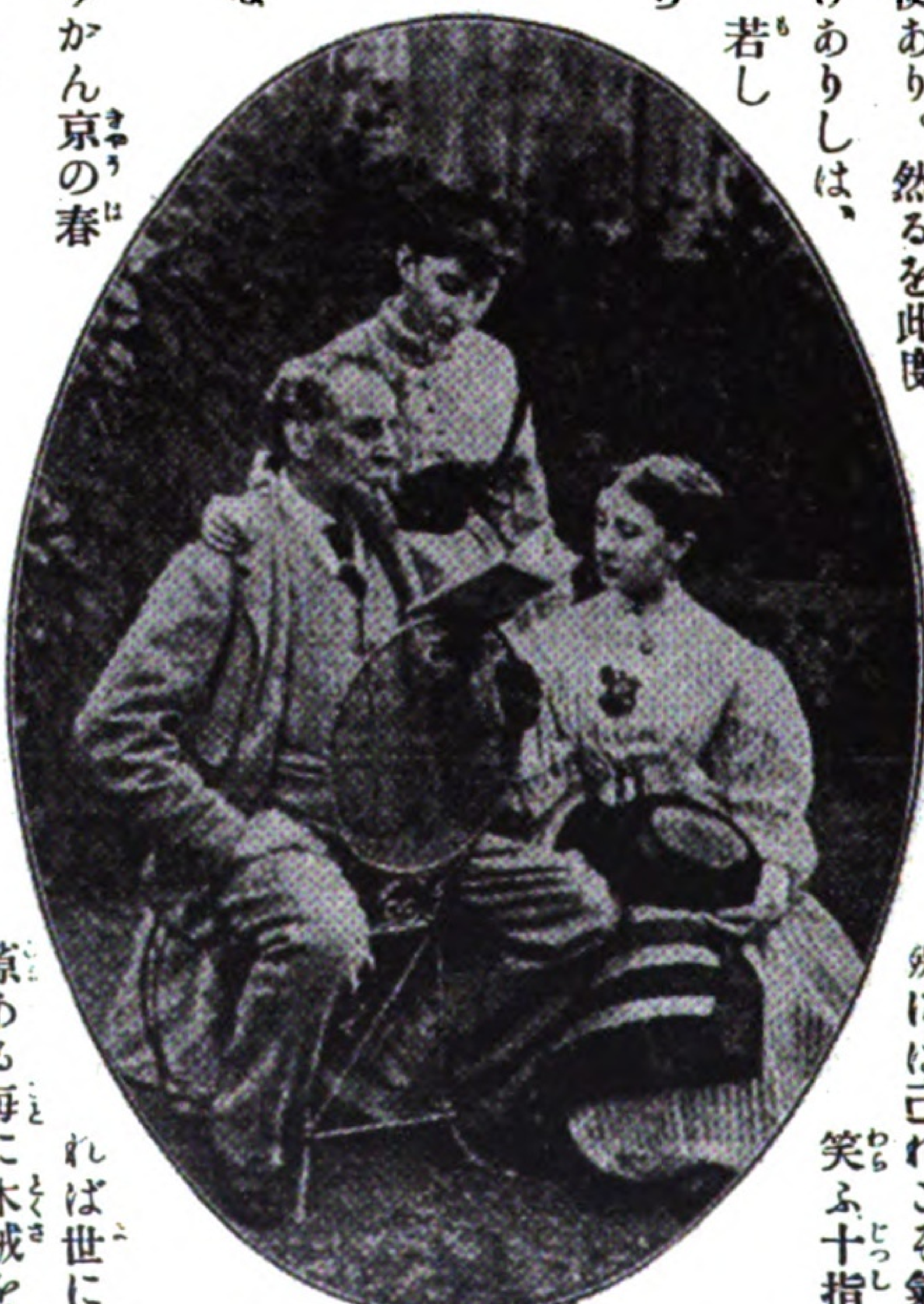
婦人電車の辭

男女七歳にして席を同じうせずといへば、汽車にも電車にも乘られぬ不便あり。然るを此度新たに婦人電車の設けありしは、風紀の上に最も好し。若し鐵道院に顔回が賢あらば、縦し食堂車は廢すとも、婦人車は設けざるべからず。前車の覆るのみが、あながちに後車の戒にはあらじ。

善は急げいざ見にゆかん京の春

爪の説

明眸皓歯と唯だ一言にいへど、三十二相こと〴〵く備はらざれば、未だ全き美人とはいふべからず、されば上は久方の天の香具山、かぐろき頭髪の端より、下は荒金の大地を蹈める踵の裏に至るまで、あまねくその難を覓めなば、誰れかは完全無缺の美人なるべきぞ。殊には己れこそ氣づかずもあれ、他は却つて笑ふ十指の指ざすところは、夫れ指の爪ならんか。年歯ごろうら若き女の、初對面の挨拶いと愼ましやかなるに、不鬭爪の色さへ櫻色さしたるは、指に嵌めたるダイヤの光よりも貴くぞ覺ゆる。されば世にしやれ者とうたはるゝ女は隙ある毎に木賊を持ちいだし、口紅の色をも添ふるぞかし。總じて爪は女の飾りなれど、針仕事に篦を見失ひし時、その役目を勤むること無きにしもあらず。夏の短夜の、夜もすがら蚤に攻められ腹立た



英國詩人 サアーレスザツケンス氏の家庭

しさは越王が薪木に伏しゝ思ひなるを、杜鵑鳴く〳〵一聲に東天紅を待ちて、たちまち會稽の恥を雪ぐも、まことや此のものあればなりけり。然あれ爪にて人の性を測るに、癇性のものは常に爪を嚙み、氣長の人は爪にてよく物を拾ふ。慾深の爪はいと長しと云へど、それは慾の熊鷹の比喩なれば取るにも足らず。無精者の爪は常に油色の垢を湛へて、汚穢しさのほど限りなし。その以す所を視、その由る所を見れば、人焉んぞ廋すべけん哉。

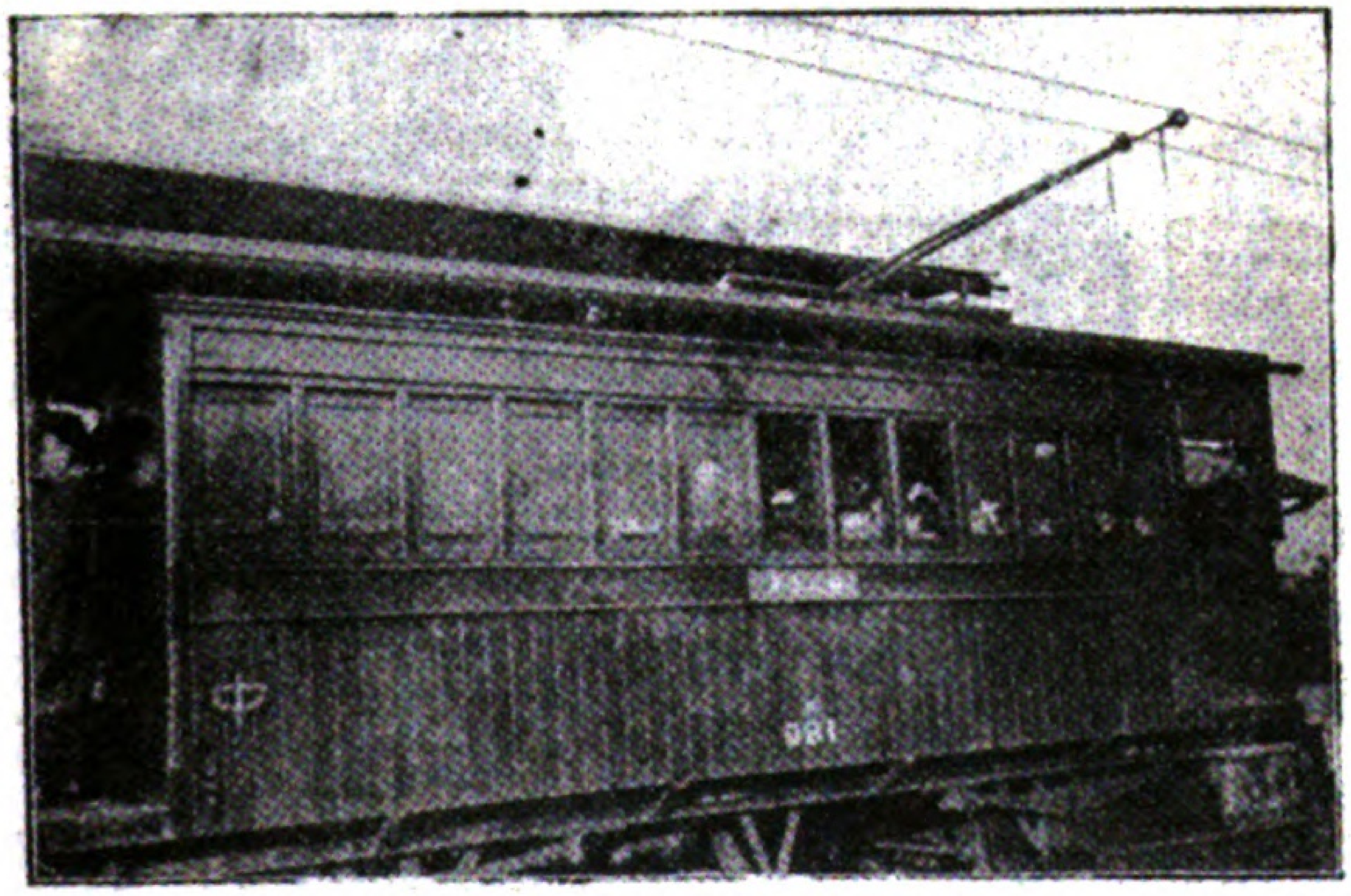
御歌會始

（名譽ある預選歌人）

一月二十四日午前十時宮中に於て歌御會始を行はせられたり幷に詠進中の御前披講に係る御題松上の鶴の御歌並に預選歌の數々左の如し

御製

たつはみなもとのこすゑにかへりけり　はまのまつかけしほやみつらむ



甲武線婦人專用電車

御製

あさつくひとよさかのほるやまさつのこすゑをしめてたつそなくなる

皇后宮御歌

すこもりのひなのちよをもさゝくやみかきのまつにたつのなくらむ

東宮御歌

こまつはらすゑはるかにもきこゆなりともよひかはすひなつるのこゑ

東宮妃御歌

やまひとをのせてかへりしたつならむつはさをさめてまつにいこへる

選歌

權典侍正四位　藤原　祥子上

あさひさすこまつかはらにあしたつのちよのこゑこそしけくきこゆれ

千葉縣神川小學校訓導　伊藤榮治郎上

あしたつももとをわすれぬこゝろよりすたちしまつはたえすとふらむ

東京府士族　坂本　芳子上

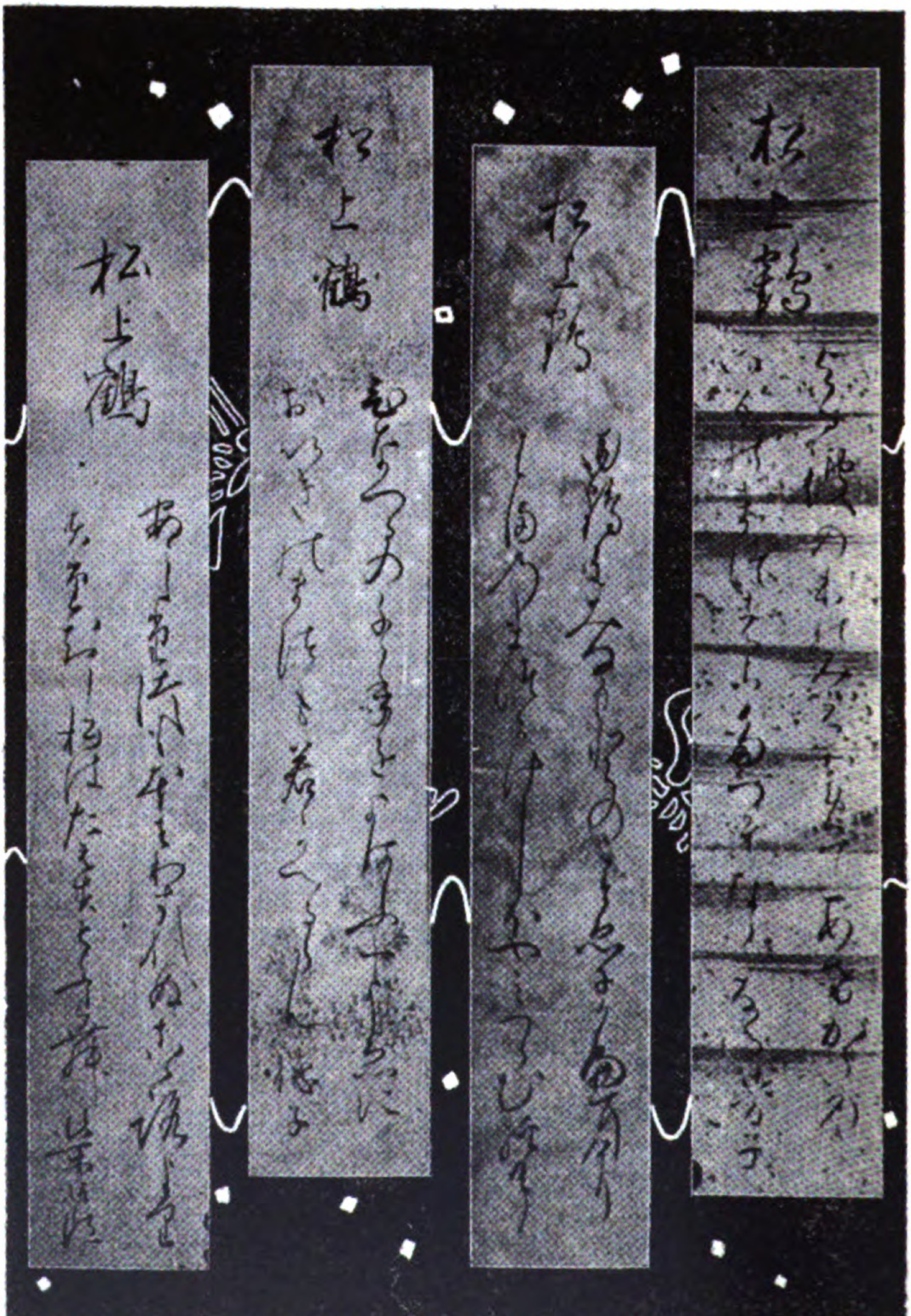
よるなみのほのみえそめてあけかたのいそのまつはらたつそなくなる

東京府平民　植松　鶴子上

ひなつるのちとせをよはふひとこゑにおいきのまつもわかかへるらむ

愛知縣平民　三輪　經年上

選歌　松上の鶴



右より植松鶴子、三輪經年、坂本芳子、伊藤榮次郎氏の手蹟なり

世間と人情

棚橋絢子

△愛情の比較

私の孫娘は、昨年の暮、敢えなく世を去りました。年は十七で惣領娘のことですから、私よりは、子息や嫁が非常に落膽して、二三日の間は、丸で人心地を失つた程でした。學校は跡見さんの女學校で、性質と云ひ、女藝と云ひ、學問と云ひ、先づは上等の方でしたから、わけて惜しく思ひました。それでも大磯療養中に亡くなつたら、如何に殘り多くもあり、又不便であつたでせうが、歸宅後十日ばかり經つて逝きましたから、皆も能く死に目に遇ひ、不幸中の幸でした。

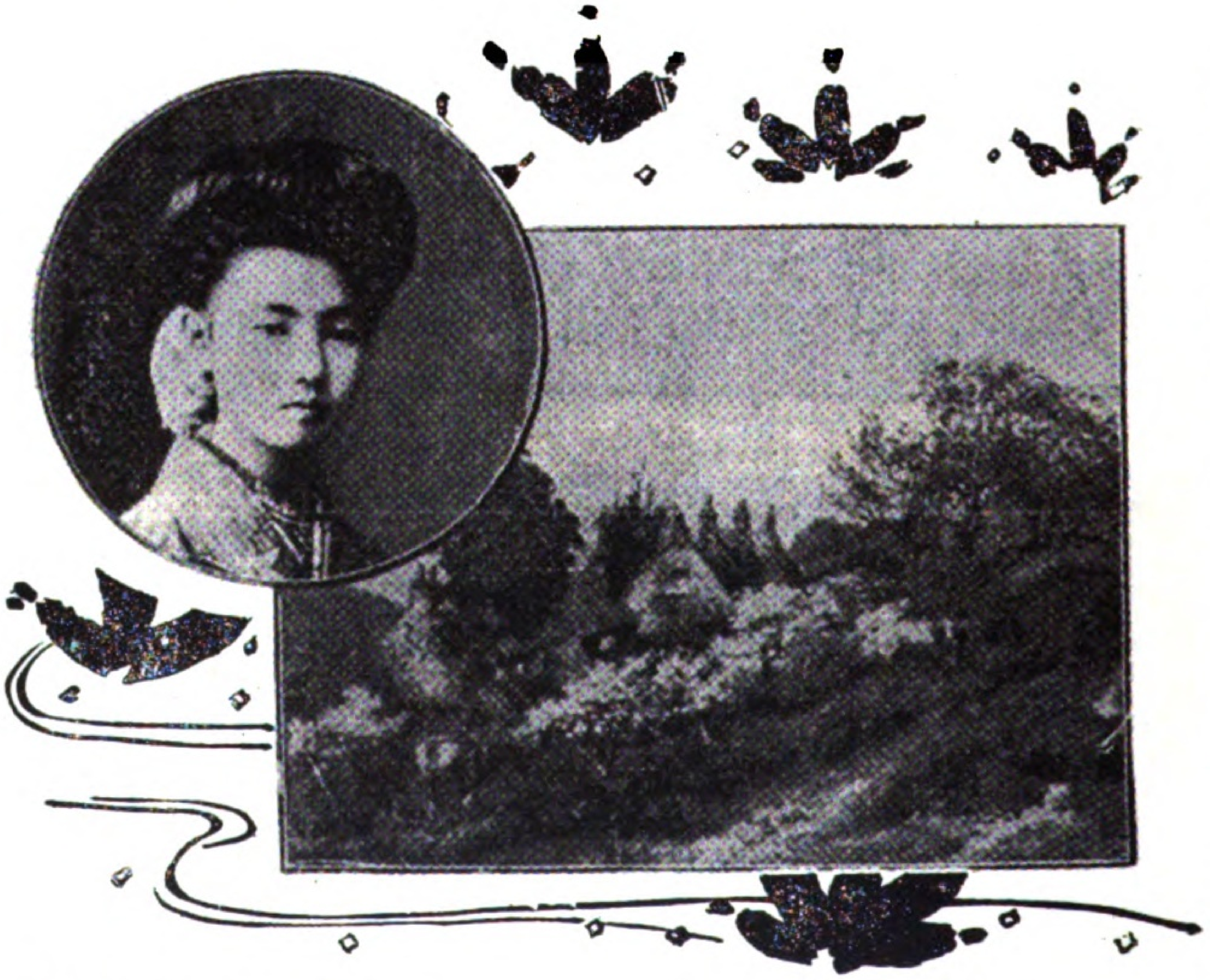


で孫が亡なつたに就て感じますが、世の中に孫程可愛いものはない、我が子は左程でなくとも、孫は可愛いと仰る方がありますが、私は、何もさうではありません。固より孫は子と同じく可愛いのでありませうが、我が子より一層可愛いと云ふのは、如何でありませう。自分の腹を痛め、這へば立て立てば歩めと面倒見た子供は、さう云ふ世話をして遣らない孫より可愛いが人情でないでせうか、けれども孫をほんの我が子の如く可愛がり肝心の兩親は、職務や家用に妨げられて、餘り構はないと云ふ家では、孫も却て祖母を慕ひ、祖母も亦子より孫を愛するが常であらうと思ひます。されば本當の所は、孫も亦子の如く可愛いが、何方かと云へば、子の方が可愛い

と云はねばなりません。私は、今回孫を亡くして物思堪へず夜夢にも見る位ですが、さりとて子供の亡くなつた時よりは、輕いやうでございます。

△子と親との親しさ

子供を愛するのは、人も動物も同じです。世に親子程親しいものはないから、子が死ねば、大抵の人は半狂亂のやうになりますが、大恩ある親の亡くなる時に、さう哀まない人があります。これは山よりも高い重恩ある父母に對する道で



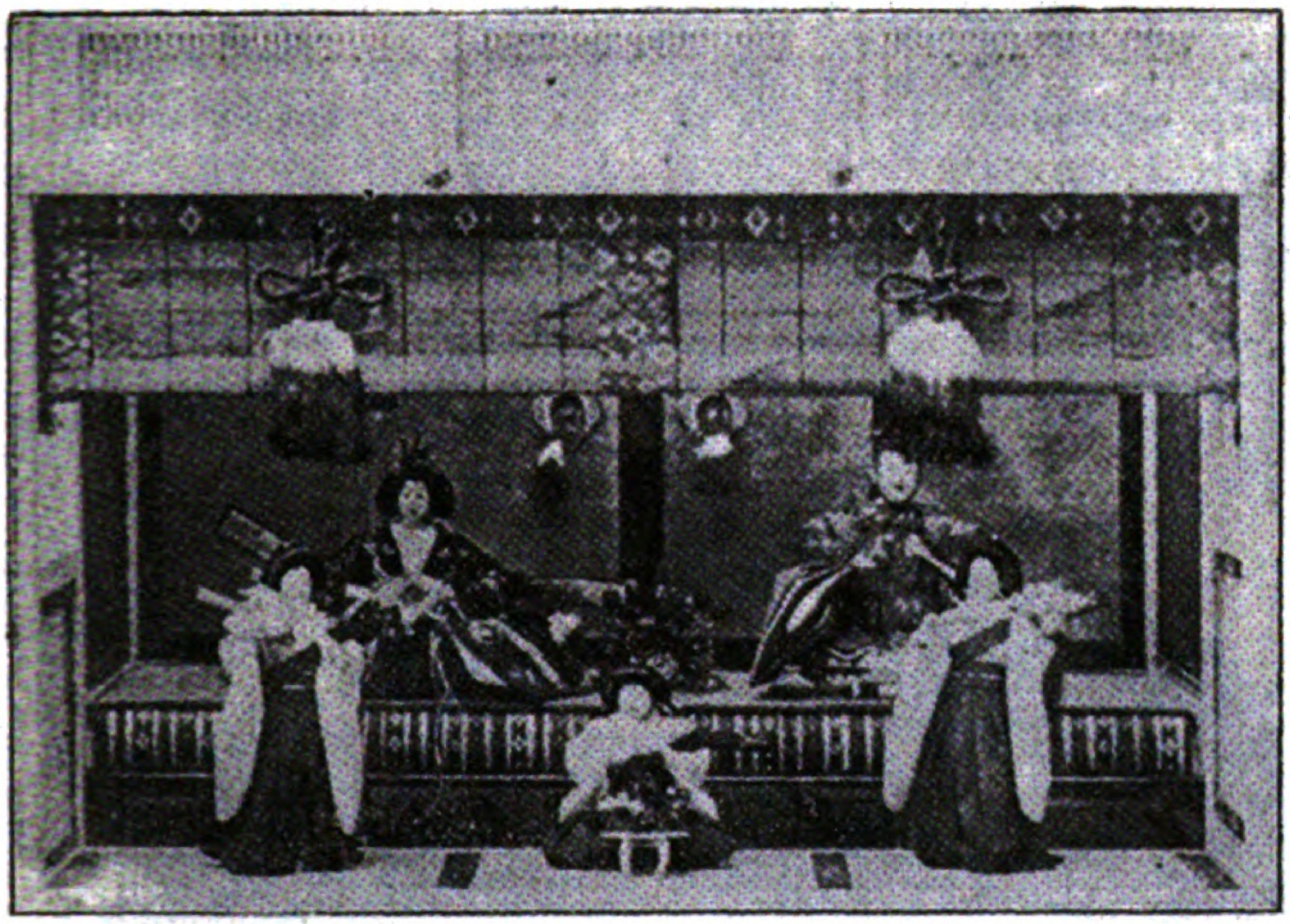
長閑なる夕の空を眺れば薄くれなゐに染むろいとゆふ（家隆）

はありません、其の死別を左程に思はぬといふことは、實に不德極まることであるから、私共は常に子を思ふよりは、親を思はねばならぬと觀念して、萬一親を思ふ方が足らない時は、是れではいけぬと、思ひ直さねばなりません。

△人情の籠つた式

世の開けるに伴れて、物事は萬事體裁好く、又華美に赴き、殊に葬式などの如きも益々贅澤になつて參ります。已に二千年の昔に、支那では墨子と云ふ人が、

霞たつ春の山邊は遠けれど吹きくる風は花のかそする（元方）



此の形勢を慨し、「薄葬論」と云ふものを書いてゐる程ですが、私は思ふに、不幸なる死亡を弔ふに、成るべく手厚くしてやりたいのは、人間の情ですから、精神的には、成るたけ念を入れ、鄭重にするのが良からうと思ひます。矢鱈に見えばつて、分外の費用を掛けたり、心には左程思はずして、形式丈を立派にしたり、又は矢鱈に簡約にするのは、何れも善くありません。殊に親の葬式は、子として出來る丈に立派に出すのが、德義であらうと思ひます。

それから、單に葬式のみに限らず、七日とか二十一日とか、三十五日とか、四十九日とか、一周忌、三周忌、七周忌、十三周忌などの如きも、成る丈け略せずにした方が宜しいと思ひます。後の生者に厚くして、死んだ者は、どうでも宜いと云ふやうなことは、實に輕薄なことですから、葬祭の儀式は、己が奉ずる宗敎又は德敎に從ひ出來る丈け手厚くしたいと思ひます。人は始めあり、終りありでなければなりません。生れるのを賀するは、死者を弔する所以ですから、亡き人

を大切にすることを忘れてはなりません。

主婦としては、良人に仕へ、子供を育つる外、老人を大切にすることは、宛も鼎の三足の如く、相並んで行はねばならぬことでございます。世間の人が　育兒の大切なるを説き、産前産後の攝生を説きながら、老人に仕へ、又死者を弔ふ所以を説かぬと云ふことは、實に片手落のことで、圓滿の道に適ひません。老人、又は病者の看護、葬式、供物等は、主婦の必ず奉ずべきことであります。

△虚禮と人情

支那人は、葬式の時には、大聲を發して泣くことを常とし　のみならず斯る場合には、泣男迄雇うて、哀悼の意を表すると聞いて居ります。かやうに殊更に泣く如きは、實に虚禮の至りで、寧ろ陋むべきことでありますが、さりとて親が死んでも、涙一滴點さぬやうでは、人らしくもない情緒の冷淡な者と云はねばなりません。また三年の喪に就ては、昔から彼此言ふ人が



鶯の聲うらゝかに引なれて春日は永くなりにけるかな（廣海）

あつて、三年の喪と云つても、滿二年間である。それなら滿一年でも宜しいではないかと云はれてゐますが、親が死に、子が死にすると、暑きにつけ、寒きにつけ、必ず思ひ出すものです。花を見れば、亡き子を思ひ出し、月を見れば亡き父を戀ふるは人情の自然で、あゝ去年の今頃はと、思ふのが普通であります。是れを、きつかり一年で切ると云ふのは、是れ亦た人情の自然ではあるまいかと思ひます。矢張喪を三年にしましたのは、深い意味があらうと思ひます。又どうしても遠くなると、情が薄らぐのは自然ですが、殊更急に變へることは宜しくありません。私は良人の歿くなつた當座は、毎日々々墓參を致しましたが、さう何時迄も出來ませんので、五十日目に廢めることに致しましたけれども、どうも參らねば氣が濟まぬので、三日に一日休み、二日に一日休み、二日置きにし、三日置きにすると云ふ按排に致して、仕舞には一ケ月一回と定めました所、今日では、其れさへ代參をさせることがありますが、兎に角人情の自然に依つて致したいもので、輕薄にはしたくないと思ひます。

それから、病者を看護することは、何よりの務めで、又功德の深いことであります。これは心掛一つでいかやうにも盡されます。私などは親の死に目には、是非共遇ひたいと思つて居ましたら、遠方に居ながら、幸ひにも、此の願が叶ひ、父の亡くなつた前には、五十日の間看病し、母の亡くなつた前には三十日間看病することが出來ました。併し、餘り長くなると、良人に對する勤めが果されませんから、豫め良人に賴んで置きましたが、二度目の時には、良人同道で往つて、良人に仕へつゝ看病致しました。能く親の死に目にも遇はぬと申しますが、精神さへ到つて居れば、必ず遇ふことが出來るものでございます。

△祖先崇拜

要するに、目前の事ばかりに、齷齪せずして、遠きを慮り、人に對する最後の處置を忘れぬやう、致したいと思ひます。能く世間では、祖先崇拜はいけぬ、

子孫崇拝が良い、又家庭は子供中心でなければならぬと申しますけれども、人間の福祉は、何れも祖先の功業より受けたるもので、子孫の繁榮も亦祖先あつての業なれば、子孫の爲に祖先を大切にし祖先の爲に、子孫を大切にせねばなるまいと思ひます。昔より子なきは不孝の至也とか、名を揚げ父母を顯すは孝の至也とか云つてありますが、是れは能く此の間の消息を漏して居るものだらうと思ひます將來ばかり慮つて、既往を顧みないやうでは、どうして社會の向上進歩が出來ませう。私は生者に厚と共に、死者に薄からす、子孫を大切にすると共に、祖先を崇拝しやうと思ひます。



木の間より月のさしたる盃に花の影をもうけてける哉　（景樹）

新郎新婦とその媒酌者



亞米利加の女

○

▲近頃紐育の國民生命救助同盟會の事業として、從來婦人の溺死者を男子に救助させて居たのを今後は專ら婦人の手で爲やうと云ふ意氣なことが成立つた。

處で之が腕試を遣つて見ると、游泳上婦人は速力は兎も角長時間耐へ得るといふ點に於ては遙に男子の上にある相な、之が第一の目的は素より溺死婦人の救助にあるけれども、傍婦人の水泳を奬勵しやうと云ふのだから、在來の窮屈な浴衣を着る習慣を破つて、不體裁でない限りの裸體にして遣らせる、男子よりも長時間の水泳に耐へると云ふのは元來婦人の體の脂肪組織が寒冷に耐へられるのと、骨が男子よりも輕いので容易に浮かび得ると云ふ事實とそれから、女子は特殊の滋養分を取らずとも長時間耐へられると云ふのに起因すると云ふのである。

○

▲才氣溌溂たる米國婦人が勞働を厭はぬことゝ、如何なる職業をも神聖視することは今更ならぬ事ながら、茲に掲げる三種の職業は其中で最も米國婦人に相應しい種類だと言はれて居る、亞米利加では小學校を終つた程度の少女が電話交換手に出ると、最初の日から一週四五弗の收入があり、熟練すれば十五弗から廿五弗を得るやうになつて居て體健、音聲明晰、言語に禮ある忍耐深い女が最も完全として選に入る、而して申込者が非常に多いから

歐米最近流行の婦人服



其合格率は十人に一人の割合だ相である、一朝何か事件でも出來するとス井ッチに火の出る程忙しいが天下の大勢を己が掌中に握つた心地がして政治家でも富豪でも社交界の女王でもすべてが自分等の手をのみ待つて居るのだと思ふと何とも知れぬ程小氣味よいと彼等は常に言つて居る、合衆國丈けで其數實に十萬强に達して居る。

○

▲圖書館の給仕で、小學校卒業程度の十四歳から出ると一ケ月十六弗を支給されて朝の九時から午後の五時半迄勤める、少し智恵のある女なら仕事の閒を利用し、同年配の女學生に接近して談話を試みるとか、一緒に讀書をする杯、其心掛次第では隨分立派な學問が出來る、最も機敏な圖書係は、給仕、小使等から獨學と忍耐で仕上げた者が多いけれ共、又其養成所があつて其課程を終つた者もある、此養成所は合衆國中主なる圖書館と連絡して居て、高等女學校卒業の程度でなければ入所を許可しない、一人の婦人の如きは十六弗の月給から叩き上げて、今では某大學の圖書係長となり、月千弗を得て居るのである相だ。

○

▲歐米では既婚者は結婚指環を持つて居るが、離婚した婦人は人も知る如く夫人と肩書のあるため、其人の事杯問はるゝ事が多いので、離婚婦人の迷惑は少なく無いとあつて、パーカー夫人の提案に基き近頃結婚指環の型を少しばかり縮めたものを造り、離婚婦人は右手の小指に此の離婚指環をはめる事が流行し始めたさうである。

様々の女の上「二」

世に拗ねた女

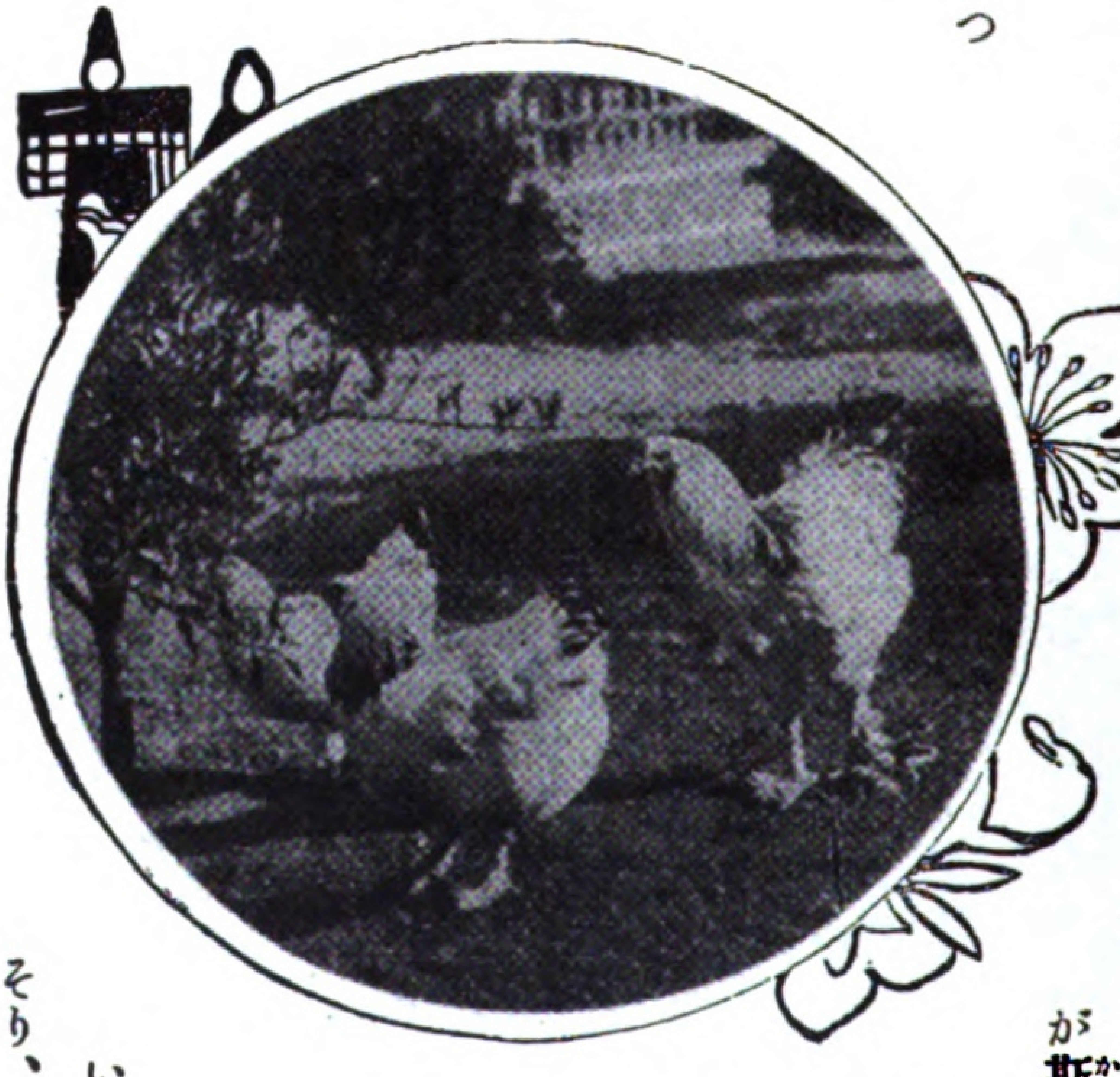
隅田川に浮ぶボートを前景に土手の櫻を一ト目に見渡す橋場町、舊小松の宮様の御別邸のほとりに、小ぢんまりした隠宅風、二階作りの粋なお家がございます。御主人は切髪の御隠居一人、それに赤い手柄に三越形の大丸髷、縞ちりめんのお召に半襟かけて、すらりとしたお脊に大きく結んだ博多の丸帯、小猫を抱いて二階の縁に立つた姿は、どこから見てもお妾さん、とよりは見えないのです。が、決してそんな方ではございません。是れは、あの、ぽんたで名高い清兵衛さんの従妹、性も鹿島の絹子さん、切髪の御隠居は、清兵衛さんの肉身の伯母さんでいらつしやいます。絹子さんはお年は三十五。それで獨棲の身を斯ふした若作り、毎朝お風呂を召して厚化粧、双頬ぼかした古風な燕脂に笹色の口紅、と聞いた丈けでは何か賤しい心でも秘めてるお方のやうですけれど、決してさうではないので……私は絹子さんのお口から、直接に伺つた、その理由と申ては變ですが、まアその若作り遊ばす



連翹の花山島の尾にゆれつゝ（月居）

お胸の中の哀れさをおはなし致します。前に一寸鹿島一家の家風を、かいつまんで書いて見ませう。

鹿島家には一家二十余軒、一つ型に出來上つた鹿島式の家風があります　又それがなかかなか微細なことにまで行き届いて、例へば着物の寸法までがちやんと定まつてゐるのです。その人の年齢や身體の大小肥瘠なぞには頓着なく、何でも女の着物は袖丈一尺五寸付け八寸、男物は口八寸の人形なしと定められ　初春には出先きで綻を切つても、ゆづり葉に紅い絹糸三針の縫初をして、歳神様に供へぬうちは針を持つな、硯を洗つて書き初めの供をせぬ中は年始の葉書一枚書いてはならぬ、と云つたやうな不自由な家風。それが自由であるべき精神までが斯うださうですから敵いません。鹿島に育つた者は、男も女もきちんと型にはまつた、舊家の若旦那式と、人形風の箱入娘になつてゐるのでございます。



流れくる色にきほひて百の葉も
心に浮ぶ花のさかつき（宣長）

それに一家を殖したい、他の性と交りたくないといふので、今まで百年來血族結婚だつたのです。絹子さんも十六の九月に從兄樣の處へお嫁にいらしつて、その暮には眉をそり、齒を染め、鹿島式のお可愛い御しんぞ樣とおなりなさいました。その明る春、親と親とが兄弟喧嘩の犠牲となつて、絹子さんは持つていらしつた十三荷の重い

お荷物といつしよに、お里に戻されました。

絹子さんは、旦那様の事は無論忘れる事が出來なかつた。或時は剃刀を枕の下に入れてお寐みなさつた事もあつたとやら。それでも例の人形風に育つた絹子さんですからお口に出して誰れに同情を求めるといふ事もなく、泣き寐入りに濟されました。若旦那式の良人様は、その後、鹿島風に似合はず、人に欺かれて相場に手を出し、さんぐ失敗して、さしも麻布に響いた角倉の鹿島も遂に人手に渡つてしまいました。旦那様のお父様は、先年、芝の裏長屋で往生安樂。銀煙管より外には重い物は持つた事のなかつた旦那様は、今では○○省の小使に成り下がり、炭俵をかついだり、他人の靴を磨いたりして、お母様と、かすかに煙を立てゝいらつしやいますのです。



絹子さんは如何かと申せば昔のまゝ鹿島家のお孃さんで、何の御不自由もなく、月雪花を友に暮していらつしやる。流石に初戀知つた前の旦那様の事、尾羽打ちからしたお噂を聞けば尚更に戀しくおいとしく、どうかして上げたいとお思ひになる事もあるさうですが、私の家

起き出てむかふ外山の朝づくひ
心もそらに晴れ渡るかな　（升子）

では、自分の財産でも、一家一同協議の上でなければ、自由にならない家制、殊に自分の失策で身代を無くした者には、例令白銅一枚でも、めぐまれぬ家風だもんですから」と案外薩張りしてゐらつしやるのです。が、その後で斯う仰しやるのです。「私はもう〳〵諦らめては居りますが、矢張り昔しの事は忘れられません　私は今でも斯うして、あの麻布に居たつもりで、あの頃と同じ樣なつくりをしてね、良人を待つてゐるつもりです。淋しくなると、縁に立つて外を見てゐるのですの」と、ちよと聞いた丈けでは









白雞の宿麗かや伊勢詣り（吳羽）

氣狂ぢみたお言葉のやうですけれど、總ての自由を無視し、時勢を無視した不自然な家風に育ち、男女混同の電車になど、宅の娘は乘せられない、といつてゐらつしやるお母樣とお二人で橋場の隱居所に世間を離れて暮してゐらつしやる絹子さんとしては、御無理はないやうに思はれるのでございます。

○

お父樣は日本は魯か、海外にまで知れ渡つた畫界の名家。その忘れ形身の谷村芳水女史は婦人でこそあれ、畫筆を執つては、雪の通ひ路、少女の姿、殊にお得意は元祿寛平時代

の人物風俗、あの頃の美人をお書き遊ばしては、如何な大家も及ばぬ御技倆に評判を高めてゐらつしやるのです。この芳水女史に憐れにいみじき戀物語がございます。十八の時、お父様にお別れ遊ばしてからは白魚の指にお母様を初め、五人の御家族をお引受け遊ばし　三十二才の春までは、お胸は清き詩のかげ、丹青の道、藝術上の御研究より外に戀もなく、悶もなく處女の純潔をつゞけていらしつたのですが、御職業のお畫の事から、お近づきになつたのは、大村さんといふ亞米利加仕込のチヤキ〳〵。白菊かほる天長節の午後、上野展覽會のお歸り、精養軒に卓子をかこんで以來、初めてあやしき煩悶をお知り遊ばしたのです。お年に似合はぬ御煩悶にぢれて〳〵ぢれぬいて、書きかけのお畫を引き裂いたり、



春雨や紅流す紙屋川　（句箋）

罪なき畫筆をかみつぶしたり、譯を知らない弟子達はまア此の頃の先生の御様子、お氣が狂つたのではあるまいかと、心配したのでしたが、その中にいつか從來の快活にお復り遊ばしたので、弟子達は、ほッと安堵の胸を撫で下ろしました。たゞ從前と異つたのは、あの西洋嫌ひでいらつしやつた先生が、會話に英語を交へるやうにおなり遊ばした事です。その中に御病氣といつて濱田病院へ御入院、御見舞にあがると面會謝絶。そんなに御重患でいらつしやいますのか知ら、と伺ふと、取次の看護婦はたゞニヤニヤと妙に笑つてゐましたが、御退院遊ばすと、赤い赤ちやんが乳母に抱かれて……………。

それからの芳水女史は、戀よりも何よりも愁い、苦

しい煩悶に陥り遊ばした。戀と畫との戰にお苦しみ遊ばしたのです。といふのは、例の大村さんは、女史に亡きお父様の僞筆を畫けと仰しやつたのださうです。正直な眞面目な　特に藝術に忠實な女史のお胸の中は、如何でしたらう？　愛人の言葉を聽かうか、お父様のお名聲の汚れです。畫家の神聖に意地を張らうか。愛人の失望と憤怒とは、まざまざと眼に見える。流石に御決斷の迅い芳水女史も、とつおいつ思案にお暮れあそばしたのです。功名と利慾とに滿身の血を漲らしてゐらつしやる大村さんは「愛があるなら、僕の言ふことを聞いて呉れ。良人の犧牲になる妻に、何の恥づる所がある」とお勸めになる。大村さんのお言葉によれば、芳水女史さへ、うんと仰しやれば外國人に賣つて二三萬のお金は譯もなく大村さんの懷中へ入るのださうです。女史は人知れぬ苦痛に幾夜を泣いた末、遂に決心して、斷然お斷りなさいました。利己主義の彌蔓つてゐる西洋に人と爲つた大村さんは、その言葉を聞くと同時に、ふつと米國へ赴つておしまいなさいました。その後手紙の一通だもおよこしなさいません。

芳水女史は今年三十七才、五つになるお孃さんと乳母と三人、芝山内の靜閑なお住居に畫筆を執つて增上寺の鐘の音に、耳を澄まして、超然とはしてゐらつしやいます。が、昨今の芳水女史は以前のやうな單純な、快活な、天才肌の畫家ではなく、邪推深い嫉妬強い、うつかり世間ばなしも出來ないやうな、むづかしいお方となつておしまひなさいました。



春の夜や榮華の夢を語り草(花紅)

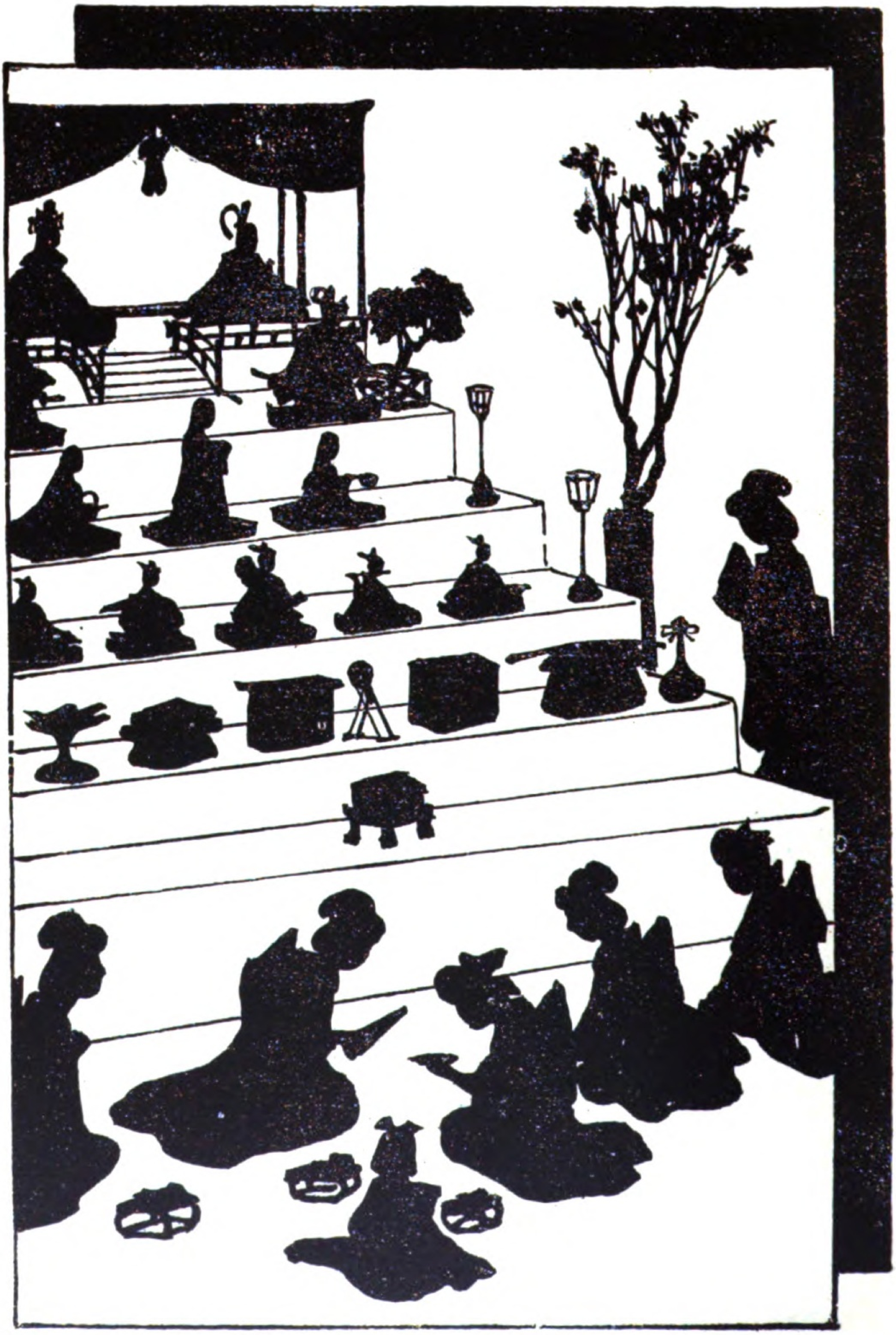
曲水の宴

曲水の詩や盃に遲れたる（子規）



雛の宴

飾きて遣おりく雛の主かな（闌更）



春野の遊び



青き踏む佳人才子や愁有







狐の諺馬の耳

諦三世

何れは俄分限の成金と呼ばるゝ類の人なりけらし大方の世に流行する儘に風雅とやら趣味とやらの心得なくてはと、柄にもなき謀叛氣起し、茶の湯といふに志しけり、誰々の作の茶杓、利休より傳への茶碗、古渡りの香合などすゝめらるゝまゝに多く買ひ求め、新に數寄を凝らせし茶席をしつらへ、當時高名の宗匠を招き、披露の會をぞなしける、さるほどに、その人密かに思へらく、斯くばかり黄金をつくし、心をつくし調へたる調度のみなれば、宗匠は嘸かし感にや入らん、如何なる賞讃の詞や述ぶると、會の初めより待ち構ふれどさる氣色は些かもなきのみならず、反つて物足らはぬ氣なる面持なり、主たまり兼ねて『いかに宗匠、此の釜も此の茶碗も何一品として深く由緒なきは候はず、君はいかに見させ給ふ、何事も心置きなく御指圖こそあらま欲しけれと云ふ、宗匠暫く口籠りしが、さて容姿を正して『實に御數寄屋の構より初めて御調度の數々、何れも疎ならず愛でたき物に拜見仕候、唯唯、そこなる見苦しき腹ぎたなき御主人の一人、この御席より缺けたらんには、いかに風流なる雅筵ならむとと先刻より口惜しく存じ候ふと、臆面もな









く云ひければ、主はかへす言葉もなく赤面しけるとなり。

○

昔女ありけり、朝夕に手馴れの鏡に打ち向ひ我と我が姿をうつしては、世に比類なき美人よと自らほこりけり、ある朝、ね亂れ髪を掻き上げむと例の鏡を見れば、こはいかにせし、烏羽玉の闇にして、花顔はたえてうつらざりき、女いたく悲しみ、必定、我が寢ねたる間に我が美を嫉む者ありて盗み行きしならむと、喚きつ叫びつ、市中を捜し求めあるきぬ、時に人あり、「和女の頭は少しも常と異ならず、肩の上にあり盗まれたりと思ひ違へたるは朝見し鏡の裏がへり居りしに心づかざりしやと云ふ女乃ち家にかへり、再びあらため見しにまこと裏なりけるとなり。以上の話は經文の中にありて、眞理は近きにあるを強ひて遠くに求むるを諷せしものゝよしなれど、日常の事、いづれの類にも適用し得る譬喩なり。

○

鏡にて思ひ付きぬ、昔田舎者あり、農作の隙をはかりてお江戸見物に出で來りぬ、上野淺草増上寺と膝栗毛に鞭うちて見物してあるきしが、ある賑やかなる通りの店に、おんかゝみ所となんしるされける、田舎者この招牌に目とめて「あはれいかなるものをや賣る店ならむ田舎への土産に」と店をのぞき見るに、美しくかたづけたる店前には若き女房の針仕事せるのみにて、何





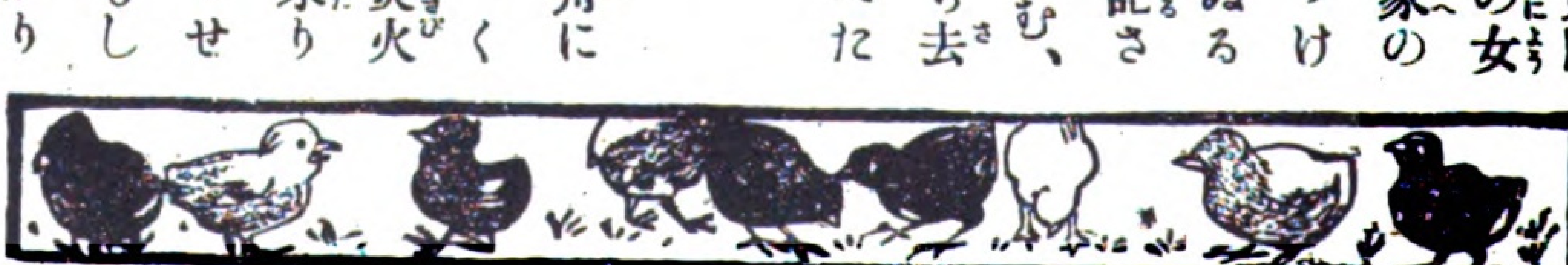




物もなし、田舍男ほとほと感じ入りて、扨てはお江戸なりけり、おん鏡見所といふは絶えて我が地方にはあらざるをげに面白き商業かなと、猶もその女房を見てぞ歸りける、蓋し昔の鏡は青銅なりければそを磨きて渡世する家のおんかゝみをおん嚊見と、とりちがへたるなり、さて次の年も豊作なりければその男面白きお江戸又見たくて上京りける、例のおんかゝみ處を尋ぬるに、今年はおんかゝみとはなくて、ことしやみせんしなんと假名にて記されたり男暫く打ち案ずる様なりしが『成程成程、今年や見せむ死なむ、ふむ、解つた、來年又來たらあのお内儀が御座るだらう』と數多度合點して立ち去りぬ可笑しや、琴三味線指南、といふ事なりしものをいみじくも讀み違へたるものかな。

○

むかし大德ありけり、某家の招きに應ぜむとて隣村まで行く途次、渡舟に乘り給ひけるが折柄秋の暮、風すさまじく吹き出でゝ舟は河の中流にて、くつがへりぬ、幸に和尚は水練の心得ありければ無事向ふ岸に泳ぎつきて焚火しつゝ、しとゞ濡れたる衣の袖をかわかされける、さる程に出迎へにと來りし人、この體を見て大に驚き、和尚様には飛んだ御災難、御怪我はあらせられずやと懇に問ふ、和尚呵々とうち笑ひ、のう在家の御衆や、この河もし沸きたつ湯なりせば、老僧はこの儘ゆで章魚となりやしつらむも、幸水なかり









けれは無事なるを得しと、言葉の節さへ亂れず。

ふりかゝる災難も心勞も、かく諦め行かば、この世はいかに樂しく、心の中も涼しからむよ。

○

これは今の話なり、さる顯官の、その夫人は疾く亡せ給ひて、忘れ形見は一粒種、玉とかしづくお孃樣いとしさに、後妻さへ迎へず萬あぢき無さ忍ばせ給ふ中に、春風秋雨、早くも幾廻りして、お孃樣もお妙齡、先づ頃むかへ給ひしお婿がねも此の夏、無事法科を卒業、親樣のお威光七光りして、いの一番に奉職の口も定りしかば、お邸の內外、只よろこびの聲にのみ滿ちみちし。

さるからにお孃樣ならぬ今は新學士の若夫人、天下晴れてゆる〳〵と、相模路は函根あたりに蜜月の旅行をと、父樣のお許し得給ひしかば、その日は朝よりいそ〳〵と馴れぬ御手にトランクなど持ち出で、準備とゝのへて在せしが、ふと思ひつきし面持にて、時しも御在宅の父樣のお書齋に行かせ給ひ『あのお父樣 久一樣(婿樣の名)の脊廣の見本を持參します樣、三越に今がた電話を掛けて置きましたけれど、私共はぐづ〳〵して居りますと午前の汽車に間に合ひませんから、父樣すみませんけど御覽遊ばして、良いのをおあつらへなすつて下さいまし』父樣優しき御目尻に尙更皺よせて聞いて在せし









が『はつはつはつ、光子や、洋服はちやんとその人々で寸法を量つてこしらへるものだよ。はつはつはつ、私が着てもよかつたらあつらへて置かう、』嬢様初めて心付きて、『あら、どう致しませう、ほゝゝゝ』と計り、長き御袂もて顔を蔽ひしまゝ苦しき迄に見え給ひぬ、この父君お脊低くつぶらに肥えて云はゞビール樽式の御恰服なるに婿様は瀟洒たる貴公子肌、すらりとして在するを見たるものは、倘更可笑しかりしなり。

○

近火ありてのあくる日、可愛げなる女の童の聲して御免なさいと玄關よりおとなふにぞ、出でて見れば、知己の家なる嬢ちやん、九つにて小學校二年の君なり、『よく被在したのね、上つてお遊びなさい』と云へど、莞爾ともせず何か懐をさぐるさまなりしがやがて一片の紙をとり出で、そを見つゝ『昨晩は御近火でさぞ御心配でしたでせう、早速御見舞に上る筈でしたけれど、無人で失禮致しました、母様が參りますのですが風邪で臥せつて居りますから、御免下さいまし』、敎室で讀本を讀む樣な切口上、その懐紙には覺束なき文字もて御挨拶の言葉をしるされけるなり、さるは議會にて何某の大臣の演說、草稿にたよりて一言半句もたがはじとつとめ給ふとひが聞きしたるを思ひ出だされて、可笑しかりし。

三月

春季皇靈祭

（二十一日）

春風嫋々たり千門の柳、暮色蒼然たり、萬戸の烟、足引の山の尾上の彩霞、春は實に美しき眺なり、雲雀鳴く野の初蕨、折り〳〵通ふ和風も、袖にえならぬ花の香ぞ、白き花、紅き花、片々として青麥の間に散りかゝる今日此頃、野道に萌えづる蓬の緑、古き代よりの雛祭る、乙女も御代の花なれや。

桃林の奥明し
藁火焚く家かも　禾水





日	月	火	水	木	金	土
3. 10. 17. 24. 31.	4. 11. 18. 25.	5. 12. 19. 26.	6. 13. 20. 27.	7. 14. 21. 28.	1. 8. 15. 22. 29.	2. 9. 16. 23. 30.





美術

造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ〻

女(めの三)

第十三回

新學期開講

通信教授
產婆看護

講習生募集

會長陸軍二等軍醫正　正六位勳四等ドクトル　渡邊鼎

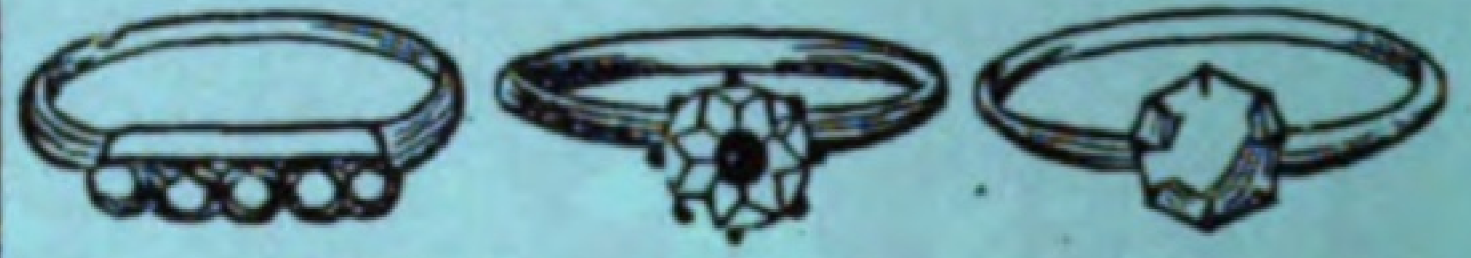
規則要郵券三錢

東京四谷區內藤町一ほノ七

東京產婆看護婦講習會

產婆科六ケ月卒業
看護科四ケ月卒業

大流行金メッキ製



壹個參拾五錢 送料三錢宛

安くてよい指環

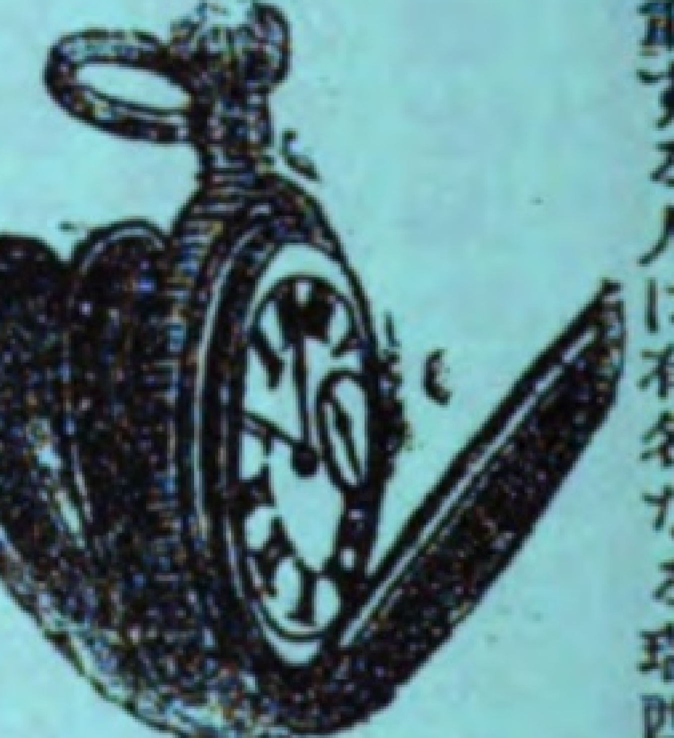
これは金メッキ製で摸造寶石を入れた指環で、人のはめてゐる所を見ると、どうしても十圓ゟ廿圓も出した眞正の金指環と思ふ桙によく出來てゐます。故に東京では只今大流行です。それで大切にすれば二三年間は色も變らず摸造寶石も眞物の樣です、今回廣告のため一個三十五錢送料三錢小爲替で送金次第御送り致し升二錢切手なら一割增四十二錢分送れ●形色々あり誰の指にも合ふ樣に出來てゐます

東京神田錦町 錦城學校南隣

小島工場

正銀側懷中時計潰値同樣廉價販賣

經濟と實用を兼ね且時間を重ずる人は有名なる瑞西國タバンス時計會社特製品正銀側時計



を御使用に限る構造は極薄形細密斜子刻裏二枚蓋龍頭卷頭引出針廻し機械最新式寶石入四十時間持廿年保險付15 16 17形壹千個限り

四圓九十錢(但し三枚蓋一圓五十錢增)●正銀側は總年使用するも時價を損せず且つ本品は潰値同樣の大廉價故御購求後一年間は無割引す●他品交換み承諾●御望の方は女學世界廣告に依り御注文の旨御記入御申越し次第景品として舶來鎖磁石鹿皮の三品を相添へ代金引換小包郵便にて送る●送實廿錢●爲替生玉局宛

▲注意 御入用の御方は御來店現品御一覽の上御購求を乞ふ向遠隔の購客にして現品御一覽なく御購求後萬一貴意に適せざる時は無割引他品交換又は代金返戻す

販賣元 大阪市東區上本町五丁目 貴金屬時計商 夏目商會

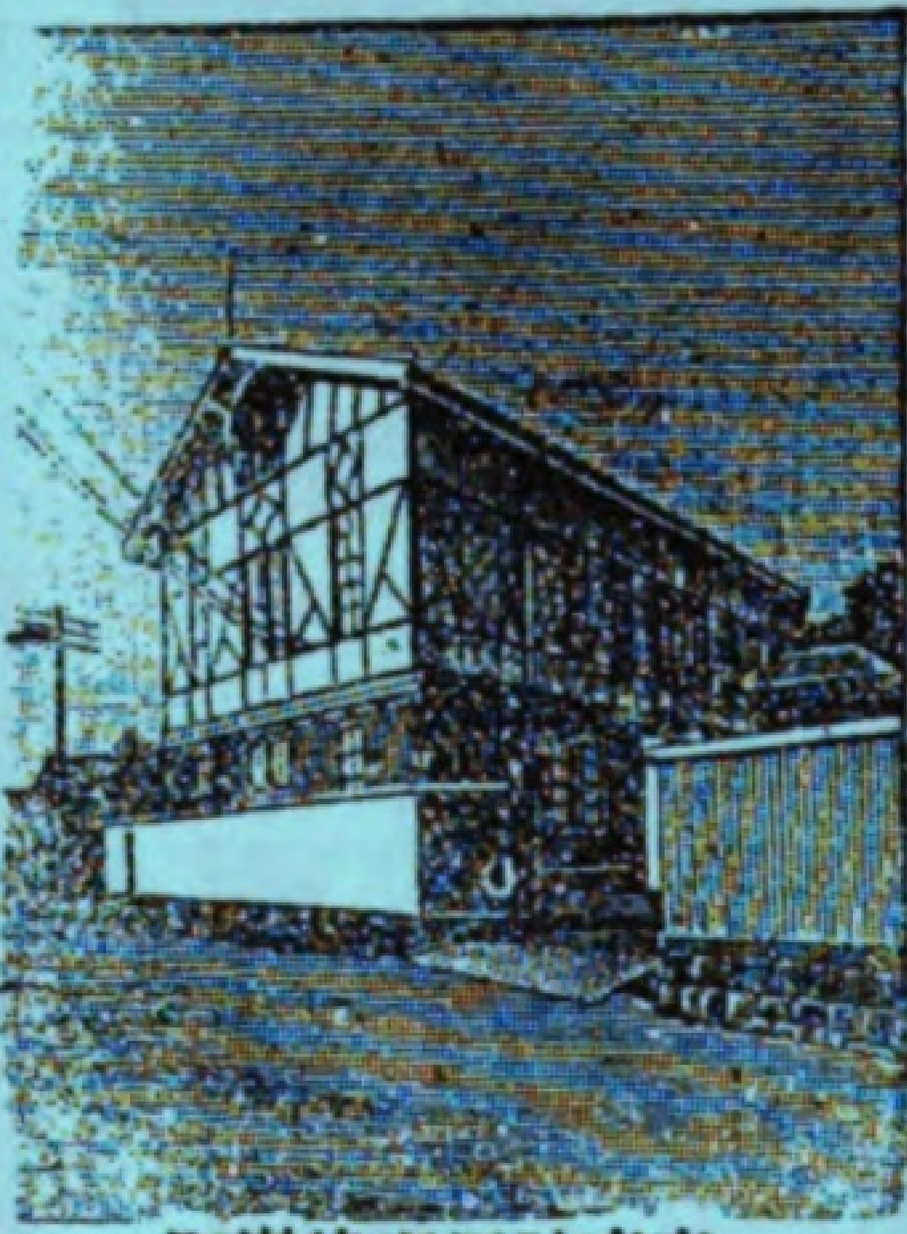
東京市九段下
神田今川小路二丁目十二番地

隆(はな)鼻(たかくする)術(ほう)

和田耳鼻咽喉醫院

午後
夜間

電話本局一七三〇番



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

生徒募集

ピアノ、オルガン。バイオリン。唱歌。其他管絃樂器及理論等

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

男ちゞれ 女くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町
岩阪澄子

やせる薬

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なく●やせて●中肉美容となる新薬なり試みたき方は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三
池田製薬所

◎産婦人科 ◎小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 吉岡彌生 (鷲山改姓)

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地
東京至誠病院 電話番町(二二五七)

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村
川名助次郎

女(ぬの五)

最進歩せる作文自習機關

文學博士 芳賀矢一先生 杉谷代水先生共編

作文講話及文範

美本 全一冊 菊版千四百頁 定價金三圓

特價 金二圓六十錢（送料內地廿錢、臺樺四十錢、朝淸五十錢）

文は社交の要具也。文の巧拙は處世上の利害に影響し生活上の幸不幸を左右す。特に文に巧なる人はその心ばへのけ高くその人がらも偲ばれて床しく親しきものなれば、文章の修練は文明女子第一のたしなみ也といふべし、容易に作文の呼吸を會得し、細大の技術に熟達せんと欲するの士女は本書を繙け。本書は純文學界、敎育界及び一般社會を合一し、普通人士の常識を本位として斬新なる方法により、懇切周到に編述せるもの、文章自習者に取りて唯一絶好の機關也。全部を三篇に分ち、

講話は古今東西の作文法、修辭學、雄辯術より、文法、句讀法、用字格に至る迄、作文一切の法則を精究して其髓を採り、美文、普通文の二面、優等、及第、落第の三級より文品の高下、文體の單複に亘り、一々世間の實例によりて各原理と實習法等とを講說すること詳密精到。

文範は時文を中心として和漢の古文を參へ、記敘、論說、敍景、情感、祝祭、弔慰の文より、飜譯文、廣告文の實際的方面迄、數百名家一粒選の模範文を掲げ、適切なる評譯を添ふ。

便覽は國文法、假名遣、送假名、雅俗疊字、同訓異字、字畫辨似等、机上一刻も手離すべからざる實用的の諸表を網羅す。

斯の如く斬新に斯の如く周到に又斯の如く實際的なる作文書は多年非常に渴望されつゝ未だ一冊も出でざりしもの、本書一部は眞に一學校一圖書館にも相當すべし。裝釘雅美、價格低廉、更に部數を限りて特賣を行ふ。請ふ一粲を賜へ。

發兌元 東京神田 振替一〇五 冨山房

女(ぬの入)



結婚しらべの内幕

人事興信所長　内尾直二

昔は多く同藩内とか同村内とかの男女が結婚したので、當人同志は知合でなくとも、親や親屬の間に大凡の消息がわかつて居ましたから、格別調査の必要もなかつたのですが、交通機關が發達して果から果の男女が入り亂れるといふ今日、輕卒な媒人口を信じ、富鬮をひくつもりで一生の運命をさだめるのは、危險千萬ではありませんか。これがために悲慘な運命に陥ちいる男女の實例は殆んど數へきれぬほどであります。且つ生存競爭のます／＼烈しくなるに從がひ、利害問題を先にしてその他の調査を度外に置くために、忽ち破鏡の歎を見る例も頗ぶる多くなりました。この弊風は一日も早く根絶したいものです。

▲結婚にも色々の流行あり

結婚も時代に應じた流行があつて、戰爭後一時は軍人熱の結婚が流行しましたが、當今は富豪が華族の子弟を目がけて婿を求め、華族の方でも富豪を娘を貰ひたがるといふやうな金と肩書が互に求婚し合ふことが流行して來ました。早い話が大學出の青年が優秀の成績で文官試驗に合格したところで、良い手蔓のない者は先づ屬官位で、三四十圓の月給に甘じなければならず、これでは却々紳士の體面を保つことが出來ぬと

ころから、金持の娘を貰つて持参金若くは仕送りを當込にする、又金持の方でも、名を賣らうと云ふ考へで肩書付の婿を求める。これが現代の思潮であります。

▲過てる結婚の悲劇

此のやうに今の所謂紳士連が金持の娘を貰つて體面を保ち得るとしても、夫の權威を保てるや否やは頗ぶる疑問で妻の氣隨氣儘を辛抱する位は未しも、甚だしいのは、ひいき役者の舞臺着と同じ物を下に着こんで惚けながら芝居見物したり、俳優と瓜二つの子を産んだりする夫人に對しても、寛大に默許して居る紳士さへあります。去り乍ら男子たる者が默許の鬱忿を他に向つて晴らさずには居られぬから、遂に異分子の子供が三四人も一家庭に同棲すると云ふ始末に立至ります皆がさうではないとしても、かゝる政略一方の結婚に悲劇のない家庭は稀れです。

▲犠牲になつた花嫁

金滿家の娘を貰ふ紳士でも、婚約の折には商賈の取引のやうに立入つた談判も出來にくゝ、月々の仕送りなぞは大抵當こみの胸算用で結婚して了ふのですが、先方では多く握り手で唯富の匂ひを嗅がして籠絡するのですから、案外持参金も輕少であるし婚後の仕送りもゼロ同樣と云ふ場合に、氣の毒なのは犠牲になつた嫁御寮で、目算の外れた良人から腹いせの虐待を受け揚句の果が離婚と相場が定まつて居るのです。

▲危難を免れた紳士

政略結婚の危險は申すまでもありませんが、體質調査を忽がせにする結婚も實に危いものです。肺結核は近頃遺傳病でないと云ふ説もありますが、よしさうにしても肺患者の子孫なら、先づ弱い體質と見做さなければなりませんから、一應調べる必要がありますし、悪災な花嫁の身體をメチャ〳〵にする花柳病なぞは、分けて念入りに探らなければなりません。又かの天刑病は稀に見るものと思ひの外。私方の結婚調査だけで

も一ヶ月平均十位の數はあるのです。つひ近頃の實例ですが、子供兩人を殘して妻に先立れた或る建築技師は、日本橋區で質屋を營む三十位の後家さんとの縁談について、私方へ調査を賴みに參りました。早速調べて見ますと、この婦人は聰明にして品行方正凡ての藝道に堪能の上に容貌は十人並以上、そして有名な資產家の娘であると云ふ事實が各方面から證據立られましたので、技師は掘出しものだと非常に怡びました。併し私方では前夫に生別れしたことゝ、郷里が遠いから親戚に當る深川木場の豪商が親元になると云ふこの二つの條件が少し不安心に思はれ、今一應郷里を調べて見やうと申したけれども、それには及ばぬとのことで、大滿足の樣子でした。ところがどう考へ直したか、翌日郷里の調査を賴みに參りましたので、これに着手しましたが、矢張前同樣の好評ばかりで、疑ふ餘地がないらしいのです。併し戶籍面に五十を過ぎた實母が最近離縁されたことになつて居るのが怪しいので、百方手を廻して調査しますと實母は酷い天刑病を發して居り、此度の縁談が成立つて里歸りの曉に、婿殿の目にかゝつては一大事と、俄かに離縁の屆けをして邸隅の一室に隱して了ひ、急拵へに後妻を貰つたと云ふ事實が分りました。義理堅き田舍人が、この名望家のためによく此等の秘密を守つて居たので調査に頗ぶる苦心したのですが、これを聞いた技師は危難を免れたと云つて感泣しました。



▲恐しい化性の淑女

昨年のこと、市中で屈指の某豪商が新聞へ求婚廣告まで出して後妻を探したことがあります。と云ふのは申込のある財產家、權門家の女子では、子供の三人もある家庭の妻として調和が惡い、それより由緖さへ正しければ、辛酸を嘗めて節を全ふして居ると云ふやうな賢婦人が欲しいからでありました。が、多年信用せる或男が、本鄕に母親と佗住居する二十二歲の理想的婦人を見出して、媒酌の勞を執らうと云ふので、豪商は從前からの關係上私に一應の話しがありましたその話しに依ると、件の婦人は中國の可なりな官吏の娘で、東京の某女學校へ入學して居たが、父は妾に溺れて學資の支給を中絶したので、半途退學の不幸に陷り、父に冷遇されるので娘の監督かた〲出京して居た母と共に本鄕へ佗住居してゐる、彼の母は却々の賢婦人で、良人の妾が子を設けたのを、良人の體面にかゝはつてはならぬと云つて自分の手へ引取り、實子のやうに愛育し、娘は出敎授などして生活を助け、矢張妾の子供をよくいたわつて居る、この母あつてこの娘あり、現代の女子に得難い厚德な婦人、それに花も羞らふ容貌で、學藝のたしなみも十分、實に理想的であるから、兩三日の內に婚約を取定めたいと思ふが、念のため君に一寸相談すると云ふことでした。私はその母親が妾腹の子を引取つた點に疑問が起り、交誼上一寸注告しましたので、豪商も心づき、それより調査に着手して見ますと、イヤハヤ驚いた代物、その由緖と女學生であつただけは事實ですが、成績不良の上、虛榮の費用のために在學中から品行は亂れ、母の出京したのは監督のためではなくつて、娘の私生兒を育つるためであつた。そしてこれを妾腹の子と僞つて德行の虛名を賣る玉につかひ、美容を餌にして玉の輿に乘る心算、尙目下も鄕里から仕送る生活費の補足に人に言はれぬ秘密職業をして居る事實が明らかに判りました。併し敎育ある娘と老猾な母とが巧妙に近隣をくらまして居たから、實直な媒人が先づ一ぱい喰はされた

ものと見えます。

▲文章と人格は正反對の婿

またこんな事實があります、人格論、修養論の著述は何れも世人を感動させ、女子教育家間には特に評判のいゝ高師出身の知名の某文士に、或る錚々の女流教育家が、自分の門下生で一昨年卒業したさる權門家の娘を媒酌しましたこの女子教育家は、その文士に一面識もないが、多くの著書によつて平生の人格を敬慕し且つ百五十圓位の月收あることを知つて推選したのです。權門家の方でも無論大喜びであつたが、矢張順序として調査して見ますと、この文士の家は、始終下婢が入り代る



その原因は彼が一錢二錢も忽がせにしない貯蓄家だけに、常識を外れた吝嗇家その上容赦なく人をこきつかふ。のみならず來るものは手當り次第辱しめる。これまで入れ代つた十五六歳から五十余歳の下婢は、一人として彼の爪牙にかゝらぬものはない。下婢等は何れも獨身で收入のある主人を見込み一躍令夫人の位置にすわる目的で服從して見ると、冷酷でしわいのに辟易して忽ち逃げ出すと云ふ事實が發見され遂ひに破談になりました、その後女子大學を卒業した溫淑な一女子がこの文士の著書を讀んで、人格に父兄も共に敬慕して、遂に結婚したのですが、幾くもなく破鏡の歎きを見たのは左もあるべきことながら、實に氣の毒に堪えません。

これを以て凡てを律するのは失敬ですが、一體文章と文士の人格とは反比例が多いやうですから、著書を見て直に著者の人格を推定するのは不覺でせう。教育ある女子が欺かれたのは大分この邊にあらうかと思はれます。

▲わざと盲目になる親

御承知の通り、日本は他の文明國に比べて離婚の多いこと二割に近いのですが、尙、公然の送籍が、結婚後大分手間どれる習慣がありますから、入籍前に行はれる離婚の數まで計算すると、殆んど四の割合に上るのです。かゝる多數の離婚より受ける打撃は、男子より女子の方が勿論ひどいのですから、私がこの仕事を始める際に、結婚調査は女子側の申込が多いことゝ豫想して居ました。ところが實地に當ると、丁度反比例なのに驚いたのです。これは舊來の習慣上、まだ女の權力が認められぬ所爲でもあらうし、一には世間の親々が娘が十八九にもなれば、花盛りの内に良緣をとあせり、二十二三になればもう緣遠いと氣を揉み、棚から牡丹餅の媒人口は不安心ながら餘り數をつゝいて蛇を出すより、大抵なところで定りをつけたい位で、わざと盲目になり、輕卒な結婚をさせて了ふのが一源因で、父母に誤れることが、多いやうに思はれます。男子の方は追々晩婚の傾になりますから、女子も決して慌てるに及びません。よく自重して將來を誤らぬ用心が大切です。

▲良人の祕密調査

完全に調査を遂げて結婚した夫婦は、幸福な生涯を送ることが出來ませうが、永い年月の間には思はぬ誘惑に遇ふて、琴瑟和合の調子が亂れぬとも限りません。かゝる場合、妻は夫の爲に目を閉ぢ、夫は妻のために目を閉ぢるのが道でありませう。併し知つて目を閉ぢるは結構ですが、ぼんやりして禍根を深くするのは愚の至りです。妻の外出が頻繁だが、花遊びかしらと調査すると、いまわしい事實が附隨して居たり、方正

謹直と信じて居た良人の、隱し者を發見した場合なぞは、調査と云ふことは如何にも慘酷な又不德義のやうにも思はれますが、これに依て適當の善後策を講ずれば、よく禍根を拔き、雨降つて地堅まる夫婦仲となり得られませう。特に妻に秘密を知られ、さばけた取扱ひをされた男は、重荷を下した心地がして、隔ての籬も取れるものです。どんな男でも妻に向つて自分から白狀する勇氣はないもので、忍ぶ戀路のつひ深入りする傾もありますが、一度妻に秘密を知られ序開を言はれて實に濟まない、もう過は再びせぬと詫口上の皮切が濟めば、そこに調和の空氣が流れ、元木に歸る緒となるものです。こゝらの經驗なき婦人は、一朝事に臨むと大失態を演ずるので、郎君の愛は妾が一身に集れりと確信して居た妻君が、三越へ買物に往つた時、藝妓と手を携へて徘徊する良人にハタと出遇ひ、忽ちその場に卒倒した實例もあります。



▲巧みに禍根を斷てる賢妻

東京の近縣に住ふ或る資產家が肺病に罹つた際、妻君は五年間一日の如く看護に手を盡し內外の用務を一身に引受て働らいたので、良人は屢々感泣した位でしたが赤心天に通じて遂ひに全癒しました。ところが一二年經つてから、商用で出京した良人が無斷で二日ばか



り歸らないことがあつた。この良人は評判の品行方正家で、妻君も此點には深く信を措いて居たのですが、娘が年頃になる今日まで一日たりとも默つて家を明けたことのないのに、泊り先を尋ねても少し不得要領の答へをされるのは、不思議なことゝ感づいて、私方へ泊り先の調査を頼みに來ました。それで先づ心當りと云ふ小田原へ行つて、友人に就て問合せましたが、當方へは來ないと云ふ。それから道の序に國府津、大磯の宿屋を問合せて宿帳を見ますと、果して大磯の某旅店に夫婦名前で泊つたことがあるのでした。そこで婦人の風采を尋ねると、場末の藝妓らしいとの事。それから停車場で、件の男女が赤羽根までの切符を買つたことを發見したので、或は目の先の藝妓ではないかと妻君に注意しましたが、決してそんな筈はありませんから他方面を探つて見てくれと更に取り合ひません。併し私方では信ずる目的に向つて調査を進行して、遂に本所間近の藝妓であること及び仲立は永年出入の者であることを確めたのです。飼犬に手を噛まれた妻君の驚きは推察に餘りありですが、この妻君は賢い婦人で元來この調査も家名や良人のためであつて取逆せた嫉妬ではなかつたので、事實の判るまではその素振りを少しも良人に現はさず、誠に沈着なものでした。そして確證を握つた上で時機を見はからひ、旨く忠告しましたから、良人も忽ち反省して、綺麗に手を切つたさうです。以上の話は甚だ散漫ですが、盡く實例であるから、御參考の一助にもならうかと思ひます。



姑と嫁の親睦策

武田藍涯

▲損な役廻り

我子に嫁をもらつて先づ安心と重荷を下ろし、夫婦仲のいゝのを喜んだ姑も、追々日數が經つにつれて面白くない話の持上るのは困つたものです。これは今まで何事も母親任せで居たものが、急に嫁任せとなり、今まで獨りで出たものが二人連で往きたがるやうになると、姑は、掌中の玉を新來の客に奪はれたやうな感じもしようし、さうすると何となく嫁が可愛ゆくなくなり、ツイ缺點も探す氣になる。小言も言ひたくなり、若夫婦の私語も氣にかゝる。そこで親子水入らずの穩かな家庭が、恰かも水面に石を投入れたやうに忽ち波瀾を生じ、葛藤を惹起すのでせう。「嫁の三日ばめ」と云ふ諺もこゝらの消息を言うたものであらうが、かゝる紛紜の起るのは、姑が惡いばかりでなく、嫁の方にも善くない所があるやうです。それを世間では姑は嫁をいぢめるものと相場を定めて、何か事が起ると、よく實情も調べずに、嫁にばかり同情すると云ふ傾があるので、姑も實は損な役廻りです。嫁となるも、つらいことですが、姑となるも、嘸ぞ苦しからうと思ひます。

▲唯一の調和法

東洋諸國では同族同棲を美風として居るので、支那の如きは、昔は四百人の家族が同棲して平和な家庭を作り、朝廷から旌表されたと云ふ話もあり、今でも臺

灣へ往て見ると、男二十三人、女十七人と云ふ大家族の家庭があります。處が西洋は、「男は父母に離れて妻に逢ひ、二人の者一體となるべし」といふ聖書の本文を確く守つてか、皆な別居主義を採つて居ります。從て嫁と姑のいさかひ話もなければ、これを筋とした小說や芝居もありません。今此の二つをくらべて見ますに、東洋の同居主義もそれがために風波を生ずるやうでは美風とは云へませぬ。又西洋のやうに夫婦ばかり仲よくして、親々を疎略にするのは、勿論美風とは申されません。ことに到底別居主義を採りがたい日本の家族制の下に於ては、無理やりに習慣を破つて別居を企てるより、寧ろ同居の美風を作る方が安全の策だと思ひます。それには互に讓步して調和を保つより外に手段はありません。

▲雪をかぶつた竹

先づ姑は餘り權力を振りまはしてはなりません。天に二日なく、地に二王なしと申しますが、一軒の家にも主人は一人で澤山です。我邦でも中古皇帝の外に上皇、法皇があつた時代がありますが、其の時の政治は勝手に院宣を發して恰で鼎の湧くやうなものであつたことは歷史に明かです。それゆゑ一家の事も、地位を讓つたらもう干涉してはなりません。一家の老夫婦が隱居し、伜に代を讓つてから、猶ほ家政を自分の思ふ通りにしやうとするのは、惡い開けない考へです。自分が手しほにかけて育て上げた眞實の娘ですら、一人前になればなか〳〵言ふことを聞かぬものだのに、他人が生で他人が育てた嫁が思ふ通りになる筈もなし、しつくり家風に合ふ道理もありません。自分の娘の足らぬのを見たら、他人の娘の缺點も許せる筈ですが、不思議なことには吾娘に駄々をこねられ、劍突を喰はされても、「本當に我儘で困りますよ、そんなことでお嫁に往つてどうするえ」位のことを、笑ひながら嬉しさうに言つて居ながら、ハイ〳〵と從順にする嫁が憎いと云ふのは、實に可愛さうではありませんか。雪を被つた竹は美しいものですが、其の下になつた竹の辛

さは如何ばかりか知れません。『宅の嫁は誠に柔和で、何事も私共の言葉に背きません』なぞと、八釜しやの姑の喜び顔する時は、嫁さんの袂に涙の落ちる時です。ですから嫁にやつた吾娘を大事にして貰ひたければ、先づこの可憐な嫁を大事にして隠徳を積みたいものです。若い時姑で苦勞した人は必らず嫁に思ひ遣りがあるべき筈を、却てその意趣返しを嫁に向けるのは、所謂怒を移すといふもので、慘酷な仕打です。世間で八釜しいと云はれる姑は、必ず若い時から後家を立通し、千辛萬苦と戰つて息子を立派に育て上げたと云ふ歴史つきの人のやうですから、さういふ人はことに注意がいります。一般に姑ばかりの家庭より老夫婦揃つた家庭の方が穏かなやうです。これは良人ある老婦人は自然執着が少く、干渉の度が緩やかな加減もありませう。



▲戰闘準備をする嫁

併し老婦人の心理狀態を察すれば、無理もないところもあるのですから、嫁はこれに同情して凡てを忍び、優しく仕へるのが道です。さうしなければ取返しのつかぬ事になります。實の親とならば何遍爭つても夢のやうに忘れてしまふが、根が他人の姑、一度衝突したら何時になつても決して忘れるものではありません。故に始めを大事にし、よく忍耐して笑顔で仕へ、眞實の親しみを得るやうにしたいものです。初嫁が經驗もないの

に、内閣でも受繼いだやうに、直ぐと家政を料理せんとするは心得違ひです。如何に腕のある嫁でも其の家家に夫れ〳〵家風のあるもので、緣付早々は親類の交際、出入への渡り、來客の待遇なぞに就ては、間誤つくことが多いものですから、嫁自身は見習生のつもり、姑は講師のつもりで行らなければなりません。世間の親達の中には、どうか娘を姑のないところへ遣りたいと云ふ人もあるが、これは姑を邪魔にせよと敎ゆるもので、初めから反抗心を吹込むものです。それよりもお前のやうな横着者は、姑に仕込でもらはなければ、良人を立派にすることは出來ぬぞと、みつしり言ひ聽かすが本當です。兎角實家の親が先へ立て姑を煙たがるから、嫁もその氣になり、姑に對する戰鬪準備をして往くやうになるのです。そんな風だから姑の笑顏も鬼の如く見え、優しい言葉も氣味惡く聞えるのでせう。己を惱ますものは、第一我心の妄想であります。

▲融通の利かぬ嫁

或る嚴格な家庭に育つた娘は、方正な紳士に嫁して琴瑟相和して居たが、舅姑や小姑とは趣味はまるで違つて居た。舅姑や小姑は芝居は大嗜、淨瑠璃結構といふので、晩酌の時など義太夫のさはりの一節を遣るといふ通人揃ひでした。ところが石部金吉の嫁はそれを苦々しく感じ、舅姑が親切に誘つてくれる芝居見物も芝居なぞは里に居る時から禁物ですと平斷りするために、自づと舅姑の機嫌を損じ、波風が立初めて、孝心な良人をひどく煩悶させました。こんな例は往々あるやうです。かう云ふ嫁の苦痛も尤な次第ですが、或る程度までは互に自分の趣味を枉げて平和を保たなければなりません。何も小歌の稽古をするにも及ばぬが、舅姑の好意を受けて芝居の伴をする位は容易いことでせう。嚴格一方で融通の利かぬのは、つまり一種のお天狗ではありますまいか。禁酒會員が宴席に列つて盃をさゝれた場合に、拙者は禁酒會員にて候、左樣な惡水は見るも汚らはしう御座ると云ふ顏付で、頭から斷れば、何んだ生意氣な失敬なと相手をムッとさせます

が、同じ斷るにも、折角ですがどうも不調法でとへりくだれば、先でも氣の毒になつて、夫ぢやア、サイダトでも如何と取持つやうな譯ですから、此の邊の手心が肝腎です。この不調法と云ふ言葉は、極愛嬌のある、言葉で、嫁の用語にも至極妙でせうし、又心の底から何事にも不調法と謙遜して居れば、自然舅姑を悦ばすことが出來ませう。



▲財布の授受

それから一般に、姑に財布を預けてある家庭は平和のやうに思はれます。姑は『私もさん〴〵身上の繰まはしで苦勞したから、もうお前に引渡したい』と口には云ふものゝ、嫁がハイそれではと直に財布を引取つてしまへば、内心屹度面白くない。それをマア左様おつしやらずに、もう少し御面倒をごらんなすつてと出れば、姑は必らず滿足するに違ひありません。第二の浪子を拵えさうであつた名題の姑も、若夫婦に財布を引渡されたのが緩和劑になつて、忽ち猫のやうに變り、風波立どころに治まつた例しはよくあるから、事情の許す限り、金權を姑に呈するのが、家庭圓滿の一方便と考へます。老人に財布をあづけると無茶な消極主義で若夫婦を苦しめると云ふ心配もありませうが、人間の性情は妙なもので、自分を信じてくれる者に對してさう常識に外れたことは出來ぬもので、大抵の姑は却つて若夫婦の便利を計るやうにならうと思ひます。

食事の作法

◎椅子にかけるには前はなるべく食卓に接しまして、後ろは他人の椅子とよく揃つて、給事人の通行に障りのない樣に致しまして、正しく坐るのであります。決して食卓の上に肱をついてはなりません。

◎食巾を膝の上によき程廣げて置くのです。之を高く胸のあたりから懸けたのは、極めて見惡うございます。食巾で口を拭き手を拭くなど、差支ありません。但し鼻をぬぐつてはなりません。

◎スープの食匙は肱を張らぬ樣に持ちまして食匙の横から音を立てぬ樣に吸ふのです。總じて西洋料理では、食器の音、嚙む音、吸ふ音など立つるのは下品です。スープを掬ふに、前から向ふに掬ふが本式であると云ふ人もありますが、其れに及びません。御婦人の方は皿を傾けて殘りなく掬ひ吸ふは宜しくありません。平のまゝで、掬へるだけ吸ひ置くのです。すべて皿に手を掛けるのは宜しくありません。

◎麵麭は食刀で切らず、手で裂くのを宜しと致します。玉子、魚類など軟くて、食刀を用ひるに及ばないものは、食叉を右に、パンの斷片を左手に持つて、パンで料理をフォークに寄せて食するのでございます。けれども料理の下汁までパンに付けて皿を掃除する樣に食するのは不體裁であります。

◎肉類を切つては食し、切つては食しするのは英國風で、肉を盡く切つて置いて食刀を置き、フォークを右手に持ちかへて食するのは米食風であります。何方でも宜敷いのです。一品の料理を食ひ終つた時には、ナイフと、フォークを皿の中に横たへ置くのです。一品を食し了らない中に、飲物を飲みなど致します時には、食刀と食叉とを皿の右左の縁にかけて置くのです。皿の中の食ひ殘りは取り散さぬ樣よく整へて置くのであります。

◎好まざる料理　又は既に滿腹となつた時には強ひて食するに及ばないは勿論でありますが、餘りに何もかも手を少しも付けないのは失禮であります。

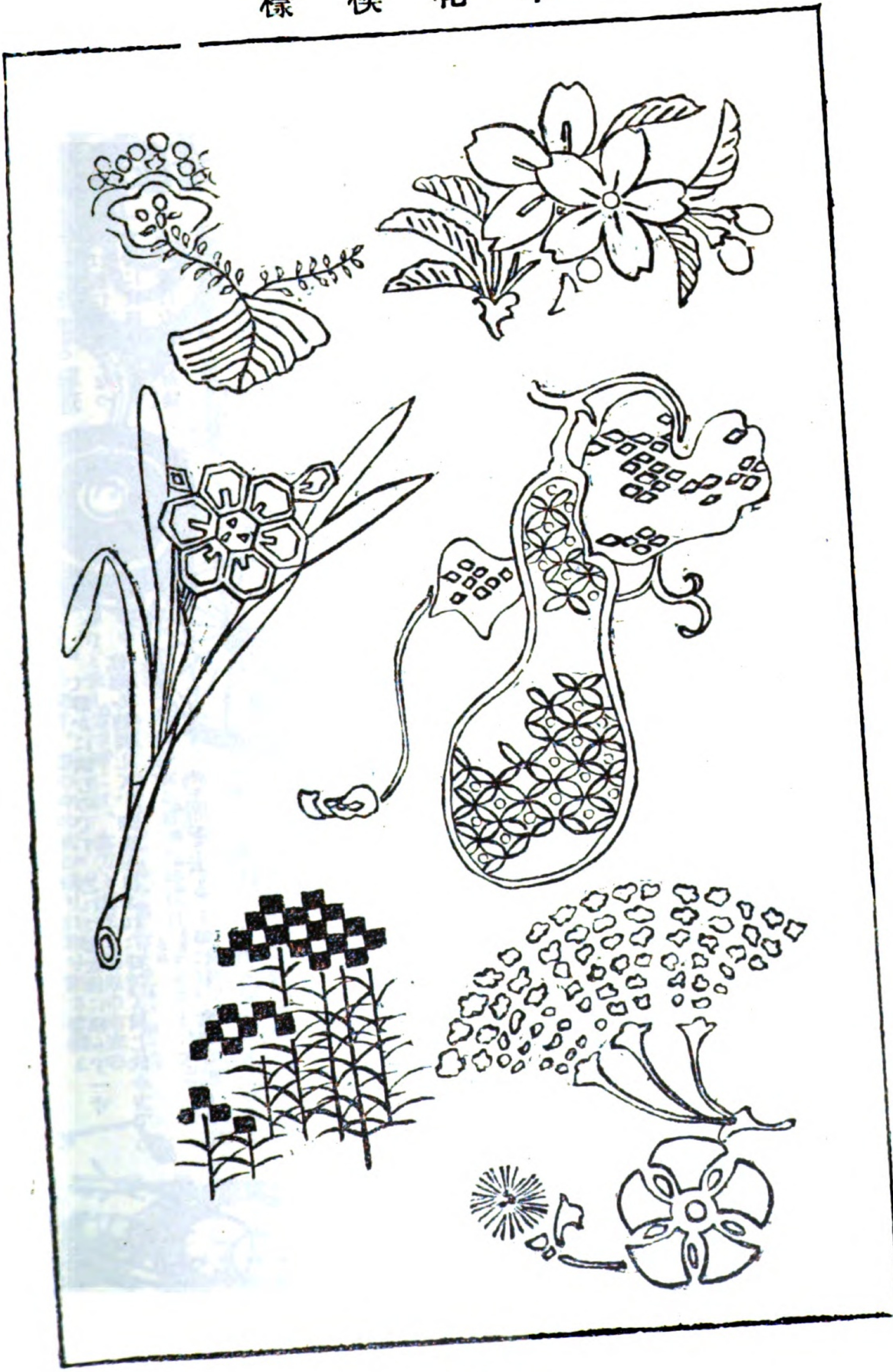
◎飲物　酒など飲物は何時用ひても差支ありません。酒を好まない時には給事に向つて斷るが宜しいので總て食事中、給事人に用事がある時には靜かに告げるのです。聲高なるは鄙げであります。西洋料理の酒には高價のものがありますから、飲みえない時には、注がせぬ樣心すべき事であります。

◎珈琲　は匙で飲ではなりません。此匙は砂糖を入れて攪拌せる爲のものです。ですから砂糖を攪拌せたならば、匙は皿の上の手前に置て右手に茶碗を持ち、左手に皿を少し離た程の位置に持まし＊て靜かに飲むのです。之れは會食後に限らず一寸他家を訪問して、珈琲を出された時でも同じ飲み方であります。

◎席を去る　時には、食巾を脱しましてよい程にざつと疊み卓上に置くのです餘り丁寧に疊むのは却つて見惡くいです。

◎隣席の客　とは食事中よき程に語り合ふのです無言なるは失禮であります。

草花模樣



文學博士 森鷗外先生序
文學博士 上田敏先生序
與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

新譯源氏物語

紫式部の源氏物語に關する注釋類や梗概の續出は本書の**現代化**の要求を證據立てる然るに古典の精神をかみわけつゝ**言文一致**に譯すことは西歐文學の飜譯よりも困難なる大事業である譯者は此困難を切拔けて見るに成功した而して現文壇の權威たる森上田両先生は本書に序して我國第一の古典文學源氏物語の譯者として晶子女史が**現代第一人**たるを論じ其**成功**を**激賞**されたのは正に此新譯に裏書したものである加ふるに中澤畫伯の華麗典雅とり〱なる**源氏繪卷五拾四帖**(奉書刷木版極彩色密畫五十四葉)は内容の優美と相俟ち彷彿として平安朝の榮華を展開し平安朝の天才と明治文壇の天才と日本に**唯二人**の才女の**合作**を**飾**って**居**る。

上卷二十一帖目次

鳥子紙繪卷物風極彩色金文字入ギルト附頗美本全三冊
上卷中澤畫伯木版極彩色畫廿一葉挿入
正價各冊金參圓
特價各冊**貳圓五拾錢**
小包料拾六錢
中卷三月●下卷五月中發行

上卷既成 特價提供

上田博士序
晶子女史著
春泥集 三版
藤島武二先生裝釘
中澤弘光先生彩畫
女史最近の短歌六百餘章を收めたり
金壹圓 稅八錢

發兌 麴町平河町五 振三八一七 **金尾文淵堂**
神田錦町二 振替二六〇 **勉強堂** 發賣

● 本法は **女髪結師安部歌子女史**

ちゞれ毛くせ毛
一大奇方劑
毛はへうけあい

●東京市麹町區三番町六十八

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

肺病の強敵

醫學士古川榮校閲、藥學得業士金澤巖著

本書は著者自ら肺結核に苦しみ百方療養の結果全快したる實驗に基き最新の學理を參照し完全なる自宅療法を詳記したる物郵劵二錢封入申込者に無代送本すべし

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院●

短身憂者に告ぐ

伊豫大洲町山本姫子と云ふ人は憂短身内外の身長法を試みしも効なく苦心研究の末**一大良法**を發見し之が爲め性來の短軀を伸し歎天喜地の餘り國家的感念を以て短身者に該良法を敎示しけるが近來既に實驗せし者數百人に達し其効驗の顯著なる實に驚く許りなりと云ふ實費貳錢切手拾枚封入照會者には早速其良法書を送る由也

東京の貴婦人はナゼ美しいでせう!!!

▲其れはこの樣にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共 金三十七錢
切手代用は 金四十錢

目次の大略 ▲色白くなる方法 ▲赤き顔を櫻色にする方法 ▲シヮのよらぬ方法 ▲キメを細かにツヤを出す方法 ▲日にやけるを防ぐ方法 ▲齒を白くする方法 ▲手の色を白くする方法 ▲髮の毛を黑くする方法 ▲毛のぬけるを止める法 ▲毛をのばしつやを出す方法 ▲ふけを去る方法 ▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法 ▲あるべき所に毛なきを生ずる方法 ▲やせる法ふとる法 ▲鼻を高くする方法 ▲聲をよくする方法 ▲入浴の方法 ▲化粧品の撰び方 ▲おしろいのつけ方 ▲衣服の模樣と縞柄 ▲衣服の縫ひ方 ▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば三千册限り特別に御分ち申上げませう

本書著者 東京神田錦町三ノ二 高柳孝子

●色白くなる

私事色々高價なる藥や化粧品など用ゐても効なき處、今回醫學得業士の先生より良藥を敎へていたゞき其れで見違へる程色白くなり顔のアレはなをつてキメ細かになり、おしろいのつきよく思ふ樣に化粧も出來る樣になりました。以前の私の樣に色白からず困難の方をお救ひ申したいと思ひますから御望みの方は郵劵二錢封入御照會下さい

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

毎日毎日引きも切らずに澤山の禮狀がまゐります

女(その三)

女子の書風に好適す

小野鵞堂先生編書
筆のしをり 全四冊
木版刷大和綴 大判長形 各三十枚
一、二定價各金拾八錢 郵税各四錢
三、四定價各金貳拾錢 郵税各四錢

訂正 小野鵞堂先生編書
筆のしをり 全四冊
木版刷大和綴 大判長形 各三十枚
定價各金廿貳錢 郵税各四錢

小野鵞堂先生編書
筆のしをり（補遺）
色紙、短冊、書狀、懐紙、扇面、
全一帖 石版刷折本 大判十八枚
定價金四拾五錢 郵税六錢

小野鵞堂先生編書
新案書式ひながた
手紙、色紙、短冊、懐紙、竪詠草、横詠草、扇面、葉書、結納目錄
全一帖 石版刷
定價金八拾錢 郵税八錢

小野鵞堂先生編書
書道講習錄 全一帖
木版、石版、活版刷 二百十二枚
定價金貳圓 小包料十六錢

永坂石埭先生書
前赤壁賦 全一帖
畫箋紙石版刷 二十九枚
定價金八拾錢 郵税四錢

後赤壁賦 全一帖
畫箋紙石版刷 二十三枚
定價金七拾錢 郵税四錢

女（その五）

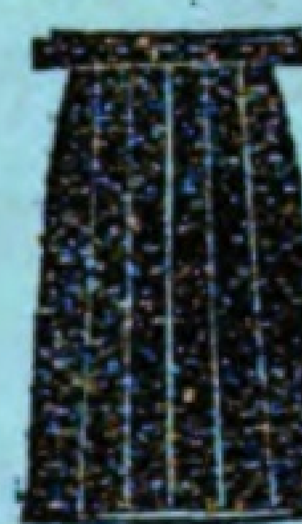
川弘文館 振替東京二四四　名古屋市本町 川瀬書店 振替大阪五八〇一

博通社 (博) 特賣品

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

女學生用御袴

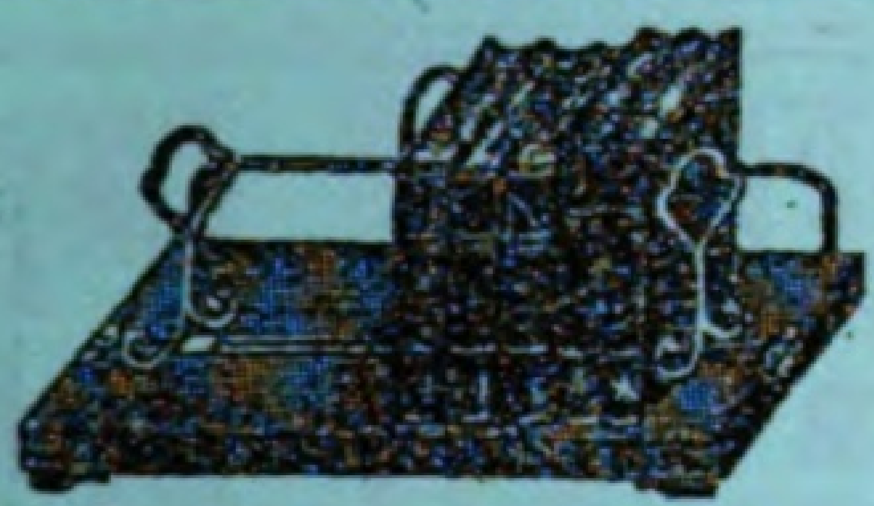
直接産地より多數取寄せ當工場に於て豐富なる材料に依り製作せる優等品にして決して仕入品に非ず『ヒダ』等充分に切地を用ひたる御誂品で裁縫の丁寧なるは勿論價格頗る低廉なり是非一度御試を乞ふ



寸法	メレンス製	カシミヤ製
尺六	一圓四十錢	三圓八十錢
尺八	一圓五十錢	四圓二十錢
二尺	一圓八十錢	四圓五十錢
二尺二	二圓	五圓四十錢
二尺三	二圓二十錢	五圓六十錢
二尺四	二圓五十錢	六圓

▲荷造送料市内四錢内地拾錢 臺、樺、清、朝、卅錢

●最新式自在本立器



體裁頗る優美、輕便にして高尚なる模範的本立器として非常なる好評を博しつゝあり、一册の本でも數册でも花形金具の調節に依り屹立自在にして全部を取外すときは一枚の板となり携帯に尤も便利であります

●大形並製一花式 特價一圓十五錢
●大形並製兩花式 特價一圓四十五錢
●大形上製一花式 特價二圓三十錢
●大形上製兩花式 特價二圓八十錢

▲荷造送料市内四錢内地六錢臺樺清朝四十五錢

●舶來毛布特價提供



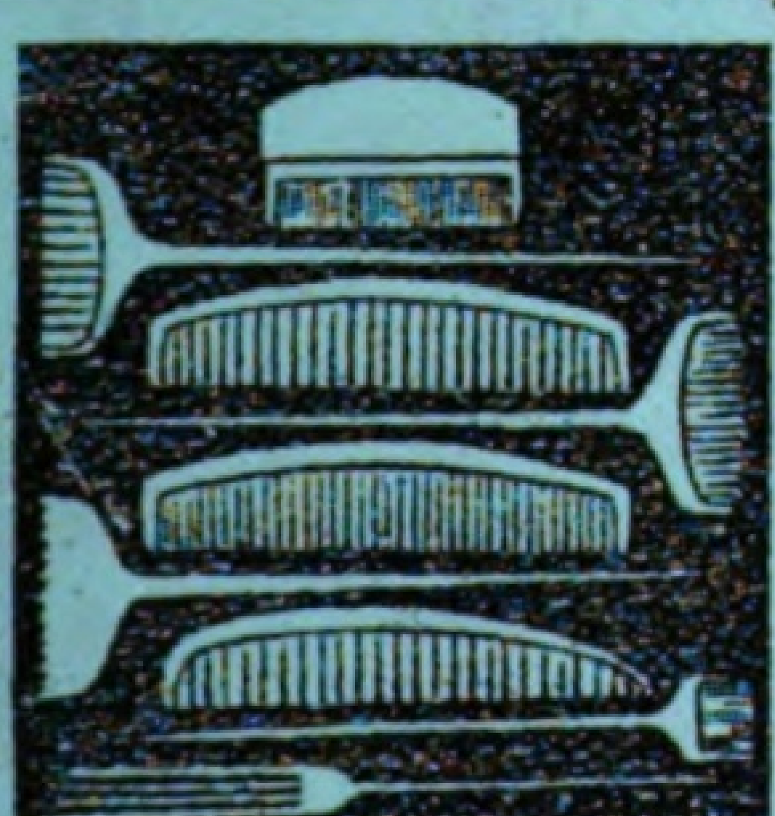
品質優等にして肉の厚き手ざはりの軟くして然も判の大なる本年第一等の德用品である!!!

●一號純白最優等貳枚續き 特價六圓七十錢
●二號純白上等貳枚續き 特價四圓五十錢
●一號鼠最優等貳枚續き 特價六圓五十錢
●二號鼠上等貳枚續き 特價三圓五十錢

▲荷造送料内地廿錢 臺、樺、清、朝四拾錢

●本ツゲ婦人髮結道具

本品は八丈島の特産にして材料は尤も優等なる本ツゲ製であります、其上東京の尤も有名なる職人の製作したる優等品でありますから其使ひ心地のよき具合の頁好なる到底他品の及ばざる處であります



◎ツゲ製婦人髮結道具
一組 特價一圓二十五錢

▲荷造送料市内四錢内地八錢臺、樺、清、朝卅錢

大橋メール、オーダービジネス

東京日本橋區本町一丁目 **博通社** 電話本局六百四十番 振替口座東京五十番

女(ろの六)

博通社 ㊕ 特賣品

電話機界の革命!!

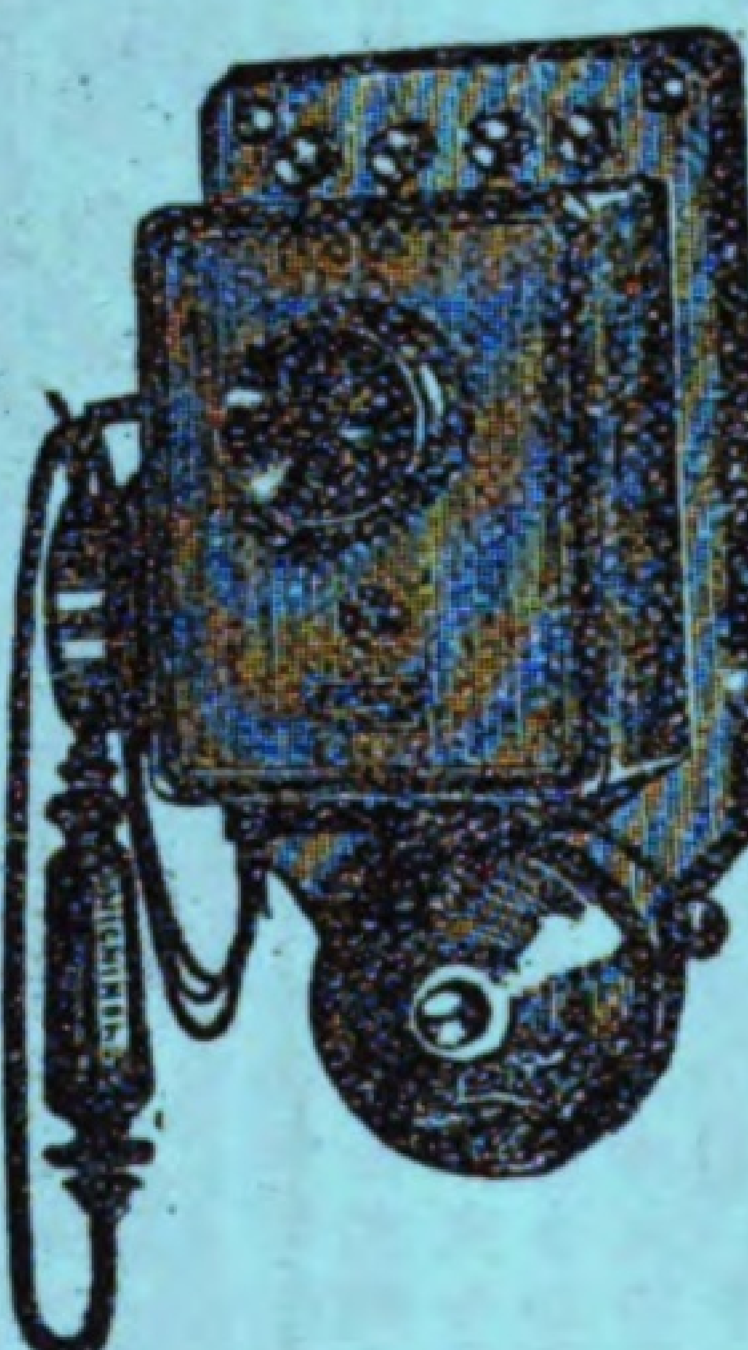
誰にでも素人に容易く架設が出來る尤も完全なる電話機及電鈴を未だ前例になき如斯破天荒の廉價を以つて最優等の通信機關を卒先提供せり。

乞ふ如何に僻陬不便の地に住はるゝ方でも、技師を要せず尤も簡單に架設する事が出來對話頗る明瞭なり。

銀行、會社、鑛山、工場、旅館、家庭、本家、分家の連接二階、三階、四階等の對話に本器を架設するときは只に時間及勞力の經濟而巳ならず用便の敏活に解決することに於ては遺憾なし。

不便を感じつゝある人士は一刻も躊躇なく直ちに架設し以つて文明の利器を善用せられんことを望む。

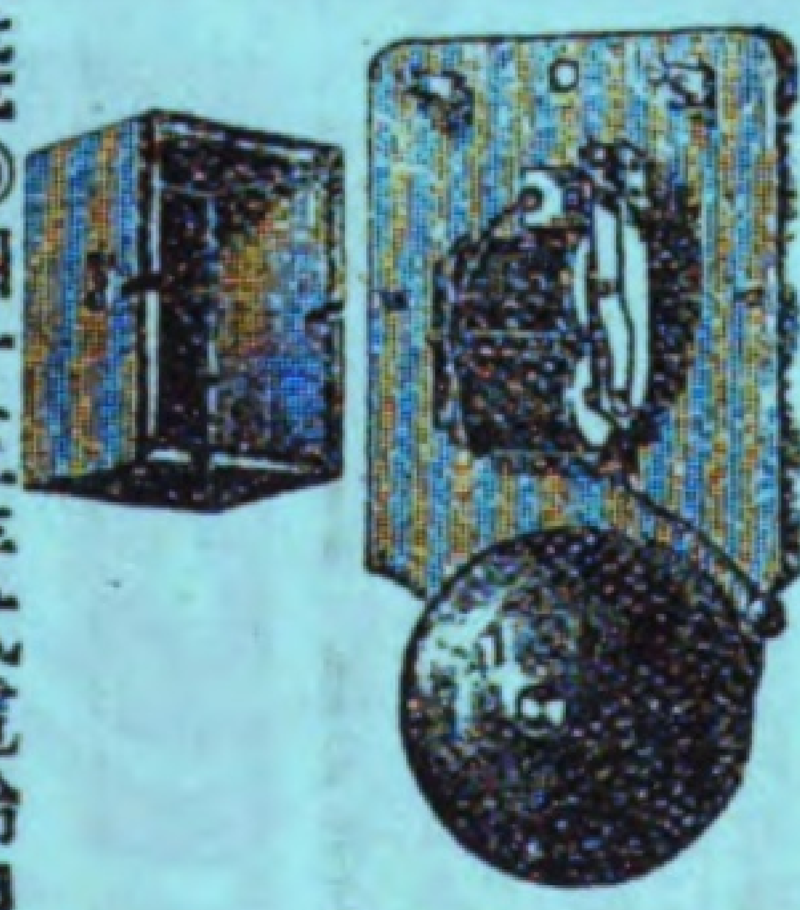
■勿驚經費一日僅四厘五毛弱 但電鈴なれば半額にて充分なり



●四十五年式電話機●

▲荷造費及送料 一臺に付 市内無料 内地卅錢 臺、樺、清朝 六十錢

但し電池は電話機一臺に付二個を以つて標準としてあります電鈴は一個なり



●四十五年式羽子板型電鈴●

◀押釦▶



押釦壹個 拾貳錢

▲荷造費及送料 市内無料 内地廿五錢 臺、樺、清朝 五拾五錢

◀竪型握▶



握釦壹個 拾五錢

◉四十五年式電話機壹臺 特價八圓五拾錢

◉一ヶ年保險乾電池壹個 特價八拾錢

◉四十五年式電鈴甲種 特價一圓六拾五錢

◉四十五年式電鈴乙種 特價一圓拾五錢

◉一ヶ年保險乾電池壹個 特價八拾錢

▼電話機及電鈴用美麗糸巻銅線一間ニ付金貳錢五厘に付の割合を以つて申受候▲

◎安心の出來る買物は博通社に限る!!!

女(るの七)

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 博通社 電話本局六百十四番 振替口座東京五十番



霞む野道

柳枝子

(一)

紡績會社の一番の汽笛が、霜氷る曉の空に餘韻を長う引て鳴り渡る。

お絹の傍に寢てゐる妹の目の醒めぬ樣靜に床を離れ寢着の上へ筒袖の上つ張りを着ながし臺所の雨戸を一枚明けると雪をもつた筑波おろしがサッと吹き込んで五體が縮み上る。

夕流した水が氷つて滑りさうな井戸端へ、鼻緒のゆるんだ下駄を踏みしめて下りる。

金盥へ一杯水を汲み上げると、釣瓶が氷つて手がちぎれさうに冷たい。

顏を洗つて、手早く束髮を結ひ直し竈の下に焚付けると奥で祖母の咳が聞える。

『お祖母樣お早う御座い升』

とお絹は煙草盆へ火を入れて、枕元へ持つて行く。去年の春から中氣で足腰の立たない不自由な祖母の世話をまめ／＼敷するので、祖母は、會ふ人毎に「私がかうやつて居りますのもあの優しい孫のお蔭で御座い升」と喜こんで居た。

寢床の廻りを綺麗に片附け、便器の掃除もして、手の屆く處へ置き、手洗ひの水も取り替へる。かれこれしてゐる間に御飯も出來て、妹と自分のお辨當を詰めお祖母樣の二度ぶりのお粥を煮る。はたき掃除から拭き掃除まで手早くして御飯を掻込む樣に食べて仕舞ふと會社の二番の汽笛が鳴つた。

「つまちやん二番が鳴つてよお起きなさいよ」と妹を起して髪を結てやる。そしてお祖母樣にお粥を上げ其間に、自分は着物を改め袴を着け昨夜整然とこしらへて置いた包を抱へ、

「お祖母樣行て參り升、つまちやん御飯を食べたら跡の洗物だけ、例の樣にして、お隣の小母さんに願つて早く學校へいらつしやいよ」

と云ひ置きお絹は三里の道を常盤女學校へ急ぐ。

お絹の父は、元郡長を奉職めて居つた、母親は非常な美人で尤父が容色望みで貰つたので餘り教育は無かつた。虚榮心の強い婦人で、善い着物を着てはそこの婦人會、かしこの慈善會と出歩るくのが好きで、二人の子供は下女まかせにして、流行の衣裳を着かざつて外出許り、自然郡長の俸給では足らぬ勝ち、父も美しい愛妻の望みをかなへて遣り度く、つひ惡い事と知りつゝ官金を私消したのが發覺して獄に囚の身と成つた。夫は三年前の秋で有つた。

其後母親は二人を祖母に預け、生家へ行つたきり歸つて來ない。

父親は不幸にも牢死をして跡に殘つた孤兒二人、僅かな遺産と、親戚の仕送りで祖母と三人不自由勝ちに暮らして居た。

お絹は父の恥辱を雪ぎ家を起さうと幼ない頭に深く刻まれ

「お父樣が彼樣な處でお死去になつたのも元はといへ

ば母樣の華美好きでいらつしやつたから」と善い者物や美しい髮飾を敵のやうに嫌つてどうぞ秀れた人に成り度と只一心に學問を勵んだ。

母親に代つて妹をいつくしみ、世帶の苦勞は幼ない身に引受けて、祖母の世話から近處の交際までもよく行屆いてゐた。

田舍には、今でも無筆の人が有つて、手紙を讀でくれの、代筆をして貰ひ度いとの頼みに來るといつもお絹は快よく書てやる。

又學校へ行かれない家の子に夜本や習字を敎へたり村の人達に深切にするので、始めは、罪人の子と侮り



蔑すんだ人も、お絹の心掛のよいのに感心して今では何につけてもお絹さんを御覽と、若い娘の手本とする樣に成つた。

夏は學校から歸つて、家中の行水をすませ、其跡で祖母や妹の浴衣の洗濯をする、糊付は夜なべにして、朝學校の出かけに干して行く事と定め、汗くさい着物や汚れたものは着た事は無かつた。暑中休暇で、お友達は海水浴の温泉のと、避暑に、行く時分お絹はお祖母樣の夜具蒲團の洗濯から、冬物の手入れまで手廻して、澤山の宿題は夜なべに怠らず、夫でも宿題の成績は一等を占めてゐた。

（二）

お絹は明日の御飯の仕かけをして、三分心の洋燈の下で暫時學校の復習をしてゐたが、夫も終つて此度は妹の羽織を今夜中に裄上げて、明日から着替へさせてやりませうと、針持つ手を急がす、寂とした家の中鼠が天井で何かコツ〱咬でゐる。外は木枯がヒユーヒユー吹き荒んで、誘ふ葉も無い銀杏の梢に、氷れる月の影寒い。

　お向ふのお孃さんの琴の調べが聞える。

「お母樣もお琴がお上手で、時々溫習へになつた。が、眞實に善いお聲であつた、今頃何處に在被るだらう、母樣のお家では家内中で米國へ行てお仕舞なさつたし家に居て下さつたら私も敎へて頂くのに、母樣は何故私達を捨てゝ他所へいらつしやつたのだらう、お隣のお松さんは、朝早くから夜遲くまで働いて、其お金は皆お父さんに取られて仕舞ふのだつて無味なさうと云ふが、兩親が有つて其爲に働らくのなら、怎麽に嬉しからう、朝も暗がりに會社へ行く時はお父さんが送つて下さるし、夜はお母さんが弟を負つて迎ひに行つて下さる。あゝ兩親の居る方は羨ましい。もういくら思つても父樣にはお目に懸れ無いが、せめて母樣が歸つて下さる事が有つたら怎麽に嬉しからう」

「トン、トン、トン、今晩は」

「何誰」

今時分聞馴れぬ男の聲、お絹は氣味惡く思つた。

「作藏ですが手紙を一本書て頂き度のですが。」

「オヤ作藏さんですか今夜はもう遲う御座い升から明日にして下さいませんか」

「えゝ急に願ひ度のですがどうか一つお賴み申します」

と云つて歸りさうも無い

此人は、村でも評判のよく無い人、什麽かして斷り度いと考へてゐる。

「鳥渡明けて下さいませんか、手間は取らせませんから」

から云はれては明けないわけには行かない。

『まあお上り下さい、怎麼お手紙で御座い升か』

とお祖母樣の枕元へ机を出して卷紙を延べる。

『えゝ兵隊に行てる弟の處へ遣り度いのです、えゝ今晩は寒いですなあ相變らず御勉强ですね』

と氣味の惡い笑ひ方、火鉢へ炭をついでゐたお絹は怖く成つて、

『えゝつまちやんの羽織を早く縫て遣らうと思つて居りますの、お手紙は何と書き升の』

と筆を持つ。

『では此返事を願ひ升』と懐中から手紙を出す、



別に急用でも無い年始狀だ

お絹は一通り讀んですぐ卷紙へ書きはじめる、

遠くで鍋燒うどんの聲も淋しく、ガタン〳〵と戸に當る嵐の音も物凄い。

祖母は輕い咳をして寢返をした、

『お祖母樣お目覺ですか』とそつと蒲團を叩く。

『之で宜しう御座い升か』と封筒に入れ上書をして、渡す、

『えゝ之で結構難有う御座い升』と手紙を懐中へ入れ、火の氣の薄い火鉢へかぢり付て立さうにも無い

時計は十一時を打つた

お絹は怖くて〳〵がた〳〵戰慄へるのをぢつと耐へ耐へ靜に机を片付け針箱に替へ「ご免下さい急ぎますので」と傍目も振らず仕事を續ける、夜は次第に更けて遠寺の鐘が木枯に震へて響く。

作藏は何か、深い考へが有つて來たものか、お絹が賴まれた事に厭な顏をせず、深切な優しい內にも犯すべからざる態度と、この寒い夜更まで妹の着物を一心に縫てゐるのに感心して、自分の不了簡を恥ぢ

「什麼もお邪魔を仕ました難有う御座い升」と

コソ〳〵歸つて仕舞つた。

（三）

一日吹き荒れた西風は北と替つて、敎室の窓の隙もる風も冷たい

「お歸りは雪になり升よ」と食堂へお茶を持つて來た小使の豫言が當つて、灰色の雲間から綿をちぎつた樣な六つの花が散つて來た。

常盤女學校の放課時、前髮を大きく出したお下髮に五吋のリボンを一の字に結んでゴム輪の人車で歸るのは、辯護士の娘成瀨久子、お迎への女中に包を渡して青磁色高華緞にスヰートピーを裾へ刺繡したケープにくるまつて、中好の相川花子に傘をさしかけて校門を出る藤浪糸重子

校中の花と呼ばれる富田欣子は肉色の防水ウエールを品よく被つて、振の長い白八つ口を揃へ、お召のコートに佛國製の飾靴の裾も輕く、つひそこの電車で日本橋へ歸る。皆家には暖かいお八つをこしらへて待つ母親は、着替へを火燵にかけて女中の待つてゐる人達

浦部絹子は、多い毛の無雜作な束髮にして、飾りといつたら、ゴムの前櫛一つ、何度も水を潜つた紡績飛白に、メリンスの袴着いて、手編の肩掛に、寒さを凌ぎ用意の洋傘に吹雪をさけ歸途に付く。

家は貧しくとも、天性の怜悧と克己心の強いので、お絹はいつも一級で一二の位置を占め、我身の不幸に引較べ情深く、氣立が優しいので、自然友達から、敬意と同情で迎へられてゐた。

『まあ浦部さんひどい雪に成つて、お困りだわねえ、お家まで三里もあるのですつて、大變だわねえ途中で日が暮れて仕舞うわねえ。其處まで御一緒に參りませう』

と電車の停留場まで、道連れはあつても、其先はいつも一人、雪はだんく降りしきつて、行手も見えない樣、幾度も轉びさうに成つては下駄の雪を拂ひ、吾妻橋まで來ると、向ふから自働車が一臺魔物のやうな聲を立て雪を蹴つて來た、ふと見上げる車中の人。

『おや母樣ちや無いかしら』



と立止まつて、お絹は殘り惜しさうに見送つた。

『母樣に違ひ無い、あちらでも此方を見て被在つた。あゝおなつかしい』と目に一ぱい涙をためて茫然立止まつて居た。

短かい冬の日は暮れかゝつて、街燈は雪風に瞬き何處の店も中戸を締め待乳山の聖天樣の夕暮の鐘が雪空に響いて淋しく聞える。

『あゝつまちやんが嘸待つて居るだらう、早く歸りませう』とひたすら道を急ぐ。

傘の雪を拂つて格子を明けると、薄暗い家の中で、

妹は火鉢の火をフー〳〵吹いて、頬を林檎の樣に赤くしてゐた。

「つまちやん遲く成つて濟まなかつたねえ」

と云ひ乍ら肩掛や羽織を棹へかけ、

「私が火を起して上るからお前ランプを付てお祖母樣の處へ上ておくれ」と云ひ乍ら火を熾して牛乳をかける。

「お祖母樣只今。お寒う御座い升ねえ火燵のお火を入れませう」と裾の方へ廻る。

祖母は讀かけた和本の太平記を傍へ伏せ、目鏡をはづして、

「今お歸りかへ、今日は雪で外は嘸寒むかつたらうねえ」

「隨分つめとう御座いましたが、せつせと歩きましたので、夫程でも御座いません、あの牛乳が沸きましたから召上りませんか」

「難有う」と祖母は玉子とお砂糖の入つた牛乳を美味さうに飮む。

「つまちやんお餅を燒て上ようねえ、寒いから此處へ來ておあたりな」

とお歌賃を燒きながら、途中で見かけた自働車の人が什麼も母樣の樣に思はれて、夫が氣に掛るので、平常はおつまと、學校のお話や途中で見た事を話すのに今日はおつまが話しかけても、氣の無い返事をするので、

「姉さんどうかしたの」と心配さうに覗き込む。

「たがあの方が眞實の母樣だつて仕方が無いわ、何處にお出だか出では森山の家も分らず、よし又分つた處で、お尋ねするわけにいかないし、あゝおなつかしい矢張り母樣は無いものと諦めるより仕方が無いかしら」

とうつとり考へてゐる。

（四）

大空には氷を流した樣な月が冴えて、木枯寒い夕べお絹の門を窃やかに音なふ人が有つた。

『どなた』
と玄關の障子を啓けると格子の外に朝夕戀ひしたふてゐた母親がしよんぼり立てゐた、お絹は夢かと許り喜び勇んで欣々茶の間へ通し、
「まあ母樣と」云つたきり嬉し涙に咽ぶ。
母親もお絹の大人びた樣子に、年月苦勢の程も思はれ、只もう胸が一杯に成つて、放落る涙を袖におさへ暫く言葉も無かつた。
『絹ちやん暫らくだつたねえ、お前にも大變苦勢をかけて眞實に濟まなかつた、何と詫びをしたら善からう、此間雪の日お前を見かけた時直ぐにも會ひ度かつたが左樣いふ譯にもならず、歸つてから倩々自分の惡かつた事を後悔して、もう居ても立つても堪らないので、今日といふ今日高い敷居を越してお詫びに來ました。
之迄は全く私の了簡違ひでした、善い着物を着あゝしてゐると、他目には幸福と見えもしようが、心の樂しみといふ事は一つも無く、日夜良心の呵責に苦しめられてゐました、私は何故お祖母樣や可愛いゝ二人を捨てゝあんな境遇を望んだかとつく〴〵我身の不覺を泣きました、今日はお父樣のお墓へ參つてお詫をして來ました、お祖母樣にもお詫をして之からお前達の世話をし度と思つて面目無いが。顏をおし拭つて來ました、何卒許して下さい』と涙ながら詫びられるのでお絹も



『まあ勿體無い、母様が其麼に仰つて下さると、私は眞實に嬉しうございます、もう他處へいらつしやらず何卒家の母様に成つて下さいまし、心から後悔遊ばせば父様もきつと許して下さいます、まあ〳〵此樣な嬉しい事は御座いません、お祖母様には私も一緒にお詫び申上ませうと、手を取つて奥の間へ行く。

（五）

學年試驗にお絹は常盤女學校を優等の成績で卒業した、三里の道を一日も休まず通ひとほした克己心に感じて、紡績會社では事務員に採用したいと人を以つて申込んだ。

祖母に孝行で妹にやさしい心掛けを愛でて、或る華族から家庭の保姆に賴み度と學校の先生へ賴みに來られたが謙遜なお絹は、

『どう致しまして私の樣なものお役に立ちませんから』と、一應は辭退したが、家庭の事情もあるので、自家から通ふ事の出來る會社へ勤める事に成つた。角田堤の櫻も眞盛に、滿都の人が花に浮れる頃お絹の家も春風吹いて和氣靄々母親と四人樂しい家庭をつくる樣に成つた。

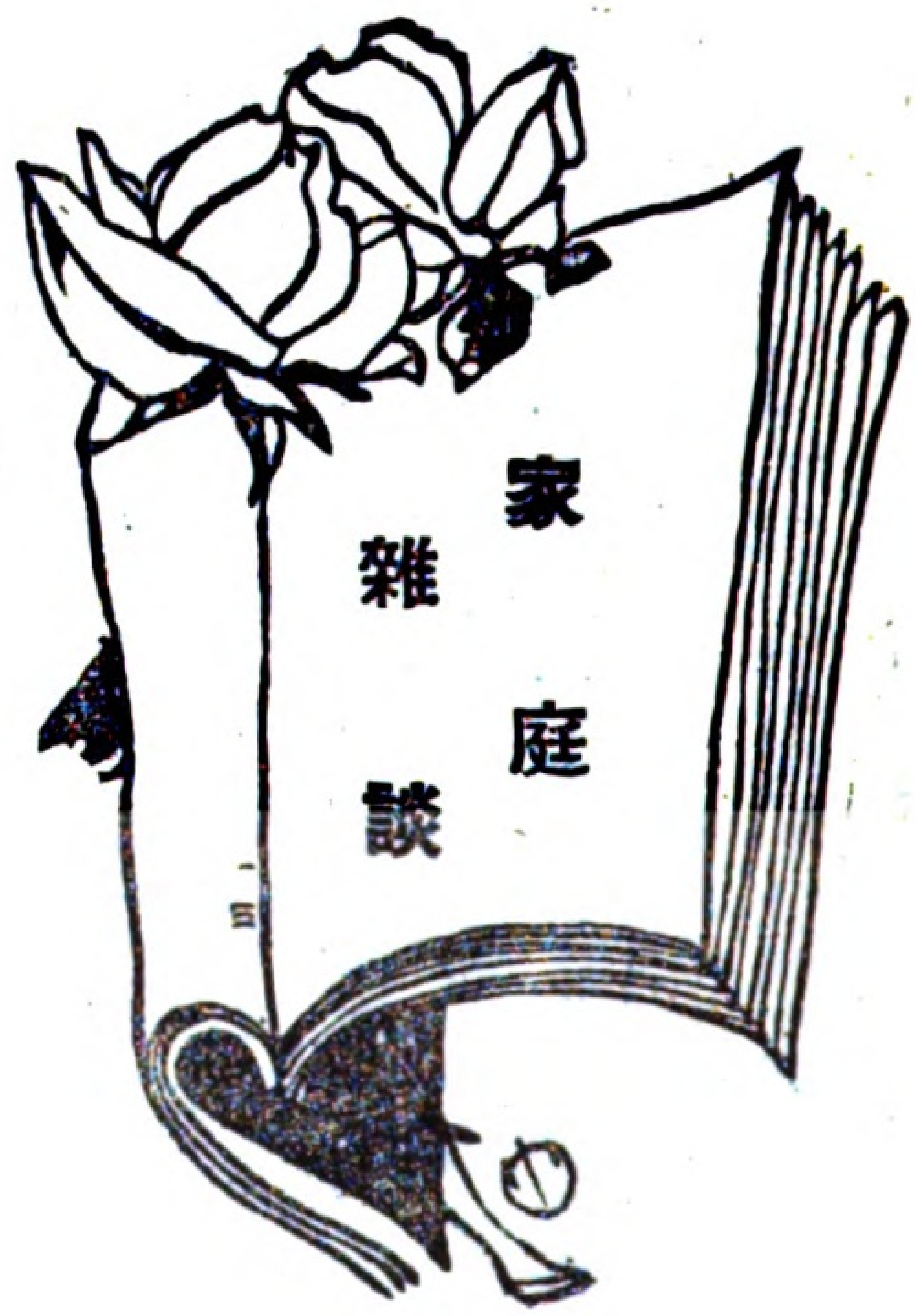
風呂の湯の溫度

（河野徹志氏）

◎目下家庭に於ける最も緊急な問題は風呂であります。錢湯には直ちに行ふ事は困難でせうけれど、内風呂ではこれ位の注意は出來るだらうと思ひます。と云ふのは、婦人科に通ふ患者の多くは淋毒を受けてゐます。相接して感染するのは已むを得ない事でありますが、その他に多くは混浴の結果病毒が傳染するので、稀には器物手拭抔が媒介をする事もあります。往々小兒に淋毒を發見致しますが、これは有力に混浴の害を證するものであります。緊急問題と云ひましたのは此處の事で、差當り内風呂だけにでもこの豫防法を講じたいものと思ひます。

◎何故風呂が病毒の媒介をするかと云ひますと、一體私共の這入るお湯は大變にぬるい、お湯がぬるい爲めにその中に洗ひ落とされた黴菌はその儘他の人に侵入します、殊に婦人は身體の構造上それに侵され易いのであります。私が寒暖計持參で大阪の風呂屋の湯の熱さを調べてみましたが大抵攝氏三十九度から四十二度までゝありました。黴菌は沸騰點の百度以上でなければ死なゝいのですから、お湯の中で傳染するのは當然であります。で、當面の豫防法としては、時々お湯を百度迄沸かせる外仕方がありません。

◎豫防法として一般に專門の知識を少しづゝでも與へる事は、つまり性慾教育ですれ、これは却て有害だらうと思ひます御承知の通り只今では看護婦が比較的深く此の種の知識を有つてゐますが、世間からは看護婦と云へばもう仕樣のない者の樣にいはれてゐます、或程度までは事實だから仕方がありません。知識があるから應用してみたくなる結果でせうれ。だから性慾敎育といふ樣なものを實行するにしても個人々々に就いてやらなければ却つて惡いことを誘發しまいかと案じられます。



客間と書齋

女子大學教授　井上秀子

一家の中で裝飾を要するのは、第一に客間で、次に書齋、食堂、などであります。客間と申しても、日本風の室ならば、單に床飾り丈けで、別に大した裝飾も致しませんが、西洋間はさう簡單には行きません。そして其の裝飾は質よりも形よりも先づ色の調和にあるのです。今その要點を少しく述べて見ませう。

△客間の飾りやう

客間には二た通りあります。一は富豪大家の客間で大勢の客を饗應するとか、又は公の客を引見するところ、今一つは普通の中流家庭の客間であります。

第一のものは成る可く淡泊で派出な、例へば薄紅とか薄い空色とか云ふやうな靜肅な色を以て配合するのが宜しい。第二のものは餘り薄色でない、何れかと云へば、濃い位のオリーブ、又は茶など云ふ暖げに見える色を基礎にして、それに類似の調和をとる事が必要です。

薄い色は一體に嚴肅な感じのするもので、氣が張ります。薄紅色などで飾つた室に入りますと、如何にも左樣然らばのお客樣と云ふ心地がして、落ち付いてゆる〳〵話などをして居る氣になれません。何となくくつろぐ事が出來惡くいものです。之に反して、部屋の周廻が暖みを帶びた濃い色で飾られてありますと眞に

ゆつたりして打ち解けた話も出來、何處となしに歡待されて居るやうな氣持のするものです。

△壁と天井と敷物

最も調和に注意すべき場所は、壁と天井と床の敷物との三つであります。その中、敷物が濃いピンクのものならば、壁はそれよりも稍や薄い色、天井は壁よりも一層薄い色でするのです。この外西洋間には、卓子とか、椅子とか、又は窓掛、ピヤノストーブなどの調度を備へ付けますが、これ等は實用的の必要な調度であると共に、室內裝飾になるのですから、ストーブの上には鏡を立て掛けるとか、ピヤノの下には花瓶を置くとか云ふ工合に致します。それゆゑ敷物・壁、天井の色のみでなく、窓掛、卓子掛、椅子張りの切れ、ピヤノ覆ひ等すべてが調和統一した色であり度いものです。併し類似の調和と申しても、部屋中ピンクならピンク、ブラウンならブラウンで張りつめると云ふのではありません。何處も彼處も同じ色のみでは、眠たいやうな感じのするものですから、何か一色基礎となる色を極めて、それに薄く或は濃くうつりのよい色を用ゐ度いのです。椅子張りの切れ地や、卓子掛の如き調和は、單に地色のみで調和させるのでなく、地色は異つたものにして模樣の色で調和させるなどが宜しいのです。調和といふ事は、違つた色の中に何處か一致する點があると云ふのが好ましいのです。たゞ一つ注意すべきは、床の敷物が薄い色で、天井が濃い色と云ふのは、全く逆でありますから、避けねばなりません。これでは下の方が輕くつて、上に重いものが覆ひ被さつて居るやうな氣がするものです。

△西洋人の批評

一二年前に、二人の西洋婦人を案內して或る華族の邸を訪れた事がありましたが、その家は同族中でも屈指の建築で、實に立派なもので、殊に色の調和などは日本には珍らしい位細かい注意が屆いて、申分なく美しく裝飾が出來て居りました。私共は 公の客間に通

されたのでしたが、その時一人の西洋人が私に向つて「當家は實にすべての調和が立派に出來て居るが、私にはこの室は何となく窮屈で落付いて居る氣がしない、あまりに氣が張る、それと云ふのは、全體の色が極く薄い色で調和されて居る爲でせう今少し濃い色にして欲しい」と申しました。すると今一人の人は、「成程、それも尤もですが、かやうな大家の客間としては、これが甚だ相應しい」と申しました。私も後の人の言葉が道理であらうと思ひました。



何れにしても一部分〲でなく、全體として調和をとる事が大切で、その調和が巧みに出來て居る室に通ると、何となく主婦の人柄も忍ばれて、奥床しく感じます。併し日本の多くの家では、あまりかやうな事は注意しませんから折角の裝飾と裝飾が、互に壞し合ふて居るなどの例が往々あります。有り合せの道具で間に合せるならば格別、新家庭等で新らしく調べる場合には、價はさのみ高い物を求めるには及びませんが、この注意をする事が肝要であります

△書齋は客間と反對

これは何よりも先づ光線の工合に注意せねばなりません。光線がよく入る處で且つ俗塵を離れて落付いて長く居り度いやうな氣持になるやうにするのがよいのです。それには、客間とは全く反對に、壁でも敷物でも極めて落ち付いた。頭を刺戟する事の少ない鼠色とか卵色とかの如き、柔らかな色を用ふるのです。書齋は取りも直さず主人の仕事場ですから、出來る丈け主人の便利なやうに種々の設備をせねばなりませぬ。本箱でも机でも實用向で且つ裝飾になるやうにし、書物なども分類し、索引をつけて置き所を一定し、直ぐ出せるやうにしなければなりませぬ。そして本箱などは、成る可く部屋の周廻中に作り付けにして、それもたゞ眞四角のみでなく、違ひ棚にもし、或は六角八角などに作る事が出來れば、更に理想的かと思ひます。



書齋は、又折々主人が親しい友人などを引くにも用ひられる處ですから、文机の外に、丸卓子、椅子二三脚を据ゑる必要もあるでせうし、又花を置き、植木鉢を置く事も必要でせう。置き時計などは是非無くてはならない道具です。

△主人の嗜好と飾付

それに今一つは、主人の嗜好を表はすやうに飾る事も宜しからうと思ひます。例へば旅行好きな主人であれば、壁に地圖を掛けるとか、各地の名勝古蹟の寫眞を飾るとか、又は珍らしい物産を集めて置くとかいたしまた主人が英雄を崇拜する人ならば、東西古今の英雄の肖像を掲げて置くも宜しいでせうし、又は修養の辭句を書いた額や軸を掛けるとかするのも宜しからうと思ひます。

要するに書齋は美くしくと云ふよりは、寧ろ研究的趣味の起るやうにするのが宜しいので、その部屋へ入れば、すべての俗事を打忘れ、精神を十分集注して、長く研究を續ける事の出來るやうな思ひあらしめるのが、上乘なのであります。



間取りの上から申しても、子供の部屋とか臺所とか云ふ處には接近しない閑靜な處に置くのが大切です。さうすれば時としては客室と隣り合ふのは構ひません。さうすれば中流の家では、大勢の客などある中に、間の隔てをとり外して一室にして客間に傳はれると云ふ便利もあります。なほ又全く西洋風のみでなく、客室にも書齋にもちよい／＼日本趣味を加へた折衷の飾り方も面白いものです。室の隔に金屏風を置くとか、丸窓を造るとか、又は岐阜提灯をつるすなどの種類で、近頃は大分これも行はれてゐる樣です。

●饗膳の心得

一、箸の扱ひ方についての禁物　取るべき品に迷ひ箸を膳の上に向けて考へること、箸に食物の附いたのを口に入れてねぶること、みだりに食物の中をかきまはすこと箸を以て食物を口中に押し入るゝこと、食物を取るに箸を横にして挾むの類は、いづれも禁物である。

二、蓋の取り方　椀の蓋を取るには片手を椀に添へ他の片手で之を取り、膳の左方にあるものは左側に、右方のものは右側に仰向けにして置く。即ち右にある椀は左手を添へて右手でとり、左のものは之と反對にとる。

三、食事中の心得　食事の順序は先飯を食し次に汁を吸ふのが普通である。其他は適宜でよい。但し同時に數種の食物を口に入れてはならぬ。通例御飯一口御菜一口といふ順序に食すべき者である、汁のあるものは勿論、本膳以外の食物は凡て食器を取り上げて食すべきものである。但し注意すべきは食器を取り上げたる儘、脇見をなし又は他人と話を交へてはならぬことである。

食事の終りに湯茶を飲みつゝ口中を嗽ぐものがあるが、あれは言ふ迄もなく見苦しいことであるから決して見倣つてはならぬ。

四、配膳及び挨拶等の心得　配膳並に給仕は凡て上座の客を先にし次第に下座に及ぶべく膳を徹するときも亦同樣にすべきものである。

主人は配膳の一通り終りたるを見て、客に對して適宜に挨拶を爲すべく、此の際客も場合によりては之に對して謝辭を述ぶべきである。

客は挨拶を終つた後に箸を取るのが禮である。　同席者ある場合には尊長が箸を取つた後に之をとるのがよいのである。（相島龜三郎氏）

雛のいろいろ（其一）

かつらきの袖はいつれそ夜の雛　（其角）





繪もの語

暗薫

太田三郎

緣の糸

思はぬ方に結ぼれる運命の糸の、不思議な緣のお話をいたしましやう。

寛政の頃大和國和田の里に、お澤といふ美しい少女がありました。父が無い其上に、母が長年病の床に就いて居りましたので、可憫そうにまだ十七の纖弱い身に、いろ〳〵激しい勞働をして、辛くも母子二人の細い命を繋いで居るのでありました。で、そうして其日〳〵の生活に追はるゝ身の、素より髪かたちを繕ふ暇とてもありませんでしたけれど、所謂天の成せる麗質とでも云ふのでしやう、其野の花のやうな姿は早くも人々の眼に附いて、窃に思ひを焦すものも尠くありませんでした。

就中、同じ部落の薊と呼ばれる無頼の男は、深く彼女を戀ひ慕つて、隙を見、機を窺つては、蒼蠅く其堪へ難い想ひを掻口説くのでありました。けれど少女の胸は母を擁して嶮しい世路に行き惱む屈托で一杯ですさうした艶めかしい言葉を容れる餘地などは、到底ありません。のみならず對手は日頃蛇蝎のやうに惡み嫌つて居る薊のこと、素より耳傾けやう筈も無く、引かるゝ袖は何時も管なく振り拂つてのみ過ぎました。

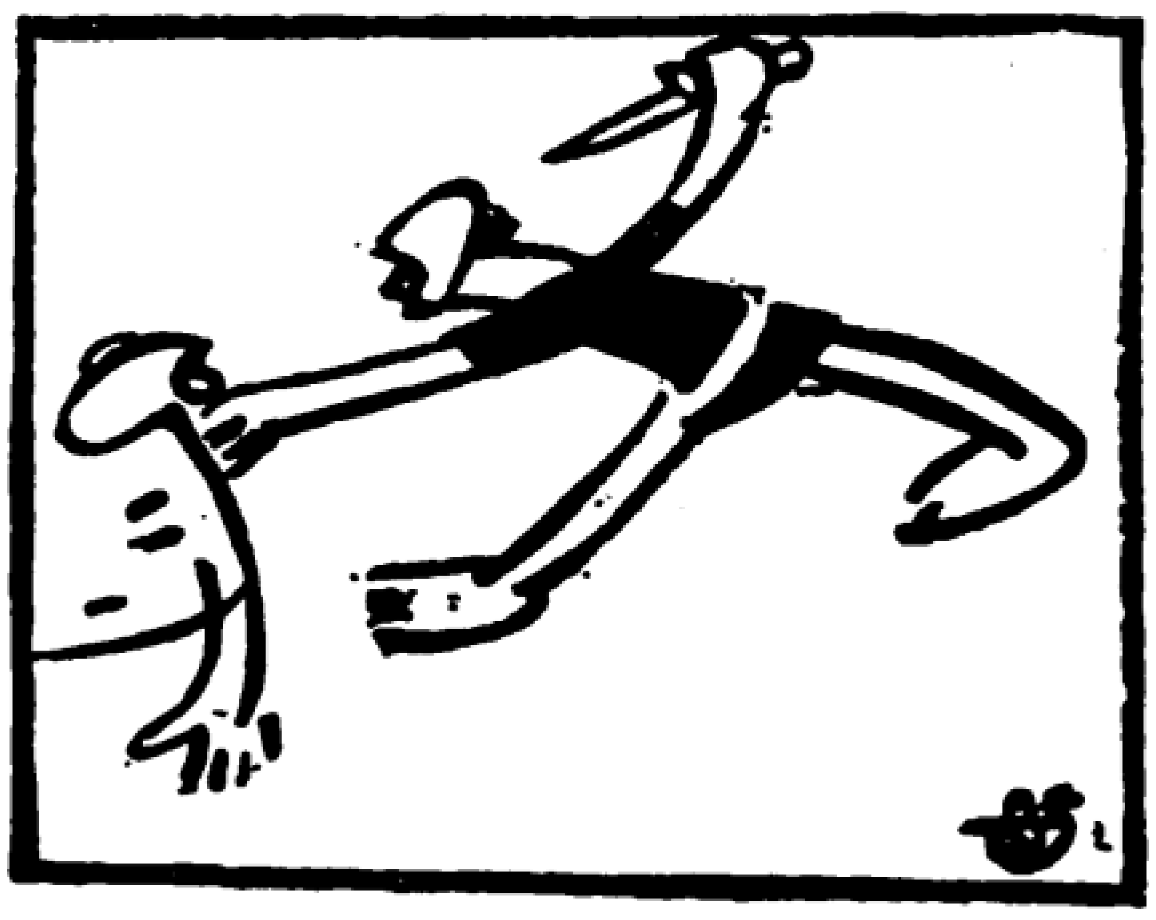
ところが或日、頼まれて隣村まで行つた歸りに、灯ともし頃を村端れの畷へさしかゝりますと、突然行く手に黒く現はれた人影がありました。見ると、南無三それは彼の執拗な戀の男です。——双の眼には極度の

亢奮に燃え上る情の焔、逞ましい腕には自ら制し切れぬ野獣の血の戰き――生憎往き來ははたと絶へて、重苦しい宵闇は、混濁の野の隅から隅へ、魔のやうな手を蔓したのであります。

無殘にも彼女は、其事があつてから母を憚り世を恐れ、宛でもう陰慘な日影の草のやうになつて了ひました。でなくてさへ、彼女の負擔は小さい肩に殆ど堪へ得られぬ程なのですのに、更にその上、云ふに云はれぬ恥しさ怖ろしさ悲しさを秘めねばならなくなつた彼女の心中は、どんなでしたでしやう。時々には寧そもう一思ひに、清からぬ身の命を絶たうと思ひ迫る事もありましたが、老衰の母の嘆きを思つては、有繋に其決心も鈍つて、兎に角に空洞のやうな日を送つて居るのでありました。

と、茲にまた、彼女に懸想する群の一人に、或る金貸の老人がありました。老猾の渠は自己の職業を利用して、此美くしい花を先づ黄金の海の義理の渦巻に漂はせ、さて後掬ひ取つて掌中に眺めやうと、計りまし

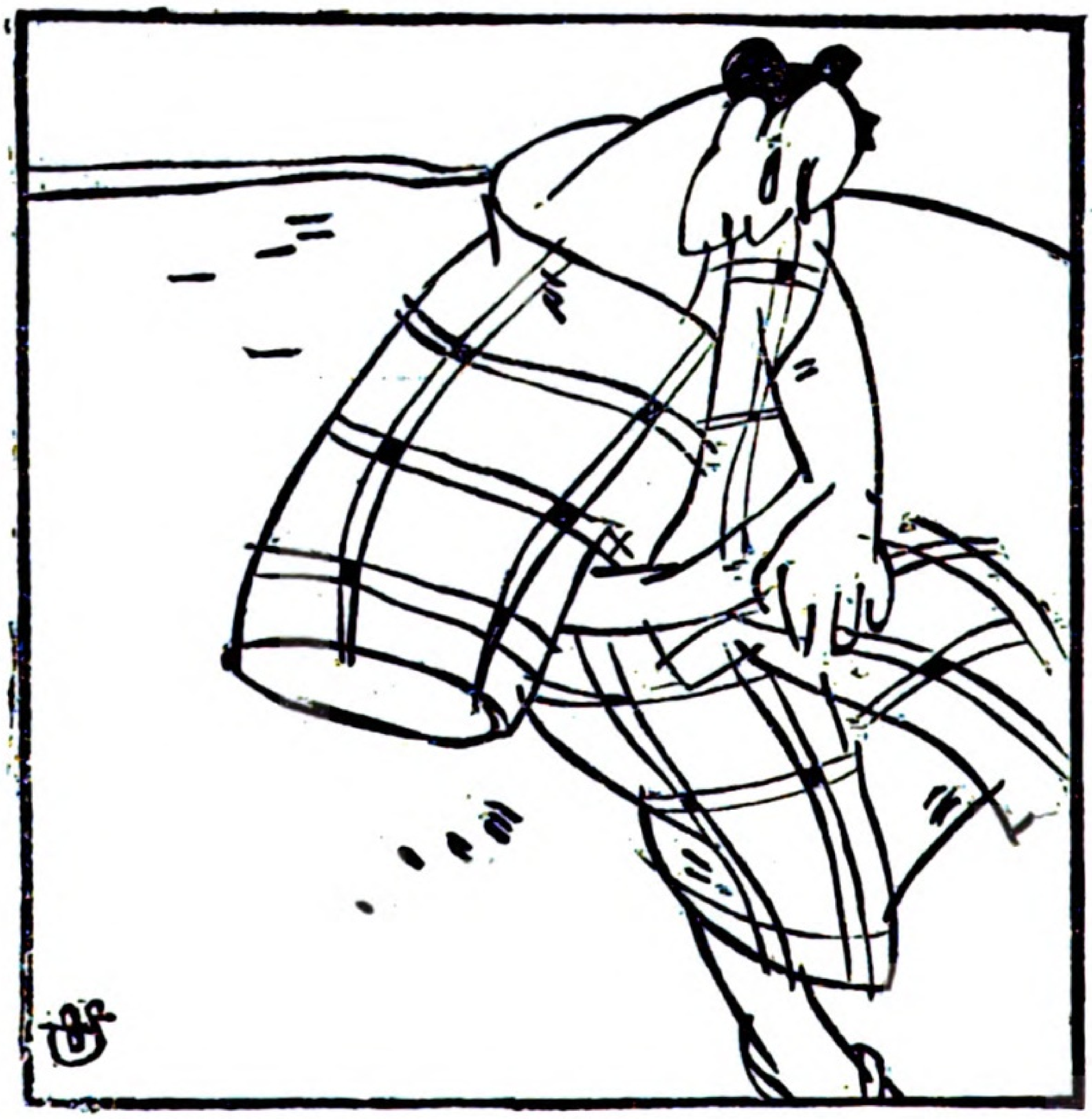




た。けれど母子は遠き慮ある者、如何に手を更へ品をかへても、更に其術中に陥りません。流石の老人も今はもう殆ど施すべき策を盡し切つて了ひましたが、遂に窮餘の一計として、或時女の家を訪れた折、物の隅に態と黄金を入れた財布を遺して立ち去りました。渠は自己の淺ましい頭腦から他を律して、如何に頑なゝ母子も、現在其日の糧にさへ事缺く身の、目のあたり山なす黄金を見て心を動かさずには居られまい、と斯う思つたからです。が、笑止や其最後の鏑矢も覗ひが外れて居ました潔白な女は、軈てそれと知つて一時も猶豫せず、財布を懐に直に金貸の家へと急ぎました。

すると、運命は實に不思議なものです。其財布が思ひも懸けぬ災厄に彼女を導きました。それは斯うなんです。女が息せき其家へ馳けつけたのは、丁度件の金貸が、金の遺恨か將た物取りか何者かの刄に斃されて上を下への騒ぎの最中でありました。が、彼女はそうした事とは夢にも知らず、唯何か常ならぬ内の様に入り兼て、少時四邊を徘徊つて居りました。ところを梟





のやうな偵吏の眼に睨まれて調べられると、折悪しく懐には不相應な黄金の、而も其財布が被害者の所持品なので、一も二もなく下手人と目されて、現場から直ぐ白洲へ引かれて了つたのです。——少女は勿論覺えの無い身の、様々に言ひ開きましたけれど、財布が逃れぬ證據となつて、嫌疑は容易に解けません。果は弱々しい體に、日となく夜となく、聞くさへに身の毛も竦つ數々の責道具、痛ましくも無辜の少女は、もう宛で瀕死の人となつて了ひました。

少女の平常を知る里の人等は、誰一人其殘酷な責苦に涙せぬものもありませんでした。連署して命を乞つたりなどもしてみましたが、併し確とした證據の品は如何ともせんやうが無く、今はたゞ手を束ねて一日一日に迫る死を、眺めて居るより外ありませんでした。

處へ或る日、突然まことの犯人が自首して出ましたと、こは如何にそれは彼の薊でした。口供に據れば、金を奪はん爲に兇行を敢てしたとの事、なほ其言に依つて、使用の短刀を金貸の家の裏の竹藪に探めますと、笹の落葉の下から、果して未だ腥い臭ひの失せぬのが出ました。で、男は直ちに死罪、女は危い命を幸に助かつて、再び青天白日の光を仰ぎ得る身となりました。——薊の死を哀れとする者は、一人もありませんでしたけれど、少女の再生の喜びには、里人擧つて

歡喜の聲を擧げました。

ところが一年許經つて、頗る意外な事實が、ぱつと世間へ知れ渡りました。其頃其邊一帶を荒した兇賊が捕縛後の自白によつて、彼の金貸を刺したのは劑で無くて、まことは其兇賊であつた事が分つたのです。嚮に竹藪から出た刄も、よく調べると、それは人の血潮ではなくて、犬猫の類のそれでありました。當事者の狼狽、里人達の驚異、とりわけて女の驚きは一通でありません。餘りの意外に胸を打たれて、一時殆ど喪神せぬばかりでありました。

それにしても、惨ましいのは劑ではありませんか。彼の善惡の上に超越する戀の、切なる情緒の前には、彼の獸のやうな無頼の徒も、なほかつ敢て一命を抛つて悔ひなかつたのでしやう。而も、四圍みな憎惡の聲に充たされて、現に其命に代らうとする對手にすら、ついに一度溫い言葉をかけられないのみか、猶仇敵と恨まれて居ながら、然も、じつと默つて其人の爲に死んで行つた男性の戀の悲痛な苦悶、假令行爲は如何に獰惡であつたにしろ、其胸中に至つては、一掬の涙に價するものがあるではありませんか。女も斯くと知つては今更に、嘗て恨み憎んでのみ居た男が憫らしく懐しくなるのでした。且は一度肌觸れた二人の縁の、絶ち難い因果にほだされて、母の歿後、終に尼となつて、其男の冥福を祈つたとか云ひ傳へられて居ります。



龜の媒



多摩郡柏野の里に、相愛の美少年美少女があつて、人知れず鴛鴦の歡樂を味ひ合つて居りました。處が其事何時しか女の親の知るところとなつて、嬉しい逢瀬ははたと堰かれました。女はとある池の中島へ幽閉せられて、而も四周の水に渡るべき船を絶たれて了つたのです。可憫想に二人は、彼方此方かたみに渚に立ち盡して、遥にそれと見る影を憧れ侘び合ふのでしたけれど、併し深碧の水は心なく其想ひを隔てゝ、小石に咽ぶ小波の低い音響が、たゞ徒らに哀愁を增させるばかり、渠等は空しく魚鳥を羨むより外に、どう詮術もありませんでした。

すると玆に不思議な事が起りました。或る夜、男が又砂の上に泣き崩れて居りますと、水底から大きな一疋の龜が浮び出て、意ありげに其脊を向けましたので不圖それへ乘つてみますと、こは如何に件の龜は、足掻きも早う彼の憧れの中島へ向つたのであります。

かくて二三日經つてからの事、女の親が糧を運んで其島へ行きますと、何時しか其處は、花咲き鳥囀る春の領の、誰憚らぬ歡樂境となつて居るのでありました。——迂遠な老父は、もうひた呆れに呆れて、少時たゞ茫然と突立つのみでしたが、流石に今は、拒み難い靑春の戀の、其靈妙な力を肯せない譯にはゆきません。終に泣々ながら二人を許しました。

逢坂

奈良の帝の代、小野美佐吾と云ふ人が、武藏守に任せられて東國へ來て居りました。華やかな都會から離れて、草深い武藏野の一小邑に下つた彼は、何かにつけて附き纏ふ旅愁を禁める事が出來ず、時折、處の遊女等を招いて、せめて一時、醉中に寂寥を忘るゝのを例として居りました。する中彼は、何時しか其群の一人と、よく世に云ふ嘘から出た眞の戀中となつて了ひました。

ところが幾何もなく、生憎彼は再び都に歸らねばならなくなりました。二人の嘆きは、もう傍で見るさへ堪へられぬ程でしたが、併し勅命はいとも畏し、軈て淚と淚は西と東に別れました。が、男は都に着いて間も無く、強い愛着の悩みにみまかりました。

女はそうとは露知らず、これ亦別後の月日を憫く送つて居りましたが、一夜、思ひ寢の夢にふとさとされて、示された或る坂へ行きますと、嬉しや其處で、懷しい人の火のやうな唇に接する事が出來ました。けれど嬉しさはほんの束の間で、未だ睦言の央ばも過ぎざる中、忽然として姿は、掻き消すやうに失せました刹那、女ははつと男の死を直覺して、軈て今は生きるに甲斐ない其體を、痛ましくも程近い淵に沈めて了ひました。



現の女と幻の男と相逢つた其坂が、現在のあの牛込區の逢坂なのであります。

結婚破約の悲劇
（巴里のパンヂオン）

下田次郎

△無邪氣な娘

マダム・ルノーの晩餐の食卓を圍む者は、外國人でいろ／＼珍しい人が居たが、佛蘭西人では、前に述べた女優や、手頼りのない婦人が、前後して仲間入りをして居た。それに婦人では、マダム・ルノーの娘で、シュザンといふのが居た。母親に似て、鼻筋のよく通つた、眉の濃い、口の小く締つた、彫刻にあるアポロを見るやうな、ラテン人種の代表的顏をした、十八九の小作りの娘であつた。性質は、母親とは反對に柔和で、愛嬌があり、世間知らずの無邪氣なもので、一寸とした事にもよく笑ふ。だから誰にも愛せられ、この仲間の花としてもてはやされた。殊にジョルジア出の學士は、非常に之を愛して親密に交際して居た。

その外食事はせぬが、夜分折々遊びに來る佛國の學生が數人あつた。その内に、法科大學生とかいふ盲目の大男が一人居て、何時も極つて一人の友人が、手を引いて、長い長い梯子段を昇つて來た。

△變化ある面白き集り

斯樣な連中が、入り代り立ち代り、食堂に集るのであつたから、その會合の變化に富み、珍らしくて、面白かつたことは、想像せられる。實際小さい一の世界的會合で、他では容易に經驗しがたい光景であつた。殊にこの盲目の學生は話が上手で、大きな聲で、面白く話し、又ピアノがうまくて、一座が景氣づいて、一層賑かであつた。その歌は、ピアノに合せつゝ、それを謡ひ出すと、我が部屋に引込んで居るマダム・ルノーまでが出て來て、熱心に合唱した。この學生は、サッパリとした快活な男で、非常な才子であるから、何處へ行つてももてるし、又學問も出來て、同窓の學生間にも重きを爲して居た。

△疑問の雲に覆はる

斯くて夏も過ぎ、秋も去つて、三十五年の一月の始めとなつた。或る夜自分は例の如く、通俗大學に行つて、中程の椅子に腰をかけて、講話を聞いて居た。ふと見ると、前列の椅子に、あの盲目の學生が來て居る。しかし何時も手を引いて、何處へでも連てゆく學生は居ないで、一人の婦人が附いて居た。見たやうな女だと思つて、よく見ると、パンジオンにマダム・ルノーの保護を受けて居るマチニヨーであつた。嬢は、何ういふ譯で、パンジオンに來たか知らないが、兎に角不仕合せな人と見えて何時もうき〳〵しないで、苦勞のためか、痩せて、頰がこけて居た。しかし極柔和で、おとなしくて、自ら人の同情を惹くやうな婦人であつた。年は二十一二である。そのマチニヨーが、例の盲目の學生と一所に、通俗大學に來て、自分の前に坐つて居る。これまで、こんな事はない。マチニヨーは、獨身の男子と、手を携へて出た事もなし、出るやうな婦人でもないが、どうしたのであらうと、自分には解釋がつかずに、その晩は歸つた。

その頃からパンジオンに行つて見ると、マチニヨーが、日頃の憂鬱に似ず、何となく、そは〳〵して、快活に見受けた。又盲目の秀才も、パンジオンに來ることが繁くなつた。で、兎に角マチニヨーは未來に希望の曙光を認めたものと思つて居たが、しかしその快活であつたのも、暫くのことで、數日の後には、又沈んで來て前よりも一層憂鬱になり、時には、食堂の隅で、私かに泣くこともあつた。それと同時によく來た盲目の學生がパツタリ來なくなつた。

それに宿の娘は娘で、何時もうれし相に、よく笑つて居つたものが、何うしたことか、少しも笑はない。食事がすむと、直ぐ次の室に行つて、ソファの隅にすくんで溜め息をついて居た。

△異常の聲

或る曇つた霧の深い晩、自分は例の如く友人井口君

と共に夕食しようと思つてパンシオンに行つて、例の食堂に這入つた。然るに、どうしたことか、何時にも似ず、ひつそりとして、常極めの客は一人も居ない。そしてマダムも、シユザンも出て來ない。見つけぬ女が、食物を運んで、我等二人は食卓に着きはしたが、何となく家の内がそは〳〵して、唯ならぬやうである。その中に、マダムの居間に當つて、異常の聲が聞えた。猫のうめき聲のやうな聲がしたり、又靜かになつたり、時にはドタバタと音がする、或は宿の娘に就いて、何か變つた事でもあつたのではあるまいかと、思つたが、



食事の半ば頃に、娘のシユザンが、突然食堂に這入つて來て、今晩は少々取込み事がありますから、失禮しますといつて、直ぐ引込んだ。言語も擧動も常の通りだし、まづ娘に變りがないやうだ。が、異常の聲がしたのが不思議だと思ひつゝ、食事がすむや、早々パンジオンを出た。

△結婚の破約事件

此夜も例の如く通俗大學に行つて、ホテルに歸つて來ると、戸口で、年來のパンジオンの客で、その家族

とは頗る親密なシュミット君に出遇つたから、今夜の事を話して、何うしたのかと聞いて見ると、シュミット君は何にも言はないで、裏二階の我が部屋へ、案内して、ランプを燈し、椅子を進めて語り出した。

あの盲目の學生と、マドモアゼル、マチニョーとの間に、結婚の約束が、此の間成立した。財産もなく、手頼りもないこの娘は、盲目とはいへ、秀才たるこの學生を、ゆくりなくも夫とすることが出來る幸福を豫想し光輝ある未來を待ち設けて、非常に喜び、是迄地獄の如く思つて居た世界が、極樂のやうに見えて、數日を一所に樂しく暮らした。通俗大學に二人の姿を見たのは、この時のことである。ところが、何うした動機からか、間もなくこの學生は、突然結婚の破約を、彼女に申し込んだのである。マチニョーは、始は信せない、唯戲言とばかり思つて居たが、その事實であることが、追々分ると、彼女は非常に失望して、それからといふものは、殆んど泣いて暮らして居た。そして絶望の結果、今日の午後、彼女は突然マダム・ルノーの五階の窓から、飛ばうとしたのである。幸ひマダムが早く見つけて、取り押へたので、危い命は取り留めたが、それから彼女は發狂した。

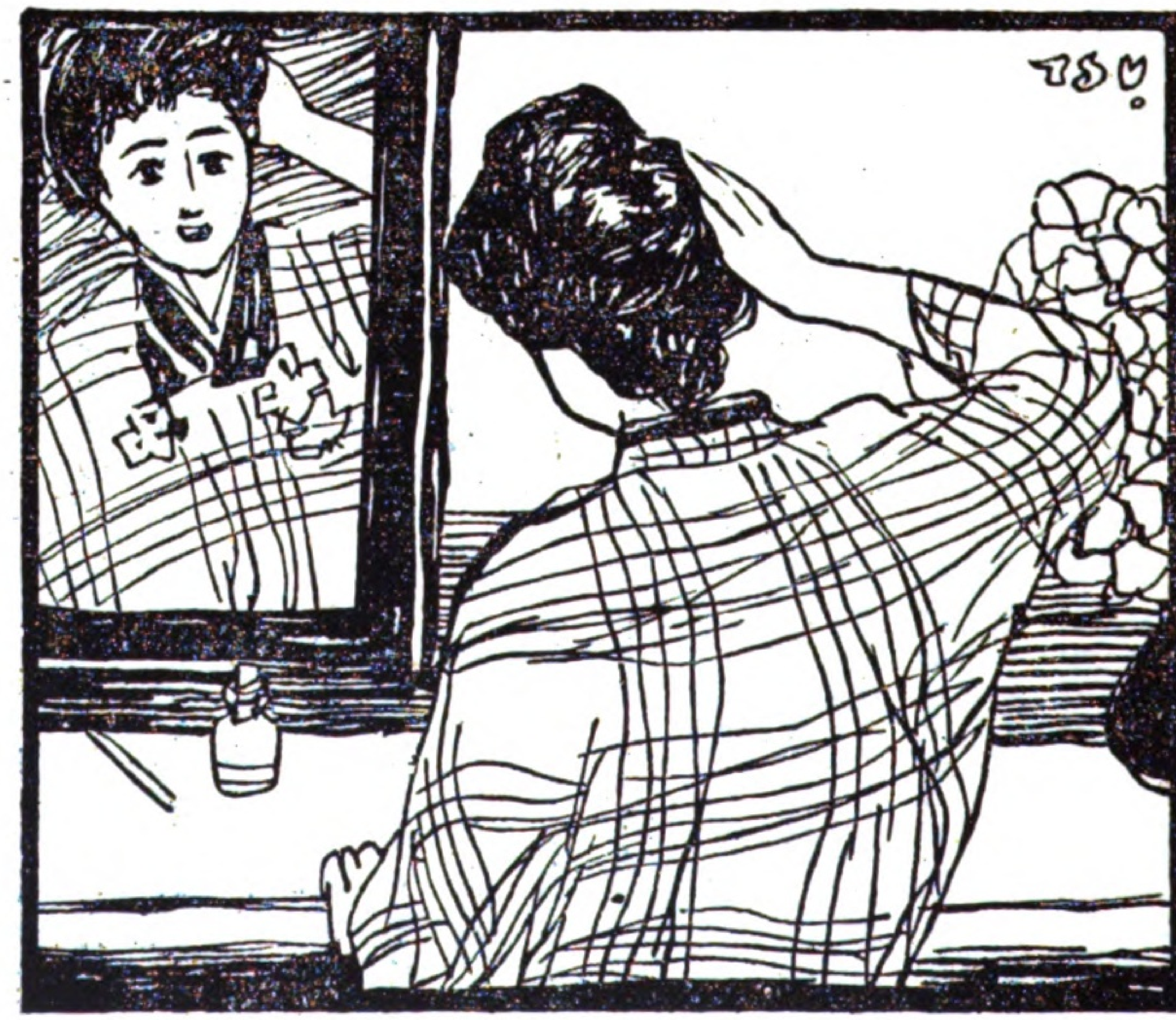
それでも、彼女は破約の恨あるに拘はらず、狂つて居ても、やはり彼の盲目の學生を慕ひ、あの人は惡くはない、彼の人に破約する氣はない、破約するやうにしたのは、あの連れの友達で、全く其の教唆に出たのである。恨はあの友にある。彼奴は人間ではない、畜生ぢや、彼奴は十フランもやれば、人殺しもしかねぬ奴じや、彼奴を殺して、私も死ぬると、喚けり狂ひなきわめいた。我々が今晩食事の時の異常の聲とドタバタの音は、全くそれであつたのである。

シュミット君は、斯う話した。人の好い、温厚な彼れも、話す中に、我が事のやうに激して、彼女を憐み、盲目の學生を罵り、彼奴は見下げ果てた奴だ。これからは人中に顔は出されぬ、寧ろ憫然な奴だと。熱心に十二時頃までも話した。

△マダム・ルノーの憤慨

翌日マドモアゼル、マチニョーは、癲狂院へ連れて行かれた。

其晩の食卓は、この話で持ちきりであつた。マダム・ルノーは、例の主義と氣象で、非常に盲目の學生の仕方を怒つて、罵つてゐた。新聞、雜誌、集會等あらゆる手段に由つて、この事を吹聴し、彼れを社會の外に放逐してやる。彼れは、マチニョーの狂氣になつた事を聞くと慄ひ出し、赤くなつたり、青くなつたりした。もう良心の呵責が始まつた。よい氣味だと、一人で罵つて居た。



彼女を癲狂院に見舞つた者の話によると、やはり同じ言葉を繰り返して居るとの事である。かうなつては一生癒るまい。田舍に居る母が聞いたら、どんなに嘆くであらうなど丶、その後數日の食卓の話柄は、この事ばりであつた。

△二孃の其の後

ところが意外にも、一週間もたゝぬ中に、我々は、マドモアゼル、マチニョーの姿を、パンジオンに見た。彼女は殆んど常識に復して、本日癲狂院を出たとの事であつた。發狂中は、一切夢中であつたといふ。しかしまだ神經が亢進して居るから、二週間ばかり、母の許で靜養するといつて、

間もなく、彼女は、オルレアン市の近傍の田舍に歸つた。よくなつて、また巴里へ出たら、小さな店を借り受けるといつて居たさうである。自分はその歸へるのを待たずに、二月の中旬にロンドンに轉學したから、母の慈愛に煦くまれて、いよ〳〵癒つたか、どうだか、後の消息は知らぬ。

宿の娘シユザンの憂鬱に陷つたのについては、やはり此處へ出入してゐた獨逸人の言ふ所によると、二年此方パンジオンに居た經濟學士が、娘に結婚を申込んだのである。娘も日頃思うて居たものと見えて、承諾した。しかしマダム・ルノーが聽かない。私ももう年を取つたし一人の娘を遠方に遣るのは、いやだといつて、許さないので、止めになつた。それで學士はパンジオンを去り、娘は失望して、何時もの笑顏はなくなつて一人くよ〳〵物思ひに沈んで居たのである。（終）

母親への注意

◎子供の恐怖心に就て或る母親の話に、いろ〳〵參考すべき所があります。私には當年四歳になる女の子がありますが、生來非常に活潑な子供で、間さへあれば大きな下駄を穿いて外出し、飛んだり跳たりして遊ぶのでしたが、何分にも未だ一人遊びは危險なので、一人の子守を雇ふ事にしました。その子守は當年十八歳で、中々活潑な女でしたから、本人も喜んで遊びに出たのでした。すると何うしたものか、一週間も經過しますと、子供は其子守を厭ひ始めました。然し子供の事と思つて、私は別に氣にも留めませんでした。

◎最初の一週間は過ぎて、二週間目になりますと、愈々益々子守を厭ひ、果ては一緒に外出させやうとしますと、逃げ隱れして、中々應じません。而して子守が無理に連れて出やうとしますと、ワア〳〵泣き叫ぶのです。生來活發で、外出を好む子が、怎う變つたに就ては、不審を抱かずに居られません。そこで私は子守の友達を呼んで、色々問ひ試みて見ますと、誠に驚くべき事實を發見しました。

◎驚くべき事實とは、子守女が外で子供を虐待する事でありました。主婦や主人の前では誠に殊勝らしく遣つて居ますが、其視線を脫しますと、打つたり抓めつたり、見るに忍びない事をするのださうです。然し子供の方は未だそれを私に告げる丈けに成育して居りませんから、只外出を拒むのでした。此の事情を知つた私は、其日の內に子守を解雇したのです。

◎子守は解雇しましたから、子供は虐待を免れましたが、終生取返しの附ぬ痕跡を頭腦に殘しました。それは子供の性質が一變した事で、活潑な遊を厭ひ、柔順な遊びをするやうになつた上、全く外出する事を厭ひ出し、尙は生れてから餘り泣いた事のなかつた子が、メソ〳〵と泣くやうになつたのであります、多くの子供を持たるゝ家庭では、子守の爲めに斯う云ふ運命に泣き、或は泣かされんとしつゝある親御さんは、決して私許りではあるまいと思ひます。



食物の好き嫌ひと滋養分

農學士　井上正賀

△人々の味覺は醫者にも分らず

衛生の專門家でありながら、牛肉を分析すると蛋白質が幾らで、脂肪分が幾らあるから、滋養になるとか或は豆腐は多量に蛋白質を含むから滋養物であるなどと、食品に關する研究や話などによく分析表を證據に持ち出して、いろ〳〵理窟を言ふ人があるが、之れは甚だ間違つた考であります。かういふ人々は、何んでも物質上の事しか氣が付かないので、之れがために一方ならず人を誤ります。靈妙なる人間の身體に要する食物の良否をかゝる單純な分析位で、容易に判斷することの出來るものではありません。食品の分析はその成分を知るにはよい方法であらうが、之れに依つて人々が食べて見て感ずる靈妙なる味を知ることは出來ないのです。戀の病が何んな醫學大博士にでも不可解であるやうに、人々の嗜好を左右する味覺は人々各々特有のもので、如何なる大學者にも知ることは出來ません。それゆゑ腐肉に群がる蛆虫を無上の珍味とする人に向つて、そんな筈はないと頸をひねつたところで、解るものではありません。全く解らぬこともなからうが、物質上のみから知らうといふのは難しいことであります。これに就ての理窟は暫く措いて、こゝに日常の食物は、人に依て違ふ味覺の點から割り出して各々その好むものを食するのが、最も經濟的でもあり、衛生的でもあり、また自然に適ふと云ふことを述べて見たいと思ひます。

△嗜好の樣々の例

好まぬものを無理に食するのは害があつて益がありません。牛乳は滋養物であるからと云うて、之れを好まぬ病人に無理に飲まして、それがために病人は嘔吐を催ふし、却つて胃腸を害して死んだと云ふ例は澤山にあります。見渡せば、飲食物の種類はいろ〳〵あつて、世が進むに從つて益〻その種類が多くなる傾があります。それと共に人の味覺が益〻發達して、人々の嗜好はます〳〵多方面になつて來ました。支那人は千金を投じて海燕の巣を賞味し、或る人はなめくぢの料理を好み、南洋の土人は大蛇の塩漬を好むのも、みな味覺が進ひ、嗜好が千差萬別である例であります。かやうに人々樣々に嗜好が異なるのは何故かと云ふに、或る程度迄は生理上の狀態や、氣候風土の關係や、乃至は遺傳から來るが、大部は只單に好みと云ふ未だ說明の出來兼ぬることから來てをるのです。それゆゑ豚肉を好まぬ人に向つて、「何故に君は豚肉を好まぬか」と聞くのは無理な話です。

△好みは重んずべし

人間の身體は大體は同じ樣な元素から成り立つてをるとは云ふものゝ、その元素の化合の狀態、各人の組織を組み立てる細胞の性狀が、人によつて一樣でないことは、尙ほその顏の異ふやうなものであります。從つて物質上から言つても、その各細胞を養ふ養分に好みがあることは見易きことですが、各細胞の性狀が何故に異なるかと云ふと、これは靈妙不思議なる生活力の發動の如何によるといふより以上の說明は出來兼ぬるのです。兎に角好みと云ふことは、人間の萬般の事柄に千萬無量の意味を持つもので、何事にでも人々に好き嫌ひがあつて、之れが日常人々の行爲の根本になつて居るのであるから人體を養ふ根本たる食物の好き嫌ひに重きを置かぬのは大なる誤りです。

△好き不好きと消化

何故に此の好むものが滋養物となるかと云ふに、之れは主として消化作用と關係のあることで、分析上から幾ら蛋白質や脂肪が多いとて、消化しないものは何の役にも立ちません。寧ろ害があります。消化してこそ始めて血管に吸收されて身體を養ふのであります。今滋養分を含んではをるが自分の好まぬ物を食したとすると、口中から唾液は出ず、胃壁からは胃液が分泌せず、腸からは腸液が出ずして、大切な消化液が神經作用に依つて一向働かないから、折角胃に入つた食物は立往生の姿となります。と云つて何時迄でも胃中に止まるわけには行かずして、腐敗に傾きながら滋々と小腸を經て大腸に至り、不消化のまゝ排泄されるのであります。

之れに反して自分の好む美味なものであると、先づ口中から自然と唾液が流れ出で、胃壁からは胃液が迎ひに出ます。腸液その他の消化液も總出の有樣で之れを優待して消化してしまひます。その狀は丁度堅く結ばれたる美人の口が己が意中の人に向つて開くのと道理は一つであります。此好みと云ふことは充分説明が出來ないにしても、何等かの身體自然の要求であるから、此の要求を充たさなくては健康を保つことは出來ないのであります。

△美食家健康ならず

▲臺所雜用▼

▲種々の野菜　牛蒡人參、大根、芋等洗ひ滲ひの品々の、其切端を一緒にして鍋に入れ、水を十分冠せて一時間程煮そして其の中へ饂飩粉か、又はクヅを入れてトロりとさせろ、然なくば油揚を細かに刻で入れます、中味が既に切端の寄り合ひですから、火は熾に焚かず、餘つた時を利用して、クヅ〳〵と成るべく氣長に煮るのです。

▲煮出した鰹節　一度煮出したのは取つておき、よく乾かしてから焙烙にて煎り手にて揉み、それへ少しの砂糖と水を入れ、トロ火にてよく煮つめ、煮えた頃に醤油をさし、醤油の乾く迄よくかき廻しますと、これででんぶと成り、子供衆の學校のお菜として喜ばれます。

▲白水の始末　ムザ〳〵棄てゝ仕舞ふ白水をとつて置き、これを沸して毎朝顏を洗へば、美男美女となる事受合ひでありますが、さもなければ野菜物の肥料になる事は皆さん既に御承知でありませう。

此の故に、分析上所謂滋養分と云はれてゐる蛋白質や脂肪分を多く含む肉食を主とする歐米人が、必ずしも菜食を主とする日本人より健康であるとは云はれません。ことに婦人には牛肉よりも寧ろ甘藷が滋養になる場合が多くあります。水分を多く含んで居て蛋白質や脂肪の殆んど含まない果物のみを食つて居ても、之れを好む人なれば健康を維持されないことはありません。また子供に牛乳を强ゆるよりも甘酒を飲ました方が滋養になる場合があります。高價の西洋菓子に飽いてゐる富豪の子供等が、三文の駄菓子にさへ飽かない子供よりも健康であるとは云へないのも同じ道理であります。從つて美食をして居るものが必ずしも學校の試驗に成績がよいとは言はれない。もしさうであるならば粗食をする苦學生の跡は速かに絶えなければならぬ譯であります。



△病人の食物

醫者は何んな病人に對しても、二言目には必ず牛乳や卵のやうな滋養物を食べよと云ふが、之れも必ずしも當てにはならないと思ひます。成程病氣に依つて胃の働きが弱くなつて、牛乳や卵のやうなものでないと消化し得ない人には仕方がないが、苟も胃の働きのある病人には、やはりその好みに應じて各々好むところの食物を進めた方がよいと思ひます。元來牛乳や卵は左程美味しいものではありません。いや之れを嫌ふ人も澤山あります。よし嫌はない

にしても、毎日々々牛乳や卵ばかりを食してゐては飽ばかりでなく、生理上から云うても成分が片寄つて良くありません。從來食物の滋養素は蛋白質、脂肪、澱粉、糖類などであると多くの生理書に載せられてあるが、肝要の味のことの說明がありません。從つて醫者も何でも滋養物でありさへすればよいと思つてすゝめるのであらうが、右のやうな譯であるから、病氣の種類にも由るが、差支のない限りは、病人の好むものを充分に與へるのがよいのです。多くの人々はあまり物質上のとにのみ重きを置き過ぎて、靈妙なる精神上のことを等閑に附する傾があるが、人間の事は精神作用を度外に置いては解釋が出來ません。特に食物に關してはさうであつて、味覺は極めて鋭敏なものであるだけそれだけ精神作用の働きが多いのであります。

新遊戲のいろ〳〵

▲ズボンボ　ズボンボと云ふ遊は德川時代の末に流行したものでありますが、其方法は竹紙を二枚繼ぎ合した四隅へ一厘錢なり五厘錢なりを貼り附けた足を附けて、四人か六人か八人かで、座敷の眞中へ持ち出し、四方から扇子で煽ぎ立てるのです、其時口々に「ズボンボヤ〳〵ズボンボならこそつらにくや池のドン龜ならズボンボヤ〳〵」と唱へながら遣るのです、此の遊びは扇子で煽ぎながら進んだり退いたりする必要がありますから、爪先で立ち、中腰になつて遣るのですから、中々好い運動にもなります。

▲西洋の羽子板　丁度日本の羽子に似たやうなもので今少し活發な遊びが西洋にあります夫れは圓形のコルクを半截したやうなものに、強い羽根を五六本植ゑたものを拵へて、子供用のラケットで打上げるのです、而して是は日本の羽根などのやうな柔弱なものでなく、男子の遊びとしても適當であります。

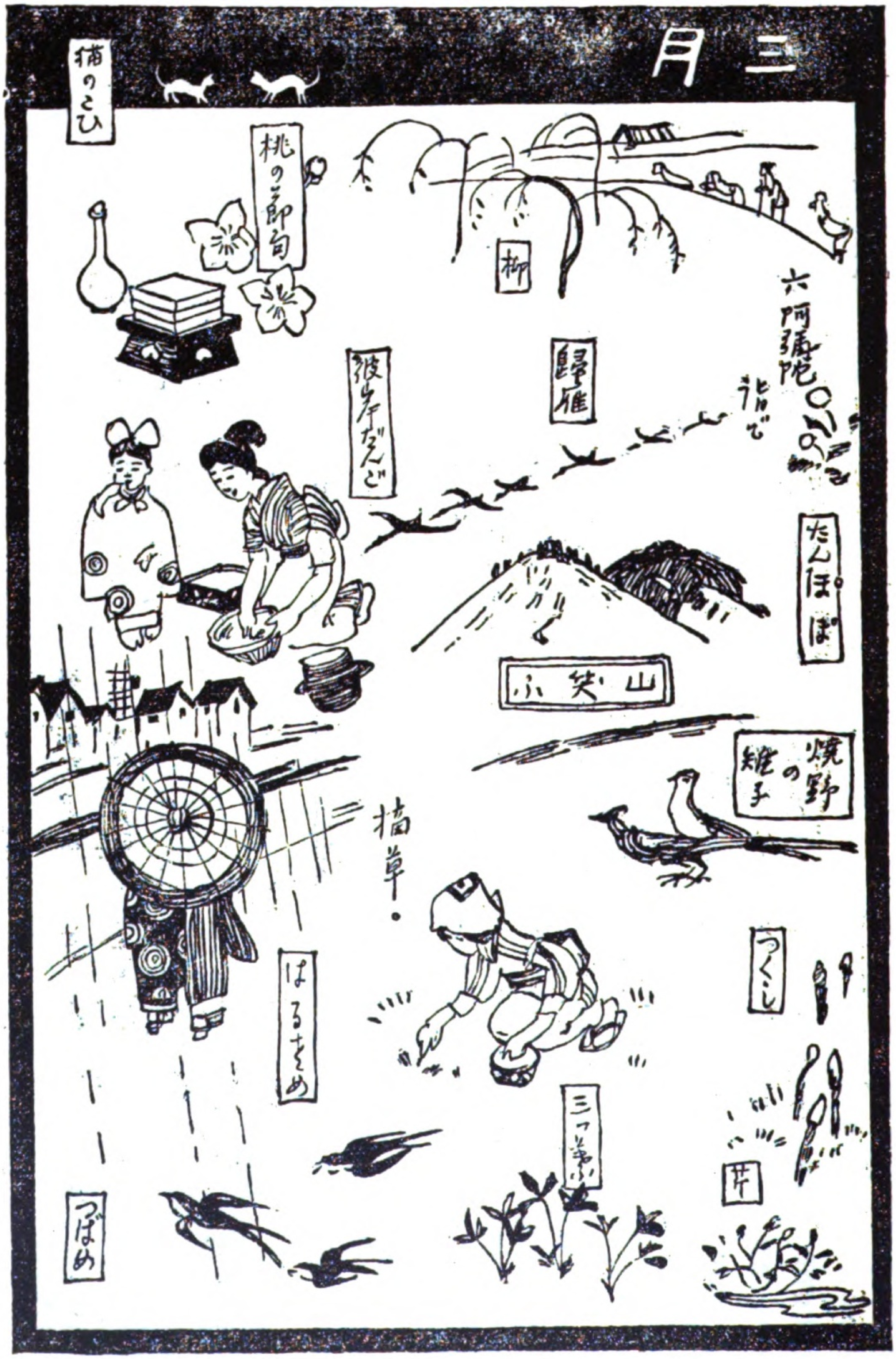
△料理法の極意

料理法は此の味覺に滿足を與へる方法の一つで、時勢の進步につれて甚だ發達しては來たが、これは不味いものを美味しくして味覺に多少の滿足を與へるに過ぎない場合が多くて、根本から成分を變へることは出來ぬから、大切には違ひないが此ればかりに依賴して味覺の慾を滿たすわけには行きません。「料理法の秘訣は每日變つたものを用ゆるにあり」と云ふ言葉のある如く、人々の好みに應じて材料を變ずるのが最も肝要であります。特に婦人や子供などの感覺

の鋭敏なるものゝ日常の食物は此の好みに應じて變ずると云ふことが極めて必要であります。此の故に人々は料理法に重きを置くと同時に、その原料に何を用ゆ可きかと云ふことに考を費さねばなりません。神は無意味に千差萬別の食品を此の天地間に作つたのではありません。みな人の好みに應じて之れを取り食はさせんが爲めであるから、人は山の物のみで滿足せず、川からも海からも取り集めた物を食するのがよい。また樺太からも臺灣からも、北米からも、南米からも、亞弗利加からも取り寄せたものを食べるがよい。北海道の林檎や、臺灣の「バナナ」や、濠洲の牛肉位で滿足してはいけません。米國のネーブルオレンヂや、瑞西の山羊の肉や、ブラジルの珈琲で我が身體の元素の一部を構成することを考へねばなりません。之れが眞に天意を得たものであります。

櫛と簪

婦人髮飾りの流行は一年を三季に分けてゐる。即ち春と初夏と秋の結婚時とである。春の流行ものとしては儀式以外には他所行きとして歌繪の櫛笄が上品向きの夫人にふさはしい。意匠は百人一首と古今集から目出度いものを選んで模様の要に文字を配り、蒔繪と金銀青貝の彫込みである。其一例を擧げると黒鼈甲臺に春霞の間から柳櫻を金蒔繪で見せ、都の一字を蝶貝で判然と嵌め、『見渡せば柳櫻をこき交ぜて都の春の錦なりける』をきかせてゐる。又白鼈甲に瀟洒な模様を彫刻して處々に眞珠を入れた都形のさし櫛に五分位の碁石形車兩天の笄を添へたのは水の滴る様な色合と目方の輕い爲めに初夏近く迄は流行品として價値を持つてゐる。束髮用の櫛は前櫛と髱櫛の二枚揃ひで晴れの場所用としては白鼈甲の彫刻もので模様は百合花、ハンセー、薔薇の花などを大ぶりに見せて眞珠がダイヤを程よく配合したものが最上品である。東髮の横ざしでは若夫人令孃向きには白鼈甲に彫刻した花ものが櫛と調和して非常に宜い。模様は水仙、椿、菫、百合花、ダリヤ、などを寫生したものである。年增向きの横ざし、飾ピンは翡翠玉迄支那人が彫刻した風雅な地板に十入金の足をつけたものである。又鼈甲色のゴム臺に新ダイヤを程よく配合した輪ピンリボン結形などもよろしい。總て束髮用には明るい華やか色か、澁方のものが調和する。


三月
猫のこひ
桃の節句
柳
歸雁
六阿彌陀詣で
彼岸だんご
たんぽぽ
山笑ふ
焼野の雉子
摘草
はるさめ
つくし
三つ葉
芹
つばめ



雛のお節句

笹木幸子

、お雛樣、雛遊び、雛祭り、むづかしく申しますと上巳の節會、御存じの樣に五節句の一つで三月三日女の兒のある處では大低此式をいたします、お雛樣の飾り方を前の日から雛段と申して段々を作り赤い布をしいて一番上に男と女と一對のお人形を並べ其下の段に五人囃、隨神、官女其外のお人形を並べ其前にお雛樣の附屬した一切の調度を並べます、その調度はお雛樣に似せて皆小さく作つたもので御座います、先づ膳部一式簞笥屛風、樂器茶道具、貝桶、唐櫃、鏡台、文庫乘物其他の食器類やら生活に必要なものは何でも並べますそしてそれに供へます御馳走はやつぱり小さくこしらつてお酒は白酒を用ひます。此ときのお客樣はやつぱり小さい人達で此小さなお道具へ小さい御馳走を盛つてお客樣事をして遊ぶので御座います、見るから可愛らしい美しい畫の樣な遊びで御座います。



此日の御馳走に必ずいたしますのは蓬の菱餅と桃の酒と蛤の御料理で菱餅は雛段に小さくして供へますが大きく作つたのを重箱に入れて、親類や知己に送るのが例で御座います、昔は母子草の汁で餅を染めましたが近來は蓬を用ひる樣になりました此遊はいつから初まつたかよく分りませんが承平頃から此風があつたといふことで御座います。

お雛樣の種類は大變多く四百餘種もあるそうで時代により又作つた人によつて名がちがひますが有名なものは芋雛、土雛、絲雛、芥子雛、狩衣、雛、鴨川雛、室町雛、吉野雛、三輪雛、琉球紙雛、薩摩絲雛、深草雛など御座います大體に分けますと人形雛と掛雛の二つになります。即ち木や土で作つた外、紙や絹に畫いたので御座いますつまり雛をもつ

て遊ぶといふことは女は内を治めるもの故幼さいときから飯を炊く眞似をしたり夫婦をかたどつて下婢のまねをしたり遊びながら家事を覺えるといふ事から起つたらしう御座います。

之を三月に祝ふ様になりましたのは三月上巳の祓と一處になつたので後土御門院の頃からだと傳へられて居ります。上巳の祓と申しますのは古三月の上巳に紙で人の形を作り之を陰陽師から送つてもらひ其紙の人形で自分のからだをなで、息をふきかけて復陰陽師に送り還します、陰陽師は祓を行ひまして之を川に流しました、即ち自分の罪をはらつて淸くしたといふわけになります、其ときの供物が桃の酒と蓬の餅で御座いましたが、丁度前の雛遊びと此上巳の祓と一處になつて三月三日に雛祭りをする様になつたといふことで御座います。德川の終頃から雛は女の必ず持たなければならない品として非常に華美になり女の兒が生れますと其最初の三月三日には初雛と申して親類や知人から祝ひをうけ大そうな祝をいたします嫁に參りますときでも必ず之を先方へもつて參りまして每年祝ひますそれに三月は彌生と申して萬物出生して春の盛んなときで御座いますから、女子は子孫繁榮の祝にかたどつて、いもせの壽きをなすなどいふこともあるので御座いませう華美にすれば限りは御座いませんが、又至極簡單にも出來ます、嫁入先までもつて來るほどの大切なものとも思ひませんが子供は悦びますからやさしい美しい祝ひとしていつ迄も殘しておき度いもので御座います。

可愛らしい御馳走の献立

五色口取
- いんげんきんとん（赤）
- 岩石玉子（黄）
- かまぼこ（白）
- 挽茶かん（青）
- ころ柿しそ巻（黒）

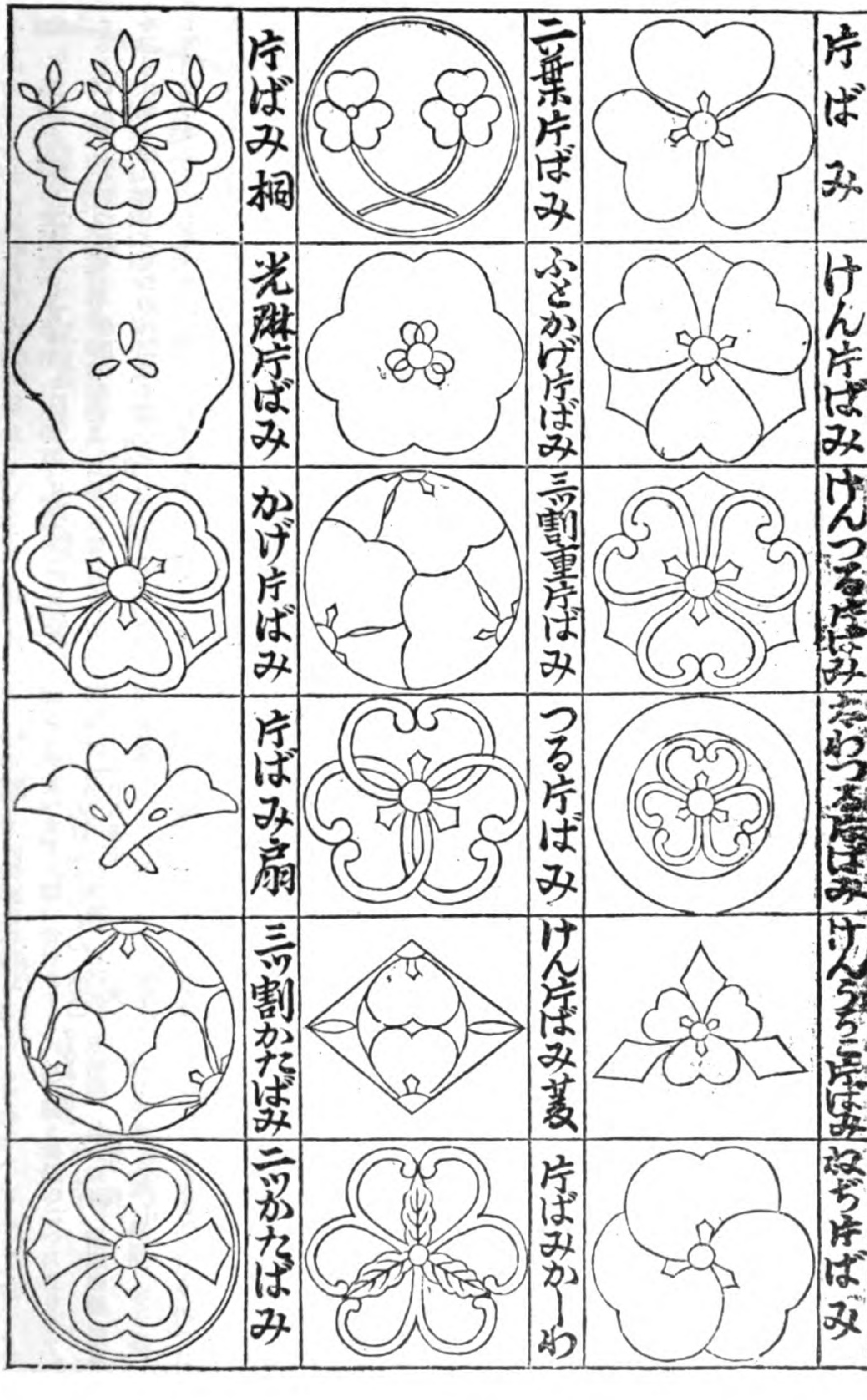
吸物
- 菱形さより
- 菱形ゑび
- 菱形長芋
- めずそすまし

刺身皿
- さより
- 赤貝
- 糸づくり
- うどせん
- ぼうふう
- はまぐり
- つけやき
- めをとぎんなん

魁まれたよな道中や春の風　飛泉
豆の花の口紅を吸ふ胡蝶哉　魚鱗
盆栽の松にかゝりぬ春の月　芙峰
雛の虎首ふる花の微風かな　漁耶
小鳥引出でゝは野邊の花を踏む　禾水



敗紮の意匠


片ばみ
二葉片ばみ
片ばみ桐
けん片ばみ
ふとかげ片ばみ
光琳片ばみ
けんつる片ばみ
三ッ割重片ばみ
かげ片ばみ
わつる片ばみ
つる片ばみ
片ばみ扇
けんうろこ片ばみ
けん片ばみ菱
三ッ割かたばみ
ねぢ片ばみ
片ばみかーわ
二ッかたばみ



京の紅

中川四明

○賢所の豆

維新前までは、節分の日に限り、誰れ彼れの別ち無く、建春門の北の潜門から入つて、賢所の御玄關へ出で、豆をいたゞくことが出來た。

それでも流石に京都人である。心あるは恐れ多しとてまづ、御門の前の檜垣の御茶屋へ立ち寄りこゝで、草履を穿き替へるものあり、借りて來た袴を着けるものもあり、又は蕪村の内裏拜みの句のやうに、女を倶して行くのもあつた。その賢所の御建物といふのは、維新後大和橿原の御陵の神宮として御寄附になり。今は無くなつてゐる。紫宸殿の東の方に置かれてあつたので、賢所士といふのが、三人あつて、三番に唯だ一人、次裃で詰め切てゐたそれから、又た御奥の方には刀自と謂て、奉仕してゐられた女嬬があつて、毎日御洗米などの神饌を奉つられたのである。畏れ多いが、扨て當日御玄關へ出て、青錢十二銅を紙に包んで差し出すと、彼の賢所士が取次で、豆を十二三粒包んで下さつたのである。炒ではなく生の豆で、それが雷除けになるといひ、親族にも分けやれば、近所の人にも呉れてやつたのである。

御所でも節分には、福は内、鬼は外の事が執行なはれた。然し普通の人家で、例の年男が、大聲あげて、喚き立てたのとは違ひ、鬼は外といふことを先づ叫び、次に福は内、次に御目度うと云ふのであつたさうな。

　　面取て舍人の笑ふ追儺かな

舍人が鬼の面を被つた時代もあつたが、それにも似て可笑しいのは、今地藏參りをする女の髷である。小

娘が花嫁の姿をする。舞子が令夫人の眞似をする。さうかと思ふと、老妓が又た舞子になる。馬鹿氣た風俗ではあるが、日本のカルネフアーとも謂はうか、警察も見て見ぬ振りをしてをるので、夕暮からぞろ〳〵お白粉臭い百鬼が徘徊のである。尚ほ市中の家々で、豆を撒くとのある。のも餘儀ない譯なのだらう。



○可笑味

面を被つた舍人の鬼も可笑味がある。皺尉の面にも似た老妓が、舞子になるのもお道化てゐる。可笑味を目的とした文藝にこれと相似たもので、「作り更へ」といふことがある。例へば、詩の文句である。

林間に酒を暖め紅葉を焚く

といふ風流なことを

玄關に席を改め口上を聴く

と作り更へた類で、日常の平凡なことに言ひ更へるので笑はずにはゐられまい。蜀山人の狂歌には、此類のことが多く詠まれてゐる。

世を捨てゝ山に入るとも味噌醤油酒の通ひぢなくてかなはじ

徒らにすぐる月日もおもしろし花みてばかりくらされぬ世は

など、上手なもので、皆百人一首の作り更へであらう。狂言の「通圓」といふのも、謡曲の「賴政」を作り更へたので、滑稽の才が縦横に見える。

頼政一節

是までと思ひて、〳〵、平等院の庭の面、これなる芝の上に扇を打敷き、よろひぬぎ捨て、座を組で、刀を抜きながら、さすが名をえし其の身とて「埋木の花さくこともなかりしに、身の成るはては哀れなり。

通圓一節

是までと思ひて、〳〵、平等院のえんの下、これなる砂の上に團扇を打しき、衣ぬき捨て、座を組で、さすが名をえし通圓が「うつみ火のもえたつこともなかりしに、湯のなき時はあわもたてられず。

俳句にも作り更へと見做せるのがある。

木枯の果てはありけり海の音　言水

晝顔の果てはありけり心太　許六

此等は皆文字で作り更へたのであるが、舍人の鬼は、人で作り更へたのである。昔は初午に、今は學校の祝日などに物する作り物は品物を用ゐての作り更へとも聞へやう。荒物類で、甲冑武者を作り、煙爐の顔、杓子の手などは、好き作り更へでかなあらう。

○眞似文句

これも作り更へで同じく可笑味がある。姉崎博士のショペンハウエルの名著にも出てゐるが、要するに、聖人だの、賢者だのが言つた高遠な意味のある文句を、其儘日常平凡な事に當てゝ引用するのである。

尙ほ名家の脚本、淨瑠璃の文句なども、同じやうに、日常普通のことに引用するので、彼れと此れとの間に、「お月樣と泥鼈」とほど、似た處と似ない處とあるので可笑味が出て來るのである。

例へば、小鍋立の藥食ひにも、「請ふ隗より」と箸を下し、酒を飲んで、「浩然の氣を養ふ」も凄まじい言草。「常世が成れの果てにて候」と揶揄するは誰れを見てぞ。遲參の人に「遲かりし由良之助」の類、皆是れ眞似文句の可笑味で、交際場裡の花ともなる場合が多くあらう。

○京都の二月

春立て節分を過しても、京都で二月ほど寒い月はあるまい。否、それでも天氣であれば、東山の霞に、佐保姫の面影も窺はれる。殊に日落て後、大日枝の紫に榮える美しさは常の日には見られぬ眺めである。嶺の芒も枯れ盡し、杉も霜に燒けて赤紫になるからでもあらう。

土筆の蕾といふは、風流を競ふ都下の割烹店でも、珍羞として吸物にもするが、それが此頃岡崎あたりの野に摘まれる、纔かに筆の穗ほどのもので、霜解けの堤の下、向陽の處に土掘て探せる乙女もある。



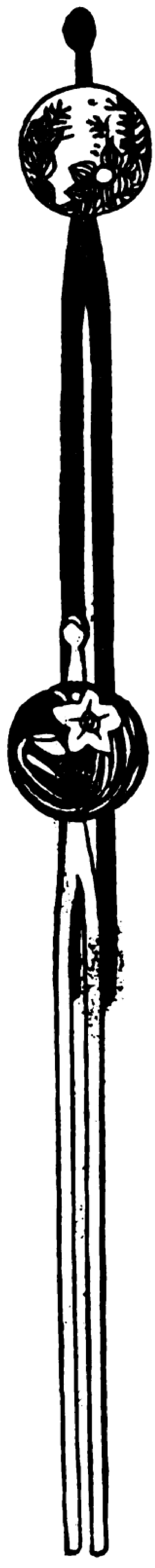
洛西龍安寺の鴛鴦は、水に落ちた樫の實を餌にする爲めに多く來るのであるに、何事ぞ、その樫の樹の老たるを、皆伐て仕舞うたので、冬も鴛鴦が來なくなつた。それでも鴛鴦の名所である。言ひ譯ほどに來てゐる番の鳥も懷かしい。それに鴛の沓、鴛の劍羽、鴛鴦並び居る石などいふことも、床しい言葉である。

鞍馬あたりには、尚ほ雪が白う殘つてゐる。炭を脊に負うて運ぶ女が、小町寺の下を爪上りに、爪下りに辿り行く、世渡りの艱難も思はれる、炬燵に[illegible]もり、カーヘルに暖たまつてゐ

る都の人は、僧正が谷の苔の間に咲く雪割草の香りを知るまい。

かしこきあたりからも、御安產の御祈願のある梅の宮には、苔のむした梅もある。嵐山へ通ふ電鐵に乘り、嵯峨野の停留所で降りて、千代の古道といふ名もゆかしい徑を南へ、四五町往けば、早や其處にお宮の森が見える、春水湛へた池、返り咲きの花も跡なく枯れた杜若の岸、彼處の亭、此處の四阿、茶を焚く烟も寒う花も纔かに南枝に綴る星の數ほどでも、寒い春は淸い春である。

平安神宮の橘の實の黃金色も難有い匂ひがする。龍尾壇を昇るは、新婚の人、誰が子ぞ、誰が娘ぞ、盛裝まばゆきばかりの新夫妻となり、禰宜か祝詞に神饌を奉まつり、神酒いたゞいて千代八千代の契り、左近の櫻、右近の橘、日は紀元節のめでたい吉日、



蕗の薹を蕗の姑といふ。苦いからでもあらうか。それでも梅の頃、には鮟鱇と倶に賞味される。鮟鱇は可笑しな海魚である。魚にして魚を釣る釣竿も有ち、釣糸を垂れてゐる。造化巧妙とも謂はうか。それを又た釣下げ料理で食ふ人間といふ鮟鱇がある。

梅幸を樂屋に訪へば鮟鱇鍋

伏見の稻荷の初午は、交通が便利になつた丈け、諸國から參詣するので、雜沓も亦其れ丈け甚しくなつた今日もさぞかしと思はれる。昔から變らぬは土人形であらう。種物賣も出てゐる。玉屋、鍵屋、貴賤の人が麕集して、お山巡りなど殊にをかしい。三が峰の谺は皆人詣で株の相場のといふものゝ流行からか、殊に浪華の人が多く、遊所から出掛け、女の更に多いのは何故か言はずとものことであらう。



家庭の情趣

男爵　菊地大麓

△慈眼愛腸の優し味

歐米の家庭は、夫婦と其の子供とを以て、組み立てて老人は居を別にして其の内に入らず、家庭の樂は父母と子供に依りて作らるゝを通例とす。之に反し、我が國の家庭は夫婦と子供との外、更に祖父母の如き老人を雜へて組織し、老人は家庭の調和者にして、時に又歡樂の中心點たり。殊に子供に對する情味は、若夫婦の稜立てるよりも、老人の圓滿にして慈眼愛腸の優し味あるに優ること遙かに大なり。而して此の老人愛敬の慣習こそ實に孝道の由つて起る本義なり。歐米の家庭に老人なきは、その國の風俗の然らしむるところ我が國の事情を以つて直ちに彼を評論する能はずと雖も、我が國の家庭に老人存し、年老へる者に孝仕する美風を馴致せしは、洵に我が國柄の美はしきものとして、之を世界に誇つて憚からざるなり、余は米國の家庭につきては多くを知らずと雖も、英國に至つては多少その實相に觸れたりと考ふる者なり。半可通を以て例を彼に採らんことは愼むべきなり。

△火の氣のなき古伽藍

何れの家庭と雖も、其の中心は主婦なり。家庭の歡樂とその荒廢とは、主婦の手に握らるゝものなり。故にその主婦にして品位高く思想堅固に、家の萬事につきて普ねく注意を怠らざる人ならんか、其の家庭は常に平和にして荒廢することなく、一家團欒の裡に明日の事務を裁理して家運日に昌んなるべしと雖も、主婦に教育なく品位低くして事物の判斷に鈍く、唯だ容姿風采の裝粧にのみ心を用ゐて、家事を顧みるに不忠ならんか、家庭は唯だ徒らの名のみにして秋風索莫、一點の火氣なき古伽藍の如く、其の趣味は終に滅して大黑柱を天日に曝さずんば已まざるに至るべし。玆に於てか女子教育の必要起り來る。我が國の家庭の組織は頗る美はしく作られたりと雖も、其の主婦の教育は概して低く、從つて地位亦劣れり。男尊女卑の聲は我が國に於ける不祥の事實なり。これは封建制度の遺せる弊害なりと雖も、大政一新以來、今にその厭ふべき事實より脫却する能はざるは遺憾なり女子の教育の低き結果は、主婦の地位をして高めしめず、主婦の地位高からざる結果は、此處に男尊女卑を繰り返し來る。而して夫たる男子は外に出て青樓紅彩に戲れ、醜狀百態放縱至らざるなしと雖も、囚はれたる主婦は之に對して如何ともする能はず、幽憎自ら病を得て命を致すに非ずんば、我意我執の振舞と爲りて、家庭の基礎を傷るに至る。我が國中流以上の家庭に殊に此の悲哀を見る。

△女子教育と裁縫教育との別





余は人生幸福の温室たる家庭の歡樂を助長する爲め、其の主婦の品格を欲求する爲め賢母良妻主義を提唱して已まざる者なり。良妻はやがて賢母なり。夫を助けて内顧の憂ひなからしむる所の者は、他の一面に於て其の女子を善良に養ひて完全なる人格を造り上ぐる所の賢母ならずや。世間或は賢母良妻主義を目して下女頭主義といふ。衣食住の萬事に交渉して下女指導の任に當るを意味するものなるべし。されど余の謂ふ所の賢母良妻主義は聊かその趣きを異にし、凡そ主婦たるものは日常衣食住の事に沒頭せんよりも、更に如何にして家庭の調和を計るべきか、如何にして夫を助くべきか、如何にして社交を圓滿ならしむべきか、如何にして子女を養育すべきか等の緊要なる問題に向つて考慮せんことを欲するに在り。衣食住の事素より閑却すべからずと雖も、之を以上の數項に比すれば、其の輕重何人と雖も判別に難からざるべし。然らば賢母良妻はいかにして之を造るべきか。昨春の高等教育會議に於て、實科高等女學校規則なるもの議せられたりき。當時原案は高等女學校に家政科を置くに在りて、其の説明に依れば、一週三十六時間中、十六時間乃至十八時間を裁縫に充てんと謂ふに在りき。裁縫を以て家政と心得るの謬れるは勿論、女子教育を以て裁縫家事に在りと認め、而してその設置を要求する社會の誤謬の甚だしき、余は案の反駁に先んじて女子教育の重んぜられざるに一驚を喫したりき。こは原案の罪に非ずして、かゝる原案を提出すべく餘儀なからしめたる社會の要求の罪と謂ふべきなり。如何に裁縫の術に堪能なりとするも、仕立屋の主婦と爲らざる限り、以て賢母たり良妻たるに足らざるべし。

△智識の圓滿なる發達

賢母良妻を造るに、家事裁縫のことを以てするの謬れるは、前段已に之を語りたり。然らば如何にして良妻を養成すべきか。余は常識教育又は修養教育を以て之に奬めんと欲す。謂ふ所の常識教育とは、一言にして之をいへば、人生日常に必要なる一般的智識の圓滿なる發達を期するに在り。即ち道德心を涵養し、思索力を深くし、事に當つて惑はず、迷はず、秩序整然として其の行はんとする所を行ひ得るの素地を養ふに在り。道德心にして高からんか、婦人の美德はすべてその間より涌き出づべく、思索力にして深からんか、凡ゆる誘惑に打ち勝ちて品位を傷つくるが如き事なかるべく、而して何等かの疑問に觸るるの時、直ちに解決する能はずとするも、其の解決の方法を發見するに苦しまざれば、家庭に於ける一切の事平穩に裁理し得るに至るべし。從つて此の教育の爲めには、現在の高等女學校の四年制は短かきに失するを以て、之を五年又は六年に延長し、以てその完全を期せざるべからず。女學校教師の、中學校教師に比し、重きをおかれざるが如き傾向あるは、女子教育を閑却するものなり。





日本の子守唄と若き旅人

竹久夢二

行暮て他國の旅籠の欄干に凭れる若き旅人が、夢のやうに連つた遠い山々を望むだ時、その胸に泪のやうに漲ぎるものは、遠く別れた彼が郷土の事どもであつた。罪を得て鐵窓の下に呻吟する不孝の兒が心より悔の聲をあげて聞いたのは聖典の一條よりも、彼が搖籃にありし頃、聞き覺えたる子守唄の一節であつた。

われ等の幻影は破られたりと叫びて、新しき科學と、眼まぐらしい近代の藝術に合奏した明治の若者も、現實の街角に行くれては昔の小唄に追懐の泪を流さねばならなかつた。

櫻さく日本の國に生れし幸福なる讀者諸君、試に御身達が搖籃のうちにて聞きそめし唄の一節を口吟む時、御身は必ずや、その頃着馴しキモノの模樣や、遊友達の姿を思出でたまふであろう。

すべての幼き追憶が、最もよく、唄の節より連想せられることを思ふ時、世のうら若き母君よ、されば、御身達はその愛兒に歌ひきかすべき子守唄が純な情緒と美しい音律とを備へてゐねばならぬ事を感じたまふであろう。

私は、私の少年の頃聞き覺えた小唄を、次の世の子供達に知らせることの徒勞でないことを思ふ。

私にも樂しい少年時代があつた。播州の赤穂から來てゐた私の守娘は、青い縞のあるネンネコで私を背負ひながら、日は日ねもす、夜は夜もすがら、小鳥のや

うに唄を歌つてゐた。
その唄はこうでした。

×

ねむの木、ねむの木、寝やしやんせ。
お鐘が鳴つたら、起きやしやんせ。

×

泣くなや、泣くなや、雀の子。
泣くと、鳥差がさしに來る。
泣かねば鷹匠が撫でに來る。

×

寝たか、寝なんだか枕に問へば
枕ものいぶた、寝たといふた。

×

千疊座敷の唐紙育。
山を拓ひて藏建てゝ。
藏の隣に松植ゑて
松の隣に竹植ゑて
竹の隣に梅植ゑて
梅の小枝に鈴さげて
その鈴ちやら〳〵鳴る時は、
坊樣さぞ〳〵嬉しかろ。

×

ねんねころいち。天滿の市は
大根そろへて船に積む
船に積んだら何處いきやる
木津や難波の橋の下
橋の下には鷗が居るよ
鷗とりたや網ほしや
網がゆら〳〵由良の助

×

なあかの、なあかの
小佛は、
何故またかあがんだ、
親の日に
海老食べて
それでまたかあがんだ。





×

向ふの山の
相撲取花を、
えんやらやつと引
けば
お手がきれた。
お藥ないか
赤いのもあるよ
白いのもあるよ
おなじことなら、赤いのにしよ。

×

うちの隣の千松は
近江の戰にたのまれて
一年待つてもまだ見えぬ
二年待つてもまだ見えぬ
三年三月で狀が來た。

×

ねんねんよう、おころりよ。
うちのねんねは何時出來た。
三月、櫻のさく時に、
道理でお顔がさくら色。

×

ねんねさんせよ、
今日は二月の二十五日
明日はこの子の宮詣
宮へ參らばどう言ふて拜む
この子一代、まめなよに。

×

うちのこの子の枕の模樣
梅に鶯、松に鶴
梅に似るとも櫻に似るな
おなじ花でも散りやすい。

×

坊やは好い兒だ、ねんねしな
この子の可愛さかぎりなし
山で木の數、萱の數

天へのぼれば、星の數
沼津へくだれば松林
千本松原、小松原
松葉の數よりまだ可愛。

×

おねんね、おねんね、おねんねや。
宵にはとうから御寢なさる
朝はとうから御眼覺で。
何を褒美にあげましよぞ
お乳の出花をあげましよか。
お乳の出花がおいやなら
雞蹴合せお目にかけよう。
雞蹴合せおいやなら
お菓子はたくさんお上りか。

赤穗の娘が敎へてくれた小唄はこればかりではなかつたけれど今は大半忘れてゐる。まだこの外に、何時何處から覺えたともなく聞き覺えた唄と、赤穗の娘が歌つた唄の記憶のきれぎれを綴合せて作つた唄を記して筆を擱く。

慌しい旅の身を暫時でもこうして昔に返らせる日本の子守唄の懷しさよ。それにつけても私の幼かりし心の園へ、江戸繪を好み童謠をなつかしむ種子を植ゑてくれた赤穗のムスメが思出さるゝ。

×

好い兒の坊やは
誰が子ぞや。
お城のうへの星の子か
南の海の椰子の實か。
坊やをうんだる
母が子ぞ
坊やを抱いたる
父が子ぞ。

×

白い羽がいの母鳥が
白い卵をぬくめたに



出來た雛はうづら斑の
ふつくらとした羽根わいの。
鳶と鴉と梟が
山から里へ見にくれば
雛は母御の懐へ
そろりと入つて寢たわいな。

×

（ねんねしなされ。まだ日は高い
暮りやお寺の鐘がなゐる）
村のはづれにちら〳〵するは
蟲か、螢か、人魂か。



さうじやない〳〵。母さんの
つけしやしやんした雪洞が
風にふかれてゐるわいな。
（ねんねしなされ。まだ夜は夜中
明りやお寺の鐘がなゐる）
山のうへをばふわ〳〵飛ぶは
鳥か、獸か、三ケ月か。
さうじやない〳〵。母さんの
小袖に染めた櫻の花が
雨に降られてゐるわいな。

懸賞募集　悲劇十番

（三月二十日〆切）

花笑ひ鳥歌ふ陽春駘蕩の日も、慘風一たび身の上に吹きすさめば、忽ちにして心の居所を失ひ、恐怖と戰慄とこも〴〵襲ひ來りて小さき胸に裂け破れなん、憤怒怨恨はまだしも、與に抗すべからざる天命の恐ろしさを悟らば、また誰をか恨み、誰れをか惡まん、生別の哀、死別の悲、まがつみに虐まるゝ人の世は實に荒野の吹雪にもたとへつべし、彼れ綿々の情を抱いて刃に臥す花の乙女よ、彼れ堅き乳房に吸ひつきつゝ慈母に離れ行く無心の子よ、いづれか涙の種ならざらん、觀じ來れば人生は魔の棲家也、荒野也、天は無情の暴主也、人は慘に處し、虐に活きつゝ僅かに露命をつなぐ哀れ墓なき生物にぞある、同情の筆一たび到らばこゝに悲劇の一番、又鬼をも泣かしむるに至るべし。

賞金

一等	金五拾圓	一名
二等	金參拾圓	一名
三等	金貳拾圓	一名
四等	金拾圓	七名

△文は諸體隨意たるべし。
△紙數は十枚以上十五枚までとす。
△賞金は發表の當日現金にて送る。
△原稿には「悲劇十番」と朱書ありたし。
△名宛は「女學世界編輯部」の事。
△原稿の文字は亂筆ならぬ事。

緣日

稻垣貴美子

今日は辨才天の緣日、鼻の先だのに何時も御留守番ばかりして、つひぞ行つた事は無い、今日こそは私御伴しますよと早くから約束して置く、手早く夕餉のあとを片付けて、兄さんと妹に留守番さして、ゴツ〳〵した田舍縞に銘仙の羽織引つかけて、母樣と二人門を出た、淡い星の光が四ツ五ツ！宵の明星は一きはさやかに輝いて居た、愛宕温泉と赤く記された街燈の所を左に折れて、細い薄暗い道を通る。この村の目標になつて居る石橋は一月前に修繕されたと聞いたが、渡るのは今が始めて。とん〳〵と下駄の音が流れの音と一緒になつて、何とも云へない物すごい響がした。

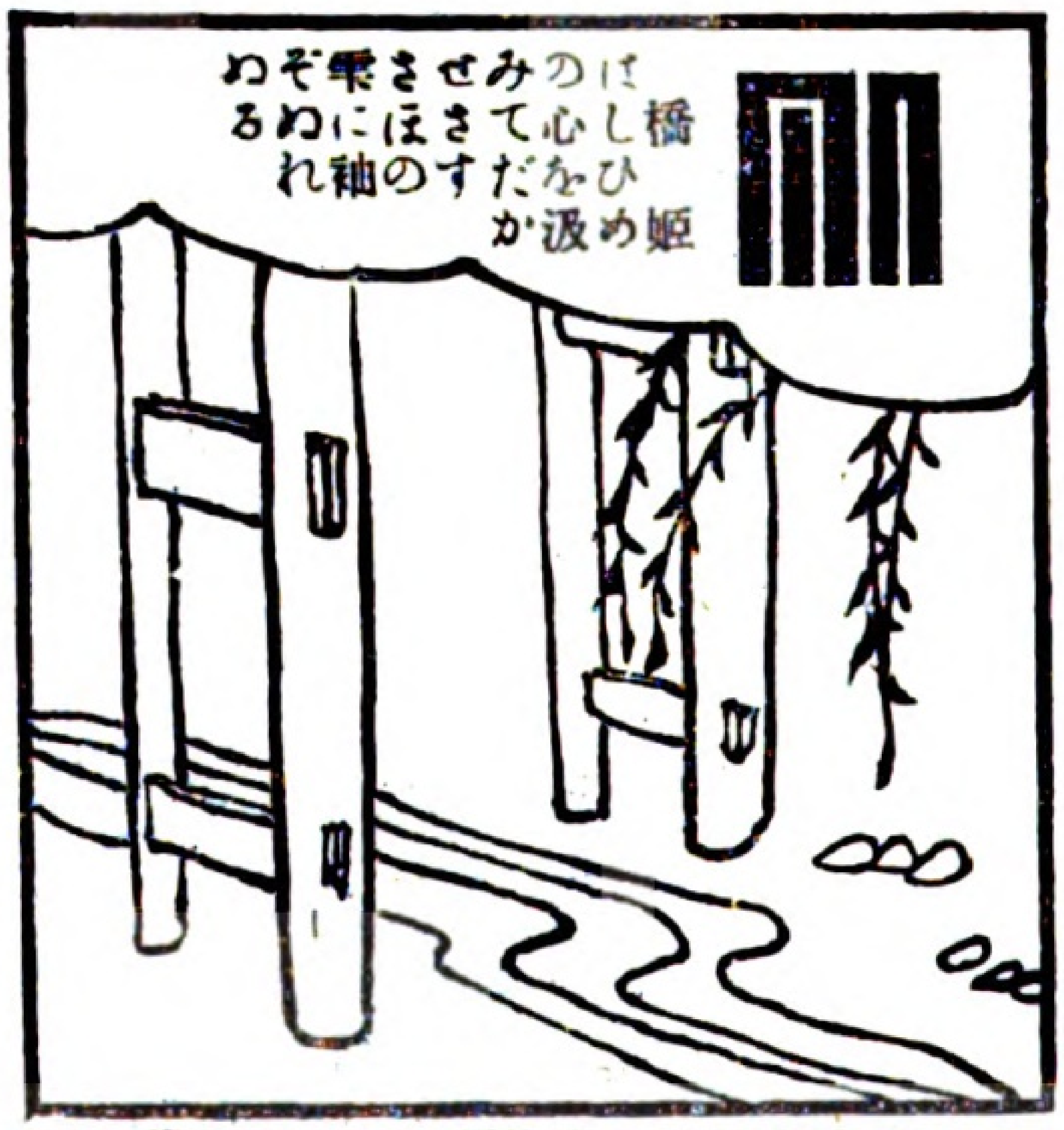


オイチニーイと幽かに燈の洩るゝ小學校の校舍からハツキリと聞えます。

母樣！あれ何あに？あれはね、來月入營する人が下稽古をして居るのですよ、誰が敎へますのやつぱり村の人で除隊になつて居る人がでせうあゝやつて每日やつてゐれば、入營つてから些つとは樂でせうね、でも每日寒いのに御苦勞さんな、毎晩！幾分か報酬が出るのでせうか、さあお母樣そんな事知りませんよ、何なら一寸學校へは入つて聞いてお出でな。

二人は云ひ合せた樣に輕く笑つた。全體刈られた田には稻のそよぎも聞えない遠近の田の間を縫つて燈の光が見える、此頃はだいぶ家數が增加て來たらしい、この村も追々賑かに成つて來ました。學校の前の一軒家の軒燈に、針、いと類、女かみゆひと硝子一ぱいに書いてある、先月の半ば村でも働者と賞められた夫に逝かれたおかみさんは、澤山の遺兒もあるので今迄通り一家を支へて行く事が六ケ敷いと云ふので身に馴れぬ商を開て、幼き頃〇〇はんは髮結ふのが上手やな！と人每に讃められた其誇りを今は一家の生活の爲めに……と聞いた時、思はず涙が頬を傳ひました、何心無く家の中を覗く途端、けたゝましく赤ん坊の泣く聲が聞えたハツト我れに返つた時は出町橋の傍まで來て居ました。加茂川から吹いて來る風は一入冷く面





に當る、河岸の柳が音もなく風になびく、橋の上を龜の子の樣に首を縮めて通つた、第一耳に入つたのは瀬戸物屋の賣聲。やあ！三貫！二貫八百、まけとけ一貫五百！も一ッ内しよぢやそれ一貫、シャツ一枚に成つて麻裏草履に目鼻をつけた樣な顔の男が錦出の鉢を二ッ手にしてカン／＼カンと鳴らして居る、罅が入つたのを藥をかけて燒き直した要者と聞いてからは聲を聞くのも馬鹿らしい。草鞋足に白足袋穿いた色の黒い娘が、安いはなあと黒い半衿の掛つたつれの女を顧みて私語いた、見て居る人は皆お百姓連らしい、欲いけれど金が無いわいと云つた樣な顔して口を開いて熱心に聞いて居る。眞鍮の輪の中にチエー／＼とうどん粉を流しては餡を圓めて投げ込で居る太鼓まんじゆうの前を通つた時、欲しくつて／＼仕方が無かつたが、買ふ勇氣は無かつた。油煙燻ぶる花屋の前には澤山な人、角帽、鳥打、中折れ帽、丸まげ、ルイザ。花を愛さうと云ふ高尚な趣味を持つて居る人々の中には、お百姓は一人も見えなかつた、骨董屋の前には茶人らしい人が一人ポツ子ンと立つて居た、其横町からは金物屋許りが數軒のきを並べて居る。

花畑なんかに今からどうせ用るから鍬を買つて行きませうとお母さんがお仰ろ價を付け樣となさると！お隣の羽織の紐屋の主人がお客の袖をつかまへて「そんな事ありますか！そんな人馬鹿にしてる、負けと云つたから負けたのだ：……」お客は大學生らしい人。威張るなら買ふてやらない、……と云つて居たが、大勢人が集つてくるので稍顔を赤らめ乍ら、財布を出して羽織紐を買つて行つたらしい。



おゝこわい！お客を逃して終ふと大變だと思つて……「それだから女なんかウツカリ買物が出來ないわネ」と母さんは笑ひながら誰に云ふとも無くお仰ろ。

イヽヤ！あれはお客さんが悪いのどつせ一度負けろとお仰るのでまけたらまた負けつて云ははるのどつせ。

金物屋の亭主はしきりと隣店の身方を持つて居る…………で此の鍬三十五錢にまから無いの？

え今出した所ですから。それぢや一ばいにして



置きますそれや高いわ。またおこるか知らんが止しませう。

云ひかけて二三間行くと。まけときます負けときます、肩から大聲で浴びせ掛けた。四十八錢を三十五錢に……まあよくまける事でも私だつたらきつと云ひ價で買うに違ひ無いやつぱりお母樣だけある、長年の經驗と云ふものは貴いものである、と思ひながら錢を擲げて人ごみの中を分けて通る、お母樣に一足先へ歸り掛けて頂いて小間物屋には入らうとする時前に行く人の道行が頁い格好だと思つて見て居ると此方を向いて笑つてゐらつしやる、私ほんとに呆然ですよ、何誰と思つたら菊池樣の姉樣なのでした。

あら！姉さん、まあ貴子さん、！私一寸も知らなかつたのですよ、貴女もひどいわネ－ホホ・ホ・・。

お一人で？え－いゝえ。旦那樣と？エ・とお仰つてにこやかに笑つてゐらつしやる。

お妹樣からお便りが御座いまして？は－時々ございます、さう〳〵貴子さんに云ふのを忘れて居りましたが此度一寸京都へ參りますの、左樣ですかお遊びに？いゝえ少し內臟が惡いので大學病院へ見て頂きに參ますの、まあ、それはお惡いのですれ、でも私久し振りでお目に掛かれて嬉しいですわ。

カチャ〳〵とサーベルを鳴らしながら人中を歩いて居る巡査が嫌に私等の顏を見て居ると思つて居ると、立つて話してはイカン、！あるくあろく。

と云ひ乍ら私の肩を突く樣にして行き過ぎた。

あゝ、またあの世話燒き巡査が！と思ふと可笑しくつてをかしくつてお腹の中で一人で笑つて居りました。

姉さんはきまり惡るさうにもじ〳〵してゐらつしやる此の巡査つたら毎日で無くても道で若い男女は無論の事、爺さんと婆さんとが立ち話して居ても、コラ〳〵と一喝するのですつて、それや、或る意味に於ては職務に忠實とでも申すのか知りませんが、よほどお調子が外れて居りますれ、私の村では誰も知らん方はありませんよ、いつもいつもえん魔樣が熊の膽を舐めた樣な顏して居ます。





オヤ？何處に行きましたでせう。
姉樣は思ひ出した樣に旦那樣を探してゐらつしやる、何だか私お氣の毒に成つたので、ではまたごゆつくりとお話に入らつしやいまし、と云ひすてゝ小間物屋へは入つてクラブ洗粉とはみがき買つて外へ出ると、
姉樣は何處でお見付けなすつたのかちやんとお夫婦で蓆の上に黄金の山と積まれた蜜柑屋の前にあるいてゐらつしやる、旦那樣のお丈の低いのが氣になつた、あれでももつと長としたお嫁樣がお所望だと聞いては姉さんもお可愛想ですわ。
人は姑樣もご一緒で無いから、お二人きりでさぞお氣樂でせうつてお仰るけれど、人には知れぬ私の心の苦しみは……といつやらお仰つた姉さんのお言葉を思ひ出しました、○○樣のお話しでは姉さんが嫁入る時寫眞と實物と大違ひだと云つて、やけ酒をお飲に爲つて、それから今迄一度もお打ち解けなさらないとか、○○でも才智あり人望ある方だとの評判の菊池樣がよもやとは思ひますが、あゝやはり美しい女で無ければとお仰るのですか？けれど考へても見てご覽なさい人間は容貌ばかり良くても肝心の心が暗くつては駄目でございますよ、容貌は產靈の神樣が授つけて下すつた賜物で如何する事も出來ません。
人はみめより只心と、古人は申したではありませんか瀧鶴臺先生の妻を御覽なさい。
只々磨き上げた心の鏡こそその人の生命ではありませんか、ね兄さま一時も早くお醒め下さいませ。
もう私が妹であつたなら何とでも申上げて御忠告致しませうものを、こんな事考へながらぐづ／＼歩るいて居たので橋の袂でやう／＼お母さんに追つついた、
何して居たの？大變遲かつたのねとお仰りながら始めて後を向かれた、私は巡査の事も菊池さんの事も云はなかつた、袂から疊み提燈出して蠟燭に火を付ける。
フト空をあふぐといつの間にか皆曇つて居て一粒の星も見えませんでした、
母さん何だか降りさうですよ急ぎませう二人は小走りに足を運ばせつゝ暗い道を家へと辿りました。



雪の日

○　津末みさを

冬に入りて、雁鍋といふ行燈のこゝかしこの料理屋に出でたるを見たる人の、ある時、「雁鍋なんて云ひますけれどもあれはほんとうの雁の肉ぢやありますまいねえ」と話せるを、聞ける側の五歳になる女兒、そんならうそつきさぎの肉ぢやないのと云ひたるにぞ皆興覺めける、この幼兒の父君は裁判官にて在すれば、客とある時欺詐取財のしかじかと論じ給ひけるをこの君の後にて、さぎとは何〱と聞いてやまざりしまゝに、うそつきの事だと答へたまひける、幼き君いつの間か動物園にて覺え來にける鷺とむすびつけてかくは秀句をいひたるなりとぞ、幼き折りの白紙のごとき頭腦こそよしにもあしにもげに染まりやすきことわりなりや。かりそめの事なりとも幼き君の前にては愼しむ可けれ。



○

ある人用事ありて、ある家に尋れ行きけるにやがて客間に通され、菓子茶など何くれと始めてすゝめさせ、只今入浴中なればまち給はれとの事なりけり、かゝる程にことことと間の襖あけて、六才ばかりの男兒入り來り客の前なる菓子皿より、一摑み菓子を摑みて逃げ行く、暫くありて又來りて摑み行く、客も主人のあらぬ間に、餘り菓子をあらしたりとあらむも心苦しく思ひければ、今度はおどさむとてまちける、さるほどに又間の襖のことこと云ひければ、客はいざ御座んなれと、目と口とに手をやり、俗に云ふべつかつこうの眞似してありけり何とてさることし給へると云ふ聲によく見れば今度は主人なりけり、まだ事の故由あからさまに云ふ可き程、深き交際にてもあらざりしかば、客はほとほと困じけるとなむ。



○

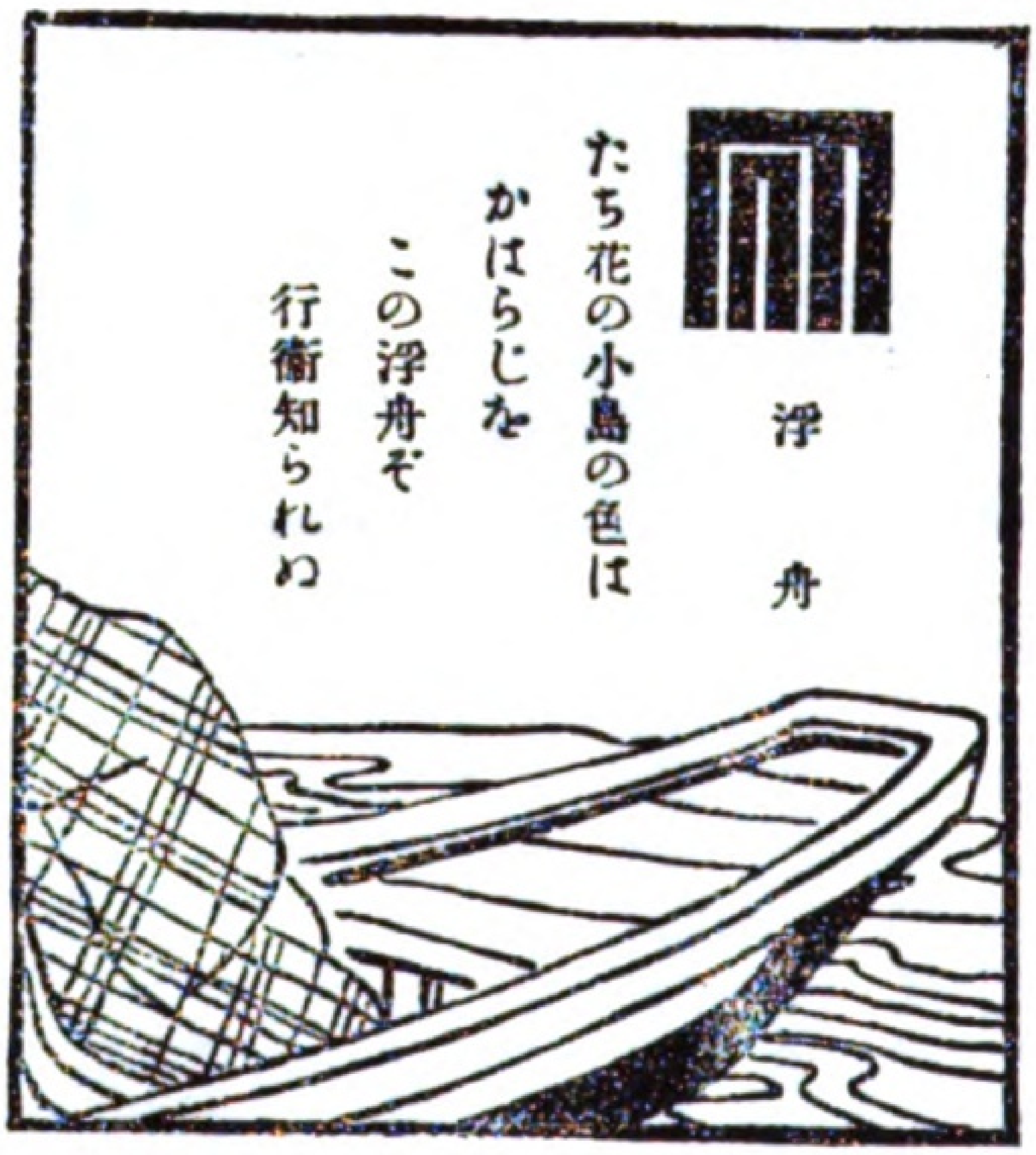
ゆら〱と風吹けば亂るゝアネモネの花、妖艶きはまりなき花の樣よと、日向りの鉢をみつゝも端近にて針運ぶ朝、通用門より入り來たりしは近所の媼なりけり、「大きにお暖かになりました、綺麗なお花で御座りまする、へえ名前はへえ、あれ上なるほど、姉樣のように美しい

つていふわけで御座りませう、ようつけたもので御座りまするなあ」とは嘘僞の樣なれど、眞實の事なり。

○

甲お姉樣、杉山先生のお髯れ日向に行くと紫色に光つてゝ、すつかり白髮がなくなつたのよ、變れえ、この頃お染めになるつてことよ

乙何でせうれ　、氣障ぢやありませんか、あのお年で生際も眉毛も畫いて被在るんですよ、お髮でも何かした時見ますと眞白なんで御座いますいくら何んでも厭味ですわ。



甲者は女學校の先生、年四十にして猶室なく窮措大にて浪々せられしが、この頃若き花妻娶り給ひしと聞ゑたる後の出來事なり乙者は知己の奧樣、御自分は五十路ばかりなれども、旦那樣は今が丁度男の大厄、わけて血色勝れて若々しう在せば、さうさう奧樣のみ老ばれてもゐられず、かくは實盛が故智にならひ給ふなり、誰にみせよとて臙脂鐵漿つけよぞ皆主へと心中立て、士は己を知る者の爲めに死し女は己を說ぶ者の爲めに容づくろ、實に御心中を察すれば又一掬の淚なきにしもあらじさはれつり合はぬ、緣は互に、心苦しき節多からんと、これにつけても思はるゝなり。

○

東西兩京の中間に位し、交通の要路を占め商工業殷盛をきはむれば、中京などゝ名づゝ可けれど自らほこれど、名古屋は殊に方言や訛り多く、他國の者の耳には異樣に響く音の今にても、改まらぬ地方なり、可笑しき語尾に、えも、なも、をつけて云ふことゝ、拗音のきあぎあなどの多き事なり。今日はえゝ天氣だなも、さうきあも（さうですか）の類なり、されば小學校女學校にてもこの方言撲滅に力を用ひ學校の用語は、標準語の東京辯を用ひよと命ぜられける、ある時頓ろお轉婆の一女生あり、即ち、先生に問ひけるは「あの先生なも、妾なも名古屋者だでなも東京辯なんて知らんぎあも、なも先生、東京つたら、ねえねえつて、いふだけでなも、私えも、あのえもねえ、さうきあもねえつて云ふていゝきあも。」



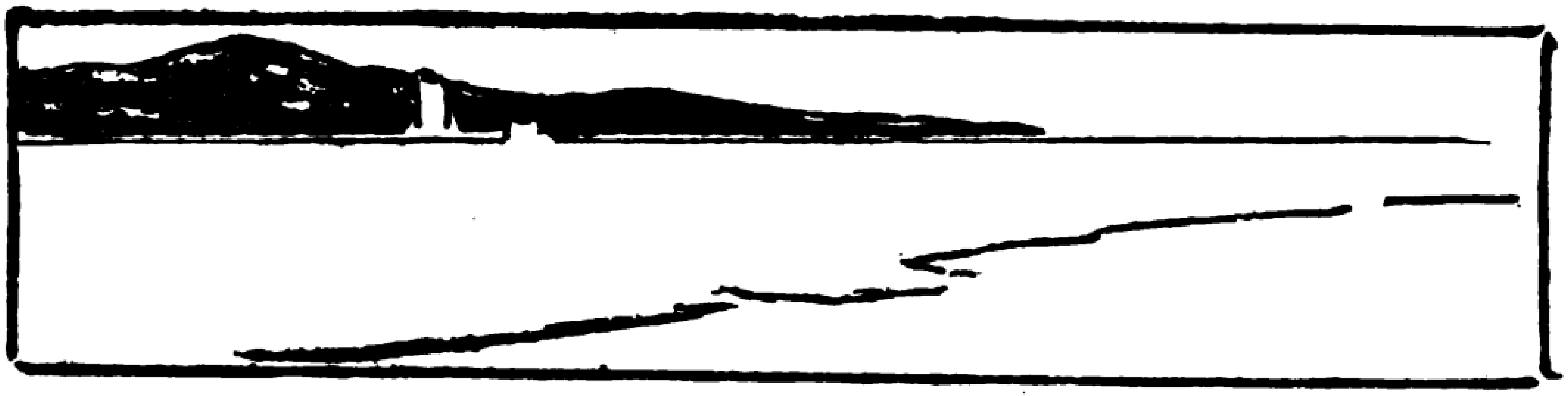


醒めた女の聲

はたゝ神

○

近頃醒めた女とか、解放せられたる女とかいふ聲が、大分喧びすしくなつて來た。文藝協會で演せられたノラは、實にこの醒めた女の標本としてもてはやされて居る。『人形の家』は、人も知る通り、諾威の文豪イブセンの傑作である。ノラは結婚して一人の子迄舉げ、夫よりは好遇せられ、所謂家庭の女王としては何不足のない身であつたが、その境遇が如何にも女子を人形扱にして居るに過ぎないのに不滿を感じて、樂しき家庭を捨て、夫を捨て、最愛の子供を捨てゝ『妻たり、母たる前にまづ人たらざるべからず。』と宣言して家出をするのである。これを芝居で演ずると、この最後の臺詞が只嘲笑を以つて迎へられたと新聞は傳へて居る。西洋諸國でかく迄、眞面目に人の頭腦を刺戟した臺詞が日本で只嘲笑を買ふに過ぎないといふのは、甚だ奇怪の樣に見えるが、實は少しも奇怪ではない。日本の社會はまだこれを深く感ずる迄進歩して居ないのである。ノラの如き婦人を產出するには、少くとも女子が妻たり、母たるの地位を充分獲得し、家庭の女王たる位置を堅固にして後、數代も經て、漸くこれに不滿を感ずるに至つてそれから始めて出來ることで、日本よりも一歩進んだ社會でな



ければならぬ。日本ではこの眞の妻たり、母たる地位が未だ充分確立して居ないのである。

○

ノラが家を出て人といふ修養を積んで然る後如何なる行動を取るかは未決の問題である。然し兎に角、女子の地位の進むといふことは社會の進歩であるから、舊式の人の恐るゝ程心配したものではない。英國の小説家メレジスは、喜劇の盛んになることは、社會の進歩した徴候であるといつて居るが、自由を得た女の増加は文明の増進である。

○

一體これ迄、日本の女子は結婚後、眞の妻たり、母たる地位を得て居ない。彼等は只嫁である。親が其息子を結婚さする有様を見ると、息子の妻といふことよりも、自分の嫁といふことに重を置いて居る。この誤れる考からして爭は起るのである。妻として夫に愛を以つて仕事せんとすれば、嫉視せられ、母として子女を其理想によつて教養せんとすれば、家風の名の下に、姑の干渉を受ける。かくして、女子は嫁たり、高等下女たるに終るのである。然し、こんな傾向も自然の趨勢、今や漸々消滅しつゝある。然し、未だ、所謂良妻賢母式の家族主義を理想と心得て居るものも少なくない。一體、夫を主とするよりも兩親を主とせよといふことは、恰も、日本が維新前に徳川將軍を事實上の主君と心得て居たと同じ間違である。



今日の女子はこの誤れる主君より、眞の主君に立歸らねばならぬ。これが爲に家族主義が亡びると思ふのは、徳川幕府が倒れて日本國が亡びると思ふのと同樣の誤解である。

○

この場合に於て舊式の人はやゝもすると孝道に背く事を説く。併しそれは決して心配には及ばぬ。孝は情の至りであつて道德の命令ではない。父母の孝養は情の發露であるから道理を説かずとも不孝をするものはない。況んや義理を喋々して孝の爲めに女子本然の職務、妻たり、母たること――を犧牲にせよと要求するのは酷である。で、申すまでもなく子としては飽く迄孝養を勵むべきであるが、親は、又其子女をして充分に、自由に其理想を實行せしめねばならぬ。

○

この夫婦中心の家族主義は如何に舊式の人が反抗しても今や着々として其地歩を占めつゝある。これは決して學説でない。又命令の聲でもない。社會進歩の必然の結果である。其證據は、現に其息子の嫁に嫁たることを強ひて居る姑が、自分の娘の爲には、財産がなくとも夫婦暮の所をと連りに其婿料を探して居るのを見てもわかるではないか。

○

夫婦中心主義は、獨り、人間自然の性に基くばかりでない、社會の進歩發展上必要



である。社會の進歩は凡て青年の力による。明治の維新も其當時の青年の事業なりとは人のよくいふ所である。これと同じく若き夫婦が舊式の兩親の干渉を受けずして、其事業及び子女の敎育に新しき理想を實行して行つて初めて社會は進歩し、發展する。只舊慣のみを守つて居ては、何年經つても進歩しない。あの本能的に舊慣を守る燕の巣は神代の古も、明治聖代の今も餘り進歩はなさそうである。

○

新しき女子の努むべきはこの夫婦中心の家族制度を樹立することである。ノラが家出をして後どうなるかはエックスであるが、若し彼女が形と內容とに於いて全然男子と同等なることを主張することゝなれば、彼女自身の破滅である。自分はノラが眞に人たるの修養を積んだならば、又彼女は家に立歸つた前よりも豐富なる理想を以つて眞に妻たり、母たるの本務を實行するであらうと思ふ。獨逸の思想家、ニイチエの「男子は職に適する樣に作り、女子は生むに適する樣に作る」といつて居るのは千古の格言である。女子と男子とは根本的に其本職を異にして居る。實に男子の使命は現在にあり、女子の使命は未來にある。男子は現在の社會を美しくせんことを努め、女子は未來の社會を美しくせんことを努めねばならぬ。女子は立派なる子女を生み、之を敎養して未來の社會を美しくすることを其本務とせねばならぬ。ニイチエは又「汝等は只己と等しきものを生まずして、より以上のものを生まざるべからず」といつて居るが、此所に女子の一大使命が存して居る。かのガルトン氏の唱道した優良種族學はこ



の地球上に優良なる種族を生出せんことを研究する學問である。實に優良なる子孫を作り自己以上の子孫を生むといふ高尙なる理想を實行するの鍵は專ら女子の手中にある。女子はこの使命を果す爲には、一旦失ひたる夫を選定するの權利を恢復せねばならぬ。人類以外の動物は凡て、雄を選ぶの權は專ら雌に存して居る。蜜蜂の女王は優秀なる雄蜂と婚せんが爲に、一大求婚飛行競爭を試み、其優勝者と目出度結婚するのである。女子もこの蜜蜂の女王の心掛がなくてはならない。

○

眞の妻たり、母たる使命を果す爲には、新しき女は、近眼者流の功利主義から割出した主婦的實用的敎養の外に、相當の人としての修養を積み、識見を高めることが必要である。

ハウプトマンの『寂しき人々』のヨハンネスは人形に等しき其妻に飽き足らず、新しき女の標本とも稱すべき露西亞生の女學生マールに思を寄せるのである。實に男子の方からいつても、新しき男子はヨハネスと同じく、敎養あり識見ある女子を妻として望むのである。只主婦としてでなく、配偶者としての妻を望むのである。

○

日本の新しき女は、世間の爲にする所ある近眼な功利主義の際物師的議論に耳を傾くることなく、着々と其修養を積み、識見を高め、以て眞に妻たり、母たる夫婦中心の家族主義の樹立に努力せねばならぬ。

▲家事に就ての智識と良妻賢母の徑捷を最も親切に詳述せるは本講義也▼
▲苟も家庭改善に志し幸福なる生活を望まるゝ人は本會講義に據られよ▼

女子大學家政講義

東京市小石川高田目白臺
日本女子大學校内通信教育會

會員募集

來る四月 新學期開講

科目と講師

○修養談……諸名士
○修身講話……成瀬仁藏
○教育……麻生正藏
○實驗心理學……文學博士 松本亦太郎
○兒童研究……高島平三郎
○法制大意……法學博士 奧田義人
○經濟大意……文學士 中隈敬三
○社會衛生……醫學博士 三宅秀
○家庭理科……近藤耕藏
○家事……井上秀子

○作法……小笠原清務
○日本料理……笹木幸子
○西洋料理……手塚かね子
○裁縫手藝……楓會研究部
○生花……兒島曉翠
○家庭園藝……農學士 佐々木祐太郎
○自然研究……大橋ひろ子
○文藝……文學士 武島羽衣
○美文評釋……文學士 下村莢
其他科外として家庭衛生顧問結婚問題女子と演劇等あり

──(毎月二回發行)──
會費 一ヶ月金五十錢 半ヶ年貳圓八十錢 壹ヶ年五圓四十錢 二ヶ年拾圓
──(二ヶ年修了)──

■會則附き内容見本 申込次第進呈

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂 電話番町(九三二) 振替東京二八三八番

女(その一)

一看よ　三大創

地球

第一巻第一號

四月十五日發行

四六倍判
二百四十八頁
口繪三色版、二色版
判各一丁寫眞版
光澤紙刷十二頁
正價三十錢
郵稅三錢

『地球』は東洋未曾有の容積と空前の大計畫を抱いて我が經濟財政の指導者たり論壇たり且つ最新智識の府たる可く朝野知名の學者實務家の贊助の下に四月十五日を期し第一號を創刊す形式に於て内容に於て我が國に於ける最高の輿論と學說とを蒐集すること尙ほ『太陽』の我が出版界に重きをなすが如く編輯の方法程度の標準亦た相同じ之を内にしては經濟を提く可き途に導き外に對しては直ちに日本帝國の實業に關する公論の存する所を代表す其品位の貴きに於て其の實質の卓越する事に於て蓋し我が財界唯一の發光體なり

婦女畫報

第一巻第一號

四月一日發行

四六倍判
口繪光澤紙寫眞版
四十頁外に石版三色
版數頁本文九十六頁
正價二十五錢
郵稅二錢五厘

販賣用電話　本局二六二〇番

發兌元　東京日本橋

女(その二)

刊雜誌　讀めー

『婦女畫報』は見るべくまた讀むべき婦人界の大雜誌なり 上はやんごと無き邊りより一般の貴婦人令孃方の肖像は勿論家庭の集團活動の容姿又は最新の風俗とも最近の寫眞若くは特に本館寫眞部員の撮影せる最良の光澤紙に印刷し坐ながら其の人々に接するの思ひあるべく閨秀界時時の新事實もまた寫眞として報じ加之記事は最も奇拔にして趣味を備へ修養と娛樂と錯り一般婦人の良友たるべくまた良配を求むる人々の爲めにも最良の案内たらんとす第一號は四月一日より發刊すべし

演藝倶樂部

第一卷第一號

四月一日發行

四六倍判
口繪光澤紙寫眞版卌六頁外ニ數色美麗木版及コロタイプ版數頁本文二百頁
正價三十錢
郵稅三錢

居ながらにして東西各地の芝居を觀、藝界の諸人物に接しまた彼等の聲曲を聞くの道ありやと問はば『然り』と答へて直ちに本誌を薦めんとす本誌の口繪は東京大阪を首として現代に好評の大芝居は盡く鮮明の寫眞とし最良の光澤紙に印刷して其の時々に紹介すべし若し夫れ角力、能樂、演舞の光景の如きまた悉く網羅して洩らさず況んや毎號一二百頁の本文は劇界の脚本、新狂言、筋書劇評は勿論謠曲、義太夫、浪花節總ての聲曲家の傳記逸話を首として素人連の內幕や古今の珍談、美談、奇談をも集め一部を繙けば演劇・寄席・聲樂舞踏まで盡く見聞するの快あらん

本町三丁目　博文館

振替貯金口座　東京二百四十番

女(その三)

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には徒ら理想の學究に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若し家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 新家庭訓　三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理　石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南　喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法　龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道　水原翠香女史著
第六編 諸流生花指南　琴松軒文雅君・松幸齋望常君 共著

第九編 禮式と作法　佐方鎮子女史著
第十編 惣菜料理　赤堀吉松君・赤堀峰吉君・赤堀菊子女史 共著
第十一編 編物指南　三木とみ子女史著
第十二編 婦人の生理と衛生　牧野清子女史著
第十三編 教育お伽噺　木村小舟君著
第十四編 女德の養成　前田長太君著

第十七編 女子作文法　遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史 共著
第十八編 子女の教養　棚橋絢子女史著
第十九編 家庭の趣味　文學士大森究山君著
第廿編 家庭遊戯法　高橋忠次郎君・松浦政泰君著
第廿一編 書道手引　井田秀生君著
第廿二編 歌の手引　大和田建樹君著

第廿五編 新式化粧法　藤波芙蓉君著
第廿六編 室内裝飾法　近藤正一君著
第廿七編 衣服の調整　石崎篁園君著
第廿八編 洋樂手引　前田久八君著
第廿九編 兒童訓話 母の知識　木村小舟君著
第卅編 洋食の調理　東京治庖會講師著

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫 十 數個
正價一冊金四拾五錢
郵稅一冊金八錢

東京日本橋　發行所　販賣用電話 本局二六二〇

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村貞省君・朝倉孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井静子女史著

第十五編 **家屋と庭園** 內山正如君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第廿三編 **刺繡術指南** 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第卅二編 **衛生と衣食住** 福田琴月君著

第卅三編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

第卅三編 **婚姻のかゞみ** 河崎酔雨君著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

●第壹 國民の務め○國家に對する務め○國君に對する務め●第貳 少女の務め○父母に對する務め○學問の務め○健康の務め○友情の務め○忍耐の務め○勤勉の務め○兄弟姉妹に對する務め●第三 妻の務め○良人に對する務め○舅姑に對する務め○家政に對する務め○社交に對する務め○育兒の務め○奴婢に對する務め

第卅六編 **日用家庭理科** 一戶清方君著

◎第壹篇 風●空氣と呼吸衛生●氣象と人身●室內に於ける空氣の注意●天氣豫報と厄日●空氣利用の器械と新具●音響と樂器●登山者の心得◎第二篇 火●住家と日光●人工照明法●炊事に關する心得●燈具と衛生●温帶の注意●熱と化學●眼と光線を應用したる器械●寫眞と光線との關係●太陽曆の閏年と日蝕月蝕◎第三篇 水●飲用水●身體發育の保護と洗淨●醬油と嗜好品汚穢水の排泄●水と娛樂●水力器械◎第四篇 土●地震海嘯及び火山●家屋と地盤●食物と生理●日用廢品と植物●裝飾品と動物鑛物●家畜家禽●水族館と魚類の二三●地球の引力と仕事◎第五篇 雷●落雷と豫防法●磁石と針と方角●人工電氣と交通機關●電氣と科學の進步

第卅七編 **偉人の妻** 前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多くは皆內助の功に待たざるはなし。本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大敎育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗敎家の妻、あらゆる階級の婦人を收む。貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の貞婦あり、交際場裡の女王あり、精練の妻あり、賢夫人あり、尙附錄には偉人を勵ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ。苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとするの婦人は、必ず一本を購ひ以て繙かれたる本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず。

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

女（その六）

女(その七)

故山田美妙君著　石橋思案君編

口絵数度刷石版画　木版挿画数頁



洋装四六判美本　正価金四十五銭
紙数三百五十余頁　郵税六銭

於伽諷刺　智慧袋

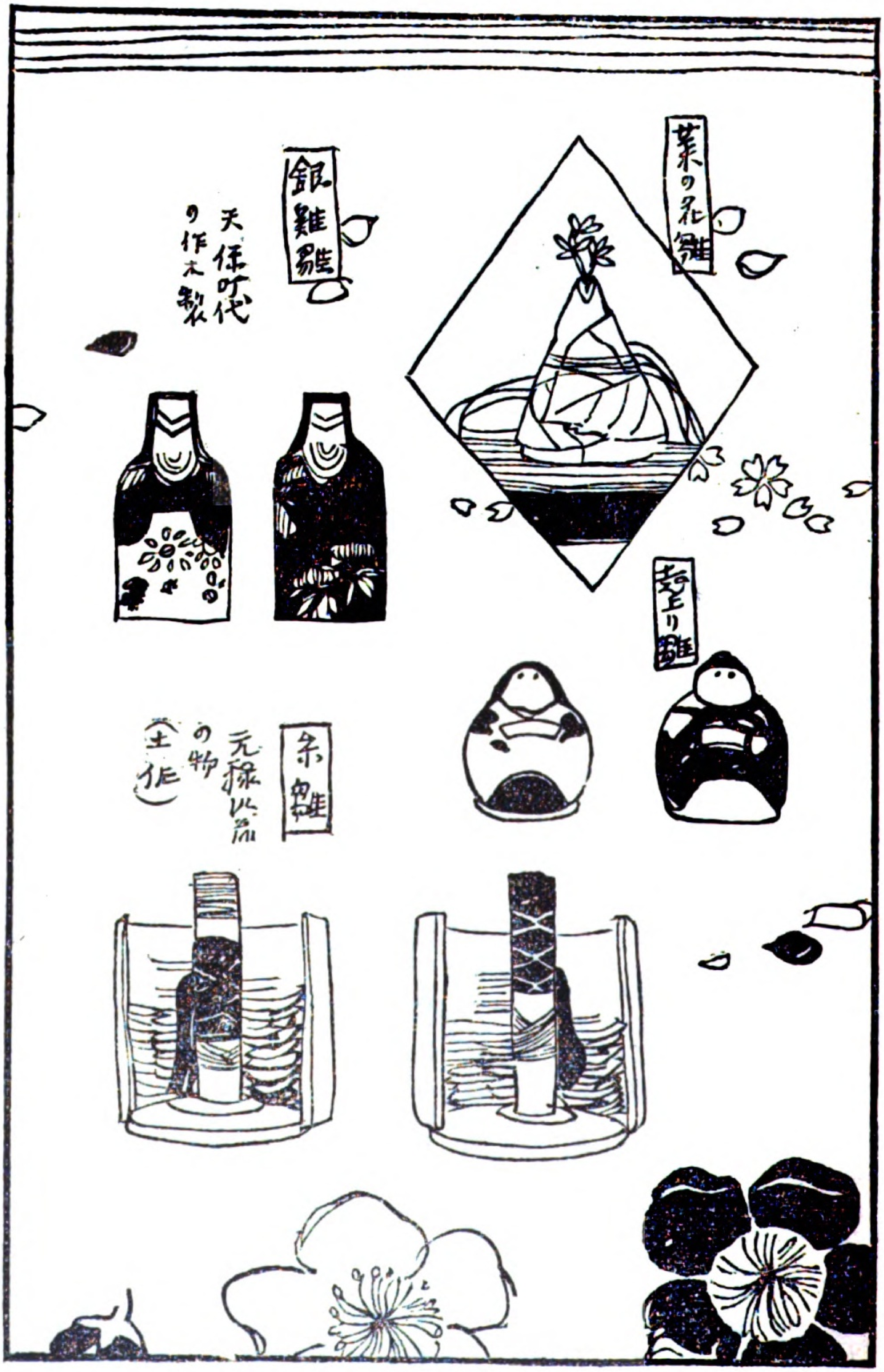
さア／＼御覧じませ、お伽諷刺智慧ぶくろが出来ました。中からは我儘王も飛出せば、乞食博士も飛出します。左様かと思ふと、見るからが美しい緋水晶、坊ちゃん嬢ちゃんのお慰みになるは云ふまでもなく、大人方のお伽にもなり申す。言文一致を初められた山田美妙先生のお伽もの、どんなものか先づ一本を購ひ給へと……販元謹白

東京　博文館　本町

女（その八）

雛のいろいろ（其二）

箱を出て顔忘れめや雛二對　（蕪村）



教育はなし　メンコと駄菓子の味



松平鏡子

また一しきり子供仲間にメンコが流行だした。

メンコとは、一寸二寸三寸、大きくては五寸のものや、小さくては八分位の直徑な、圓く打ち抜いた厚紙に、赤や青やの彩色をした、武者だの獸だのゝ繪を張つたもので、(東京にも賣つて居る)、玩屋具の隅の箱には、屹度一枚位見出されませう、それを打ちつけては遊ぶんです。

此樣な小さな村でゐながら、矢張遊び道具にも流行廢がある。一時は竹馬が大流行で、一段の二段の三段のと、年の多いさに隨つて一節づゝ高めたのを、誰も誰も持つて乘つて歩いた事もあつた。ある時は石けりがもてはやされて、其處此處の平地には、白墨や蠟石ですき間のない程、丸や四角やが書かれてゐた。

一人二人がやり始めると、みんながその尻馬に乘つて、だん／＼仲間が殖えてゆく。殖えると何時か分裂して、あちこちに幾組もの團體を作るのが習慣のやうであつた。デアボロだの飛行機だの自動車だの、父君の東京土產を得て、大喜こびな富豪の令息達もあつたけれど、それはほんの數にも足らぬ少數で、あとは欲しくつても買つては貰へず、作るほどの智惠もなければ、その勞力をも厭ふものばかり、やつぱりこの村一軒の玩具屋——片隅に駄菓子や草鞋や煙草なども賣る——から、メンコだの凧だのトンボだのといふ、安い在來のものを買ふて來て遊ぶ者が多かつた。

恰度波が寄せ返す樣に、この單調な遊戯が、繰返し／＼廻つてあるく。永くて半年、短くて一週間、この

メンコはもう一月も前から用ひられて、まだ何日棄てられやうと思はれぬ。

いばら垣一重越えると、小學校の運動場だつた、田舍の事とていかさま呑氣なずゝッと、廣い場所を校庭に取り入れてゐる代り、まはり一並の櫻木が、空間を置て植ゑ付けられてある計りなので、敎へるのも敎はるのも、遊ぶのも泣くのも泣かされるのも、路からは手にとるやうに見えるのだつた。



日當の好い下駄箱に添えた一側には、いひ合すとなく例のメンコ組が寄つて、いく組となく戰ひを決してゐた。一度は叱つて退けた先生も、到底そのおさへ難きを知つて、今では見て見ぬ振に濟ましてゐる。それさへあるに、何だつて遊びは遊びだといふ、校長先生の寛大なる慈悲が殊更にメンコ組の火の手をあふつて、ペタン、バタンと紙の土を打つ音、けたゝましい叫聲は高く校内にひゞいてゆく。

鼻汁は垂らすけれど三次が一番旨い。算術の時の泣顔は何處へやら、一日のうちには懐中一ぱい勝とは自分でさへ云ふ。一人が勝つだけ、餘計に負ける他の子は、一軒しきやない棒端の玩具屋に走つて、新らしく買ひ入れることを忘れなかつた。溜めやう、人より數多くしやうといふ競走心にかられて、よし負けずとも持つ小遣錢の半分は、乾度メンコをこの店で買つた。

それ故、この玩具屋の繁昌は近頃になく目覺ましいもので、五厘一錢といふ端金ながら、引き代へに出入りする小さいお客の爲に、内儀さんの顔には微笑が深く印せられるやうになつた。誰彼の差別なく皆好いお華客、好いお客さまであつたけれど、與吉ほど買つたものは、村中に一人もない。

與吉は佐平の家の末の子で、今年十二の、額の廣い鼻の小さい脣の厚ぼつたい子供であつた。父親はもう取る年波に滿足な仕事も出來ず、ほんの人の使ひあるきをしたり、田の草取りを手傳ふたりして、自分のわづかな小遣金だけの收入を求めてゐた。いへは多く總領の茂助が切りもつてゐるのである。

與吉は、學校でも指折りの低腦兒であつたけれど、それだけ人のまへのはゞかりも知らず、また親の身になれば、それが身にかへて可愛しくも思はれて、父親は僅かな煙草錢のうちを割いて、毎日二錢宛を與へることを怠たらなかつた。

與吉は今日も、霜燒だらけの手の、もうくづれて水が出さうな無氣味なのを、辨當風呂敷でくるりと卷いて、負けない氣でメンコをいぢつてゐた。

だが妙に負ける。勝つた例がないと云はれる程、負け續けに負け通してゐた。それ故、かう一二枚で全敗といふ樣な子は、乾度與吉に勝負をいどんで來た。夫は何も、與吉とするのが面白い譯ではなく、しさへすればえものが澤山あるといふ事が、目先に見え透いて居るからである。

三次のメンコは、もう古くつて繪も何もはがれてゐた。

「俺はこれ一枚で澤山ふやしたんだせ。」

つて息巻いてゐる。

大低の子のももう大分時代がついて、土に薄黒く汚れて居たり、繪が半分に裂けたりしてゐるけれど、與吉のばかりはいつも色がよくつて新しかつた。

「お前ェ新らしいんより古いんがいゝんだぜ。」つて他人に云はれると、

「取り替えて呉れねェか、え、おい、俺アこんなんが二枚やるによ。」



そう云つて、清正のと廣瀬中佐のと二枚分けてやつて、眞黒な汚いのと取り替へて貰ふと、

「誰かしねェか」意氣揚々として始めるけれど、矢つ張いけなかつた。

一日に二錢宛も貰ふ與吉は、子供仲間の金持であつたけれど、二日に五厘、三日に一錢貰ふ子の方が、ずつとずつと數多く持つて居た。

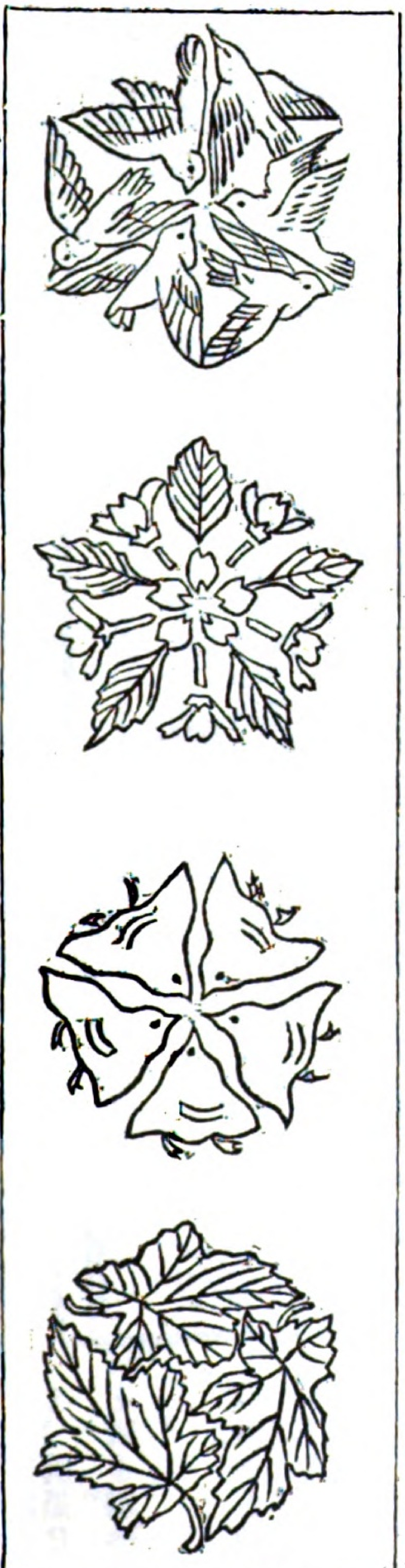
いはゞ親父の汗の代、もう六十歳もとうに過ぎた身

體で、やつとかせいだ金の中からわけて呉れるのを、買ひたい鐵砲玉一つ買はうとせずに、こらへて求める大事なメンコは、いつも〱右から左に、買ふと即時また他人の手に渡つて了つた。

果は人に借りてはする。而しそれもやがては取られて、自分はみんなの爲るのを傍でつくねんと眺めてゐた。

『紙博打つて云うんだつてぜ、俺惡いことしねえんだ』など〻、自分の過去に一度もメンコを手にしたことのない樣な、口綺麗なことを云ひ乍ら、翌日はまた新らしいのを持つて遊んでゐた。

花鳥模樣



△すゞめ　△さくら　△千鳥　△つた

春ももう中旬になつた。學校の廻の櫻の木は、美くしい花をたわ〻に載せて、風の吹く度にちら〱と散つて亂れる。その花吹雪の舞ふところ、日增に暖かになる下駄箱の日向に、子供の群は矢張メンコをいぢつてゐた。

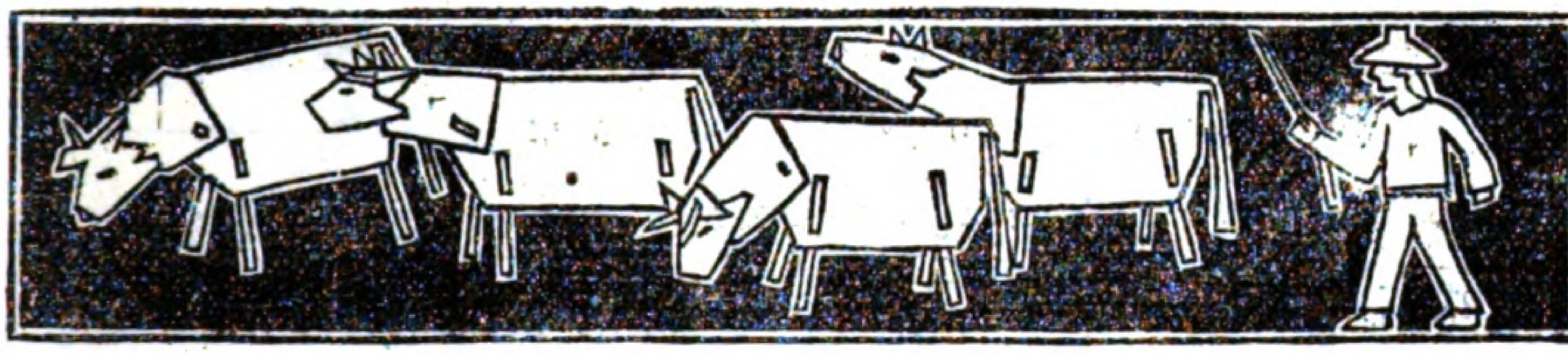
三次の懷中は益々ふくれる、玩具屋はまだひつきりなしに繁昌してゐる。

メンコの流行はまだ廢たらない。與吉は相變らず駄菓子の代を入れ上げてゐる。何日迄つゞく命かしれないけれど、メンコの熱が冷めるまでは、與吉の口は駄菓子の甘い味を知らずにすごしてゐるであらう。

雛のいろいろ(其三)

畫子も来るや雛の膳廻り　(士朗)





奥様と下女

桃波

此節の下女には、紡績の女工上りなんかゞ多くて、とんと従順なのが少う御座いますのれ、少し小言でも申しませうなら、すぐぶツとふくれ顔してろくに返事もしないつて始末ですから、私は此樣のには口で云はないで手でして見せるのです、譬へば拭布なんかでも粗末な洗ひ方して掛けてますと、私は默つて自分で洗ひ直して置くのです、さうしますと二三度する内には丁寧にする樣に成ります、もつともこれはいゝ方法では有りませんが、人見て法とけとやら、佛頂面見ないだけましですかられ。

○洗面時の心得

毎朝洗面する時鼻から冷水を、スーツと二三度吸込んでおくと、風邪を引かないでいゝとか云ふ事は、醫師にも聞いた事が有りますし、又或雜誌にも載つてゐましたから私はいゝ事だと信じてましたが、先日或る懇意な醫者に聞きますと、以前は宜つて事だつたので現に醫書にも其事がのつてる、だが近頃の説には、鼻には腦に通じた非常に鋭敏な神經がある、其鋭敏な神經を急に冷水で刺激するのは非常に危險な事であるから、せぬ方がよいとの御話しでした。

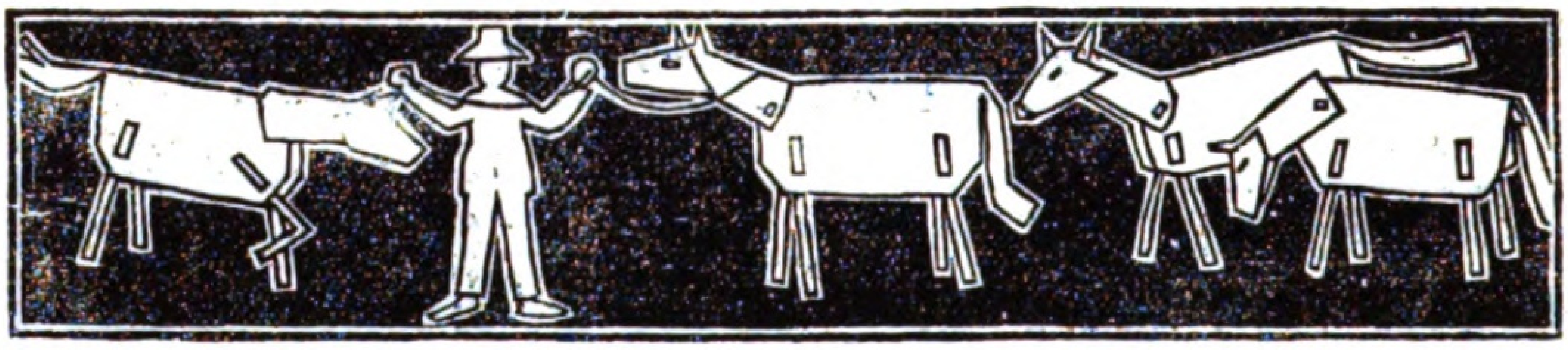
○一錢銅貨の價

五厘一錢つて金は誰しも平氣で使つてますがれ、百圓以上の金を預ければ日に一錢の利息は得られない、又一錢餘の金が有れば、百圓の金を借る事が出來るのであると考へたなら、たとひ一錢たりとも、おろそかには出來ますまい。

○金の茶碗

諺に純金の茶碗が出來ると其家は身代かぎりする、と云ふが、私し先日琴を新にしかへました、處が琴がよくなつたので、今迄のメリンス有禪のゆたんでは、どうも釣合ませんから、羽二重でこしらへました、表が羽二重だから裏もそれに應じて白モスにする紐もちりめんにいたしました、後で私し思ひました、僅か琴一つ新らしくしたばかりでさへも、此通り餘分な金をつかつて仕舞た純金の茶碗をこしらへれば、箸も珊瑚にすると、成程昔しの人はよくいつたものだれ。





○挨拶の練習

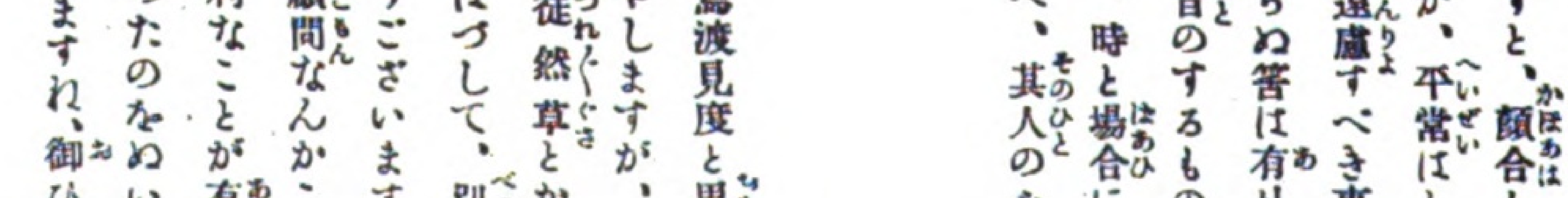
人の外出する時には、お早う御歸り遊ばせ、歸つた時には、御歸りなさいまし、と云ふ挨拶は何でもない樣なものゝ、必ず云ふべき事ですね、まあ私でもね、買物なんかに出て、歸つて參りまして、下女なんかにお歸りなさいましつて挨拶しますと氣持がようございますが、歸つても知らん顏してられますと、留守の間何か惡い事でもあつたのじやないか知らんと思ひますものね、道々面白いものがあつて、歸つたら話して笑はしてやろうなんて考へてましても、つい不愉快な氣になつて、いゝそびれてしまいますからね、此何でもない挨拶でも、言ひ習ひませんと、つい忘れてしもうもんですからね、私はやうやく口のまはる子位にも必ず云はする樣、習慣付けて居ります。

○葬式と琴の音

先日私がある町を通りますと（此町は役所勤めの人の多く住む町）或る家から葬式が出て居りました、其つい三軒ばかり先の家で琴の音がしてました、いつもなら好きな琴の音に足とめて聞くところですが、其折ばかりは何となく、嫌な感じがしていそいで通りぬけましたが、われ〳〵旅住居の者は同じ町内でいても、兩隣り位は懇意にしましても、早三四軒へだゝりますと、顏合してもお互に知らん顏で濟ますつてふうですが、平常はともかくね、不幸のあつた時などは、お互に遠慮すべき事ですね、半丁とへだゝらぬ近所の事、わからぬ筈は有りませんから、よく心して、琴なんかの外へ音のするものはひかへることですね、幾ら優美な音でも、時と場合によつては、かへつて人にいやな感じをあたへ、其人の心柄さへしのばれますから。

○古雑誌

月々の雑誌の量ばかりふえ、古ので鳥渡見度と思ふのがあつても、さがすのに隨分時間を費やしますが、それを手隙の折、たとへば、磯千鳥樣の新徒然草とか、内藤樣のとか、自分のすきなのばかりをはづして、別々に綴て置きますといつでも間にあつてようございます、以前によく出てました糸左近先生の衛生顧問なんかこうして一冊の本にしておきますと、大變便利なことが有りますよ、そして口繪の自分の趣味にかなつたのをぬいて、表紙にいたしますと猶美しい本になりますね、御ひまの方はやつて御覽なさいまし。



三月の總菜料理獻立（一）

日	朝	晝	夕
一日（金）	汁（大根千六本）、生玉子	豆腐薄葛	豚、けんちん巻、わかめ、酢味噌和へ
二日（土）	汁（里芋）、葡萄豆	鹽ざけ、菊花かぶ（三杯酢）	天ぷら、田芹、浸し物
三日（日）	納豆汁、てりごまめ	ほうれん草（お浸し）	車海老、つと豆腐、くわゐ、はす、筍、煮〆、蛤、清し汁（せり）
四日（月）	汁（小松菜）、佃煮	がんもどき（煮付）	かながしら、鹽焼、菜びたし
五日（火）	汁（甘藍）、焼海苔	玉子焼、下し大根	ゆば巻ほうれん草、なまこ三杯酢
六日（水）	食パン（トースト）（パンノ焼きたる物）、オートミール	火いりこんにやく	まぐろ、あんかけ、百合、白煮
七日（木）	汁（小蕪）、納豆	うづら豆、玉子みそ	いり鳥（かしわ、ちぎりこんにやく、さゝがし牛蒡）そぎ豆腐、青海苔清し汁
八日（金）	汁（葱）、雁くひまめ	まぐろ雉焼	かぶらむし、かき、三杯酢
九日（土）	汁（うど）、玉子	うの花	かき豆腐、するめ烏賊、くづ煮
十日（日）	汁（豆腐、）ひじきから煮	酢だこ（短冊うど）	小鯛、筏蒸し、きんぴら牛蒡
十一日（月）	汁（百合根）、焼海苔	豚ソボロ	かれい、鹽焼、碗盛（むすびさより、まつだけ、みつば）
十二日（火）	パントースト、牛乳	馬鈴薯白煮、ふき、粕漬	きわだ、作り身（ぼうふ）、つくね芋、甘煮
十三日（水）	汁（蜆）、鯛でんぶ	はんぺん付焼	寄せ鍋（竹輪、慈姑、しらたき、鶏、みつば）うど、酢煮
十四日（木）	汁（切干）、玉子	くわゐ甘煮、菜びたし	牛蒡まき焼き、玉子豆腐、清汁
十五日（金）	汁（結びかんぴやう、松露、白みそ）わさび漬	がんくひ豆、ちよろぎ	牛肉鍋、貝柱、わさび醤油

三月の總菜料理獻立 (二)

日	朝	晝	夕
十六日(土)	汁(わかめ)、うづら豆	ライスカレー、大根酢漬	甘煮(かまぼこ、慈姑、うど)、うぐひす菜、ごま醤油
十七日(日)	汁(はんぺん、葱の目)、海苔佃煮	さや豌豆、人參(白あへ)	ゑびめし、鰯つみ入れ、白髪ぬき、清し汁
十八日(月)	汁(やつ頭)、ほとゝぎす	たこ、櫻煮	蕪胡麻みそ付燒、烏賊、ぬの目和へ(短册うど)
十九日(火)	大納言粥、牛乳	嫁菜(白胡麻醤油)	鯛・うしほ汁、こんにやく味噌和へ
二十日(水)	汁(みつば)、ざぜん豆	いり豆腐(きくらげ)	豚、すき燒、さや豌豆、青煮
廿一日(木)	汁(さゝがき牛蒡)、生玉子	わかめ、短册うど(酢味噌)	海老、フライ、柳にけまり(ひじき、黒豆)
廿二日(金)	きらず汁(ねぎ)、大根酢漬	蓮根(かのこ煮)	菜めし、田がく、鮭の作り身(山川白酒)
廿三日(土)	のつぺ汁、きくらげからに	むきみ(ふき味噌和へ)	比目魚、煮魚、燒豆腐
廿四日(日)	汁(銀杏大根)、小蛤佃煮	筍、薄葛	ビフテーキ、キヤベーヂ三杯酢
廿五日(月)	汁(あられ豆腐)、燒海苔	たゝき牛蒡、花がつを	烏賊、木の芽和へ、山芋、うまに
廿六日(火)	パントースト、ジヤム・牛乳	燒豆腐、木の芽田樂	かれい作り身、菊花豆腐、清し汁
廿七日(水)	汁(あさり)、生玉子	サンドヰツチ	とろゝ汁、よめな、白あへ
廿八日(木)	汁(おろしくわゐ)、ちよろぎ	ぶり鹽燒	あいの子丼、つくだ煮
廿九日(金)	かすみ汁(ちんぴ生海苔)	あさつき、むきみ(ぬた)	しもふり鯛のさしみ、とろこぶ、もみのり、清し汁
卅日(土)	汁(よめ菜、小かぶ)、あちやら漬	生鮭・てりやき	シチウ、みつば浸し物
卅一日(日)	汁(さや豌豆)、西瓜粕漬	蛤・しぐれ煮	フライドポテト、落し玉子、せり清し汁、蓮根あちやら

梶原景季の妻



△武臣の妻威吟

右大將賴朝、鎌倉の御殿にて御物見より、往きかふ人を御覽ぜられし折ふし、見にくからぬ女の供二三人うちつれて櫻の咲亂れたる一枝を、女の童に持たせて通りければ、賴朝卿御筆を取らせたまひて

のこりなく手折て見ゆる櫻かなまた來ん春は何をながめん

かく詠じて御使もて、かの女にとらせければ、彼の女とりあへずその返事にこの歌をかきて奉りければ、右大將はしたなくいひつろものかな宿を見て參れと人を走らせたまひけるに、これぞ梶原源太景季が妻なりければ御感のあまり、ひきで物あまた給はりける、その後いかゞなしけん此妻不縁の聞えありしを賴朝卿聞こしめし、かゝるやさしきものなるをとおとりなしあつて其沙汰やみけるとなん。

△榮耀榮華の夢

佛は加賀の國より出てし女なり、容色舞曲ともに勝れたる佳人なりければ、ふかく平相國清盛に愛せられしが、いつれか秋にあはではつべきと祇王がよみし歌に感じ、おのれもまた此の歌を詠みて發心せり。さて尼となりて往生院へ尋ねゆき心のそこを打明て、尼の祇王祇女にわびければ、兩女もそゞろ涙にむせび、是れもまた宿世の縁しなりけりと互に喜び、稱名念佛に年月を送りとも〴〵迎接の瑞を得て往生をとげしとぞ。源平時代の艷史を飾りし美人の一人なり。

佛の前



半者川浪



△秘曲の傳統

川浪は中原通季といふ者の妻なり、通季は琵琶の妙手なりけるが、ある時やんごとなき方にて秘曲をのぞまれしかばもだしがたく、手をつくして彈けるに彼貴人あくびをし給ひけるを通季腹立ちて言けるは楚山に得たりし璞も見る人なければ石瓦にひとし、麒麟も王良樂にあはざれば鹽をこそ負ひけれ、聞耳なければ益なしと、立かへりてそれより琵琶を彈かず、其後病に臥して世の無情を觀じ、佛前に向ひて秘曲を彈じ我むなしくならば此曲世に絶えなんと歎きてこれを妻の川浪に悉く傳へしとなん、夫死してこの妻はしたものとなり此曲を彈きしに常盤井相國感じ給ひ

なかばなる月のかつらのおもかげを思ひ出してかき曇るらん

右の歌の返しに川浪この歌をよみけり。

△貧士の眞情を酌みて

眞袖は京の白川の者なりしが、筑紫の侍を聟にとりて、睦しかりしに家貧しくして物ごと心にまかせざりければ、まかなひの料求めん爲めに夫は一とせ筑紫へ下りける、眞袖一人子を守りて京に殘り兎角とりつくろひてその子を育て、便りを待ちけるが、程へて夫の方より文の來りければ悅びてよみけるに、別れし後より侘しく心ぐるしき樣などこまごまと書つゞけし上、つくし衣あまた其外いろ〱の物をのぼせる由を書きつられてありければいと嬉しくて猶よくよみてゆくほどに其奥にまこと我れ富めりなば斯くこそ贈らまほしけれど今に猶貧しくこそと戯ふれごとの樣に書たりけり。眞袖泣く〱うちよみて、いかにも此品あらば上せたく思ひ給ふらめど、心に任せず在するは猶いたはしくはべるかしと涙ながらに返事を認め其おくに此歌を書ておくりしとなん。

眞袖



△琵琶の古跡

治承のむかし、秘曲に名高き妙音院師長卿、暫し尾張の國に下りゐ給ひしが程へて歸洛したまふ時、そのころ召仕はれし呉竹といふ女に向ひ、おん身を具して上らん筈なれど、今はその期にあらず、やがて迎ひの者下すまでのかたみにせよとて、琵琶一面あたへて別れ給ひける、かゝるほどに呉竹は琵琶をかき彈らして朝夕の心を慰め、月日をかされて待ちゐたりけり、されども、たえて迎ひの來らん樣もなく、今は音信さへもたえ果てぬれば歎き悲しみのあまり此歌を書き殘こして、深き淵に身を沈めて歿しぬ、芳紀まさに十八歳、里人其貞節をあはれみ水中を尋ねて骸を求め、彼の琵琶と共に埋めて墓を營み、群僧を招き法養ねんごろにとふらひしとかや。今尾張の琵琶島、琵琶橋なんどいへるは蓋し此の古跡なるべし。

呉竹



江口の妙女



△娼家の傑才

妙女は江口の娼家の娼なり、ある夕暮に西行法師來りて、宿りを求めけれどもかさゞりければ

世の中をいとふまでこそかたからめ假のやどりを惜むきみかな

妙これをきゝて言下に

世をいとふ人としきけばかりの宿よ心さむなとおもふばかりぞ

西行此歌に感じて强て此家にやどり夜もすがら雅談に及びぬ、語ふ詞のはしぐにも夢幻の世を觀ずる有樣まこと大悟の所爲なりけり、程なく曉に及びて別れんとするとき西行

かりそめの世には思ひをのこすなよ聞しことの葉忘られもせず

妙此返しにこの歌を詠みければ西行涙をながし、斯る宿に色を賣る者にも此賢女ありけりといたく賞歎しけるとかや。

△纖子の頓才大事を治む

綾女は京堀川のものなり、信濃國の侍何某の妻となりけるが、京に知る人ありて文を下しければ隱しおきしに、あやしきことのあるよし夫に告るものありければ、夫その文を尋ね出しけれども讀み書くことを知らざりければ、我子の戸隱山に手習の爲めにありけるを呼び下し、綾なすゐおきて其文を讀ましめぬ。綾はいかなる首尾やあらんかと色かはりてありしが、この子こゝろありて只よのつれの文のやうによみなしければ、嬉しさに兒の歸るとき種々の物をとらせ、その中にこの歌を書き入れたるなり、兒の返事に

しなのなるそのはらにしも宿られどみなはゝきゞと思ふばかりぞ

後見家をつぎ、まゝしき中とは見えず、むつまじく世を送りしとなん。

都の綾女



野上の斑女



△狂女の述懐

斑女は美濃の國野上の宿の傀儡にて、その名を花子と云へり、吉田の里の某といへる人に契りて別れの時かたみに扇を貰ひしより、唐の斑女にたとへて異名とせり、其後あこがれ物くるはしくなり、扇をかざして此歌を唄ひあるきけるとなり、歌の心は夏果てゝ秋になれば扇は忘るゝものなり、わが身の忘らるゝ夜の獨り寢の床のつゆけしといふことを添へてよめり、古語に君が一日の恩の爲には妾が百歳の身をあやまつといひしことのごとく其樣哀れ深し、定家卿も此心をよみたまひし歌あり

一夜かす野上の宿の草枕結び捨てたる人の契りを



桃の宵

白桔梗

金屛に、白桃かほろ春の宵、
　雛の宮居の雪洞の灯紅う、
「官女」と書いてある箱――へ手を掛けて、
私は思はず微笑だ。

若菜しほれて　土筆は折れて
蓆の上に　花も散らばろ
小さな俎板　皿小鉢
まゝ事すみし　離れ舍の軒

おゝ記憶よ！　記憶よ！なつかしい記憶!!!
雪消えの椽先き、雀囀ろ軒下に、蓆敷いて、長閑な春の陽を背にあび、貝の口に固く結んだ緋綸子の帶の――幼な姿――うしろ向きになつて脇き目もふらず、萠え出でた若草を、少さい俎板に乘せて……、コト〳〵と庖丁の音！　ふと振りむいた、我幼な顏！
――そうする内に、大きくなつた――。
「お姉樣！　お姫樣の瓔珞が見えないの。」

「え？　そんな事は無いでしよう、少さい綿にくろんで、お袖の下にある筈よ。」
お茶の湯の道具、おはぐろの道具、鏡臺！針箱、包むだ薄い櫻紙を透して、蒔繪や、靑貝入りの、朱塗りは美つくしい。
ひとつ〳〵膝にのせて、紙をとろ。
めんどうだけれど、こうして飾ろ時――燃ゆろよふな緋毛氈の壇に、人形やお道具の下へ〳〵と、並べらろゝ時は嬉しいけれど、それに引き替えて、しまふ時！　一つ〳〵又紙にくろんで、箱に入れて、小屛風たゝんで、内裏樣の冠と、姫樣の瓔珞、脇へ笛と小皷とを入れて、綿にくろむ時！少さい私はよく包紙の上へ、ほろりと涙をこぼしたつけ！　雪洞に灯紅い宵の、せめて十日！　五日は儚ない。
すうつと立ちあがろと、高髷が重い。秋の端をそつとくわへて、緋の長袴の裾をうしろへなびかせ、三段目に置く。
「高砂のお姥さんのお手を鼠が食べてよ。」
「あらまあ、たんと？。





「否、ちよんびり。」

「さう、じや好いわ、糸ちやん？　そちらの方にれ、五人囃のゝ鼓と笛の入てろ箱は無くつて？。」

…………

「ちい姉さん。」

「あい。」

「又お雛樣の可愛いゝお道具を借りて、まゝ事仕ませうれ。」

「あい。」

「ほゝら、鞠!!!。」

「あら!!!。」

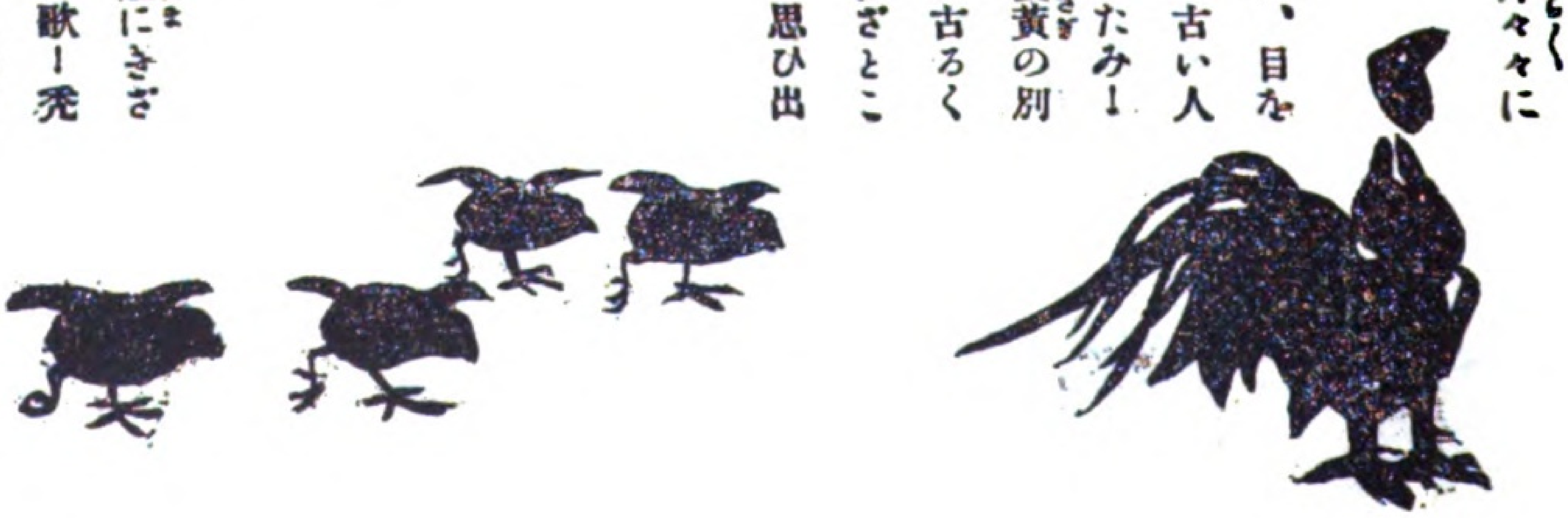
妹達の會話をうしろに聞いて、私は雪洞の蠟燭を替える。

紫の帷幕、輕くしぼつた緋房の奥、銀屏に淡く影さした、瓔珞の垂絡！　御衣をかすめて梅が散る。彌生とは云へ渡島路、大沼の春は未だ淺くて、桃は蕾さへ無いけれど、佐保姫ならぬ、私の手製の白桃、緋桃、八重櫻は室咲きの紅梅と艷をきそふて、紅深かく、しだれ柳のみどりの糸を、配えて美しい下へ、小町の艶姿を立たせて見る。花の一片々々にたらしといたローズの香は、形もなくなつて雛の宮居をゆるうめぐる。

「桃子の箱。」おぼつかない字くばりに、目を走らせて、私は又微笑みをもらした。古い人形だけれど、私にはなつかしい忘れがたみ！　桃われにして、前とうしろに、紅と淺黄の別別の鹿の子掛けて、友禪の袖の模樣も古ろくさいつて、皆んな思ふけれど、私はわざとこうして置く。過ぎた幼い春の記憶よ、思ひ出の代にとて……。

少さき母の小守うた、
　夜毎添寢の頬ずりに、
汝は美つくしき夢や見む、
　夕べ冷たき燈に……、
母よもすがらいねもせず……、
　……………、

彼の頃は少女界の愛讀者、幼ない腦にきざみこまれた、美つくしい無邪氣な詩や歌！　髮は高髷と替つても記憶は何時迄も殘つて居るものを。口ずさむ毎髣髴と浮び來る其時代!!!





雛の日　その三

十五の春！　十五の春、あれから私は人形と別れた四年の東都生活は私の背丈と心をこんなに大人にしてしまつて‥‥人並はづれて大きい私、じみ好きな母樣はもう紅の入つた帶は見つともないつて仰言る‥‥けれどけれど、

　羽子よ鞠よみな母上にかくされて
　　肩上げあとの針目寂しき

あゝ今ぞ知る！　昔少さき乙子なりしを、―大きくなつた女の子は――。

　十九の月の眉はふくれど
　　笄を加ふべき日は近き來るに

‥‥‥‥‥‥‥‥‥

乙女の涙‥‥今の涙を怪うとしと云ふ君あらば‥‥。あやしう、うるみし、眸あくれば涙に散つた雪洞の灯！　並らぶ灯と灯と美つくしう、連らなる紅玉のまぶしさに、私は袂に面を掩ふた‥‥。

「お姉樣、私今晩雛の間へねんねするの。」

紅い少さな枕をかゝえて、糸子がひよつくり入つて來た。

「母樣は、いゝつて仰言て？。」

「えゝ。」

雛壇の下に枕並べて‥‥夢は花やかな宮居にも遊ばう、少さい妹の切な願ひを、私は可愛ゆく思つた。

「お姉樣と一緒にねんねしませうねえ。」

私の箱枕と自分のくゝり枕とを、あつちにしたりこつちにしたりして、並べて居るんですもの。

「ねえ、お姉樣？。」

「えゝ、ねませうね。」

友禪めりんすの寢衣のひもを一人で結んでゐると思つたら、たて結びにしてすまして居る。ぺたりと坐つて、

「お姉樣おやすみ、ちい姉さんおやすみ。」

向きなほつて、

「お雛樣おやすみ！。」少さい手をついた、寢衣のうしろ姿の可愛さ。チョコ〳〵と走つて布團の上にコロリ、私の搔卷で、少さい肩を包むでやる。ふたりとも天鵞絨の襟に頰をうづめながら、大きな瞳をぱつちりあいて、同じやうに、雛壇ばかり見つめて居る。かうして入る妹達の夢路！どんなに美しいものであらう。明朝起きたら、早速聞いて見ませうと思ひながら、電氣へ紅の掩ひをかける。盡紅化した部屋の內、ふたりを見ると無言でニッコリ！。

　紅の房美つくしき小枕の、
　　三つ四つならぶ、春の閨かな。



思ひ出の記

名なし草

えゝ左樣で御座いますね別れましてからもう直き一年になります。恰度今頃は病氣の最中だつたのでしたもの。

早いものですねえ。淋しい〳〵と思ひながらもう一年經つて仕舞ふんですもの。死去りましてから以來絕えず何だか不安の念にかられ〳〵て送つて來ましたよだつても母が居りませんでは誰も叱つて呉れても無けれや敎へて呉れる人もないのですもの。それやもうすつかり何も爾も出來たお精神の確固した方は好御座んすけれど私なんか未だ未成品なんですもの。やつぱり馬車の馬が鞭ではたかれながら據無しに絕えず同じ步調で走つて行く樣に、人間でも始終他から勵まされたり叱られたりして居ないと駄目ですね。

私は平常日記なんかつけた事はありませんでしたけれど、母の病氣中丈けは記けて置きましたそれは一生に一度は何うしても遇はなくてはならない、悲しい苦らい親の死別！　それ迄になる經過を先きによるに從つて段々忘れて行くだらうと存じましたから、思ひ出の種にもと記けておきました。發病以來死去ります日迄百日計りの間、忙しい中を缺かさずに每夜書き付けといたのですが、いくら自然の成行きだと斷念めても矢張り弱いものですねどうしても、其後出して見る氣にならゝません、で今迄手付けずに御座いましたのを、昨日始めて出して見て、何だか今更あたらしい感じが湧いて來ました。

何しろ不意でしたからね、少しも平常と變らない元氣でしたのに、突然卒倒して其のまゝ死にます迄といふもの、遂々正氣に返りませんでした。隨分永い間で御座いましたよ。

お恥かしい御話ですけれど、私は重湯のとり樣も本當に知りませんでした。其癖おすしだの櫻飯だのといふと、先に立つて手を出したもので、時にはノート片

手に大骨折りで燒き上げて見ると、クラストのねぢねぢしたパイが出來たり、又は半分カステラになつて半分玉子燒のが出來上つて、此次こそはなんて力瘤入れたり、よく母に冷かされたものでした。けれど重湯なんてものに、なあに只お粥の上汁をとればいゝんですもの、造作ないなんかと心得て居たのが、そも〳〵の不覺でした。でも母の病氣でいゝ經驗しましたよ。看護婦のを見樣見眞似で動かす事の出來ない病人のシーツの敷替へや、寢衣の取替へなども大變に上手になりました。食餌の與へ方なども造作も無いやうで、中々難かしいものなんですね。何でも考へた事と實際とは、大變に變ふものだといふ事を、熟々悟りました。



其の日記見せよと仰有いますの。えゝそれは少しも差支は有りませんけれど、大變な亂暴書きになつて居りますから、一寸はお讀めになれないでせうよ。今日は是丈けおめにかけときませう。

孝養の猶しもたらぬ怨み思ひ、侍る床にうつゝなき君

是は發病した日の晩に涙をうけて書いたもので、今でも其の時の有樣がまざ〳〵見えるやうです。

常住の宿にや母と我すまむ、もだへと死との境こえ來て

おん病ひいやあつしけば我さへに猶しぬべくも胸こそいたけれ

まどかりし心すさびて朝夕に胸をぞ抱くおん病ひゆゑ

餘り丹精しても、少しも容體に變化がないので是等はみなうめきの聲とでもいふのでせう。

此頃は夢ばかりこそたのまるれうつゝに笑ふ君ならなくに

いえましてそゞろありきの夕暮の其のひと時を夢ならで見む

よく時候の好い時分になると夕食後母と一緒に散歩するのが一番樂しみだつたのです。だものですからそんな夢をよく見ました。一年後の今でも度々そんな思ひしますよ。

さゞめきの聲もる門をともしみて過ぎがてに見る我ともなりけり

實際其の頃の私の心の淋しさといふものはありませんでした。

春九旬うつし心もゐさゝすに、病ます母のみとりに暮れぬ

梅雨ばれや青葉風よきまどあけて、母にまゐらすみるく煮る朝

氷わる音に眼さめて淋しくも、雨きく夜はの我が涙かな

是は少し病氣なれた時分です。

あまりにも死の手ののぞむ心地して、打ちまもらるる病ふどのかほ

もういよ／＼の晩だつたのです。

廿年みそば去らでも別れては、ありし日永くおもはれなくに

聲ちさく母よとよびぬ夜の庭に、ひとり淋しくおもひ餘りて

それから秋になりまして遺骨を東京に持つて參りましたが、是が一緒にする最後の旅かと實にいやな心持ちがしました。

なき母のみ骨奉じて上りこし都の秋のうら悲しさよ

それから以來他家で人が死んだと聞きますと逢つた事もない人でも非常に氣の毒な感がしまして、毎日出る新聞の黒枠が妙に注意をひくようになりました。

あなたなんか今の内ですよ。たんと御孝行をなさるのは。

紅寶石の話

玉簪

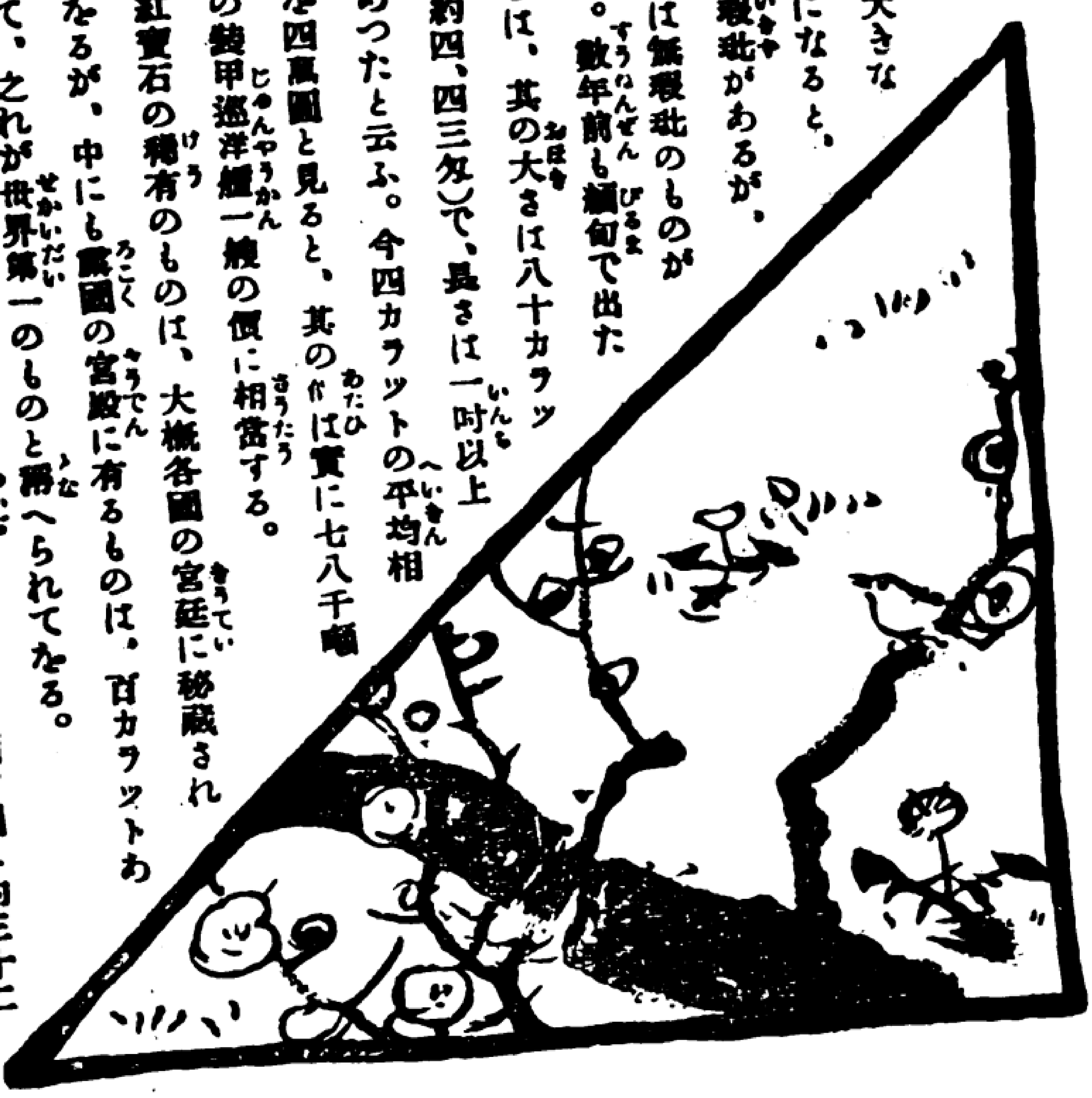
△最も貴重な寶石

吾々が、普通衣食住一通りに不足を感じない樣な身分になると、次には先づ第一に身體の飾りを飾りたがるのが一般の人情で、就中婦人は衣類ばかりでは何んだか物足りない、頭の飾、腕の飾、胸の飾、指の飾が相當に揃はねば滿足せぬ。其れも唯だ金、銀など計りではなく、色々の寶石類などを嵌めたものでないと、裝飾が引き立たないやうに思ふ。此の寶石には種々あるが、何にが一番貴くて高價であるかといふと、何人も皆な金剛石と答へやうが、其の金剛石と同じ目方で、而も其れの五倍も六倍も値段の高いものがあることは、餘り知つて居る人が無い。其れが即ち本題の所謂天然紅寶石であるのです。

一口に紅寶石と云つても、其の色、光澤の完全せるものは極めて稀であるが、無瑕疵で五カラット即ち約二分三厘位の鳩血色即ち眞の紅寶石色のものは、同一重量の最上等の金剛石の十倍位の價額であるとは、實に驚くの外はない。鳩血色と云ふのは如何な色であるかと云ふと、之れが中々面倒で、殺したての鳩の鮮血の滴りを白紙に浸した其の色を云ふのです。併し大體に於て淡紅色の一種と思へば間違はない。

△稀有品の奇聞

紅寶石も大きなものになると、大概瑕疵があるが、偶には無瑕疵のものが出る。數年前も緬甸で出たものは、其の大きさは八十カラット(約四、四三匁)で、長さは一吋以上もあつたと云ふ。今四カラットの平均相場を四萬圓と見ると、其の價は實に七八千噸位の裝甲巡洋艦一艘の價に相當する。



紅寶石の稀有のものは、大概各國の宮廷に秘藏されてゐるが、中にも露國の宮殿に有るものは、百カラットあつて、之れが世界第一のものと稱へられてゐる。

西暦千八百八十五年即ち吾が明治八年の頃に、緬甸國に約三十二カラットと、三十九カラットの二つの大紅寶石が同時に出た事があるが緬甸政府は當時非常に貧乏で困つて居た時であつたから、之れを早速歐洲の某國に百萬圓と二百萬圓とで賣却することになつた。處が之れを運搬するになか〳〵小包郵便と云ふ譯にも行かないで、輸送する馬車やら汽船やらを皆な最も有力なる軍隊で嚴重に護衛して、殆で王樣か何にかの御巡幸の樣であつたとは驚くの外はない。

△ルビーの性分と產地

紅寶石は鑛物學上より云ふと、靑玉石と共に鋼玉屬に屬するものであるが、其の主成分たる礬土に、紅、靑、等の種々の色彩を與へる者の有る無しによつて、靑玉石ともなり、又た紅寶石ともなるのです。即ち靑玉石にはコバルト、紅寶石にはクロームの入て居ると云ふ差異に過ぎない



紅寶石の主なる產地は緬甸であるが、其の他セーロン島、シヤム等も產地として知られて居る。之を採るには別に面倒な事をしない。單に深さ五六十尺の堅穴を鑿り、其の土石を天日で乾した後撰み別けるに過ぎないが、立派なものに掘り當てる事はなか〳〵困難である。

紅寶石に似てをるもので、價の廉いスピネルと云ふものがある。之れは紅寶石に比べると性分も全く違ふし、硬度も餘程低く、色も淡くない櫻色をして居るから、紅寶石であるかないかはすぐ識別する事が出來る。古の人の紅寶石紅寶石と云つて居つたのは、大槪此のスピネルであつたさうである。

△人造紅寶石

天然の紅寶石は、斯の如く貴重なものであるが、近來巴里のパスフイルと云ふ人が、之れを人造的に造ることを發明した。其の技術は中々立派なもので、最上の人造紅寶石は、天然產のものと性分は素より、色、光澤迄で寸分違はぬために、何れが天產のものだか識別することが出來ないといふ。

此れを造る裝置は、極めて簡單なもので、單に非常に高い溫度を作り其の性分のものを化合結晶せしむるに過ぎない。

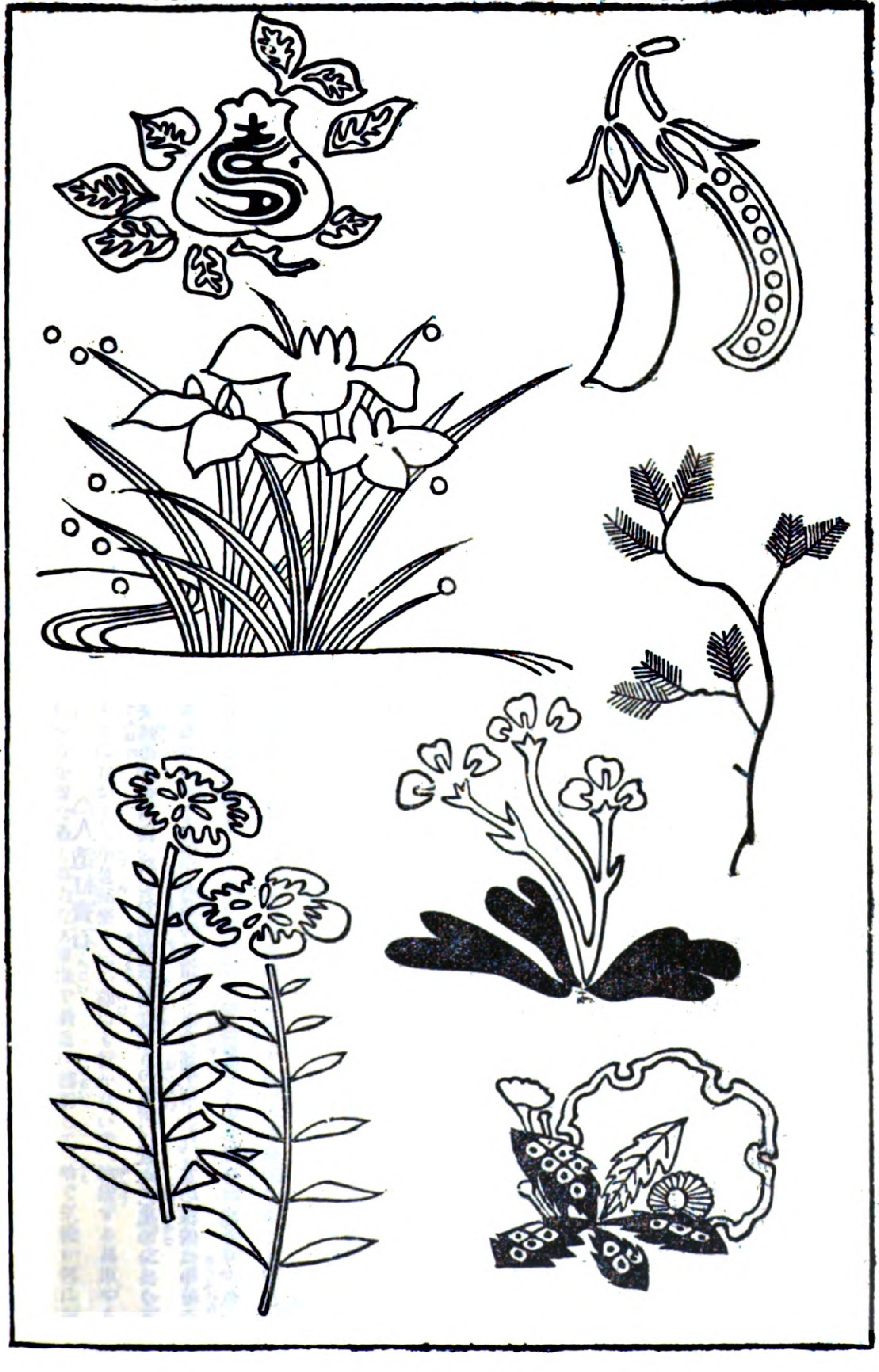
其の費用は一カラツトに付一圓内外で造り得らるゝといふから驚く。故に巴里などの質屋では、紅寶石の質入を御斷りして居るといふことである。斯く廉く出來る樣では、金剛石穿孔器等にも、金剛石の代りに人造紅寶石を用ゐらるゝ樣になるであらう。

人造紅寶石の斯く廉く出來る事は、天然紅寶石に對して非常なる大打擊であるが、技術の進步と云ふ上からは大に慶賀すべきことである。

たつの居る千代田の梢打霞み
江戸の港に春は來にけり　（文雄）

飛鳥山あすも來て見ん櫻花
けふの盛のあく世なければ　（游清）

△莢豆△小松△すみれ△雪鈴に蒲公英△柘榴△あやめ△櫻草



料理食品文盲手引（三）

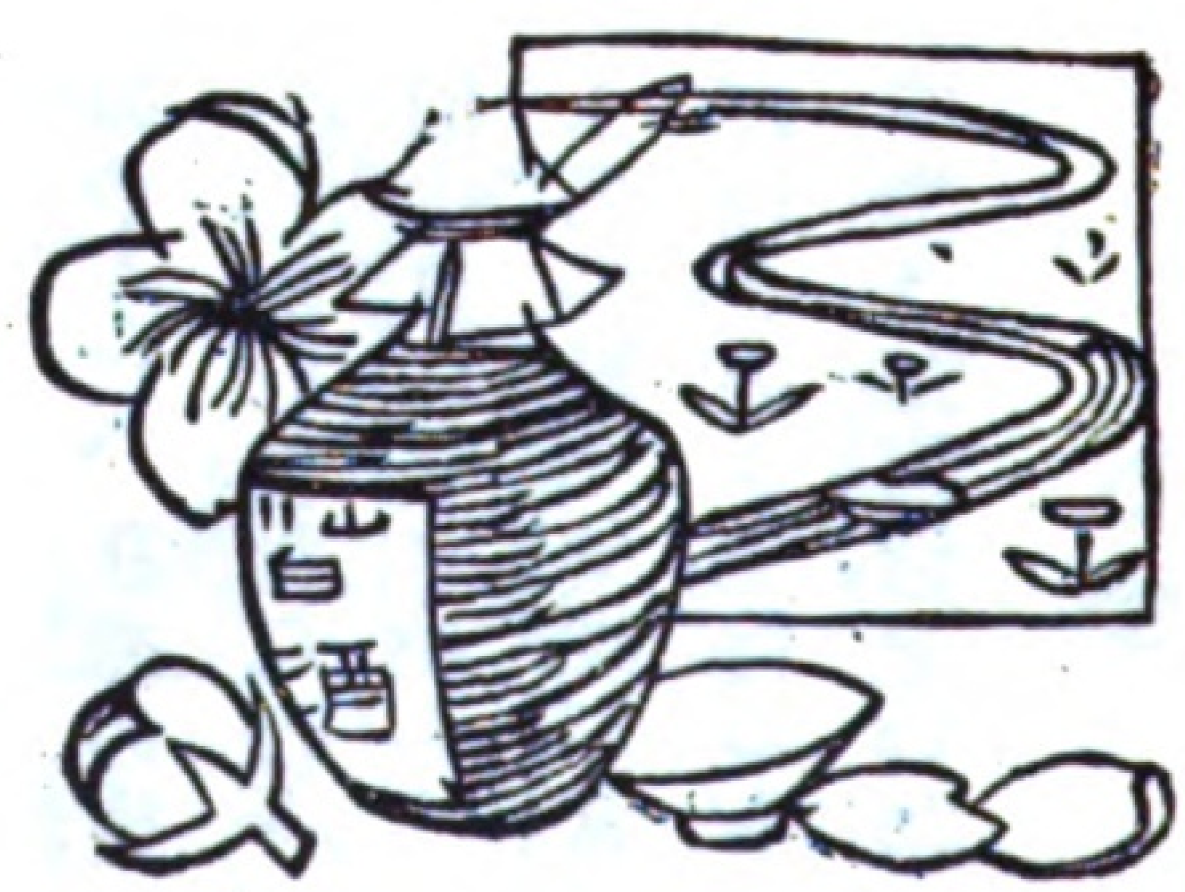
小泉迂外

△白酒

これは支那からまゐつた風習でございませうか、極く舊時は、我國でも、雛祭乃ち桃のお節句には、桃花酒と申して、桃の花を浸した酒を儀式として用ゐたさうでございます。

しかしなんぼ儀式とは申せ、御若い婦人方を主とした祭事の飲料としては、ちと此桃花酒がふさはしくないところから、いつの頃からでございますか此が廢れて現今のやうに御馴染の白酒を用ゐるやうに變遷りました。

一體江戸時代には此白酒を單に御節句ばかりに限らず、春の飲料としてひろく賞翫いたしたもので、春先きから花時へかけますと、荷桶に白酒を收容た白酒賣の行商が市中を美しい呼聲で徘徊して鬻いだものでございました。



此風俗は元祿以降でございませうか。古い草紙や錦繪などで拜見いたすと中々雅致がございます。こんなところから、歌舞伎の淨瑠璃狂言などには、柿色の袖無し羽織で眞紅の紐といふ服裝の女白酒賣が、ちよい〳〵現はれて、そも〳〵富士の白酒は……などとしきりに白酒の効能を振廻はして居ります。

又昔は普通の桝酒屋ではあまり此白酒を賣らず、主に豊島屋と四方の二軒で賣りましたから、其繁昌は豫想以上で『江戸名所圖會』には、「例年二月末鎌倉町豊島屋の酒店に於て、雛祭の白酒を商ふ、之を求めんとて遠近の輩黎明より店前に市をなして賑へり」とあつて其光景が寫されて居り、當日は戸口に酒醤油相休申候と記した大札を建て入口へ柵を造り、客は人浪を

打つて押寄せたさうでございます。

序でに申上げて置きますが、此白酒は極く腐敗れ易いもので、現今ではよく壜詰にして贈答いたされますが、此壜詰には多く麁惡い品が混ぜてあるさうで、又たとへ上等の白酒でも壜へ詰換へると酸味が出るさうでございます。

△榮螺

これは江の島で御馴染の壺燒、金波銀波を心ゆく程眺めながら箸を動かした趣味は又格別で、誰方もア、お滋味かつたと御思ひ出しになるでせうが、此お忘れにならぬ榮螺が、どうして御節句につきものとして供へられる譯は一寸ごぞんじありますまい。



此れは昔支那で魏の文帝が三月桃の節句に曲水の宴を催し、羽觴といふ盃に酒を注いで水に浮べて遊びました故事があります。此羽觴といふのは螺と稱へまして、頭の方は鳥に似て、腹のところが脹れて鸚鵡の形に似てゐる貝の貝殼で、腹のところを碎いて盃に作ると、覆らずに丁度工合よく水に浮ぶので、支那では羽觴又は鸚鵡の盃なぞと稱へまして珍重いたされます。

日本ではあやにく、此貝がございませんので、

曲水の詩や盃に遲れたる　子規

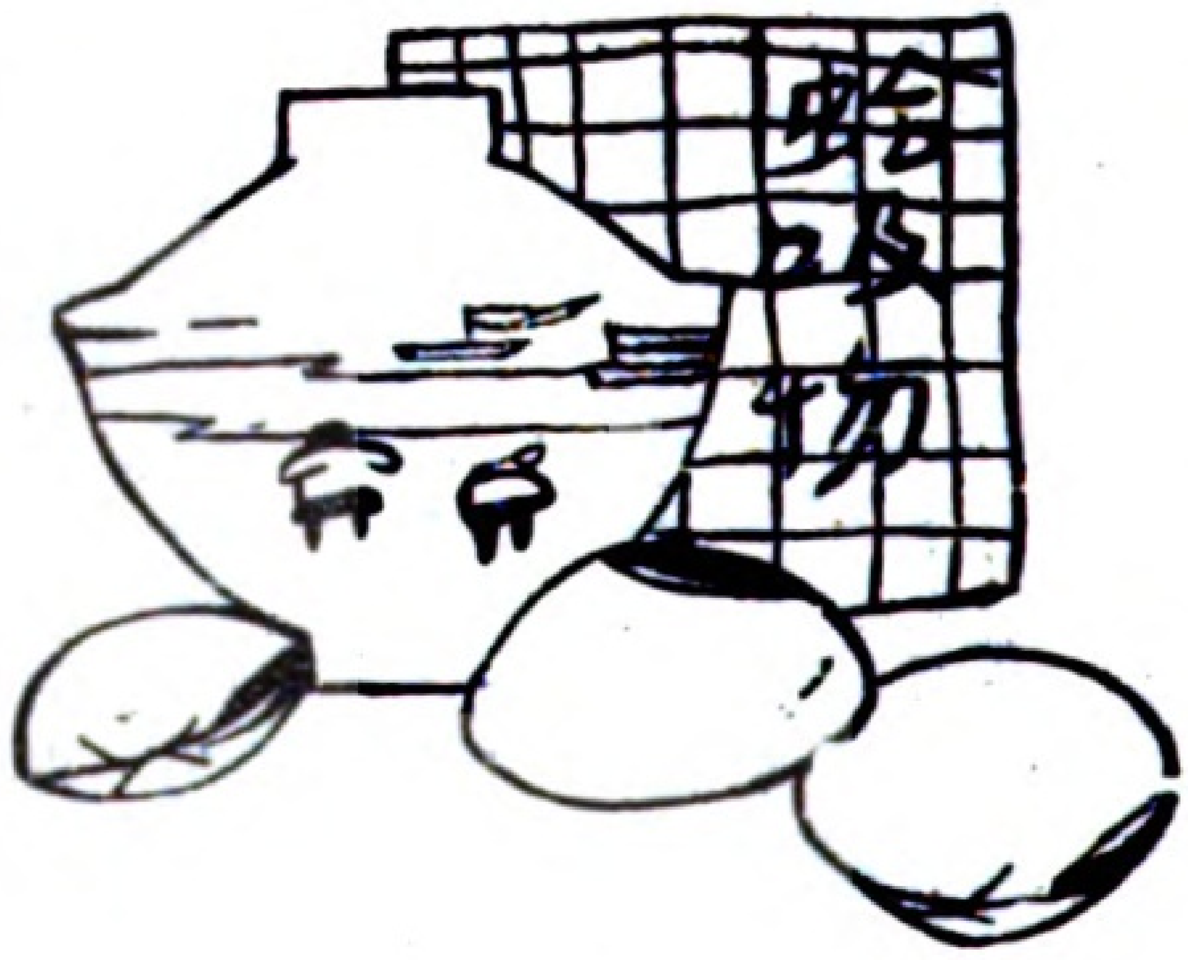
のやうに、在來の塗盃を流したと申します。

しかし後世になりまして、羽觴ならずともそれに類似の貝はなきかと、或る好事家が詮索の結果、螺といふ名の點で榮螺が當選いたしまして、浮べずとも飾るだけといふ條件のもとに、勿體なくも緋毛氈の隅を汚すやうな出世をいたしましたのです。

△蛤

蛤鍋と申しますと、大胡座で火鉢を圍みながら熱燗の湯氣を吹く處を連想いたしまして、大そう下等な食

品でございますが、蛤の吸物と申しますと、御婚禮の膳部にもつくられて、高貴の方々にも侑られます。



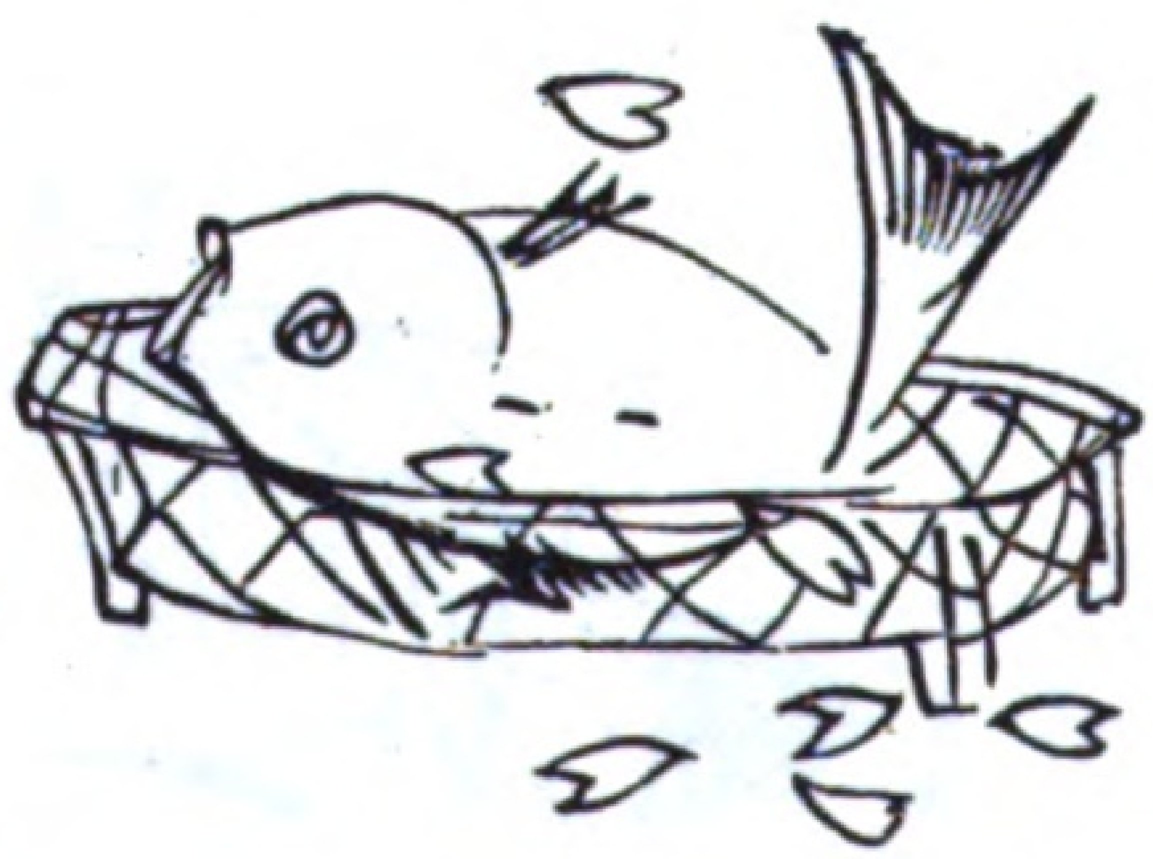
さうかと申しますと、蛤は蟲の毒など丶昔からの習慣で、家庭によつては婦女子に喰くのを禁じてある向きもございます。鮓種などにも此貝を卑しいものと排けて、手前共では蛤は漬けませんなぞと斷る高等がゝゝり屋の鮓屋もございます。

蛤は元來不消化物で、衞生上から申したら御勸めはできない食品ですが、古來から種々に料理されて其庖丁によつて極端から極端に赴くのは此貝の特色で、桑名の燒蛤は古來から有名で、東海道を上下する旅人は舌皷を鳴らして歡迎したもので、蛤好きの方は、生燒の生まく\としたのを却て賞翫するやうです。

雛祭に之れを飾りますのは深い意味でなく、御婚禮の調度に擬して、銚子盃等と同じく供へるのでございます。

△櫻　鯛

鯛は魚の王とも申しまして、四季に關らず味の美しいもので、さまぐ\に料理いたして滋味く喰けます。



此魚は寒いときは海中深くに棲息いたして居りますが、追々暖くなるに隨つて淺い處に移つてまゐり、波の靜かな暗礁の多い處を好んで集ります。

とり分け節分から八十日乃至百日頃は產卵期でございますから肉がついて、脂肪も增し、色つやも紅色を帶びて銀の斑が著しく光つてまゐります。之の時分に漁りますのを俗に櫻鯛と申します。

近頃では人口の增加につれまして需用者が多くなりましたので、江戸前と申して房州や相州近海で漁れま

す位ゐでは中々足りませんので、氷を利用いたして、北は奥州から南は馬關、朝鮮邊の鯛がどし〳〵東京に輸送いたされます。しかし是れが爲に却て鯛の眞價を失して、難有味が薄らいでまゐりましたが昔は大そう此櫻鯛を賞翫いたしまして、

ゆく春のさかひの浦のさくら鯛　　爲家
あかぬかたみにけふや引らん

といふ古歌もございますし、

膓を牡丹と申せさくら鯛　　几董

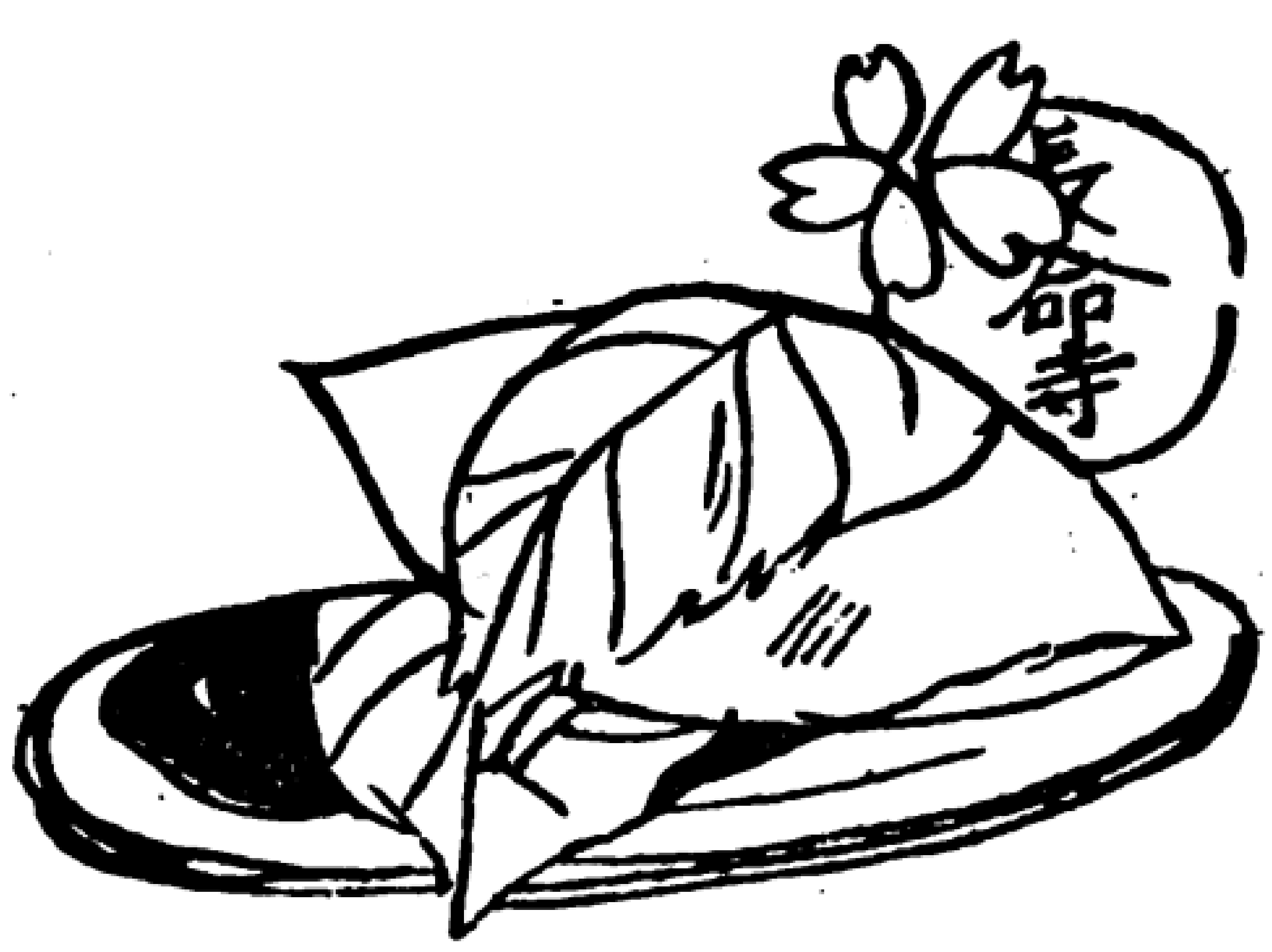
などといふ古人の句もございます。

△さくら餅

富士筑波中を流るゝ隅田川を渡て、向島での最の古い名物は長命寺の櫻餅で、昔も今も味の變らないのは此家にばかり江戸の俤をとゞめて、なつかしくもあり又悲しくもあります。

そも〳〵此の櫻餅は今を距る百五十年程前に、同寺の門番であつた山本新六といふ男が、花時を當て込みまして、慰みがてらに製りだしました處、當時の好事家の評判に上りまして、遂に本業といたすやうになり追々繁昌致して今日に及んだのだといふ話です。

それで此家の餅が、市中で有名な菓子屋で製るのよりも滋味しいといふのは、一つは皮の薄い爲もありませうが、一個について櫻の葉を二枚宛費して、すつかり餅を包んでしまふ爲で、時間が經つても



軟かく喰ける特色があるのです。

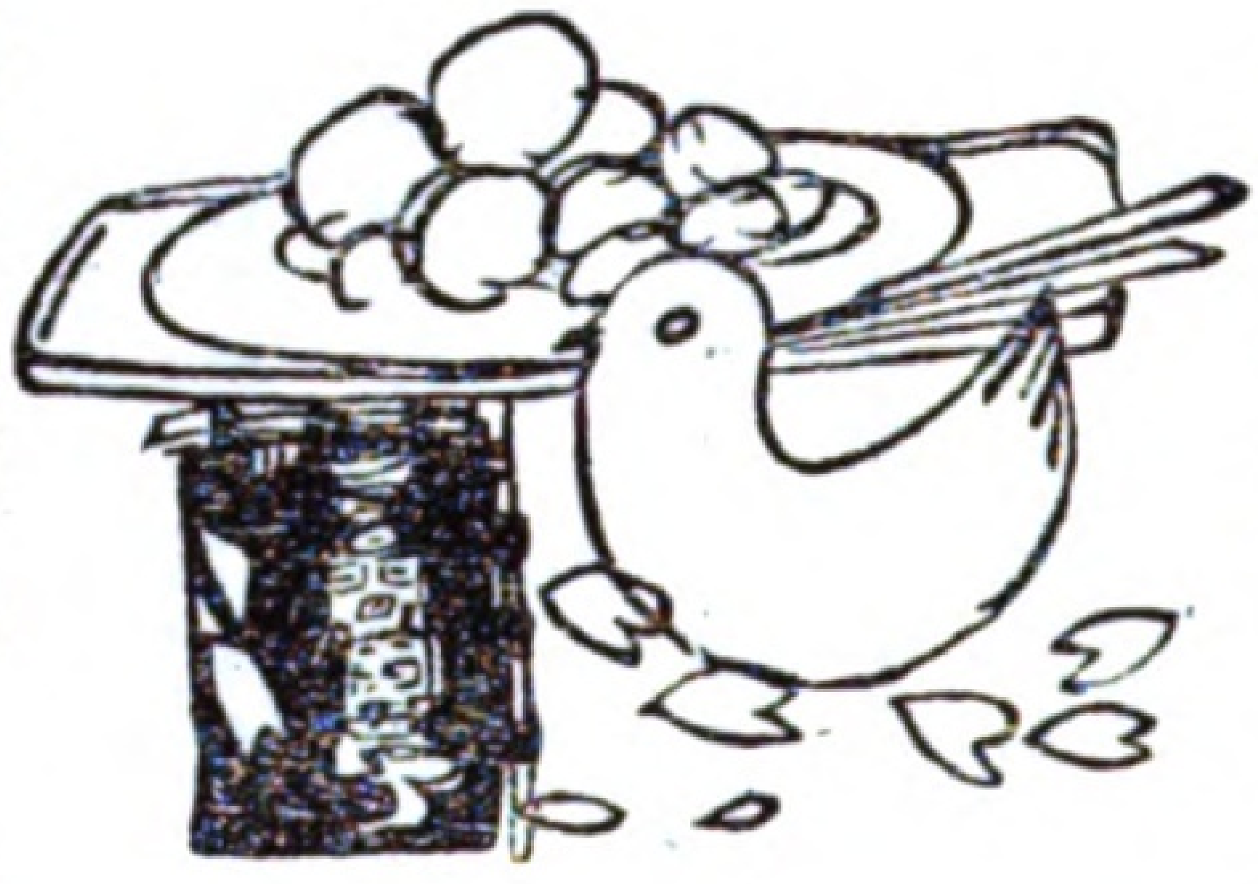
花の頃には分けて繁昌で、毎歳、鹽漬にいたした葉を費す數が、十五萬枚入の六尺桶で三桶乃至四桶ほどださうで、一日の賣高は平均二萬個と申しますと、餅といつても中々馬鹿に能きぬ商賈でございます。

萬斛の花吹雪を浴びながら悠々茗を啜るといふ嵐山の風流は得られますまいが、

植半の皷聞ゆるさくら哉　子規

でも前景にして、そゞろありきの草臥足を此家の床几に投出すのも又一興でございませう。

△言問團子



さくら餅を書きました序でに、もう一つ向島名物言問團子を紹介致しませう。

此家は彼の業平朝臣が、

名にしおはゞいざ言問はん都鳥　我おもふ人はありやなしやと

の古歌から其商號を採りましたので、此家の先代は堤下の植木屋で、傍らに言問ケ岡に葭簀張の茶店を出して附焼團子を賣つたのが、そもそもの濫觴だそうです。

何さま雅人墨客の多く杖を曳く土地なのと、一つは先代の外山氏が俳諧でも唸らうといふ奇人でしたので見る〱中に流行して、今日では却て櫻餅よりも名高くなつてまゐりました。

花の頃は一日三石の餅を搗くさうで其忙がしさも想像できます。

△江戸風の料理

ちか頃は生粋の江戸料理が追々滅び、所謂料理屋式の鵺的料理が漸々勢力をつくつて、自然的につくるべき家庭の庖丁にも此趣味が大分入込んでまゐりましたやうです。

一體江戸料理の本旨は、物の自然の姿を崩さず、體裁をつくらず、それで味を美しくするので、食物にいろ〱細工を加へて、例へば慈姑を花形に切つたり、うで鷄卵をつぶして彩色つて、林檎に見せる爲めに葉を付る等は避けるのでございます。

魚ならばなるべく手を掛けずに自然の美味いところを喰くやうにするので、鯛ならば鹽燒か、刺身に限つたものです。之れは鯛の古いのはとても鹽燒にはなり

ませんので、新らしいのをよろこぶには、どうしても之れによらなければ自然の味が解りません。

それから汁物ですが、京阪では重に昆布だしを使つて、濃つてりといたしますが、江戸は重に鰹節のだしであつさりとしたのをよろこびます。さうして此の汁の呼吸が最も料理人のむづかしい處で、昔の通人が汁加減一つで、割烹店の眞價を卜知る事が能きるとさへ申しました。

古川柳に

平清の驕りの末はうしほなり

といふ句があります。之れは贅澤に贅澤を仕盡した美食家の、とゞの極致がうしほに舌皷をうつといふのを咏んだので、うしほは實に汁加減一つで美味くもあり不味くもある料理であるからでございます。

平清は先年廢業致しましたが、江戸時代には第一の割烹店に推された家で、古川柳の寸鐵的の妙は僅々十七字の中に横溢されて居ります。

△おぼろの鮓

婦人方には御馴染のおぼろのお鮓、之れは現今では何處の鮓屋でも名ある店では漬けて出しますと、昔はあまりつくりませんでした。



これは文政の末頃に今の與兵衛鮓の先代が、まだ屋臺店を出して居りました當時此鮓を發明いたしたので、之れを製ります動機については一場の小話がございます。

或る時主人が豫て御贔負をうけてゐる牧野家の御留守居と四方山の話を致して居ります中に、某の謂はれるには、既にいろ〳〵の鮓を喰ひ盡して、早や美味といふものに厭きてしまつたから、此次ぎ迄に何か一つ變つた珍らしい鮓を握つて見てくれとの詞でした。

ところが江戸の御留守居でもいたさうといふ位の武

士ですから大の茶人でございますので與兵衛も、よろしうございと受合はしたもの丶大に苦みまして、一晩寐ずに其趣向を考へました末、遂に小海老を煮て摺り更に之れを煮つてボロ〳〵に製り、幾度もやり直してや丶意に叶つたので乃ちおぼろの鮓と稱へて彼の武士の許に屆けました。

彼の武士は早速に試みました處が、得も云れぬ滋味さなのと、其妙案にいたく敬服して、

名どころの花よりかけて朧かな

の句を寄せて賞賛されましたので、與兵衛は其苦心が顯ばれたのを悦んで、直ちに公に握つて出しました處、之れが江戸中の評判となつて、遂に名物の鮓と成るやうになつたのです。

當時は現今のやうに芝海老の需用者が尠く、魚河岸などでも隨分安價く捨てるやうに賣つたものですから烱眼の與兵衛は此廢物同様の小海老を利用して奇利を博したのでございます。

△献立の趣味

主婦の趣味といふものは日常の献立にもあらはれるもので、日常目馴れて居る有合せの惣菜でも、其の取合の如何によつては、料理屋で喰くより却て愉快に箸をとる事が能きます。

主婦が急場の來客にうろたへて、それ魚屋、それ仕出屋と下婢を諸方へ走らせるのは、客の方でも心苦い場合があります。それよりも鹽引の鮭に座禪豆か、さもなくば時の野菜でも一種添へて出したならば、却て氣が利いて、あはてずに濟みませう。

松平不昧公の懷石帳を拜見いたしますと、はじめにかういふやうな献立書がございます。

豆腐一色△八盃どうふ、海苔(朝飯)△燒豆腐、摺生姜(晝飯)△湯豆腐、葱味噌(夜食)

茶人の用意の行屆いて居るのは、同じ豆腐でも斯様に區別されてあります。

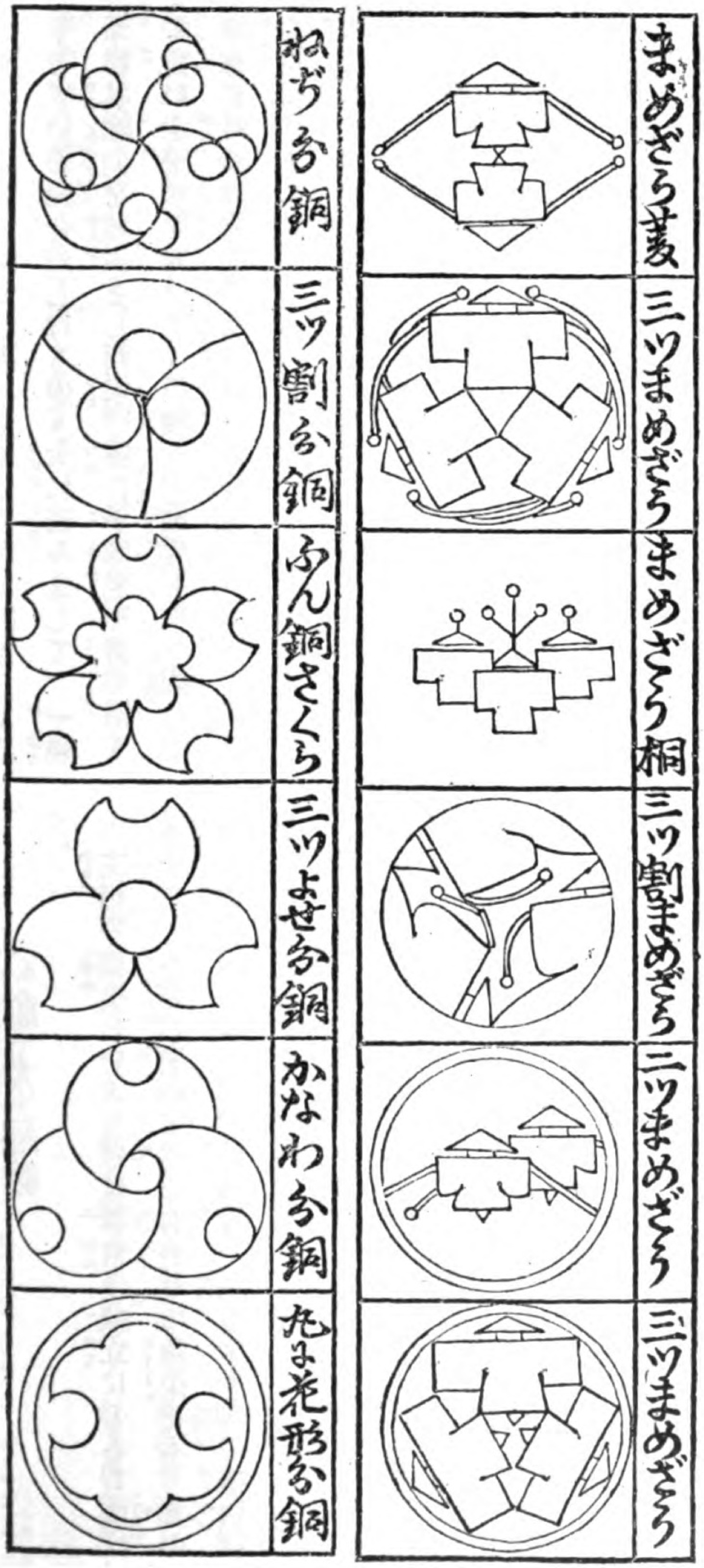
又、汁其他の注意には、

納豆汁は朝飯、菜汁は晝飯、つむこ汁は夜飯。鹽ものは年暮より春。鱠は冬より春。二三月は味噌のさしみ。四五月はいり酒。六七月は山葵醬油。煮ものは冬の內。すましは春夏秋はじめ。これは十人並の人間の腹中なり。

と書かれてあります。

新東京の趣味と、昔の茶人趣味とは一概に申す事は能きますまいが、之れをいろ〳〵に調和し、應用したならば日常の酒飯も又新らたに快く召上れるでせう。

壷燒や床几の上の花埃　禾水



懸賞十二支合せ（賞金壹百圓）

一 繪合せの標準 これは甲圖の十二支と、乙圖の人物とが丁度合ふ様に割當てありますから、これをとり合はせるのであります。

一 懸賞の方法 は十二支と人物とを正確に組み合はされた方を正解者となし、抽籤法により規定の人員五十八名に對し下記の賞品を贈ります。但し正解者規定の人數に滿たざる時は次點者より順次繰上げて數に滿たします。

一 解答〆切 は三月二十五日限であります。

一 當選發表 は四月十五日發行の增刊號『悲劇十番』の誌上にて發表致します。

一 解答用紙 は葉書の事、但し左の通りの書き方順序に願ます。即ち列記せる十二支番號1、2、3等の下の×の所へ人物の側にある印○●□等を記入し合せて其人物の名前を記入する事

一 賞品 は金壹百圓を提供し下記品名を以て五十八名に分配を致します。

賞品

一等　三越選定　友禪縮緬一反（價金二十圓）　一名
二等　三越選定　糸織一反（價金十圓）　二名
三等　三越選定　新大島お召（價金五圓）　五名
四等　圖書切符（金壹圓）　二十名
五等　書籍（金五十錢）　三十名

合計金百圓

但し一等以下三等までは各位の希望に依り現金を贈呈す

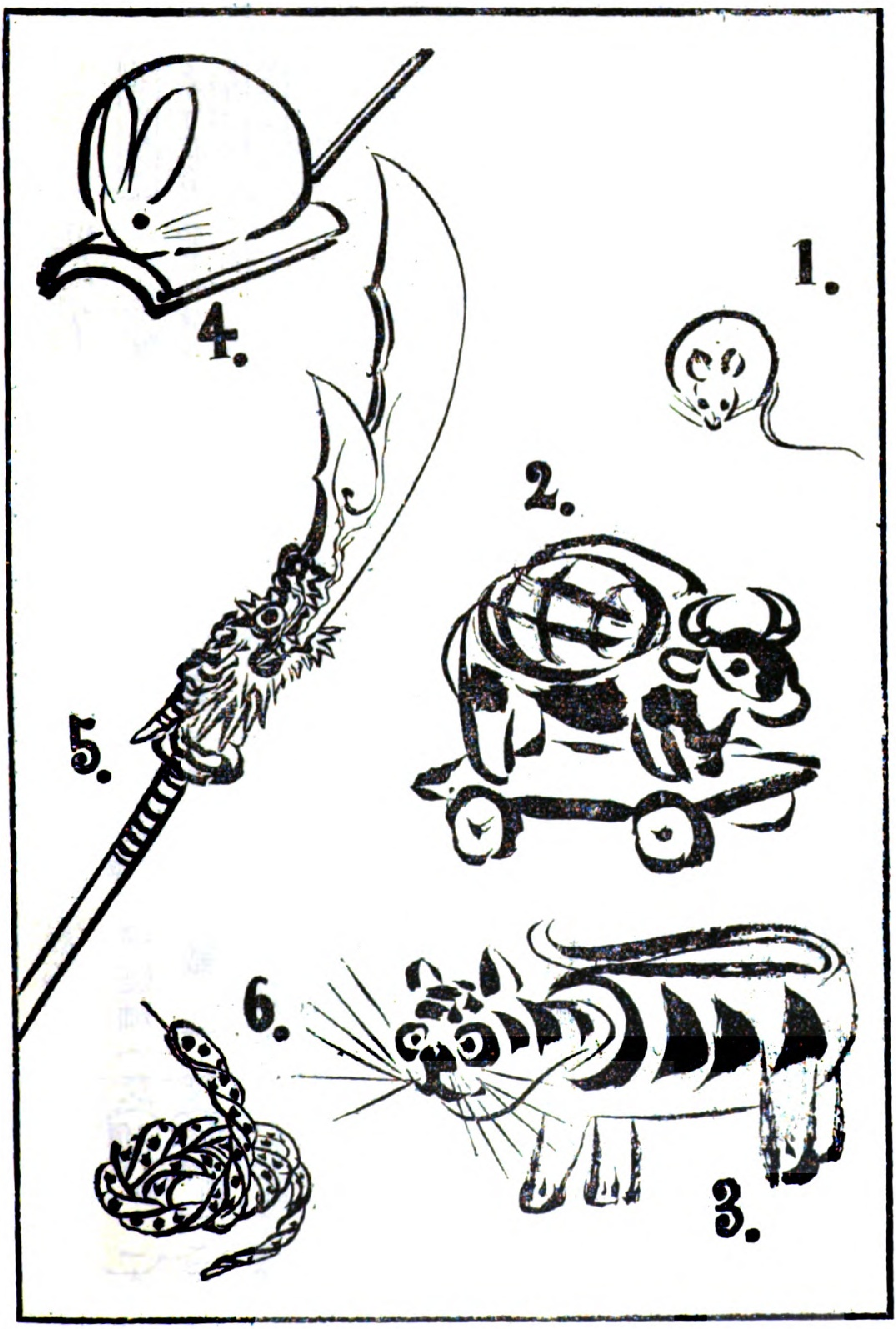
用紙葉書

(1) ×　(2) ×　(3) ×　(4) ×　(5) ×　(6) ×
(7) ×　(8) ×　(9) ×　(10) ×　(11) ×　(12) ×

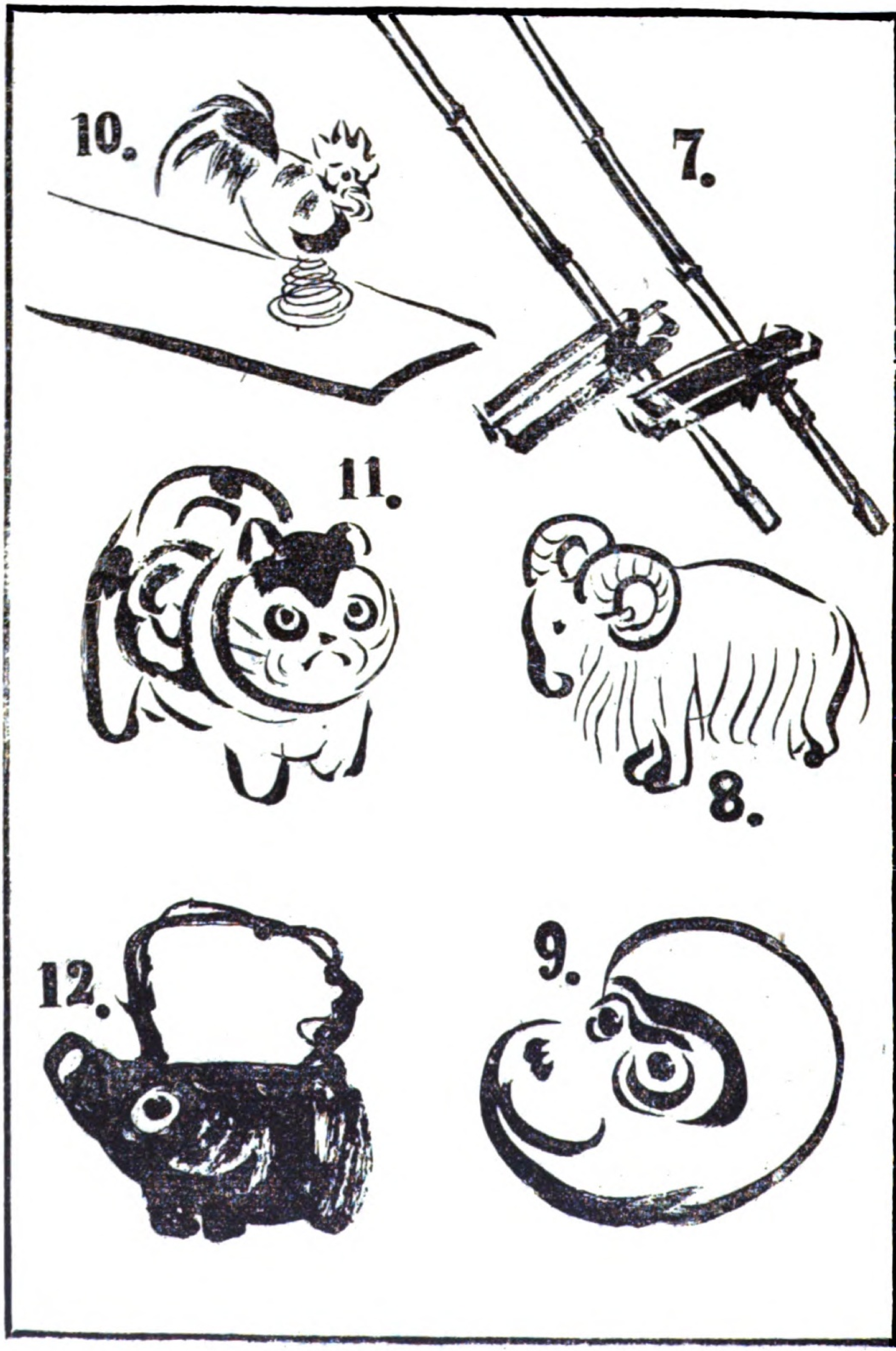
住所　氏名

◎解答葉書名宛は博文館女學世界懸賞十二支合せ係と記入すべき事

懸賞十二支合せ　(甲の一)



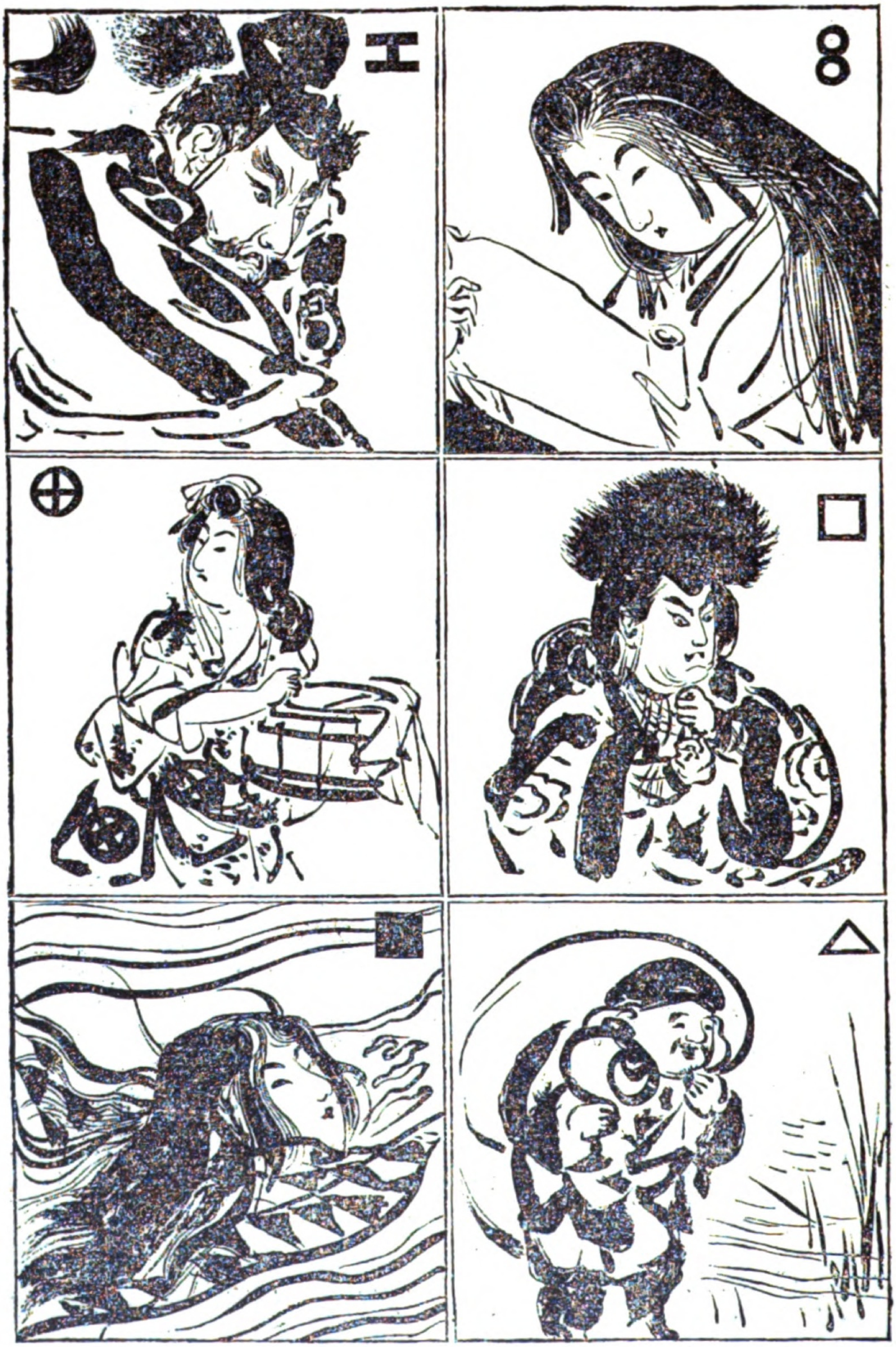
懸賞十二支合せ（甲の二）



懸賞十二支合せ　(乙の一)



懸賞十二支合せ（乙の二）





宴會のいろ〳〵

坪谷水哉

○親族や親しき友達と集まり、御馳走したり、またはされたりして、供に樂しむと云ふことは、人間最も愉快なる事の一である。が、其の御馳走するにも客になるにも、餘程注意せぬと、折角偕に樂しむべき愉快なる催ほしが、却つて意外に不愉快なる結果となる事も多い。で、茲には余が自ら經驗したる事や、他人から親しく聞た事で、宴會に就ての失敗談を並べて見る。和洋料理や支那料理、さては餘興にまで亙る故、假令御參考にはならずとも、御慰さみとならば結構だ。

○洋食の献立目錄は、普通に佛蘭西文で書き、美麗に印刷して客ごとに一枚づゝ食卓の上に豫じめ飾つてあるのが禮式で、正式の宴會には日本でも大體其の通りにやつて居るが、其實は洋食の名に分らぬ物が多い上に、佛蘭西文の讀める客は、何れの宴會でも極めて稀で、折角献立目錄を飾つて置ても、猫に小判で、何が何だか分らぬ者が多い。そこで近來は漢字で翻譯したる目錄を飾るのが大分方々で見受けらるゝが、其の中で、御名前を申し兼ねるが或る御婚禮の披露會、場所は華族會館に、紳士淑女綺羅星の如くに並んだ席で、食卓の献立目錄は、例に依て漢字で印刷したが、アスパラガスにソースの懸け汁を譯して、洋獨活羮汁と書かれた。男女雙棲を天長地久と祝ふ婚禮の席に、獨活の二字を用ゐたので、心ある者は眉を顰めたが、緣起を擔ぐ譯では無れど、不幸にも其の新夫婦は、琴瑟和合を缺いて、後に破鏡の嘆を見た。

○前年内務省で、地方の去る中位の官吏達を招集して會議を開き、事了りて一夕大臣から



帝國ホテルで饗應あり、一同食卓に並んで、ナイフとフオークの無事に働いたのは宜つたが、最後に指洗ひの水が出て、次に果物のバナ、が來ると、上席の一人が、バナ、を皿に受けたが、まだ其の喰べ方を御存知なく、皮の附たまゝ細かに輪切りにして、盡く指洗ひの水中に入れ、一と片れづゝ楊枝の先に刺し、皮ぐるみ口に入れ、目を白黑して味ふと、其の次席から次席へと、何でも上席の爲すが儘に眞似て居た一同の客が、誰も彼も皮むかぬバナ、を、楊枝の先でパクリ〱。

○露西亞料理は一と風異つて、食卓の上に先づ數多の小菜が陳列せられ、客は一と通り其れで酒を飮でから、始めて本料理が順次に運び出さるゝが例だ。が、東京の主なる新聞記者の面々が、昨年南滿洲鐵道會社の招待で、滿洲へ觀光に出かけ、序だからとてハルピンまで行くと、總領事の川上俊彦君が、晩餐會に招待せられた。例に依て食卓の上には、黑龍江の鮫の子や、同じ河の鮭の子や、鮭の燻肉、偖は黑龍灣の鰯の罐詰など、珍らしい物が夥多しいので、一同は麵包を摘りながらシタ、カ喰べた後、始めて本料理が出て來たが、半途から滿腹と爲り、折角の馳走に手も着けぬを、接待巧手の川上夫人が、此れは何所の名物、其れは何所の名產、マア些とでも味つて下さい、と勸められても手は出せず、互に顏見合せて肩で呼吸。

○支那料理の食卓では、食事の半途に、熱く蒸した白木綿片を、固く搾つて銘々に配ると、其の手を燒き相な熱いので、面を拭ふのが甚だ快よい。今は故人の新潟縣代議士後藤某といふ老人、其れとは御存知無く、東京の支那料理店偕樂園で、例の白き布片が出ると、湯氣のポッポッと立つのを見て矢つ張り料理の一種と思ひ、直ぐに取り上げて口に啣へ、ギ



ヨッとして顔を蹙め、左右を見廻して、『若い時は自慢の齒だが、年をとつてはモウだめだ。殘念ながら斯う云ふ料理はトテモ齒に合はぬ。』

○或る大華族の夫人を會長に戴く婦人の協會で、集會を會長の御殿に催ほされしとき、餘興にとて某といふ落語家を招かれると、當人一世の面目として、思案を練つて話したのが『嚊ァ天下』といふ下等社會の女權擴張の滑稽談、大得意で滿場の喝采を博すかと思へば、聽衆何れも面見合せて苦笑するのみ。話が濟むと會長夫人が『御苦勞で御座りました。シカシ斯樣な御話は今後斯樣な席では仕なへ方が宜しう御座いませう』との挨拶、落語家先生赤くなり、また青くなつて退出したが、實際此の餘興は受けたのか受けなかつたのか、シカと分らない。

○東京星ヶ岡茶寮で、故川上眉山氏の追善會を催ほしたとき、幹事は何れも硯友社の通客連、趣向に多くの意匠を費やしたが、其所には三味線を一切禁じてあるとは、流石の幹事連も御氣附れぬが千慮の一失。此れも出版業界の通客、堀野文祿堂の主人が、自慢の義太夫を聞かせんとて、三味線曳には第一流の專門家を伴ひ來り、山王の臺の頂上まで、運び込だる三味線が『オット其れは此所では御氣の毒樣ながら』と斷わられ、幹事が種々辯解したが、平生貴顯紳士が風雅を樂しむ茶寮の事とて、何としても規約を破ることが出來ず、トウ〱一同が三味線の代りに不平を鳴らすのみ。

○次は在東京雜誌記者の宴會を日本倶樂部に催ほしたとき、餘興にとて女義太夫の綾之助を招いで、定めの時刻に一同が集まると、此の倶樂部では一切婦人を入れぬので、假令餘興でも女義太夫は斷わるとの事、會衆は聞



く積り、綾之助は語る積りで、倶樂部の內と外とで立ての交渉、去りとて倶樂部の規約にも背き兼ね、急に隣家のシンガーミシンの裁縫學校へ囑み、三階の教室を借りて、先づは此の所伽羅仙臺萩、御殿場、政岡忠義の段と、漸やく口上の柝子が鳴る。

○國際新聞協會と云へば、在東京の內外新聞雜誌記者の通人の集まりで、其の新年宴會を新橋の花月に開いたとき、席上には新橋、赤阪の藝妓の尤物が侍べつたが、其れだけでは尙ほ物足りぬとて、來賓として當時帝國劇場附女優中の人氣者、森律子と初瀨浪子の二孃を招待し、會員の一人望月小太郎氏が、特に自分の馬車を迎ひに遣はした。二孃は其夜劇場にての役目を了してから來て、設けの席に着て膳に對つたが、望月君や東京朝日の杉村楚人冠君が、盛んに一同へ紹介したので、二孃もまた愛嬌商賣とて、自席を離れて他の客と談話も交へるので、內外人も、非常の滿足で、其の夜は大成功と思ひきや、此事忽ち帝劇女優間の一問題と爲り、二孃は女優規約を破り、客の座敷で藝妓に交つて御酌したとて、樂屋の朋輩から彈劾の幕を演じたとは、偖も面倒なる世の中かな。

○去年の暮に、秀英舍の新築落成の祝宴が、築地の精養軒で催されたとき、四百人餘りの來賓の中から、同社創業の社長故佐久間貞一氏の友人とあつて、禁酒會々長安藤太郎氏が起て、秀英舍の萬歲を祝すべくシャムパンの盃を擧げた。禁酒會の會長が祝盃と云ふのだから、之に和した主客一同、一と口飮んで祝すのに、發聲者は少しも口に附けなんだ。

○先年まで何れの集會にも、多く見受けた赤い洋服の岩谷松平氏が、自慢の大聲で、萬歲の音頭取りを得意でやつた頃、房總鐵道の開通式に臨んで、ドウ間違へたか、總武鐵道萬



歳と叫んで、大笑ひと爲たこともあるが、其れに似たのは華族會館で、某生命保險會社の專務取締役が、陸軍大將伯爵の某家から夫人を迎へられた結婚披露會に、來賓中の某元帥が、兩家の爲に發聲して萬歳を祝すのに、平生同僚の軍人が、來賓中に多いので、花婿家の性を呼ぶのを忘れて花嫁の御里方ばかりを呼び、某伯爵家萬歳と叫ばれたので、婿君の友人はアッケに取られて默つて居た。

○先年仙臺附近で陸軍特別大演習の終りに、例に依て　大元帥陛下御親臨の大宴會が催され地方の有力者は多く御招待を受けた時、其參列には、必ず絹高帽で無ればならぬといふので、仙臺では俄仕入の絹高帽が夥多しく賣れた。愈よ當日、御宴會場へ往つて見ると、不思議にも額に茶色の鉢卷の樣な色の着た人が多い。妙だと思つて注意すると、是れは帽子裏に附た革が、粗物な爲に色が落ち、奔走して汗かいた人々の額には、何れも此の通りに色が着くのと知れた。

○例年の天長節には、外務大臣官邸で、大臣の大夜會がある、上はやんごと無き皇族方から、各省大臣、各國外交官、文武の高官、兩院議員、民間の紳士まで、三四千の來賓中夫人同伴で參列するのが多く、其の立派は言ふ可らず。其中へ、地方の代議士の一夫人が良人に伴はれて出て見ると、何方向ても知らぬ者ばかり良人に離れては忽ち群集の中で迷ひ兒となり相な爲、緊乎と良人の手に縋り、彼方へウロウロ、此方へウロウロ、彷徨ひ廻る其の間に、長く曳く、洋裝貴婦人の裾を踏むやら、舞踊室の入口で、稠人の背後から伸び上つて覗き込み、往來の妨げと爲て押し披けらるゝやら、最後に愈よ食卓開始となつて、空な皿と小刀を抱へて立往生の果てが、セメて菓物でも採らんと、迂つかり屈んで立ち上る途端に、他人の持た皿に頭を打て、其の皿がひつくり覆る機會に、無慘や其中に盛た肴やかけ液を、白襟紋附の上から冠つた。



春霞立を見捨てゝ行く雁は
花なき里にすみやならへる
伊勢

歌の中の寶玉

歸雁漂客

×

花ざかり四方の山邊にあくがれて、春は心の身に添はぬかな(千載集)　藤原公衡

霞か雲か將た雪か、見わたすかぎり四方の山邊は一帯の櫻花、加之もそよ〳〵と暖かき風にそゝのかされては、いかなる引込思案の者もツイ心が浮立ちて、何事も手に着きがたからん。さりながら茲が所謂る思案の爲處なり。いたづらに心を花に浮かされては、唯だに無益の時間を費すばかりならず、端なく懶惰の性を養ひ得て、一生の不覺を招ぐことゝなるべし。更に注意すべきは、驕奢の花、誇榮の花にそゝのかさるゝことなり。もし此花に心を奪はれては、忽ち困苦の實を結びて、生涯酸き思ひをなすべし。

×

うすく濃く野邊のみどりの若草の、跡まで見ゆる雪のむらぎえ(新古今集)　宮内卿

おなじ野邊の若草の中にも、おのづから濃きもあれば、淡きもあり。濃きは速かに雪の消え去りし處か、淡きは久しく殘りし處ならん。今はその雪すでに跡形なけれど、なほ若草の色にまで其れと知らるゝは、人の一生にも似たりけり。若き時に勉強すれば、生涯その幸福を享くるなれど、若し遊惰に年月を過せば、何時までもその報いを受けて、光榮困苦の差別は、天地霄壤も啻ならぬほどに至るべし。

×

我が門の板井の清水里遠み、人し汲まねば水草生ひにけり（古今集）　讀人不知

あながち學問藝術のみに限らず、世の中のこと何にてもあれ、一旦中途にて廢むれば、直ちに用に立ち難くなること、宛ら人の汲まぬ井戸に似たり。されば學校は一日も缺席すべからず、職業は寸時も怠るべからず。もし一日一刻にても懶くることありては、忽ち其れが病みつきとなりて、終には敗者の群に入りなん。孟子曰く、山徑の蹊間、介然として之を用ひて成る、しばらくも用ひざれば則ち茅これを塞ぐ。

×

思ひ草葉末に結ぶ白露の、たま〳〵來ては手にもとまらず（金葉集）　源俊頼

我れと一度思ひたることは、唯だ一心になれ。全力を集注すればこそ、如何なる成功をも爲し、金槌を振つて絶えず打てばこそ、冷寒鐵の如きものも終には火花を放つて鍛はるゝなれ。然るを時打思ひ出せるが如く、ポツリ〳〵と爲すやうにては、たとひ千百年を經とも、人生いかなる事か成し遂ぐべき。

×

大方の人は言のみ吉野川、瀧の白玉緒を貫かずして（漫吟集）　契仲阿闍梨

お世辭七分お追從三分が世間普通の人の言葉なり。されば假令深切めかしく云ひて呉れたりとも、素より實行ひて呉るゝ眞心なければ、此方も最初よりアテにせぬがよし。それを世間馴れぬ正直なる人は、直ちに眞に受けて、不圖依賴心を起すが最後、飛んでもなき淵瀨に陷りて、容易くは浮びがたき怕しき目に遭ふなり。あはれ吉野川の名は好けれど、瀧と落ち來る白玉を見るに、少しも緒を貫きたるものなし。返す〳〵も怕しきは、この白玉に似たる無責任者の言葉なる哉。

×

世を憂しと難波のえやは恨むべき、わざもあしかる身を知らずして（春葉集）　荷田東滿

世を思ひ、人を恨むるは、眼のみ徒らに高くして、

手腕の一向に働かぬ人の常なり。もしその手腕だに能く働かば、この世は誠に面白かるべし。されば先づ此世を悲觀する以前に、專心に己が修養を積み、十分に己が手腕を磨かば憂しと思ひし世の中も、やがて樂しきものとなるべし。己が身のほどを知らずして、漫りに人を恨み、世を呪ふは、濟度しがたき愚かものゝ極みなり。



×

末つひに海に入るべき山水も、しばし木の葉の下くゞるなり（閑田詠草）

伴　蒿蹊

人は辛抱が肝腎なり。韓信が股下を潜り、太閤が草履を掴みしも、時世到らねば已むことなし。それを世間凡々の輩は、些しのことにも辛抱が出來ず、直ぐ腹を立てゝ、侮辱とやらん、屈辱とやらん、大仰に罵りさ

わぐなれど、かゝる輩に限りて大事業を爲したることとなし。河豚はよく怒れども膓少く、太鼓はいかに喚けども其内空し。人を怕れぬ鬪雀、車を避けぬ蟷螂、共に小者の典型とこそ知れ。

×

時雨の雨間なくし降れば槇の葉も、爭ひかねて色づきにけり（新古今集）　柿本人麿

軒の雨滴すら石を穿つ比喩あれば、何事をなすにも根氣よきが第一なり。根氣だに好ければ、何時か己が志望を達する時あるべし。彼の四季に變らぬ常磐木も時雨の雨の絶え間なく降れば、終には葉の色さへ色づく例あるなり。

×

ほとゝぎす汝が鳴く里の數多あれば、なほ疎まれぬ思ふものから（古今集）　讀人不知

時鳥よ、我れは汝が好きなれど、彼方の里にも鳴き此方の里にも鳴き、あまり鳴く處の多き故に、何となく浮氣のやうに思はれて、我れも些か疎ましく思はるるやうになりたるぞよ。是れこの歌の意なり。凡そ世間の狀態を見るに、此方に來ても愛想を振りまき、彼方へゆきても愛想を振りまく人は、たとひ怕しき敵は受けざれど、また決して眞身の味方も着くことなし。且つは他より八方美人主義よと指彈され、己れは愛想の振蒔損に了りて、結句何物をも得ぬ愚かなる目に逢はん。されば、この人はと思へる人を選びて、專心赤誠をつくす方、はるかに利益なるべし。

×

あすからは若菜摘まんとしめし野に、昨日も今日も雪は降りつゝ（新古今集）

明日は野に出でゝ若菜摘まんと思ひしに、昨日も今日も雪降りては、折角の樂しみも仇となりたり。實に世の中は寸善尺魔なれば、今日は今日の風が吹き、明日は明日の風が吹くと悟りて、何事に依らず機會を逸せぬ用心すべし。あゝ功は成りがたくして敗れやすく時は得がたくして失ひ易し。

×

己が身の己が心にかなはぬを、思はゞ物は思ひ知りなむ（詞花集）

和泉式部

我がまゝに育ちたるものは、得て何事をも我が思ふやうになさんと思へどそれは大いなる間違ひなり。己が心すら我が思ふ通りにはならざるに、いかで容易く世の中の儘になるべきぞ。されば能くこれを思ひて、萬事得手勝手のことを愼しみ、少しにても他に迷惑をかけぬやうに計るこそ可けれ。さすれば軈て情ある人と譽めらるゝに至らん。



×

世をわたるならひよ身には危ふきを、誰れか心のまゝの繼橋（雅俊家集）

權大納言雅俊

葛飾や眞間の繼橋は實にその名のあらはせる如く橋を繼ぎたるものなれば、それを渡らんとするに搖々と動きて、危きは身もすくむやうなる思ひすべし。さりながら此は素より橋なれば、渡るま

じと思へば渡らずしても濟まし得べきに、此世ばかりは、如何しても渡らねばならず。而もその危さは眞間の繼橋の及ぶべきにあらねば、能く〳〵愼みて、氣隨氣儘の蟲などは跋扈せしむべからず。

×

移ろはでしばし篠田の森を見よ、かへりもぞする葛の裏風(新古今集)　赤染衛門

一時の感情に驅られて前後の分別を失ふは、兎もすれば後悔臍を噬むの種なり。これは、和泉式部の許に戀人の來らざりしに、早くも已れに秋風立ちぬと察して恨みしをば、赤染衛門の暫時待ちて見たまへと注告したる歌なり。凡そ人の心は、後に思へば些少なる事柄にも、その場合には熱狂しやすきものなれば、如何なる時にも、一度は『しばし』と思ひ直して見るが肝心なり。されど未だ世の苦勞の足らぬ人は、この『しばし』が容易に出づるものにあらず。

×

最上川人をくだせば稻舟の、かへりて沈むものとこそ聞け(續後撰集)　寂然法師

最上川と云へばいと早き川なり。されば稻を積みたる舟は輕々と下すを得れど、人を乘せて下せば忽ち顚覆る憂ひあるなり。この稻舟を以て譬ふるに、世には往々人の惡口を言ひて、天晴れ仕濟したりとする不了間者あれど、諺にも人を呪へば穴二つとやら、因果は何時か我が身に報い來りて、知らぬ中に損害を招くこと甚だ多し。之を戒めよ、之を戒めよ、爾に出でたるものは爾に反る。

×

傾かで入る名殘をいとゞ思へとや、傾むくまゝに澄める月かな(千載集)　權中納言　長方

西の空に傾きつゝ益々澄みわたる月こそ、いとゞ名殘は惜まるゝなれ。人も無き後に至りて惜まれんと思はゞ、終りに至るまで眞心こめて努力せよ。後脚に砂を蹴り、跡は野となれ山となれ主義にては、その人の無き後に及びて、結句厄介拂ひの鹽花を播かるゝ侮辱を受くべし。

×

年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山

（新古今集）西行法師

命長ければ恥多しとは、消極主義の取るにも足らぬ言葉なり。人間の此世に生れて、如何なる業を成さんにも、又如何なる樂しみを享けんにも、命長きが第一なり。命だに長ければ、さまぐの面白き事にも逢ひ思ふことをも成就するなり西行法師も長命したればこそ、又越えんとは思はざりし小夜の中山をも越しえたれ。されば何人も常に衛生のことに心がけて、只管長壽の工夫を廻らし、人に賴まれても決して蒲柳の質をば自慢とすべからず。





△倫敦人の服裝

▲人の服裝は、美術思想の現はれで、東洋には東洋風の美術思想より來れる東洋的服裝があり、また西洋には西洋風の美術思想より來れる西洋的服裝がある。試みに一の牧場を描ける東西の繪畫を手にして見ると、東洋風のものは、其の牛其の草、將た其の空模樣など、個々別々に巧妙に出來てゐて、一々離しても立派なものと思はれるが、西洋風のものは、總體の出來の工合が巧妙で、若し其牛や草や空模樣の各部を夫れ〳〵離して見たら左程でもあるまいと見ゆるのが多いやうである。服裝に於てもこれと同じやうで、概して日本人は帽子なり服なり子クタイなり出來る丈け上等品を選び、個々別々に氣に入つたものを整へる傾向があるが、英國人は左程一品一物の選擇に凝つてはゐないが、何となく總體のスタイルが引立つて見える。

▲日本人は子供の時分から、縞柄とか、模樣などで、嗜好の觀念を養はれるが、英國人は子供の時分から色彩の配合に依つて之を養はれる故に子供の樂書に於ても、後者は直に顏料を用ゐ、前者は先づ物の形を描く、從つて前者は器用となり、後者は鷹揚となるやうである。器用な日本人は、其の服裝に於ても、自然一品一物の形質に頓着し、若くは模樣縞柄などに多くの注意を拂へど、鷹揚な英國人は、模樣や彩

▲子女に讀ますべからざる書▼

◎戀愛の分子を含む書類
◎餘りに荒唐無稽なる話語
◎魔術者や幽靈神を材料とせる書類
◎脚本類
◎殘酷悲慘なる事實を記したるもの
◎話說の趣向に極めて複雜にして子女の頭腦を惑亂せしむるもの

質などは第二に於て、唯だ先づ色合などのみ吟味する。

▲英人は、假りに茶色がゝつた服を着用するとすれば、ネクタイも之れに應じた色を配合させ、靴は勿論茶皮にして、手袋や靴足袋なども色彩りよく、ステツキのノーブさへ金色のものを携帶し、青味がゝつた服や、紺の服に赤の種類のネクタイは大禁物としてゐる。若し黒地の服を纏ふなら、ネクタイの色は何でも構はれど、必ず白縁取つたチヨツキを用ゐ、決して茶皮の靴を穿たず、ステツキ、ノーブも、寧ろ銀色が彩色の法に適ふといふ工合に氣を付けてゐるから、是等の香薬を個々別々に離して見ると、よしや安物許りの寄せ集めにもせよ、總體の出來榮えは甚だ結好である。

▲最も個人の自由を尊重する英國とて、假令皇帝に拜謁仰せ付けらる場合でも、必ず爾か爾かの服裝を要するといふやうな制裁は無く、如何なる服を着さうと、其處は各自の自由意志に託せてあるから倫敦の街頭は實に奇觀であるが、人は外の貌を見るもので、其の服裝如何に由つて、信用程度に影響を及ぼして來る譯なれば、分別あるものは皆相當の服裝を保つ事に注意して居る。又倫敦の下層社會を一瞥すれば、夫れは夫れは迚もお話にならぬ憐れな狀態が演出されてあるが、是等は殆んど人間としての取扱ひを受け得ない事を自らも所期してゐる有樣である。

▲美人となる法十ヶ條▼

一、菓子を食はぬこと(齒を保つ)
二、朝寢をせぬこと
三、坐つて人を使はぬこと
四、運動すること
五、夜食を廢すること
六、入湯に七つ道具を使はぬこと
七、白粉、石鹼を適當に使ふこと(糠の効用石鹼に優る)
八、顔を洗ふに烈しく擦らぬこと
九、純良の牛乳を用ふること
十、西洋料理を適宜に食すること





奥様の反省記

柳葉

乳母の手に何不自由なく兒を育つる人はいざ知らず中等社會の多くはいづれも母の手に、兒は育つものなり。

相生の松こそ目出度けれの其夜より、誠に夫婦が蜜の如き生活は、兒の產るゝまでが其程度なる可し。兒の產るゝまでは良人に不平なく、妻に不足なく、出るにも入るにも送り迎へて、和氣靄然たるものあれど、兒を持つに至りては、夫婦の間そろ〳〵不足勝になるものなり。曩に良人の外出に際して、妻の優しき女房心は、背後に廻りて羽織を着せ、襟を直しさては履物を揃へて送り出せしも、兒を持ちし今は、其事爲し得ざる場合多くなるものなり。歸宅を迎ふるに際しても、兒を持ちし妻が、思ふやうならぬ場合多きはこれ已むを得ざる—即ち母となりたる權利とや言ふべし。

そこで良人たる人、初めは此事情を推して敢て强ひざりしも、それが慣例の如く爲り行くに從ひては、不平の頭を擡げて强ふる事あり。偶ま機嫌惡き日になど其不平の勃發する事あり。夫婦相互の感情は、多く恁る場合に害ねらるゝものなり。不和合の根となりて、他日何かにつけて口論の萠しともなるものなり。良人はわが言ふ事に理窟を着せ、妻は又良人の言へる詞を同情の無きものと思ひなして、いろ〳〵とつまらぬ理窟は腹の中にて捏らるゝものなり。

まめ〳〵しかりし女も、兒を持ちては、其半分の業しか人に見せられぬものなり。それは寔に當然の結果なれば、良人たる者之を咎むるは、誤れることにて、同情なきものと思はるゝは無理ならぬ事なり。されど婦たる者の、そを鼻にかけて、好き事に思へるは又大な

る誤りなり。

良人の詞に楯突いて、不足を言ふは大なる不倫の行爲と言ふべし。抑々婦は良人を慰安するが爲めにあらずや。己れに言ふべき理窟ありとも良人が不平を洩す心を押計りなば、良人の心に同情する思ひなかる可らず。良人強ければ弱く出るに、婦として何の耻となるべき。

良人の不平を、己が不足にて受けなば、愈よ不平と不足とがまさり行くべし。

一家の和合は、不平を



空さへも酔るはかりの桃の花我も重れん桃の盃・（千浪）

消滅せしむる妙藥なり。兒無き當時と、兒を持ちし後の良人に對する擧動の同じからざるは、當然なる事なれども、そを妻として當然なりと心得るは間違ひの甚だしきものなり。さらぬだに氣の重くなるものなれば、せめて言葉だけなりと、良人の感情に滿足を與ふる心忘る可らず。

×

笑ふに泣くに人さまざまなり。

むつとして眼のみ光らして怒る人あり。虚心平氣を裝ひて心に怒れる人

あり。言はんとして言ひ得ず、身を顫はして怒る人あり。がみがみと鵝鳴り散して、怒る人あり。其内にて罪深きは、言はんとして言ひ得ず身を顫はして怒る人なり。心を痛むるは、虚心平氣を裝ひて怒れるなり。意地悪きは、むつとして眼を光らする人にして、且つ人に嫌はるゝものなり。無邪氣なるは、鵝鳴り散して心に怒らぬ怒り振なり。

而して怒る時は、突如として怒るなり。然れば誤解して怒る時もあり。人物事に接して、何事に依らず、反省する心深かりせば、誤解して怒るが如きことはなけれど、反省力不可能の人の常として兎角不用意に怒るものなり。

然れば怒りし時、人は只、己れも笑ひし事ありしを思ひ出して、其時の事を努めて考ふべし。多少心の和ぐものなり。心の和ぎたる時、人の常住坐臥を省るべし。常住坐臥とは、笑はずとも泣かずとも、悲しまずとも怒らずとも事足る事なり。只虚心平氣にて宜しきものなり。人間の餘儀なき行爲の内の一つとも言ふべきものなれば、怒る時は笑ひし事ありしを思ひ出して虚心平氣に歸るべし。

×

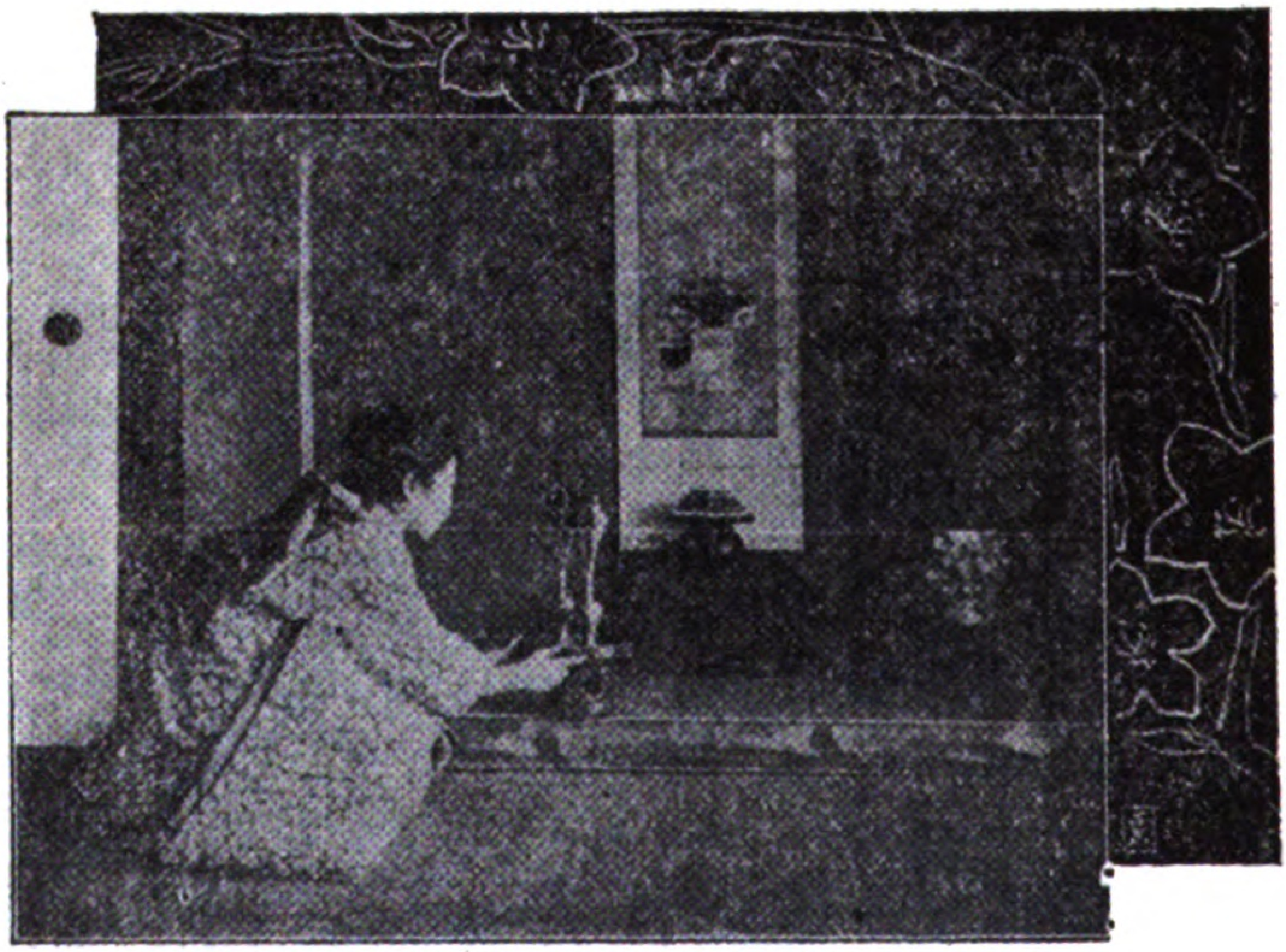
外見を張る者、氣位の高き者等、皆智慧を遣ふものなり。智慧にはさまざま有れど、茲にいふ智慧は、身を破る因ともなるべき智慧を言ふなり。譬へば、外見を張る人の、己が足らぬ事ありて、親しき人より忠告せらるゝ場合、又は敎へらるゝ場合に於て、成程と合點しながらも、之をお辭儀して聞く時は、何となく己が見識を失ふが如くに感じられ、乃ち咄嗟の智慧に、知つたか振して己が足らぬを隱蔽する如く、又氣位高き人の、何か人に頼み度き事有り。頼むには腰を折り頭を下げざる可らず、又眞摯にならざる可らず。氣位高き人は、係る場合を多く忌み嫌いて、何とか之を安安と爲し終さんものと焦せる場合あり。即ちお辭儀せず、腰折らず咄の折々にそれとは無しに、心の裏を引くやうにして頼まんとするが如し。

身を破る智慧とは、即ち係る場合を言ふものなり。

而して恁る智慧は成就し易きかと言ふに、多くは人に見破られて、心に言ひ知れぬ耻を掻くものなり。氣位高きだけ、外見を飾るだけ、己が智慧の破れたる時は人一倍内心苦痛を感ずるものなり。謹むべし。

頼み度き事あらば心を低うなすべし。心持好く人に通ずるものなり。

教へを享けなば難有く心得て禮を言ふべし。さすれば心持好く安心し得らるゝのみならず傍より人之を見ても誠に美しく見らるゝものなり。



ふり分の髪を短かみ若草を髪にたすらん妹をしぞ思ふ（詠人不知）

×

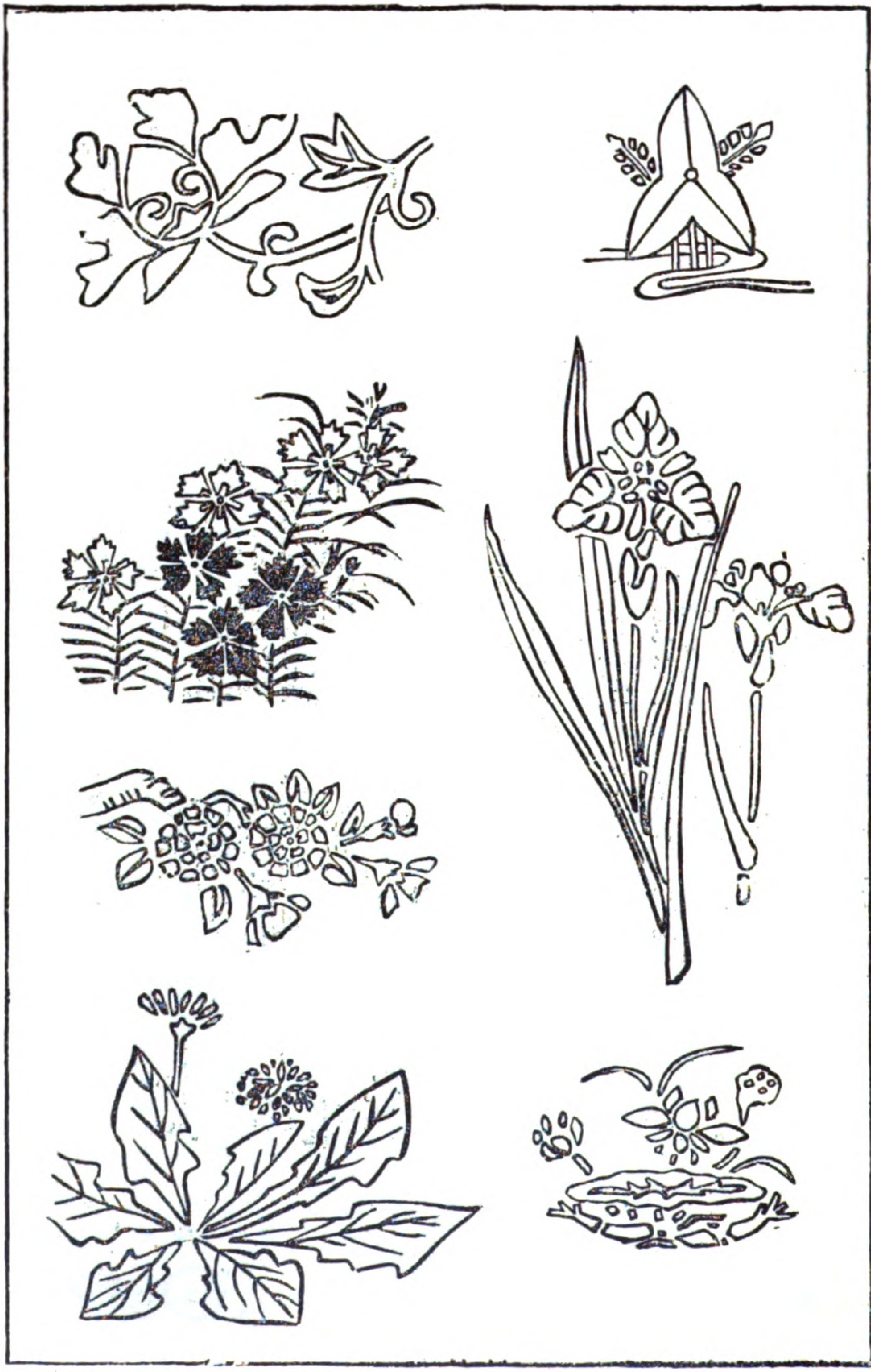
人の心を大別して言へば二種に過ぎず。物事を構ひて氣に爲る人と、物事に介意はざる人となり。其程度の深淺は、人によりて其相違はあれど、大略この二つに過ぎず。然れば物事を構ひ過ぎ、氣にしすぎる人は、輕微なる病氣に對しても取越苦勞を爲すものなり。又構はざる人は、反對に悔を殘す事稀ならず。何れにしても極端と極端とは宜ろしからねど、總て病める人の心に、虚心平氣の素養は日々心掛くべきもの

なり。人體の根本は、天地に支配さるゝものなり。即ち天に隨ふは人體の平常なり。死ぬるも生きるも、天地の在世に依ればなり。未練は天地を無視したる自分勝手なる心なり。決して天地を無視すべからず。

然れば病める人も、天の支配に病む義務あるものと覺悟して、病むだけ病めば、自然義務の消滅するものと思ひ、先先の取越苦勢はすべからず。然りとて、構ひ過ざる人は、除り放縱にして亦義務を知らざるものと言ふべし。義務を知らざるは、之亦天地を無視したるものなれば、反逆の罪有りと言ふべし。大いに自重して、自己の病氣は自己が癒す義務あるものと思ふべし。



草花模様



△河骨　△かきつばた　△あやめに蓮の浮葉　△かきつばた　△なでしこ　△八重櫻　△たんぽゝ



雛祭の事ども

△雛のいろ〳〵

雛祭りは古くはひゝな遊ともいひ、またひゝな祭りともいひき。雛には大小品質樣々ありて、時代によりて、其の種類一ならず。芋雛、立雛、絲雛、琉球紙雛、芥子雛、狩衣雛、鴨川雛、室町雛、吉野雛、三輪雛、薩摩絲雛、深川雛等の外、なほ數十種あれど、こは形式又は製作の土地によりて名づけ、大小形式材料の差異のみにて、いづれも男女雛の對なるものなるべし。また製作者の名さへ其のまゝに、治郞左衛門雛、小米雛などいへるあり。同じ内裏雛なれど、元祿、享保、寛政、文化など、時代によりてそれ〳〵名を別にするもあり。其の數百千の上に出づべし。或る好事家の如きは、足利以來の雛四百餘種を藏すといへば、また種類の多きを知るべし。されど内裏雛は、人形と紙幅の懸雛の二種に過ぎず。即ち彫刻の木偶、牙偶、或は土偶、紙、絲等にて作れる人形と、紙、絹地に色彩せる繪雛（俗に懸雛又は紙雛といふ）との二なり。共に男女一對を配す。この外、五人囃子、隨身、官女等附屬の人形ありて、同じく雛段に並ぶるなり。

△調度は古式

人形の外、雛に附屬する道具をいふ。内裏にて使用せらるゝ品を小さく作り、蒔繪など施して、一見目も醒むるばかりにせるもの多く、まづ膳部一式、簞笥、屛風、樂器、茶道具、貝桶、唐櫃、鷄合、文庫、乘物、其他食器一式等にて、數百金を費さずば、調ふる能はざる程數多くして、華美なるものあり。要するに普通上流の生活に必要なる器具を一式其のまゝに飾るなり。今も尙古代式にて、開化したる新式は流行せず。

△雛の供物

は供する食物をいふなり。蓬の餅、即ち菱餅、蛤などは、古より行はれたるなり。白酒を供することも早くより聞えたれど、古書には甘酒とあり。別物なりや否や判じ難し。其他季節のものにて、常人の飲食物なる限りは、何物にて



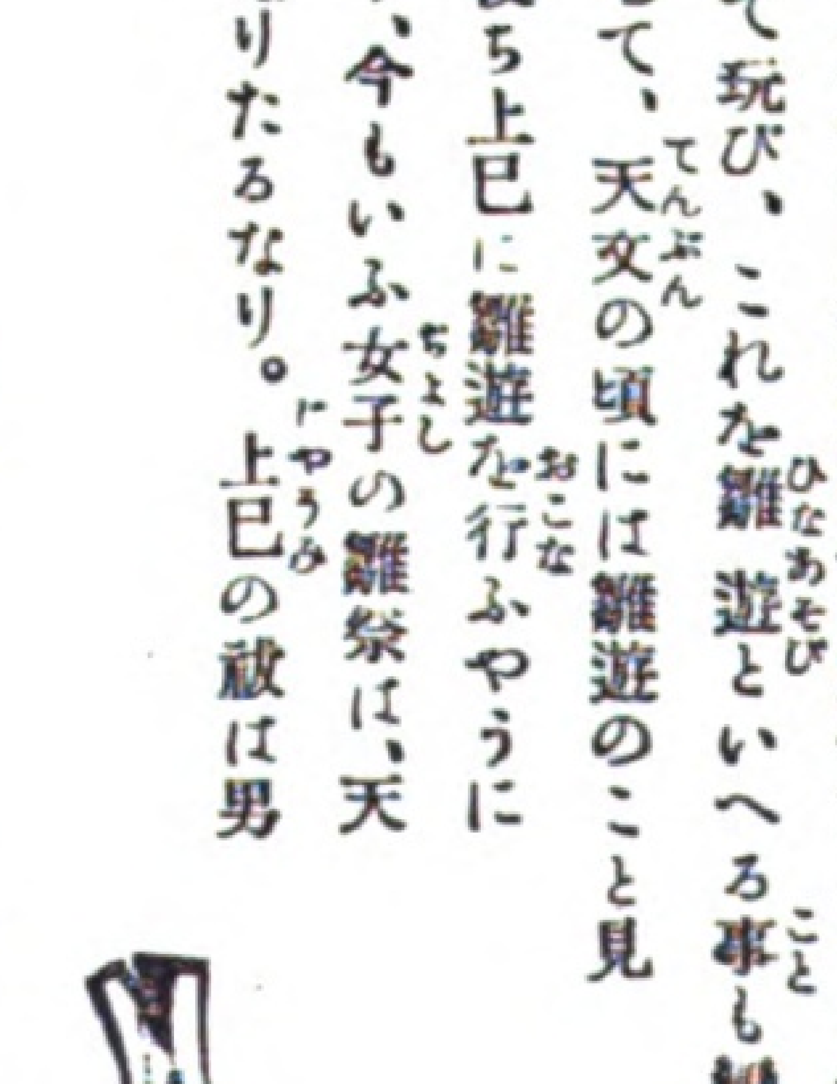
も供したらんが、菓子は今日なほ雛菓子とて、それ〳〵の物を菓子店にて賣捌くを見る。此等を例の食器に盛りて供ふるなれど、古は悉く蛤の貝に盛りて供へきといへば、質素の樣察せらる。蓋し徳川氏に至りて、甚だ華美の風一時に行はれし故なるべし。

△起原

詳かならざれど、今より九百七十年前の承平年中既に此の風ありたりと傳へらる。初めはひゝなあはせとて、宮中又は公卿殿上人等の家庭の遊戯らしく、季節も定らざりしは、源氏物語、枕草子などによりて察するを得。今の三月と限りて家毎にまつるは、後土御門院の前の頃よりならんか。三月三日に行ふやうなりしは、上巳の祓の人形と、雛遊とを混ぜしにて、初めより上巳に雛祭せしにはあらず。室町時代になりては、三月三日には、女子小さき夫婦人形を作り、之を雛の一對と名づけ、其の外、大小の人形を座上に並べたること今の内裏雛と五人囃子とに異ならず。また酒食を供へ、人に準へて玩び、これを雛遊といへる事も變りなし。されど桃の酒、蓬餅は雛より早く上巳の食物にして、天文の頃には雛遊のこと見えざれど、酒と餅とは上巳の慣例として行はれたれば、後ち上巳に雛遊を行ふやうになりて、偶ま桃の酒、蓬餅を供へしなるべし　序なれば記す、今もいふ女子の雛祭は、天正以後に始まり、後には端午に對する女子の祝日のやうになりたるなり。上巳の祓は男女共にすることなれば、雛祭とは全く別なりと知るべし。

△初雛

徳川中世後は、雛を女子必攜品とし、まづ女子出生してより最初の三月上巳の節句を初雛と稱へ親戚知人より祝ひ、爾後年々飾りつけ、婚するに及んで、更に婚家にて初雛及び、年々の雛祭を行ふ。此の風次第に衰ふるが如くなれど、古風を遵守する家庭にては更めす、今も日本橋十軒店の繁昌舊の如し。土地によりては、八朔に雛を飾るもありしこと、古書に見えたれど、今は其の風傳はらず。現に中國邊にては、明治になりても、なほ八朔に雛を飾りしとあれど、そは三月飾付くるものゝ一部に過ぎざるなり。



園生の春

（若草や稚子が草履の紐紅き）





金屏のかげ

（さまぐ＼の衣裳）

美和子

○

十畳の室の床には、五段ばかり雛段を作り、緋の毛氈を敷き詰めて一番上には紫宸殿に内裏雛、右近の櫻左近の橘も、緋の袴を穿いた官女も並んで、左右に嚴しい矢大臣が立ち、下には光琳雛や有職雛、江戸振りの極込み人形、さては可愛らしい五人囃、お嫁入りの行列、菱餅、小屏風、桃の花や白酒に至るまで、貝もあやに並んでゐる。其の前で、不二子さんは膝の上へ白紙をのべ、もみぢのやうな可愛い手を器用に働かせて、折鶴を折つてゐる。

髪は大きな桃割で、顔には白粉が濃くついて、郡内の座布團へ端然と坐つた風情は、まるで雛段から脱けて出たやう。

お着物は茄子色地に花菱と菊の立枠を、總て絣風に現はした濃い友禪縮緬、羽織は、紺地へ白で拔いた市松風の二本格子に、利久、藍、納戸、紫紺などで、菊の花や寶づくしを染め出した友禪縮緬で、面長の色の白い、眼のぱつちりした不二子さんには、此の華やかな中にも澁味のある衣裳が、實に綺麗でよくうつる。



不二子さんの着物（友禪縮緬）



新大島絣

○

『不二子さん』後の襖を靜に明けて、

金屏風の蔭から顔を出したのは、不二子さんが二番町の姉樣と言つてゐる大好きの芳子さんである。

芳子樣は、或る實業家に縹緻望みで輿入をしたが間もなく離縁になつて今では下二番町の家に泣いて暮してゐるのです、不二子さんは、そんな事とは知らず、姉樣はお嫁にゆくよりは家に居た方が好いと言つては皆を笑はせたり泣かせたりして居る。

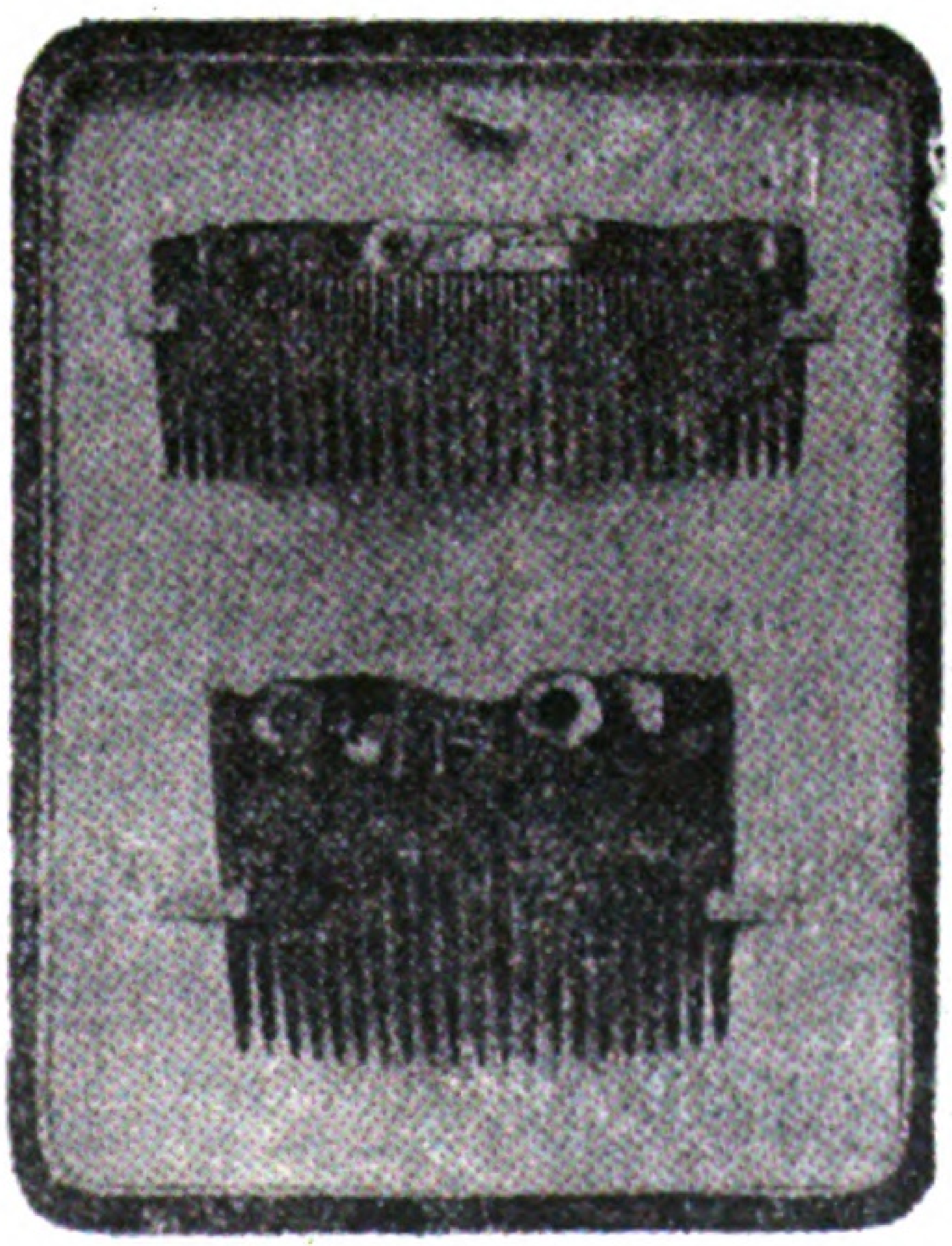
『鶴を折つてゐるの？』

と言ひ乍ら、芳子さんは不二子さんの前に坐つた。

縹緻好みで貰はれた人だけに、鼻筋が通つて、眼の清しい、美しい顔ではあるが　とかく沈み勝ちで、薄く匂ひの雲がかゝつて居る。破鏡の悲しみの爲めでもあらうが、父が永の病氣だからでもあらう。著物は黒地に茶と鼠の杢入りの亂立格子を織り出したもので、お召縮緬のやうではあるが、しなやかでないと見れば、何うやら眞物ではないやうで、三越などへ行つて見ると階下の陳列棚にざらに並んである品らしく見える。



君子さんの着物（縮緬總模樣）



俊子さんの本甲蓋二枚櫛

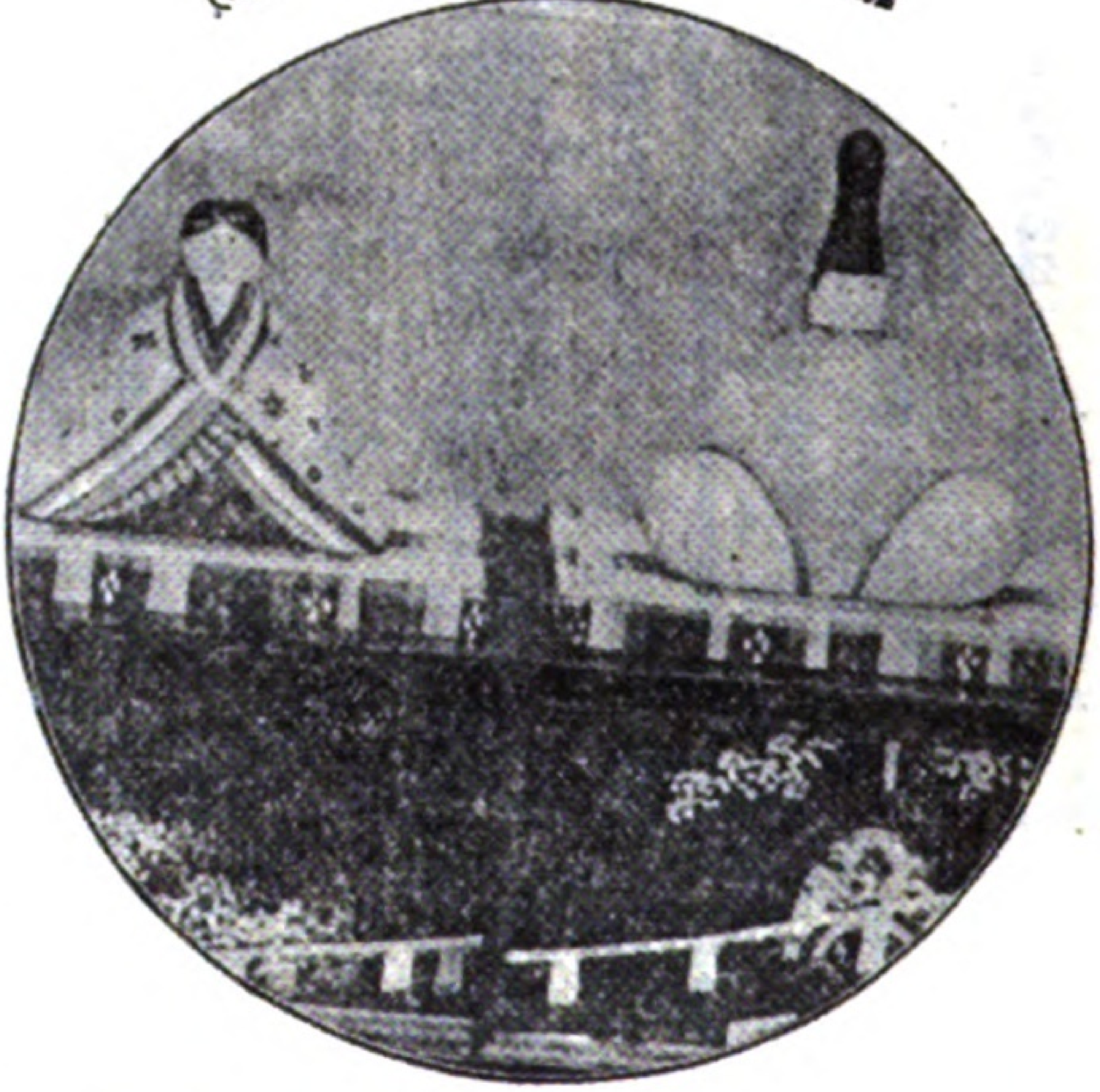
羽織も此頃は殆んど見受けない紋羽二重で、其の色も、藤色でもあれば、まだ今風なれど、お可愛相に五六年前に流行つた栗梅色。半襟も刺繍のないお納戸色の染模樣である。そして手の指は、家庭の荒い仕事を物語るやうに、節々の骨が大層大きくなつて居る。

○

六時頃になると、家の人々は皆樂しさうにして此の室へ集つた。

不二子さんの兄樣は、大島の二枚襲に、同じ羽織、その裏は墨繪でも

雛は皆んな女でありわべし（月斗）



描いてあらうが僅に見へる所は白の羽二重です。帯は流行の韓瀬へ彫刻模様のあるもの。若い紳士には此の瀟洒した様子が厭味がなくて如何にも相應しい。

其傍にゐる不二子さんの姉様は、鞘形模様の大島のお召を着て、下着は白地の友禪縮緬で、上着と共の柄の、牛巾な白地、牛巾な青磁鼠に染めたもの、帯は大島式の唐織丸帯に、利久茶地に茶の濃淡、鐵納戸、金糸等で菊桐の模様を現はした極めて澁い柄で、二十五の奥様には、ちと地味過ぎる位。

○

赤ちやんの君子さんは、曙紅色地の縮緬の二枚襲で、模様は紅梅に源氏貝を總模様としたもの。源氏貝の中は紫紺、紅、柳茶などの配色あでやかに、眼もさむるやうな美しさ。

御隱居様は年相應に、霜降縞の經綸織の二枚襲れの上に實用お召といふ絹紛の細い格子縞のものを被布にして、友絹の切地を紐にして結んで居られる。

○

次にゐるのが、根岸の俊子さん。親類の十八九の美しい娘さんで、上着は光華紋お召で、竪に松葉模様のある共紋織。下着は友禪羽二重へ、蕉、焦茶、淡藍、柳茶、錆納戸等で、小倉色紙模様を散らした澁いもの。帯は洒落者用として最も面白い無線織へ彩色した栖鳳の竹に雀の圖



不二子さんの羽織（友禪縮緬）

羽織は縮緬の藤色に、藍氣を帶びた五ッ紋時めく紳士の嬢さんだけに、衣裳はさすがに流行の粋を集めてある。殊に羽織の色の藤色に藍氣がかつてゐるところなど、陽氣に向ふ此の頃の氣候には極く應はしい。いづれ三越か白木屋邊に相談相手がゐることでせう。

同じ親類でも、芳子樣と此の人とは着物の流行に七八年の相違がある頭のものでも芳子さんは新ダイヤ入りのゴムの二枚櫛位なのに、倭子さんは、黒甲臺に金地に梅とこぼれ松葉の模樣を配色よく芝山盛りとした二枚櫛の價は三四十圓もするものに、本甲へ梅に鶯を彫刻した白由簪を挿してゐる。同じ年頃の女ながら、破鏡の涙にくるゝ人と、榮華の夢の温き人、電燈はあかあかと二人を照して居れど、其の身の上には遠い遠い距離がある。

○

不二子さんの二番目の兄樣は、高商出身で、今は横濱に勤めて居られるが、丁度來合せて、終列車で歸るといつて、洋服をつけたまゝ窮屈さうにして居られる。服は粗い竪縞のトヰードで、襟は大反りの三ッ釦、チヨツキは駱駝毛のへり取りの五ッ釦、カラーはダブルで、澁いお召のネキタイへ、眞珠を抱いた梅の花のピンを挿して、何處へ出しても退けを取らないハイカラ姿。頭は眞中から別け、顳顬を靑く剃つて、小高い鼻には金縁の眼鏡が光つてゐる。

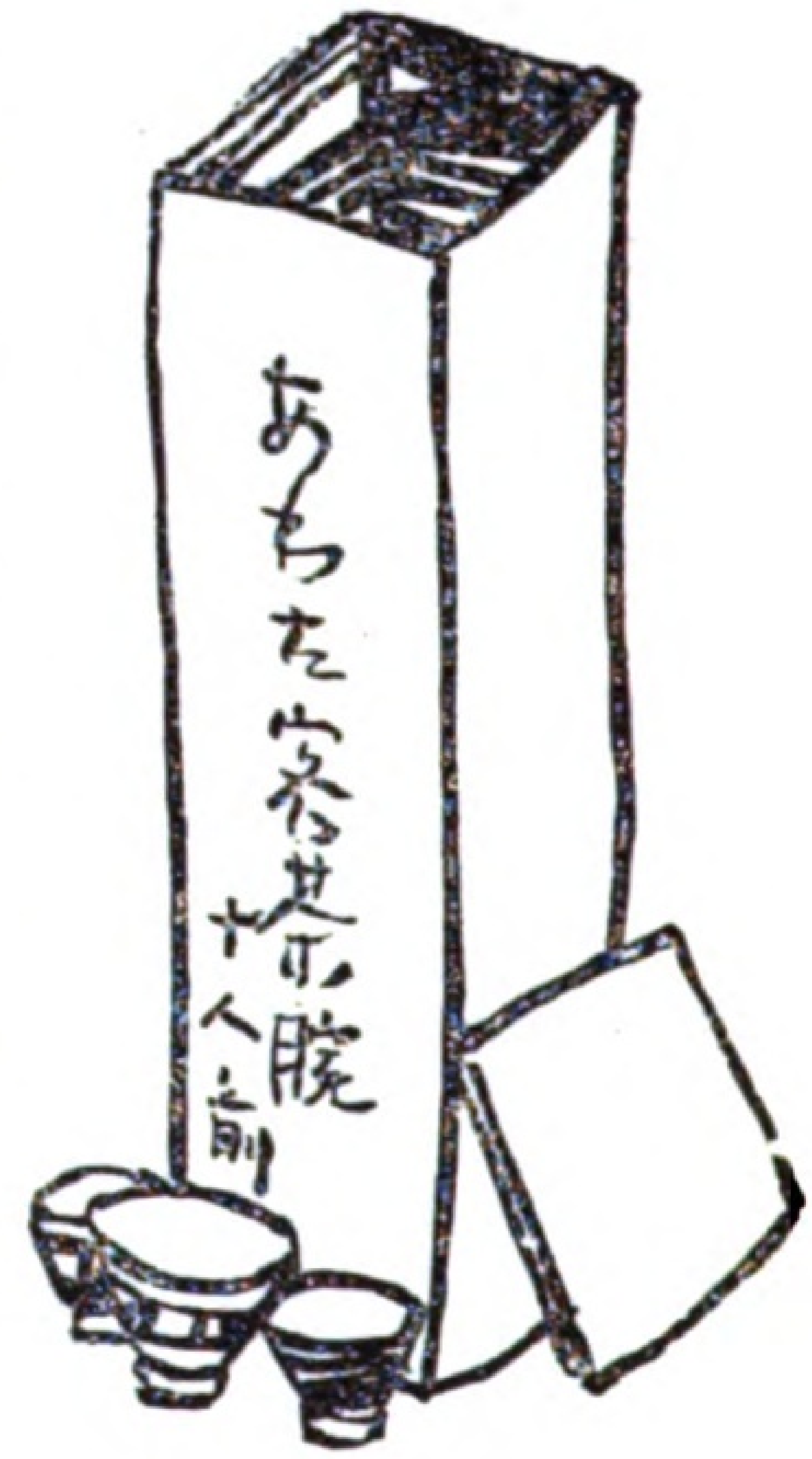
やがて金口の埃及煙を四分一銀の卷莨入から取出して、ゆるやかにふかすと、煙はもやもやと横に棚曳いて、傍にゐる呉服屋のやうな倭子さんを、夢の樣に包んだ。

○

さまざまの衣裳の中に、女中のお銀も今日を晴れと着飾つて居る。着物は歳暮に貰つたらしい新大島で、帶は小柳織といふ綿入りながらも博多まがひの品。

衣裳の樣々の流行は、此の一室に展べられてある。白酒の盃は人々の手から手へと渡された。電燈は煌々と輝いてゐる 時代と歴史を物語る人形は小い雪洞の陰に……。





雛節句の献立（貝一式）

△吸物　蛤、わらび、三州みそ、粉山椒

△口取　菱形蒲鉾、鮑貝盛、桃花長芋、

△鉢　赤貝田樂、

△さしみ　花ばか貝、たひらぎ、胡瓜、

△椀　はしら、房みる貝、海苔、

△丼　榮螺甘煮、

△香物　細根大根、

△吸物　の蛤は剝身にして布巾に包み水氣をのぞき、メリケン粉にくるみ、ダシ（鰹節を煮立てし汁）にてザツト茹でゝ用ふ。蕨は穗を切り灰にてくろみ茹でゝアクをヌキ、下煮して蛤の取合せとすべし。三州味噌百目につき水五六合の割にて鰹節を加へて煮立て水嚢にて漉すべし。

△口取　の『菱形蒲鉾』は普通の蒲鉾の如く魚を擂りて、此れを板へ厚さ四分位にのして蒸して後ち菱形に切る。赤は食紅にて色をつけてよろし。青色は菜の葉を擂鉢にて擂り、水を入れて水嚢にて漉し、其水を鍋にて煮立つる時は靑きもの浮き上がる故、これをすくひ、水をしぼりて蒲鉾の身に交ぜ合すべし。『鮑貝盛』は小貝の鮑を貝ぐるみ茹で貝を離し水で洗ひ、再び軟かに湯煮をし笊へ揚げ、更に酒、味淋、醬油にて煮上げ、前の空殼の中に盛る。『桃花長芋』は花に剝き、茹でゝ最初煮汁にて煮置き、再びアク引砂糖、酒、及び鹽少々を加へて煮上ぐ。又別に鍋に紅を入れて水にて溶き火にかけ、これに以前の芋を入れて色のつく迄煮つめ、後鍋を火より下ろし水を入れて芋を洗ひ笊へ取つて冷まして用ふ。

△鉢　の赤貝は貝を離して二つにへぎ、串をうつて火にかけ焙り、醬油をかけ、又火にかけ田樂味噌をつけて出す。『味噌』は上赤を裏漉にして鍋にかけ砂糖、味淋、酒をよき程に加へて煉り、冷まして鷄卵一つ落して混ぜ合せ刷毛にて塗るべし。

△刺身　のばか貝は赤き舌を切つて二つに割り、竪に細く長めに庖丁を入れ、熱湯をかけて霜ふりにして水で洗つて盛る。玉珧は貝より剝がし

白い柱を切とり、小口切にして重ねて前盛となす。胡瓜は薄く小口より打つて水でさらし用ふ。

△椀 のはしらは鹽水にてよく洗ひ、大なれば五六ぐらひ、少なれば十粒程用ふ。朋みる貝は貝を剝ぎ、ざつと茹でゝ水に投じ黒き皮を剝き、兩端の汚き處を切りとり二つに割り、更に竪に細そ長く庖丁を入れ熱湯にそゝぎ用ふ。海苔は兩面を青くなる位に強火で燒き、八つ切位に截つて二枚浮かして侑む。

△丼 の榮螺は貝ぐゝみ茹で、身を引き出し、水にて洗ひ、貝の袴を脫り、一寸ばかり宛に筒切になし、酒、味淋、醬油にて煮る。盛りて出す時には、前の汁を煮つめて貝の上にかけるべし。榮螺の腸は婦人によりて好厭あれば、其の調理法はレザと書き置く。

△香の物 細根大根は糠漬にて太きは二つに割りてすゝむべし。

▲鶯餅の製法▼

上等の白玉粉 五十匁を鉢に入れ、水を加へて捏れ、濕布巾につゝみ、沸湯の中に入れて煮沸かし、其の包みの浮き上るを度として引あげ、擂鉢の中に取りて 凡そ二十匁ばかりの白砂糖を加へて適度の柔かさになるまで擂り交ぜ、之を青黃粉の上に取りて よくまぶし、適宜の大さにちぎり、豫て作り置ける餡粉を包みこみて 青黃粉をふつた板の上に並べ、黃粉をまぶすなり



惣菜献立

朝 △味噌汁 わかめ

晝 △煮肴 小鯛煮付・せん生姜、

夜 △天ぷら 白魚

△味噌汁 和布は微温湯で洗ひ小砂を落して水につけ、柔かになつてから適宜に切り、味噌汁の一たん沸騰したる時投じてよろし、粉山椒などふりかけてもよろし。

△煮肴 小鯛は鱗をひき、腮と腸を除き、よく洗ひ置く、次に味淋六分清酒四分の割に温湯を少々交ぜて汁をつくり、鍋に敷簀か竹の皮を敷いて右の汁を入れ、沸立ちたらば前の材料を上肉を上にして並らべ入れ、落し蓋をして暫く煮て靜に醬油を少しづゝ注し、材料の眼玉が白

くなるを度として鍋を下ろし、数度の儘大皿に取り、更に小皿に盛る。

せん生姜は生姜をせんに打つて水で晒らし、酢に浸して用ふ。

△天ぷら　の白魚は初め鹽水でザット洗ひ塵を落し、笊に上げて水氣を切り置く。次にメリケン粉にてもうどん粉にても有合せの品を毛篩で篩ひ、玉子一個に水(茶碗に)三杯の割で溶きこの中へ前の粉を同じ茶碗で八九杯入れ、ザットかきまはし、よき處にて材料を五尾位宛鍋に落して、かき揚になす。揚げ方は胡麻油を鐵鍋かフライパンに充分入れて火にかけ、油が泡立ち、煙りが立つを度として、材料を鍋の片端から追々に入れ、二三度箸で返して揚げ、新聞紙の上にて一度油を切りて皿に盛るべし。

朝　△煮豆　大豆、蓮根、氷蒟蒻

晝　△ぬた　蛤、獨活、若葱、酢どり防風

夜　△燒肴　さより雲丹燒

△煮豆　大豆は二三度水を變へて洗ひ、釜に水を充分入れて火にかけ、微温湯になりし時、右の大豆を入れて柔くなる迄茹る。蓮根は節の處より切離して皮をむき、竪に二つか四つに割り、其れを小口より五分程に庖丁し水に浸しアクを抜き置く。氷蒟蒻は水につけて柔くなし、竪に二つ切にし又其れをせんに庖丁して水氣を搾り置く。さて此二品を前の大豆の湯に入れて茹で、後ち更らに釜をよく洗ひ、砂糖と醤油を以て此諸材料を同じに煮上げ、釜より少しむらして鉢に移す。分量は大豆一升につき氷こんにやく十枚、蓮根中位のもの一本、砂糖五六十目、醤油一合五勺位の割にてよろし。

△ぬた　蛤の剥身は水氣を切つて熱湯で一寸茹で、目笊にあげて水氣を切り酢に浸し置く。獨活は皮を剥ぎ亂切にして水に投じアクを抜き酢に浸しおく。若葱は一寸位に切つて熱湯でザット茹で、水氣を搾つて酢に浸す。摺り味噌は、普通の味噌に砂糖を適宜に加へて擂鉢で擂り、裏漉にして酢を少し加へどろ〳〵にゆるめ置く。かくて以前の材料を此味噌に入れてよくかき交え、防風に熱湯をかけ酢に入れ二分位宛に切りしをふりかけて侑む。

△燒肴　さよりの鱗をひき、頭を落し腹びらきにつくり、鹽をふりかけ二十分程置く。其次ぎに雲丹を小匙に二杯深皿に入れ、玉子の黄身一個でよく溶く。さて前のさよりは水で洗ひ串にさして燒き、之れに溶きたる雲丹を刷毛にて塗り、少しあぶつて串を抜いて皿に盛るべし。

▲草餅の製法▼

蓬の嫩葉をとり、莖を去り、茹で、灰汁を出し、一夜程つけ置きて絞り、水を切りて刻み、擂鉢にてすり、之を糯米の粉を捏れ、蒸籠にかけて蒸したるものに交ぜ合すなり。



北村初子夫人と語る

婦人記者

品海の濤聲

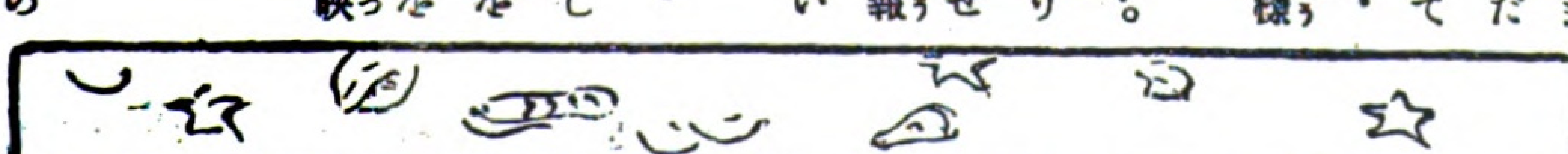
姉妹の閨秀音樂家として、天野愛子女史と共に夙にその令名が謳はれ、皐月音樂會のヴァイオリン演奏に花の如き妙齢美人を揃へて、若い人の血を躍らせた北村初子女史、演藝同志會なるものを組織して、日本に新らしき藝術を起さうと、毀譽褒貶の外に立つて、偏へに會の發展に盡して居られる北村季晴氏夫妻に就ては、世間に兎角の評はあるにしても、確かにその努力と意氣込みとは、藝術の上から、多大の感謝に價するものであらうと思ひます、記者は北村夫人が、京阪地方の演奏から歸られた翌々日、伊皿子の私宅に訪問致しました。音樂教授、芝音樂會と札のかゝつた門をくぐつて玄關に立つと、愛らしい女中が取次に出て「奥樣は只今お留守で併し間もなくお歸りになりませうから、暫らくお待ち受けを」と言つて、海に面した十二疊の客間に通された。床には水鳥の軸が掛つて、違ひ棚には鈴琴が一挺と、飾り時計が置かれてある。硝子越しに見える品川灣の全體、房總の山々から豆相の連山は、濃淡の刷毛でぼかしたかのやう。點々と並んだお臺場の影からは、行く眞帆かへる片帆がちらついて沖には黒い舟も見える。すぐ目の下の波打ち際には、今し新橋のプラットホームを離れた汽車が、大蛇の樣にうねつて行く。

暫らく恍惚としてゐると、門の格子ががらりと開く。女史のお歸りかと思つたら、左樣ではなく、すぐ隣りの室からピヤノの音がし出した。大方お稽古の方でせう。それから先刻女中が持つてきてくれた演藝會報を取り上げて、大方讀も見終つた頃、再び格子が明いた。今度は本當のお歸り。

外出着のまゝでいそ〳〵と出て來られた女史は、「どうもとんだ失禮を致しました、大層お待たせ致しまして……」と、愛憎よく仰しやる。打ち見は三十をいくつも出ないやうな人品のよい奥樣。茶のお召縞を二枚重ねて、同色の濃い帶に、黒縮緬の羽織がよく映つて、瀟洒な束髮も何となく奥床しい。

演藝同志會の理想

私共夫婦の組織して居ります演藝同志會と申すの





は、歌舞伎芝居でもありませんし、又所謂新派のものと云ふのでもありません。元々私共は音樂が本領ですから、その立場から音樂と劇とが一致して發達したもの即ち歌劇、しかも西洋のオペラその儘でなく、日本のオペラを新らしく起して行きたいと云ふのが理想なのでございます。併し世の中の事は、何事でも自分の理想通りに行くものでもありませんし、又各方面の智識と經驗とを得る爲に、種々の勉強も研究もせればなりませんから、今迄もさうでしたが、これから先も時には歌劇と全く無關係のイプセンの樣な劇を致す事もありませうし、或は西洋の歌劇をその儘に致して見る事も御座いませう。兎に角今迄日本にはなかつた新らしいものを生み出さうと云ふのですから、一と通りの苦心ではありません。それに微力でございますから、自由に部員を集める事も出來ませんので、たゞほんの名の通り、同志の者が集まつて研究して居るに過ぎません。

日本風の歌劇

日本にはこれ迄歌劇と云ふやうな藝術はなかつたのです。強いて云へばお能で、あれは謠曲をうたひながら舞ふのですから、この點は一寸似て居りますが、併しお能は音樂が至つて單純で、又身振りでも表情でもずつと人間離れがして居て、オペラとは極めて緣の遠いものでございます。それが西洋では古くから發達して居るのですから、それをその儘日本に採つたらよささうですが、さうしたくはありません。日本には日本特有の音樂舞踊があるのですから、それを使つて日本的のものを作りたいのです。勿論西洋のものも使ひますが、それは十分日本化して、日本の音樂、舞踊と混化した、少しも不自然でないものに致したいと思つて居ります。それは舊劇にも新派劇にも飜譯劇にも、それ〴〵の面白味があるから、どれも決して捨てる事の出來ない者ですが、歌劇は音樂や劇などが結びついて最も理想的に發達したものですから、我國でも十分之を發達させたいと思ひます。西洋ではことに之は重んぜられて同じ俳優でも、オペラ役者は一段上の地位に置かれてあります。

普通劇と歌劇の差

普通劇と歌劇の異つた所と申せば、普通劇では、ある題目についてその事件の進行や役々の情想等を對



話を所作とで見せますが、歌劇では主もに歌と音樂とで之を表はします。勿論普通劇にも音樂はありますがそれは僅に囃子に用ふるもので、それが中心となるのではありません。處がオペラでは音樂が主で、それにはオーケストラ（管絃樂）も必要です。それ故にオペラ役者の第一の資格は聲であります。咽喉が惡くては、いくら外がよくも、オペラには向きません。體軀なども小さいよりは大きい方が舞臺面が引き立ちますが、小さくつても大きい聲を持つて居れば、さして差支へありません。顏も美しいに越した事はないが、舞臺面は特別ですから、普通であれば宜しいのです。けれど私共の企てゝ居るオペラには、三味線のやうな日本音樂の素養も要るし、踊りも必要ですし、勿論西洋音樂も舞踏も出來なければならぬから、中々面倒でございます。同志會は、今の處年に四回位試演をする筈ですが、まだ設備も十分整はず、人も揃はず、又見る方もそれだけの頭が出來て居りませんから當分の内は普通劇の中へ適宜に歌や音樂を應用して効果を表はすやうにするとか、或は劇中へ歌劇の一節を挾むとかして、眞の歌劇に進むべき階梯を作つて行く積りでございます。

樂みはこんな事

一番私共が愉快に思ふのは、舞臺に立つて思ひの外の好成績であつた時です。それが人を相手の事ですから、自分がよく仕て居るのに、相手がまづくつて居ると、腹が立つて不愉快でたまりませぬ。又反對に相手が巧くやつてゐるのに、自分の方がやり損じた時には、實に不面目で穴へでも入りたいやうな氣が致します。

とお話しの最中へ、いたいけ盛りな護謨人形のやうな坊ちやんが二人、玩具の洋刀を腰にして、四つ計りのこれは又お母樣そつくりな可愛らしい孃さんと一緒に入つて來られた。女史は慈愛に溢るゝ面色で、お孃さんのお頭をなでながら、何分私などはこんな子供が四人も御座いますから、いくら何と思つても、全く藝術の爲に一身を捧げつくすと云ふ事が出來ませんで、どれ程力をそがれるか知れません。自分がすべて手を下して世話をしませんでも、一切の氣配りは如何しても致さねばなりませんから……。一方に家庭を持つてから斯う云ふ事をして行かうといふのは中々困難でございます。併し西洋の有名な歌劇役者などにも、良人もあり子供もあつて、一方家庭に於ては完全な主婦として家政を整へ、又一方には立派な藝術家として立つて居る婦人がいくらもある事ですから、家庭を持つて居る婦人は藝術に盡瘁する事が出來ないなどと云ふ筈はないと思ひます。と流暢な調子でお話しになる。兎かうする間に、大分日かげも傾いたので、お暇してかへる。門を出るともう狆犬が忙しさうに走つて居た。



大學病院受診の記

胡蝶

鉢前の棕櫚竹をならして風さら〱と熱ある身には心地がわるい。叔母樣に髮ときつけて戴いてると、番頭が、

「え丶もうボツ〱御出掛になつてよろしう御座いませう、幸ひ今日は水曜日で、部長樣のお出ましになる日で御座います。」

こ丶市大前の〇〇〇旅館來る人も宿る人も、何れ輕からぬ病の身をさげて、天晴名醫の診察受けんものと遠近より集ふた病魔のとりこ、御前の樣ない丶顏色した人ひとりも居ないね」と叔母樣が仰在つた位。昨夜も階下の座敷で、たれか大きな聲してうなされて居たら、宿の女將さんが覺して上げた樣だつた。

「二度も行つたけれど部長樣には診て戴けない、遠い所をわざ〱來て、此ま丶歸るのも殘念と」北國なまりで、口やかましくこぼして居た隣室の人は、今日も行つたと見えて内は寂としてしまつた。置時計を見ると八時に五分前、死刑の宣告を受くるか否か、と丶ろく胸をおさへつ丶、警察署の門くゞる心地でいかめしい病院の中に入る。案内には女將さんが、持つて來て呉れた上草履はいて長いろうかを豫診室へ……。

「あのう診察劵はあちらの方へ出しておきましたから暫く此處でお待ち下さる樣、では私は歸りますから。」

かうした商賣の人は、不似合な東京辯で、品のい丶女將さんだこと。何處かで空椅子見出して後がへりして持つて來てくれた。ホ丶丶丶、今賞めたからつて譯でもありますまい。

内科は一番込み合ふと聞いて居たけれど、初來の患者ばかりで、まあこんなに澤山あるのかしら、大きな

待合は早人浪のゆるぎ!!

昨日女將さんの話によれば、内科の診察室が五ッに分れて、第三が中西博士第五が部長の笠原博士、其他は學士の先生方許で、例の少いむづかしい樣なのばかりを選つて、中西博士が二十人笠原博士が十人を限り、御診察なさるとか。雲霞と集ふ此人々の中、何れが博士の診察を希願はぬ者があらう、三十人とは餘りに情ない、大多數は失望して歸らねばならないのだ。



定刻になると、白い前掛した若い婦人が群衆の中に分け入つて、大きな聲あげて同じ名を二三度づつ續け樣に呼び始める。皆の目は婦人を取卷いて一樣に輝く。豫診の時はなるべく大袈裟に仰在つた方が、ここで先生が定まるのですから」と、豫て敎はつて置いたから、自分の容體心の中でくりかへしくりかへしまてども待てども我名は呼

ばれぬ。もうそろ〳〵退屈して顔がほてつて仕方がないから、叔母樣に御願ひして置いて外へ出る。見る目も霞む樣な長い廊下、トントン〳〵と白衣の看護婦の忙し相な足どり、其所に人が居るかとも思はぬらしい唯一心に職務に勵む樣は、外の病院には見られないと思ふ。

どこへ行つてもどこへ行つても人で一ぱい!!!、いつもこんなのかしら、「耳鼻咽喉科教室」と御二階の方が指してある。外科婦人科まではなかなかに遠い。

あちこち歩いて居る中に私の番が來て、叔母樣大さがしてゝ下さる。

博多の伊達卷スル〳〵と、きつちり合した球琉絣の袷の衿くつろげて形ばかりの豫診が終ると、看護婦の後についておそる〳〵診察室へ……、入口を見ると「第三教室!!!」まあよかつた事、思ふ後から又悲しい樣な心地もする。二十の數に入る事果して幸か不幸?

内に入れば此處はさすがにひつそりと、物靜かな助手が丁寧に容體聞いて、獨逸語? で書きつける。それがすむと檢溫器を挾まされる、もう十分は大丈夫と外さうとしたら、霹靂一聲「抜いちやいけません抜いたら下ります」と看護婦の頓狂聲が頭上に落ちる、ああびつくりした、何故こんな病院でありながら留點檢溫器を使はぬのだらう、との不審も起る。

待つ間程なく我名はさゝれた。肥つた先生の前に腰を下すと、廻りはもう制服姿の大學生の八重垣!!! 先生は私の容體を大きく讀んでおきかせなさる。

形の如く胸部の診察澄んで、高い寢臺に横はると、甘きに群る蟻の如、忽ちよする制服の黒!!! 私の胸と背は數ある聽心器で埋まつてしまつた。

「先生がグイメンがあると云つたけれど判らない」つて一人が云ひ出すと、「大きな呼吸して見なさい」「咳して御覧」等と口々に、まるで私はなぶり物にされてる樣な、それでも別に羞かしいとも何とも思ひませんでした、遠にぬけこして居るのか唯もう夢中で云はるゝがまゝに……。一人去り二人去りふと氣の付いた時學生の群は次の患者を取卷いて居た。腹部の診察は先

生許り、やれ〱と衝立の陰で帯締めて居たら、花木さん!!! 眼と眼がパッタリと合ふ。「まあ!!!」夕月匂ふ須磨の浦回、波は黄金の玉と散るなる、渚に立ちて唯二人、細い聲して殘月の曲合唱した時の樂しかつた事!!! 三年前の夏が戀しい!!!

同じ宿に同じ日に來て、すつかり仲よしになつてからは、一つ御年が下だつた物だから、私の事を姉樣姉樣って、姉妹も及ばぬむつみ! 「鍋つかみ鍋つかみ」って冷笑されながら、其が却つて嬉しかつた。歸る日までも一緒と定めて、○○の停車場でお別れする時、いつ又御目もじが出來るやらと、手を取あつて同じ思ひの涙をのんだ。たつた一月の交らひではあれど、人も不思議と思ふ程親しんだものを、ああされど去る者は日々にうとし寒暑の御便り絶えては居りませぬけれど、御いたつきとは露存じませんでした。二度逢ふ時は病院の中……。



「まあ花木さんとんだ所で御目にかゝりますのね、ど

ちらが御病う御座いますの？」

「まあ本當に不思議で御座いますわね。よく〱の御縁でなくては、私ですか此夏頃からね時々發熱いたしますのですよ、えゝ三十九度から、方々御醫者にかゝつても何の熱と云ふことが判らないのですよ。それでね、一度よい御醫者に診て戴いたらつて母も申ますから……。』

以前からの癖で一寸御首を傾げて仰在る可愛らしい丸髷姿！　御病人とは受取れない位「何時御結婚遊ばしたのつて、口まで出かゝつたけれど、此樣な處でおかしいと思つたから宿だけ御知らせしてお別れする。容體は叔母樣に聞いて戴くとして、私は御先へ院を辭する、時正に零時三十分。

あゝ私は疲れました。



婦女畫報の出現

◎月東海に躍つて波上金蛇を走らす。婦女畫報の誕生なり。

◎婦人一日の粧は一生の花なり、初島田の印象を去つてこゝに初丸髷を具体す。

◎萬金の子容貌あり、千金の子才名あり、他が姿色に加ふるに他が才藻を以てす、鬼に金棒。

◎玉の膚、月の眉、綠の髪、天然の麗質に加へて人工の粧を凝らす。

◎かくの如くにして人を羨殺し、人を惱殺し、又人



を艶殺し、人を凄殺するものは此の畫報なり。

◎畫報の記事は虛より出てゝ實に入り、虛實の間に人事を寓す。頗る異体なり、頗る新式なり、亦頗る破格なり。

◎畫報の記事は辛辣なり。辛辣人を殺し、辛辣人を活し。辛辣人を樂ましめ亦人を哀ましむ。東家の秘密、西家の隱微、東西貴妃淑房の芳聞、南隣北隣市井妖婦の艶話。

◎天下萬人花に對して花を觀る悉く愚人也。花に背いてこの花を見る、ソロモン以上の智慧者也。



現代女性の必讀誌





臺所雜記帳

△手の荒れたるを治する法

リスリンを寢る時に十分其の荒れた手に塗り、布片を卷いて夜具へ付かざる樣にして眠るのです。斯くする時は、二三夜にして必ずなほります。

△凍瘡を治する法

蕪を二つに割つて、幾回となく患部へすり附くるがよい。また煙草の莖を煎じて其の患部を洗ふもよし。一週間も經れば全治します。又凍瘡の未だたゞれずして唯腫れたばかりの時は、蕃椒を煎じて一二回洗へば全治します。

△蜜柑を永く貯へる法

無疵の蜜柑を選び、箱の底に椿の葉を敷き、其の上に蜜柑を並べ、又其上に椿の葉を敷き、成るべく蜜柑の摩れない樣にして密封し置く時は夏になつても、少しも變りません。

△硝子を接ぐ法

酢一合、牛乳一合五勺、鷄卵五箇の黄味を、十分に能く混和したる後、苛性曹達を練り合せて接ぐのです。

△松重豆腐を製法する法

淺草海苔を敷き、其の上に豆腐と鷄卵の白味をつなぎに入れたものを、海苔の厚さ一倍にのべしき、蒸して味をつけるのです。

△蟲歯の痛を治する法

蟲歯にて痛み堪へ難き時は、古茄子を煨灰にて燒き、之を細末にして、其の痛む歯に塗れば直に治ります、又燒酎にて含嗽するもよし、或は杉又は松脂を丸めて蟲歯の穴へ入るも宜し。又韮の實を燒きたるを石の上に置き、筆の管などにて其の煙を受け、之を耳の穴に當てる時は、耳より細き糸の如き小蟲出で、歯の痛みは速に治ります。

△生姜の蜜漬

先づ生姜の大なる物を選びて皮を剝ぎ去り、煎餅狀の薄片に切りて、之れに一回沸湯を注ぎ、速かに適宜の場所に廣げ、水氣を乾し、稍や堅くなるを度とし、更に鍋の中に糖蜜を入れ、また右の生姜を投じて煮たゝしめ、其よく糖分の浸みこみたる時を測りて、桶の上に笊を置き、其の中に徐々に抄ひ出し置き、乾きたる後、白砂糖をまぶし、器中に貯へ置くのです。

△押し銀杏の拵方

剝き銀杏を焙ろくなどで炒りて薄皮をとり庖丁の柄の方にて押しひしぎて、平たくし、煮汁醤油、砂糖で煮つけます。

△ふくめ八つ頭の拵法

入つ頭芋を丸のまゝ湯煮にして皮をとり・一寸位の角に切り・鍋に敷簀を敷いてくづきない様に其中へいれ、鰹魚煮汁をたくさんに入れ、醤油、砂糖を加へて煮ます、煮くづれない程にして火からおろし、其のまゝ煮汁へ五六時間以上浸しておいて汁をふくませてからたべます。

△フイッシユボールの拵法

何魚にてもよろしく、骨皮を去り、肉ばかりをこまかにたゝき、鍋にバタを入れて火にかけたる所へたゝいた魚肉を入れ、よくいため、ソースと胡椒をふりかけて交ぜます。次に馬鈴薯を皮を剝いて茹で、漉して、これにも胡椒と鹽を加へ、右の魚肉と交ぜ、あまり大きすぎない樣に丸め(一寸餘の丸さに)、少し平たくしてメリケン粉をつけ、鍋に油を少し入れた中に入れて揚げます。芋が多すぎると、揚げる時にくずれるから、魚類より少し少い方がよろしいのです二つ位盛り、パセリを付け合せ、ソースを添へて出します。

△鹽引鮭の玉子蒸しの拵法

成るべく鹽のあまい鮭を水につけて鹽を出し、皮をとりて、五分角位に切り鉢などへ入れて酒をひた／＼位に入れ、其まゝ暫くつけて置きます。鷄卵を割りて、鰹煎汁を玉子と同じ量くらゐ入れ、醤油をからすぎない程加へ、よく掻き交ぜて、右の酒へつけて置いた鮭を六切七切位を深皿へ入れ、玉子のかきたてゝのをかけ、蒸籠へ入れて蒸すのです。玉子がかたまるまで蒸して出來上れば、生姜の極こまかにきざんだのを上からばら／＼と少し掛けて出します。

△餅のかびざる法

酒樽の未だ香氣を去らざるものへ詰めるか、又普通の桶なれば其中へ酒を塗りて後ち餅を詰めそして空氣の入らざる樣に蓋をなし置くのです

△庖丁類の錆を生ぜぬ法

總て庖丁及び剃刀の類は汗の手・鹽氣のある手にて使用すれば、錆を生ずる故・使用せし毎に椿の油をもつて拭ひ、又は墨を塗つて置けば錆びません。

△シヤクを治する法

白砂糖をなめれば奇妙にとまります。

△漆の臭ひを除く法

新調の漆器などの漆の臭を除くには、米汁を微温にして數回滌ぎかけるか、又は數日間精米の中に埋めて置くべし、又豆粕にて洗ふてもよろし。或は風通しの良き處に曝し置くも可なり。

△米の小石を除く法

米を能く洗ひたる後、水を澤山入れて、桶を兩手にてゆすぶり乍ら、其米を水と共に笊の中へ流し込めば、石は重きゆゑ桶の底に殘るなり、其石を取り捨て、又右の如くすべし、斯くすること再三なれば小石は全く除かるべし。

いそがしや菫を摘めばつく／＼し　園女



懸賞繪合せ　花と女
當選者披露

◎懸賞繪合せ「花と女」は左の如く解答せられた方が正解者であります

福壽草（床飾）　梅（詠歌）
櫻（舞姫）　藤（御殿女中）
あやめ（花鋏）　なでしこ（夕涼み）
朝顔（水汲み）　萩（彈琴）
コスモス（女學生）　菊（貴婦人）
山茶花（酉の市）　水仙（煤掃）

◎正解者の中から規定により、抽籤の結果、左の十名を當選者と定め、賞品（圖書切手二圓宛）を贈呈致します

下總國古河町　永田潤子
山梨縣南都留郡瑞穗村西町　渡邊琴司子
東京市麻布區霞町二十五番地　鳥谷まつ子
大阪市東區瓦町五丁目　三浦雪子
福島縣平町胡摩澤百十二　永田やす子
朝鮮大邱千代田町　柿本好野
神奈川縣鎌倉扇ヶ谷　西松正子
東京市淺草區北淸島町七十九番地　星野鋭子
三重縣宇治山田市外宮前　高木ゐい子
東京市小石川區駕籠町五十一番地　笹原芳子



和歌

一等

○ 伊豫 渡邊梅子

酒船の上乘うれし大利根の眺め五十里春の風して

評、氣象高邁、調亦健。

二等

○ 近江 冷露

愛らしうほゝゑむ花にくちつけて蝶さゝやくよ天地のなぞ

評、理に落つる嫌なきにあらざれとも、眼前の小景を世態人情の上に大看し去り、解して天地の謎語となしたる、面白し。蝶よ、胡蝶よ、菜の葉に止まれ、留めて止まらぬ戀の道など云ふものと、其着想を同うす。

二等

○ 尾道 小林さと子

胸かざる時計の針のすゝむごと花のをとめの時はすぎ行く

評、胸飾る時計の語に、靚裝の麗人を見、指鍼の刻みに、花顔の移ろひ行くを今更の如く驚かしむ。亦好詩。

三等

○ 牛込 守屋よしみ

春風は柳の絲によりかけて霞のきぬを縫はむとすらむ

評、詩詞運用の巧を取る。

三等

○ 本郷 片岡浪子

ひとむれの天女乘りたる春の雲さくらに降る日は近づけり

評、用詞何ぞ其れ斬新なる。

三等

○ 小石川 下田有喜子

ともすれば人の情にすがらむと哀れ心をさかしまにおく

評、自ら哀れ心をさかしまに置くを覺えたる時、感愈深かりしなるべし。下句奇。

三等

○ 下關 山本芳子

長門路の麥生の上の朝月に旅の心の淋しさを遣る

評、平安没落の長門路だけに、感慨新なるものあるを覺ゆ。

秀逸

○　横濱　原　瑠璃

玻璃越しにむろの花見てあたゝかき春の香を戀ふわれや少女子

評、着想面白し。

○　須磨　前田　敏

消え殘る島の燈火うすれ行きて波より白む浦のあけぼの

評、美はしとも美はし。

○　大阪　野村德子

有明のまくらべ近う鶯は初音もらしぬ淡き香もして

評、末の一句ありて、詩味俄に添ふを覺ゆ。

○　前橋　時子

たまゆらの雨の乳房をそと抱きて夢を夢みる山の湯の朝

評、なまめかし。

○　下總　木末白花

おもうどち嫁ぐと聞けば胸に咲く名なし小草の花のさゆらぐ

評、下三句殊に妙。

○　靜岡　北川和子

かこひめの門の柳は絲たれて浮氣の風にならひとぞ見る

評、小唄めけどまたひとふしなきにあらず。

○　丸龜　春子

世を呪ひ人を呪ひの譜は成りてかなする我の指の細りよ

評、指の細りは、千萬無量の眷恨芳怨を説明す。

○　横濱　晝間季子

相模野や桑畑つゞくかたかげに紅き桃さく彌生となりぬ

評、田家平和の氣象を見る。

○　本郷　佐久間千代子

思ふこと胸につゝみて物言はではかなく笑みて相別れけり

評、婉約。

○　佐賀　澁谷　靜

恐ろしき昔語りの繼母も今は我名となりにけるかな

評、嫁期をおくれて子ある人に嫁きたる悲しさを歎ひしものなるべし
何等の悲痛ぞ。
自ら繼母の名に泣く母は慈母なるべし

佳作

○　本郷　横田佐久
蘆の葉に霙たばしる暗き夜の入江の舟ぞわが心かも

○　大阪　金田初子
人知れず春ながかれと笑むごとに紅のほゝ我誇りかな

○　相州　山田萩花
たよりなき身は浮草の其の如くさだめなき世を流れ行くなり

○　飛驒　萬京子
きさらぎの雪うけてみゐむらさきに金粉などをおきし小扇

○　根室　齋藤みつ
吐く息の白ふとけ込む冬の街馬橇の馬はいきづきてゐぬ

○　淺草　本莊安藝子
花瓦斯は緋幕のかげのうつくしき役者の額に照りなやむかな

○　尾張　横山しま子
一刷毛の上總の山に限りして紺青流す春の海原

○　下總　谷口麗子
いく度か裂くべき文を頬にあてゝまた忍びなく夕ぐれの窓

○　小倉　千代子
雨ふれはわりし昔ぞしのばるゝ海ぞひ町の温泉の宿

○　京橋　古橋興惠子
うららかな春の大路を音もなくゴム輪のすぎてよき香のこれり

○　鹿兒島　松崎くま子
陸奥の國や濱街道の春風に今日も引き行く馬の鈴かな

○　淀橋　原喜代子
柔かき小草の褥こぼれ出る蝶の羅羅の美くしきかな

○　横濱　山内小夜衣
春風は鎭守の森と破れ棟と裂けし幟をハタハタと吹く

○　滋賀　堀口なみの
君多く語らぬ故になつかしく語らぬ故にさびしかりけり

○　下總　ふき子
君が文いく度となくいだし見て涙ぐむ夜を雁の聲する

○　新潟　田中吉野
春雨にぬれ燕飛ふ青柳の堤の上を蛇の目傘行く

○　熊本　白萩
春の夜のうたゝねに見る少女子の夢はいとよし紅の色

○　大分　吉松よし子
春の雨しめやかに降る夕暮を小窓によりて君思ふかな

○　大阪　濱ちどり
今日もまた君は來まさず更けゆきぬまつ身につらき風の音かな

○　臺北　小泉勝子
やみもなほかくしかれたる梅が香はよはき乙女の戀に似たるか

○　愛知　榊原愛子
野の末の山は繪のこと夢のこと春雨けぶる若草の道

○　廣島　古田よし子
ふわふわと青き木の間を雲流る思ふことなく窓に居よれは

○　朝鮮　渡邊すゑ子
瓦斯燈の火いと青う夜更けて重き響ふる山里の驛

○　宇都宮　佐藤文子
ほの白き月の光にたどり來ぬ君と語りし夢追はむとて

○　濱松　馬淵千代子

かるたとる乙女の春のまとゐにもまちらぬ身とはいつなりにけむ

○　尾道　小林縫

美き人の袂からげて小鼓をしらぶる窓に櫻ちるなり

○　廣島　平岡壽子

樂しげに人に見られて塲へ離き寂しき子をば少女とや謂ふ

○　函館　藤本鳥羽子

口にこそそれとはいはぬ瞳もて君をこふるとつけにしものを

○　本郷　田村いく子

大川の月夜さびしく降る雨にしづごころなく散るさくらかな

○　名古屋　絲若柳野子

ふるさとも春風吹かむ花咲かむ木綿織る君の胸も和ぐらむ

○　深川　なでしこ

くる草紙讀みふけりたる雪の日は小春治兵衛の戀に泣くかな

○　東平　渡邊椿子

かにかくに十九の年をおそろしきものにかぞへて初春に入る

○　堺　岡野千代子

肩上げは皆おとされぬ愛でゝ來し京人形よ紅き手まりよ

○　郡山　谷村啓子

結ひそめのかみのにほひの失せしよりあるじの君は酒に亂るゝ

○　大阪　鳳地秋琴女

打よする波のあやさへわかぬまで靄こめたる春の海原

○　福山　松下滿龜子

寒行の鉦の聲もあわれなり月夜にさむきひな僧の影

○　山口　熊代政子

思ふ度び其の思度び重なれる鉛の様な重き悲しみ

○　山口　林はる子

黒い花血の色の様な落椿つれなき人の心臟にも似て

○　札幌　赤羽節子

枝しげりみ空にたかき松が枝に霧かとまがふ田鶴の一むら

○　信濃　吉川多美子

戀はれ戀ふおもひの路のゆきかひに音をもてつなげあはれ玉琴

○　福山　文子

世をも捨て身をも捨てにし身ならずや何故かくはこゝろ苦しき

○　濟國　幽子

ゆるしませ君が情の此日頃うすれ行やと恨みても見し

○　山口　國安きわ

みてづから織りてたまひし初春のこの新錦世なきを泣く

○　金澤　大橋梨花

この宵を鼓まくらにうたゝねの夢圖かなるあで人や誰れ

○　深川　なでしこ

桐散る祇園の夕一力へいりし舞子の可愛ゆき瞳

○　下谷　瀬川きん

春雨の小傘かしけてあまひゆく京都なまりの結綿の人

○　大阪　小泉貞子

櫻月夜錦のとばりたれこめし眉美くしき君に琴ひく

○　橫濱　高橋壽美子

甲板に片破月をながめつゝ大浪さわぐ相模灘こゆ

○　麹町　牧野鐵香

春は未だ島の鳥居に雫する雪の白さにくれてゆく秋



俳句

天

風車遠き里わや花霞　愛知　加藤はる子

評　眼前の景、平和の句

地

花散るや寄居蟲這ひ居る岩の角　北海道　熊子

評　磯邊の春、如此美はしきはなし

人

五形田や溫泉に近き里の土はてり　廣島　新見芳子

評　此里元來病者なし

秀逸

梅ちるや宵月うつる丁字風呂　埼玉　林畝子

評　化粧の襟も未だ寒し

鑛山町に魚籠届く日や桃の花　下關　山本芳子

評　讀書にも飽きてけだるき日也

洛陽の柳に灯す夜市かな　京都　船木夢子

評　春雨の景も亦思はる

城下町の商家振はず遠霞　岐阜　登美子

評　霞の配合によりて活く

紅鳥の來て水淺し春の川　群馬　高橋涼風

評　美しき句なり

佳作

張板に散る花くだし蝶飛べり　埼玉　荻野さく子

輪塔の影や椿の走り水　芝　遠山久子

青笹の小鯛に降るや春の雪　茨城　今泉義子

團欒して見る繪草紙や春の風　鹿兒島　波江野むら子

巨石名殘る舊港や北を凪ぐ千鳥　鹿兒島　松崎しま子

もり砂や御垣靜かに松の花　新潟　宮澤きん子

春雨に濡れし磯邊の小貝哉　大分　高橋菊

祝き事の首尾轉れり御國唄　越後　藤原好子

一ツ家を圍みて青き柳かな　靜岡　原崎富士枝

鶯や大樹に山路盡きて谷　淺草　大谷染子

春雨にけぶる柳の風情かな　兵庫　菊原いま子

左義長や遙に雪の山晴れて　大阪　西村みち子

炭斗の底に埋もるゝ句想あり　横濱　大村鈴雨

軍を統ぶ參議の庭や梅かほる　越後　横村みれ子

夜の風に梅ちる庭の讃歌かな　瀧の川　水月
牛れむる鼻に陽炎もえにけり　大阪　寺部琴子
振袖に殘るかほりや彌生盡　新潟　東樹普子
髮洗ふ盥の湯氣や陽炎す　同　東樹たい子
寒の日を普茶の設けや餘寒人　横濱　鈴蘭
よき人に文などかゝん松の内　埼玉　播摩とり
辻の灯にさゞえ燒く香や春寒し　大阪　西村みち子
お手毬や紅葉の御手と申そこそ　備後　高尾さかゑ
泣く稚子に乳やるうつゝ布團かな　伊豆　鈴木袖子
白梅に賢婦の碑文讀みけり　長崎　永瀬清子
學童や春風行も通ひ馴れ　靜岡　北川かづ子
縁目の庭淨し松の内なれや　埼玉　長岡濱子
白菊を深夜に見たる夜さむさかな　靜岡　松島順子
船うたもよけれ柳に淡き灯　備後　田鶴子
冴る夜や盧に映えて實を傳ふ犬　長崎　牛島富美子
業平と稚旗ろ夜中の雛哉　佐賀　久富とし子
殘雪のみどりに消ゆろ麥田哉　相州　戀母女
雛の瞳眠るかそれも董叢　小樽　秋野秀香女
行雁や田雨にかすむ夕灯　巣鴨　田中仙子
盆栽の梅も早し京の市　名古屋　吉川かぎ
訴への門打叩く吹雪かな　京都　中野ふみ子
二日灸保險勸誘員の來し　奈良　向山喜代子
富士遠見雪晴れに棲ろ妹　小石川　越沼艮子
合祀してより此方や梅薫る　滋野　玉歩
寒明けのふりかへりたる病かな　愛知　春子

風土馴れてこの病閑や春の雨　本郷　原琴子
海棠に雨ふる夜中の朧かな　兵庫　毛利政子
逝く春や母となる身の窶れ樣　越後　金塚文子
長閑さや輪移り高に胴太鼓　吳　出木谷まき
灯籠や梅寒き昔のなつかしき　小石川　中川喜の子
消え殘る虹の遠輪や夕靄　香川　大井久子
梅の主眞史もありて鷄飼ひす　福島　鈴木ひさの
春日野に巣喰ば歌に雲雀かな　尾張　靜子
暮れかぬる鷲棲も夕榮えぬ　豐後　藤原竹子
桃里も近し舟曳靄む也　越後　新井紫花
白椿飄れて暖き日なりけり　岡山　民草
餌を揺れば啼く文鳥の長閑哉　秋田　あやめ
春の夜や英雄に男婦配し見る　朝鮮　木元雪子
誰が戯れ蜜蒲て行くや江戸の春　廣島　久保田敏子
才媛は病みぬ紅梅散るに惜し　淺草　奥田稔子
草に水に春色滿てり馬も馴れて　神戸　山田あさの
蘆の芽や江に蜆堀一ッ舟　神戸　堤久子
冴返る灯や刃研ぐ水にこぼれ花　神戸　堤すゑ
かゝる夜の雪に春女も擱ぶとかや　長崎　太田れき子
衣運ぶ女に春の灯の紅し　四谷　中村成子
陳列館の横の出口や寒牡丹　岐阜　松原正枝
菜の花や藁屋ばかりの里寫し　大阪　寺田ひで子
月夜砧打つ春邊機杼は來ず　神戸　上田俵文子
歌遊行野來て爽厳を捲く廬ら　朝鮮　新庄なほ子
牛蛙いと聞く乳含み草春の風　東京　源あさ子



誌友倶樂部

▲花ない寂びしい雪の今を、かげろふ燃ゆる春の野邊にもをとらす顔に、增刊「花籠」に集まりし、紅黄白紫とりどりの花の色香!、一等の選にお上り遊ばした坂部淸子様の「心の花!」、海路はるけきハンプシャーに、永久にねむります愛の化神、ナインチンゲール孃の面影、今更ながら其雄々しきみ姿、目さきにうかぶ思ひいたしました、玉露様、いつもながらのお筆の綾!、言葉の花!、人の何ぞと問はぬうち、消えても露は汚れが無い!、都を遠く離れたる北海に住ひいたす身は、寄稿家の皆様に、夢にだもお目もじかなはぬ悲しさ、巴港なる百合子様、其後御機嫌ようゐらつしやいますか?、春とは申せ、御同様北路のきさらぎの風、臥牛おろしもはげしうございませうに、御身おいとひなさいませ、立待岬、波がしらに破る故郷の月影、戀しう偲んで居ります、(北海道大沼はる子)

▲物集先生の「在原業平」、ほんとに面白くて、日々漫歩して行く私の頭には、よいおくすりで御座いました、好き人を慕ふの情の深いのは、美しいものでございます、業平朝臣、高子の姫の御心情のほど如何許りつらく悲しく在らせられしかと、身にしみておいたはしく思はれます、心ない人のとやかく申すのは、美しい心情を解しないものと思ひます、何卒毎號面白いのをお願ひ申上げます、(麹町にて園世)

▲内地では、隨分亞米利加熱が盛んの様で、只、米國に行きたい、行つて見たいと云ふのみで、堅い決心もなくて、中には寫眞結婚などして渡米なさるお方も多くある様ですが、非常に危險な事と思ひます、私の知つて居る人に、やはり寫眞結婚で參られたお方がありますが、今では非常に後悔して、泣いて居られます、何うか諸姉様方よ、決して寫眞結婚なんてなさらない様にお願ひ申します、愈々渡米して事をなさんと、堅い御決心さへお有りでしたら、なんぼ女子でも男子の方に負けない位ゐには生活して行けますよ、そして渡米する手續も他方面に幾らも好い道があると思はれますのよ、何んの目的もなくて渡米なさるゝお方は、とんだ狼の餌食になりですよ、私も米國の片田舍で、本誌を唯一の友として淋しく暮して居るものです、何うぞ末永く御交際を願ひます、(中村キミ子)Miss K. Nakamura P. O. Box 522 Pasco Wash U. S. A.

▲白桃様の「うたものがたり」、面白く拜見致しました、似而非連歌の終り「米の三升」云々は、私思はず吹き出しました、以後もあのようなのを願ひます、(神奈川波多野龍子)

▲記者様に申し上げます、米子様のお筆になつた『冬來る囁き……鏡子様』などいふやうな繪には以後はどうぞ止めて下さい、あゝ美くしいと思ひつめて居た内藤千代子様の想像畫は、あまりみにく過ぎました、(喬子)

▲内藤様のホネームーンが出ましたのね、大變な評判なので、早速拜見いたしましたが、私失禮ながらあんまり感心致しませんでしたわ、讀んでしまつてから頭の中に少しの感じがありませんの、薄べらな、奥行のない様に存じましてれ、あらあら私としたことが、とんでもないわる口ばかり申しましたわ、これでも内藤様崇拜者の一員なので御座います、(月江)

▲牛込りよ子様、御同情致します、拗れ者や變り者と云はれる様になるのも、皆其の境遇からで御座いますわ、私も悲しい身の上、過去半生は涙の歴史ですのよ、お差支へなくば誌上で御交り下さい、阿波のしぐれ女様、「驚く手紙」、「心の日記」、「嫁ぐ人」、御望みなれば、私差上げてもよろしう御座います、御住所お知らせなさいませ(横濱須美子)

▲私は只今寂しき田舍に生活して居ますが、昨冬小兒を連れて久し振に町に出で、あちこち散歩しました時、小兒が珍らしがり、あれは何ですと尋る儘、適當に説明して聞かせつゝある内、貸座敷の前を通過しつゝ、小兒に聞かしむる積りにあらざりしも、此れは女郎屋と口滑らせしに、小兒は忽ち女郎屋とは何を賣る所ですと問ひたり、私は説明に窮し、何ども答へざりしが、小兒は屢々問ひかへし、大に困りしことあり、小兒の前にては言語もよく

よく注意せざるべからざることゝ思ひました、
(山形縣最上郡萩野村陸軍官舍内浮須良子)

▲十二月號にてお便り下さいました不知火海の邊に居ますお方、いろ〳〵お深切なお言葉、有りがたくお禮申上げます、まあ、日奈久から六里の海邊、さぞかしいゝ景色でございませう、おうらやましう存じます、私は熊本に居りましたの、あの住吉の汐干や、日奈久の海水浴、懷かしうございます、何卒いつまでもお交り下さいませ、當地も瀨戸内海に面して、大島小島の間を風帆がゆきゝして居ります樣は、中々風情多くて、海岸の白砂靑松も又美はしうございます、お所さへお報せ下されば、當地の繪はがきお送り致します、時節柄、折角御用心遊ばされよ、諸孃の内に、松平鏡子樣のお寫眞お持ちなさる方は、何とぞ誌上に、お出し下され、お住所や學校等御存じの方は、此欄にておしらせ下さいな、さよなら(伊豫國新居郡西條富田花)

▲千代子樣つて、私今に不思議なことがありますの、去年の春東上して、あの千代子樣のゐらつしやるくげ沼にも遊びました、そしていろいろ聞いて見ましたけれど、とう〳〵御住所が知れなくつて、心をのこしつゝ、こちらへ歸つたのです、御存知の方は教へて頂戴な、(神戸みを子)

▲野菊樣、一體如何遊ばしたのでせう、大變しづかで居らつしやいますのね、私野菊樣の筆大好き、鏡子樣のも……、(千葉桃われずき)

▲太田三郎氏の書物繪、私一番氣に入りました、なんだか大層引入れられるやうですね、内藤さま、おふるひ遊ばせ、攻擊しながらやつぱりあなたの崇拜者ですわ、ホホヽヽ、(赤坂すみれ)

▲京都の小芹樣、おとゝしの暮れに指をたいへんお痛めなさいましたとのお便りいたゞいてから、あなたがどんなに氣になつてゐましたでせう、でもこの頃はなか〳〵お振るひのやうですのね、やさしき小さな芹よ、いたましい夕風に貝ガメンのやうな花びらは散つて、靑い葉がかなしくふるへても、おん身のうつくしい姿を流しゆく小川のはてには、野の毛牽ペンてふ神が、み空はるかに淸き愛の歌をうたひてあるものを、おすまひおん明かし下さいませ、(あわれ)

▲詩友の皆樣、朝顏の種子御入用でしたら、參錢郵券五枚封入お送り下されば、同種子百種交り(朝顏培養法附)を分與致します、(大阪市南區天王寺大道三丁目四二六二松澤豐子)

▲磯千鳥樣の「乙女心」、ほんたうによかつたわ、私磯千鳥樣のお作大好きですの、此後もあんなようなのを澤山だして頂戴な、(函館露子)

▲近頃は月毎に女學世界が壯んで、本當に面白く讀んで居ります、皆樣又お心安く願ひます、それからちと御無心乍ら、どなたか尾崎紅葉先生の俳句集をお持合の方は、相當の價格でゆづつて頂き度う御座いますが、(深川富川町三加藤登子)

▲野菊樣は、先に教を受けた校長先生の奥樣で、それは〳〵優しいお美くしい方で、私等を大層可愛がつて下さいました、(埼玉楓花)

▲宮城縣仙臺市の里の樣、私は米國桑港に居りまして友無き少女でございますが、當地をおしたひ遊ばす貴女樣のお事を誌上で拜見致しました、つた無い者でございますが御交際をいたしたうございます故、御住所を誌上でお知らせ下さいませんか、當地の繪葉書も色々と持合せて居ります、御交際をお願ひ申ます、(デージー、)

▲瀨美露子樣、あなたも愛讀者でいらつしやいますのね、私は先月の懸賞繪合せ、あの六號活字の小さい文字正解者の名前の中に、あなたのお名を見つけた時、どんなにおなつかしうございましたらう、その後はとんとおたよりもいたしませぬが、私は元の妹、あなたが御在校の時分、あの蘂美しき夕に、校庭をさすらひながら、故小妹の歌を歌ていたゞいた者でございます、誰だかわかりまして？。それから内田かど子樣、此頃ちつともお便り下さいませんのね、いかが遊ばして、また昔の樣な面白いお手紙下さいましな、どうぞお願ひ(埼玉雲路子)

▲釜山の秋岡龍子樣、私大贊成よ必らず盛んな誌友會を開きましよう、其日の早く來る樣に樂しんで居りますよ、(釜山秋風凉子)

▲私は女學世界と云ふ名を聞けば、直に本誌をモノポリーしてゐらつしやるかの樣に思はれます内藤千代子樣を、次では磯千鳥樣を連想致しますのよ、ですが實は先日まで皆樣の中の或方と同樣に、お二方が男女何れの方でゐらつしやるかに迷つてゐましたのよ、所が最近の報はかうですのよ、磯千鳥樣は早大の方で、千代子樣は鵠沼の一家に人妻として樂しく暮してゐらつしやる二十三四の方ですつて、千代子樣は去年の一夏は逗子の宿屋に居られましたとか、その折御すがた拜見した方に聞きますと、實にスヰートホームなどお書きになるからは、如何にもおすがたは現代的ハイカラのタイプの樣に思はれ

ますが、……色のお黒い、おつくりばえのない方でいらつしやるつて……、顔が女性美の缺てとしましたら、私は千代子樣に同情いたしますわ。（衛香）

▲乙女ごゝろお書き遊ばした磯千鳥樣、何んとはなしにお慕しう存じます。此の後も何卒よい記事をお願ひ致します。（仙臺清香）

▲麹町の園世樣、本當にお察し申ますわ、何だか自分の事の樣に思はれて、知らず〳〵涙がこぼれました、私も此の間まで麹町に居りましたが、矢張り夫が胸の病ひで、二つの子供を抱いて夫の國へ歸りましたの、意地わるき繼母、筆にかきつくされぬ樣な我家庭、どうしてそんなによく似て居るんでせう、併しれ、園世樣、此の廣い世の中には、まだ〳〵不幸な人は澤山ありますのよ、いくらなげいても限りがありませんわ、それよりか氣を大きくお持ち遊して、お子樣の御成育をたのしみに、お體を大切が何よりのつとめですわ、どうぞお差支なくば御住所をお知らせ下さいましな、お手紙でなりとも御なぐさめ合ひたうございます、四谷鹽町の西川樣、私も園世樣に同情の一人　何卒以後お交際をお願ひいたします、（奈良縣生駒郡南生駒村小平尾樫本千鶴子）

▲私は米國中部の或る學校に勉學中の者です、語るに親しき友達とてもなく、只故國より送り來る二三の雜誌を友として、僅に其の日を樂みつゝある者です、故國の姉樣方、今後は繪葉書文通等の御交換を願ひます、私よりも當國の風景風俗の繪葉書、數面白き當國の事情等、御通信申上げます（スミレ）S. Miyasaki 1120 Gaugh St. San Francisco. Cal

▲「花籠」にうつゝ世の義理のしからみ解きかれて、といふ歌をお出し遊ばした染谷まつ子樣、おさしつかへなくば、御住所お知らせ下さいませんか、何とはなしになつかしくて、もし御交際して下されば、どんなに嬉しうございましよう、（下關俵文子）

▲諸友の皆樣、花鳥を愛づるの時も愈近づきましたのれ、しかし花にお心を奪れぬ樣御勉强遊ばせ、少年老易ですもの、樂の春もいつか覺めて悲しい秋とはなりますかられ、一寸の光陰も惜まれん事を願みます、私は草深き田舍で山鳩やみゝづくの聲を耳にして淋しく暮して居ますの、皆樣どうかこれからお仲間へ入れて頂戴れ、それから姉樣方にお尋れ致しますが、近頃女學世界の發展に伴ひ、我が談友倶樂部の勢の盛なる事は、誠に喜ぶべきです、けれ共それに反して讀で涙の出る樣な事がありますの、もつとも可愛い事や、人をほめてある方のお心は實にも揚ますが、惡く書かれる方のお心の程が誠に推し察れます、あんな事を書かれては、女德を缺きます皆樣如何でございませう、（愛媛女）

▲二月號の清香樣へ、業務の餘暇副業に出來る容易い内職が御座います、資本も何も要りませんから、御遠慮なく御照會下さいませ、御周旋いたします、（京都岩上高辻上る藤谷吳服店内ふじえ）

▲牛込のりよ子樣、深く御同情致しますわ、拗れ女の一人……、なぜですの？、皆樣、私は淋しい山里に日を送つて居る者でございます、何とぞお交りの程なりがひ上げます（羽前國にてきよ子）

▲諸友の皆樣、春の日は浮き立つようですネ、私は高等女學校を卒業して、一年を夢の樣に過してしまひましたの、ことに本誌を無二の友として居るのです、皆樣の中に書畫のお上手な方は、何卒お惠み下さい、又皆々樣と手藝品の交換なども好みますわ、繪葉書なども交換致したうムます、次に在米の皆樣には、親しく交りを願ひます、私も都合に依つて、渡米致すつもりなのです、先づは皆樣、失禮でした、ホヽ……（茨城縣那珂郡神崎村大字本米崎武藤齋子より）

▲若葉樣のお書きになつた『友のゆく〳〵』は、ほんとに面白く讀みました、私の友達の中にも、やつぱり松井さんによく似た哀れな方がありますのよ、只今何處に居らつしやるか、一寸も分らないのです、マアよくも私等仲間に似ました事、何卒、この後お振ひ遊ばして頂戴な、（福島縣後藤文子）

▲五六年前の本誌と、此節のとを比べて見ますと、大變な進歩が見えて嬉しうございます、物集先生のお文は、眞に面白く、何よりの樂しみに拜見いたします、内藤千代子樣のことに就ては、大分皆樣御さわぎでございましたれ、男子、老孃！、皆樣の御推察御尤もと存じます、けれ共要する處、私共は愛讀者なので、作物をよむのですから作者が男子であらうが、老孃であらうが、そんな處まで深入りして研究するの必要はないでしよう、かつて藤田いさを樣もこんな事から、遂に筆をおなげになりましたが、……斯いふ事から女は嫉妬深いなど云はれるのでは

ないでしようか、それから和歌は新體交々出て居ましたが、此節では新派に限られてしまひましたれ、以前の如く折々舊派を出していたゞくことは出來ないでございましようか、（松の花）

▲本年一月號の本誌本欄に、京都西堀川三條上ル吉川様内つれ子様と仰るお方が、自分は幼い時からくせ毛で困て居たのが、或る藥學者のおかげですつかり直つた故、同じくせ毛で困て居る人は、三錢切手封入で申こまれたら、其の方法を敎へるとの事でしたから　切手封入で申込ましたら、すぐに御返事が來て、其のくすりを分けてやるから、小包料を送れとの事でした。少し變だとは思ひましたけれど、よもやだまされるのでは有まいと早速三錢切手五枚封入して送りましたが、それからは梨のつぶて、何の音さたも有りません、實に驚き ました、（くせ毛女）

▲尾崎恒子様のお筆に上つた清子様の身の上同情致さずには居られませんわ、栃木水沼の千葉様、やはり本誌を愛讀していらつしやるでせう、私相變らずですの、友のゆくへ、大いに得る處が有りますのれ、誌友の皆々様誌上でお交りを……、水戸の增刊お持ちのお方、住所をお知らせ下さいな、次號で……（福島縣白河にて野の花）

▲内藤様、松平様、村雨様、紅梅様　樂んで待つてゐますから、どうぞ……、内藤様の才筆、村さめ様の沈痛、紅梅様の輕快、いゝコントラストだわれえ、また玉露様のもすきよ（芝小百合）

▲玉露様のお作、おやさしくて大好き、益々お振ひ遊ばせ（下關市西南寺町下村安子）

▲二月號の誌友倶樂部に投書なされた、函館の・N子様、おさしつかひなくば、下名まで御住所と御姓名とをお知らせ下さい、次に私は繪葉書の交換をお願ひ致します、特に海外にお住ひの方は一層親密に致します、（宇都宮市川向町五十一青木よれ）

▲川上葉子様、誠に恐れ入りますが、是非手紙差上げ度うございますから、下名まで御住所お洩し下さいませ、（下谷區竹町二十八志訪方館野くに）

▲内藤さま相變らずお作がお上手でございますのれ、松平鏡子様、ます／＼お振ひ遊ばせ、記者様、女學世界にも編物の栞出して、種々の編物の仕方お敎へ下さいませ、又内藤様、松平様、及び愛讀者の姉様のお寫し繪出して下 さ い ませ、（山口萩にて清子）

▲渡島のはる子様、膽振の女様、何だかおなつかしうございます、私も三年前には北海の北端に居りました、以後御交際を願ひます、名にしおふ北風寒き北海の冬、御身おいとひ遊ばせ、（夢子）

▲諸姉様より美くしき繪はがきを交換下されまして有難たうございました、當米國の貴女よりも美くしい繪葉書を被下ましたが、お所が消印の爲にわかり兼ねます故、誠に申兼ねますが、も一度御住所姓名を明らかに書いて下 されませ、早速返事を出します、尙又海外の諸姉様と繪葉書い交換を　ひま、（京都押小路通麩屋町西入安居内船木〆子）

▲記者様、松江美佐子、のお作の手がるにできる辨當の本はございませんかお知らせ下さいませ、（京都小島かよ）——日本橋區通り一丁目大倉書店から出て居ります、

▲私しは始めて誌上で御仲間入るしていたゞきます、數年の間唯一の友として居ます女學世界は、日に增し錦を飾つて來ました、之れも記者様始め姉妹様方のお力による事と深く感謝に堪へません、私は女學世界をよう／＼讀みうる淺學の田舍者でございますが、皆様のお筆をおふるひ遊ばすにつけていつもうらやましくてたまりませんが、あきらめて居ります、しかし奥山の埋木で一生を送るのも殘念ですから、せめて音學か手工の學校かへ入學致し度く思ひ居ますれど、當地には理想の學校がございませんから、花の都へ上りたうございます、（神戸にて紫陽花）

▲大阪の本誌讀者の諸姉さまへお願ひ致します、私は大阪府立病院か回病生院の見習看護婦を志願致すものでございますが、何卒御深切な以つてその手つゞき及び御住所おしらせ下され度、一重におねがひ申します、（神戸一少女）

▲ネー皆様、私し十五の夏から本誌の愛讀者となりましたの、優しい皆様方の御文章やお名前拜見致しますたびに、胸をとゞろかしてゐましたワ、でもネ、まだ小供ですもの、お仲間に等は夢にもとあきらめてゐました、しかしもう十七になりますからネ、可愛がつて頂戴ナ、以後どし／＼投書致しますから、惡い所はおなほし下さい、（名古屋高女住子）

新刊紹介

○**花袋文話**（田山花袋著）

文藝と文章とは、殿薦なる意味に於ける人生の眞相なり、文藝即人也、即命也、文藝と文章との精蘊は、現文壇唯一の小說家なる著者一流の犀利なる批評眼に映じて、遺憾なくその實相を現はせり、一讀明治作品の研究となり、現代小說の文章觀となる、收むるもの描寫論以下十數篇、江湖の一讀を薦むるや切なり。（定價八拾錢、博文館發行）

○**詩集『曉鐘』**（土井晚翠著）

甘柔千萬の口語詩や新體詩の間に立ちて、著者の詩はつれに異彩を放つ。本書は十年以前出でゝ大喝采を博したるもの。事情ありて絕版しこゝに年あり。今、改訂十一版を機として大增補を爲し、四六判に改め價を引き下げ美裝して出でぬ。沈める鐘再びこゝに高く鳴りわたるべきか、また慶事たるを失はず。（定價四十五錢、神田區東京堂發賣）

○**ホネームーン**（內藤千代子著）

スヰートホーム一度び出でゝ洛陽の紙價爲めに貴く、千代子式なる新語を生ぜしめたる彗星的才女は、再びこゝにその文を集めて本書を公にせり。未だ雜誌に載らざりしも三四あり。例によつて例の筆致、前號に紹介を忘れたる間に、早くも七版を重ねしと云ふ。亦た多くを贊せず、最も現代的の書として讀者にすゝむ。（定價六十五錢、博文館發行）

○**快男兒快擧錄**（河岡潮風著）

著者、曩に冒險英雄譚を著はして痛快なる筆は世の青年の憧憬の的となる今亦本書を出して破天荒の快擧を爲せと叫び、あばれて、あばれ拔けど號す、著者一流の怪文字總〻として疾風の如し。（正價五拾五錢、東京堂發行）

○**家庭と開運**（田中菊次郞著）

本書は深く佛敎を信ずる一婦人の、著者に開運の意義を問へるに答へたるもの、自己開運に資せんと欲する者は、本書を讀め、先天の運、後天の運、開運十則共に金玉の文なり。（定價五拾錢、前川文榮閣書店發兌）

○**樗牛文篇　文は人なり**（姉崎嘲風著）

文は人なり、これ現代に超然たりし樗牛の文章に對する覺悟なり、姉崎博士樗牛文篇の粹を集めて編纂せられしもの、文章を讀まんとする者の看過す可らざるもの。（定價壹圓、博文館發行）

○**歌集山河**（金子薰園著）

著者の近什を集めた者で、見ると、著者の歌風は此頃ますく冴えてゆく樣である、一二首をこゝに記して見ませう、晚夏の京都に入れば蒸すごときあつさの中の青き山河、三階の籐椅子により露白き四方の山べのあかつきを見る目さむれば紹蚊帳の外の青山の山ぎはあかみ京の日は出づ。（定價金四拾錢、麴町區飯田町新潮社發行）

○**自　傳赤裸の人**　ルーソー（堺利彦譯）

佛蘭西大革命の點火者として、『民約論』『エミール抄』の著者としてルーソーの名は今猶ほ吾人の耳に新なり、波瀾重疊、神出鬼沒なる彼が生涯は自ら大膽にこれを告白して餘すところなし曩に樂天囚人を著はして達識能文の譽ある堺氏今やこれを譯して、彼が眞面目を傳へんとす（正價九拾錢、丙午出版社發行）

○**婦人解放論**（今井政吉著）

本書は獨逸人クレパッツ女史著、婦人解放の危險」及びハーケ女史著「眞の婦人解放」を基礎として泰西の婦人解放に於ける諸思想を綜合統一して紹介したるもの、今や婦人問題喧傳せらるゝに當りて本書を得たり、裝幀優美好個の珍袖なり。（定價卅五錢、精美堂發行）

○**小學校に連絡せる家庭の敎育**（山松鶴吉著）

著者は久しく高等師範に在りて敎育に携はるの人、現時兒童敎育の隆盛なるにつれて、その缺陷も亦夥し、著者此處に着目する所あり、その研究の結果を公表せらる、世の親たるものゝ、必らず讀まざる可らざるもの。（定價壹圓、敬文館發行）

○**和歌入門**（佐佐木信綱著）

題して和歌入門といふ、著者は現代歌壇の宿老主として短歌初學者の爲めに、その平常の蘊蓄

を吐露さる、附錄歌題と作例は古今の名歌各三首宛を添へて、いとも懇切を極む。（定價五拾五錢、博文館發行）

○通俗女子日用文（小野美智子著）

近時女子の日用文に於ける平素の修養を疑ふ聲喧し、著者は平易實用を旨として、專ら女子日用文の模範を示せり。（定價四拾五錢、隆文館發行）

○夜雨集（横井夜雨著）

我に不斷の蟄扉にあり、寂しけれど清し、誰か我が日中の靜寂を疑ふや、夜雨の夢や水の如し、流れ／＼てこの一篇をなす、七本櫻　傀儡子、お才の圖へ外十有七篇、散文に憧憬れんと欲する者は本書を讀め。（定價八拾錢、女子文壇社發行）

○修養四書（松村介石著）

現時我が國の思想は波瀾重疊、潮流急なり、世の青年の之が爲めに漂はさるゝもの、溺るゝもの尠なからず、本書は之が救濟を主眼として、專らその精神方面に於ける蒙を啓かんとす。（定價壹圓、春秋社書店發兌）

○三ぼう主義（宮川壽美子著）

國を治むるには、女房、佛法、鐵砲の三ぼう主義でなければならぬ、言ひかへれば、家庭、宗教、兵備の三つは最も大切な事柄であるといふ書の下に、英國の家庭・社會に就ての觀察、日本との比較、其他著者が滯英中の見聞所感等を記したもので、特に英國家庭の美點に就ては、最も委しく述べてある、家庭の事に就ていろ／＼問題の起つてゐる際に、此の書の出たのは嬉しいことです。（定價金八拾錢、日本橋區本石町寶文館發行）

○明治勅題歌集（村松清陰編）

明治二年より四十四年に至るまでの勅題歌を、御製を始めとし、預選歌に至るまで、すべて集め、尚ほ宮中歌御會始の次第、詠進者心得、歌會に關する參考事項、預選者府縣別等を附してある、是れまで勅題歌集の出版された者ないではないが、本書の如く一首も殘さず網羅したる者はないやうです、之を集めるに就ては非常に苦心したものゝよし。（定價一圓、神田光風館發行）

○少年少女對話集（松浦政泰監修）

女子大學校英文科卒業生九名の合著で、收むる對話は三十七篇、悉く歐米よりの飜案又は飜譯に係るといふ、多く經驗なき人々の著としては、非常の好出來で、學校或は家庭に於ける少年少女の教育資料の一として良い書物です。（定價金五拾七錢、小石川區櫻木町北文館發行）

○立春帖（多田親愛翁遺筆）

世尊寺流の書風を以て有名なりし多田親愛の筆蹟を折手本に仕立てたるものなり、筆力優婉女流の習字手本として實に絶好のものなり。（定價七十五錢、博文館發行）

○口語新書翰文（今井柏浦編）

はべるかしのむかしは元より、まゐらせ候の雅俗文も最早實用に適せずなりしは時世の變遷といふべし、此文口語體にて一新機軸を出す、文例いづれも簡潔にして趣味饒かなり。（定價四拾五錢、博文館發行）

○女子補習讀本（文學博士遠藤隆吉著）

本書は小學校教育を受けたるもの又は廣く一般の女子に對してこの必要なる智識を與ふるものなり專らこゝろの修養を主として、聖賢の逸事傳記、歷史ばなし、言葉使ひ、手紙の書方より家事の概略、科學の梗概までをも網羅して記述せり。（價三十錢博文館發行）

○偉人の妻（藤田霽子著）

奈翁、ビスマークの英雄、豪傑を始めとして泰西古今の政事家、學者、軍人、畫家、賢哲、文豪、詩人、にして歷史上有名なる人の内助者の傳記逸事を集め、其の性行閲歷の教訓に資すべき個所を集めて家庭の讀物としたるものなり、家庭百科全書第三十七編。（價四十五錢博文館發行）



懸賞組み繪

答案正當者(其二)

大阪 辻 きみ子
新潟 川島たけ子
肥前 田中はつ子
和歌山 一ノ木歌子
本所 坂井てる子
新潟 小川くに
鳥取 佐々木光子
福島 小林幸榮
朝鮮 井上光子
能登 古窪とも子
鳥取 里見久子
福岡 宮崎ちよの子
新潟 渡邊わか子
橫濱 木村ぬい子
熊本 金川きゆ子
神奈川 田口倭文子
滋賀 太田ひさ子
神奈川 山浦義勝
新潟 風間はな子
高知 島内松榮
新潟 川上よし子
越後 久保田久子
麹町 紀 喜代子

橫濱 新海靜子
門司 宇都宮慶須子
麹町 入谷咲子
鳥取 赤木今子
兵庫 日比乙女子
青森 吉田みゑ子
岩手 菅野かう子
兵庫 古淵杉乃子
石川 高田榮子
高知 高橋千代子
宮崎 木場田けい子
大阪 藤本房子
大阪 中山敏子
清國 安達茂子
鳥取 佐々木幸子
但馬 古佐禮子
芝 小林秀子
福岡 松尾まつの子
相模 松本やよ子
新潟 田巻なみ子
島根 小林すみ子
北海道 澁谷松子
大阪 鹽見ない子

石川 大谷内壽美子
東京 高橋みゑ子
朝鮮 大森のい子
東京 坂井一男
島根 安田文子
山梨 深澤千代子
石川 河井常子
廣島 増田喜代子
前橋 大澤いさ子
東京 鈴木京子
伊勢 松下たま子
大阪 筑紫千代子
福岡 山下滿乃子
德島 森 ふみ子
根室 早坂はる子
奈良 山本いと子
神戸 平松圓子
越後 小林とき子
愛知 大林たみ子
石川 伊藤わくり子
新潟 上村たい子
佐賀 加藤たけ子
相模 瀬戸しつ子

大阪 小川恒子
京都 川島安次郎
山梨 澁井いつ子
橫濱 覺正とみ子
越後 内藤たせ子
香川 田中依子
栃木 楡井せつ子
福岡 麻生廣子
香川 須田蘭子
東京 水崎濱子
鳥取 谷村壽子
長野 近藤ふみゑ子
朝鮮 山崎小雪子
羽前 浮須貞子
長野 大森かめよ子
鹿兒島 平川いく子
淺草 森田みき子
福井 加納ちく子
東京 小川美代子
伊勢 丁野つれ子
麻布 野口きち子
秋田 松下ろく子
常陸 清水しま子
岐阜 高橋よれ子
石川 山崎琴子
熊本 大島妙子
丹後 德田善右衛門
岐阜 細江こよき子
播州 青木柳子
群馬 栗原登代子
山形 木村なみ子

福岡 百東みつ子
京都 村上はる子
山形 佐藤とし江子
名古屋 仲野すゞ子
東京 土方元子
備中 逸見美代子
京都 清水賀代子
新潟 諸橋榮子
門司 岡和田よし子
下野 中村千代子
愛知 田中博
廣島 田中みつ子
大阪 鹽見峰子
清國 杉本榮子
京都 小野桂子
靜岡 勝又くら子
千葉 宮田蔦子
大阪 山田八重
福岡 前田ふじえ
島根 福島とみ子
日本橋 加藤清
埼玉 矢部登美
神戸 平島光子
丹後 森下かめ子
下關 飯田京子
朝鮮 片山しげ
廣島 小田つるよ子
千葉 飯塚たき子
千葉 中村喜舞子
越後 家田君子
佐賀 富岡とお子

千葉 武藤きみ子
茨城 高橋小ふじ子
大阪 森 しげ子
福島 佐々木てる子
越後 吉田光子
愛媛 高橋さだ子
千葉 高橋仙子
京都 四方千代子
長野 所 藤子
福島 北郷しづ子
新潟 松岡まつ子
福島 鈴木喜代子
新潟 津野咲子
相州 荻 花
京都 大野えん子
相州 宇都律子
朝鮮 白井こう子
東京 内田明治
京都 小物谷しげ子
京都 田村芳子
千葉 山崎たか子
大阪 赤松武夫子
神戸 坂西啓子
廣島 木村うら子
臺北 黒江重矢
臺灣 高野よれ子
澎湖島 青木うた子
肥後 野口とみ子
長崎 衛原須加子
豐橋 夏目はろ子
近江 西 うの子

富山 松井みどり子
東京 繪島雲子
和歌山 野村瀧子
兵庫 山崎きよ子
東京 時國たか子
埼玉 田口清子
福島 長南花子
但馬 市村鶴子
長野 原 あや子
福井 猪口きぬ子
北海道 布川久眞子
岩手 三田のぶ子
日本橋 田口きく子
三河 染谷千代子
石川 和泉とき子
山梨 末木かずえ
大阪 上杉楠枝子
北海道 衣澤幸子
北海道 天神林わきこ
福島 太田やす子
堺 奥村ひで子
名古屋 吉川あきえ
大阪 木村とめ子
東京 森 かれ子
大分 藤井郁子
牛込 佐藤やす子
廣島 淵野龍子
群馬 三俣ふじ子
三重 内藤五十鈴子
大阪 北村千代子
石川 大田ライオン子

福島　岩崎はな子
東京　坂本よし子
鳥取　山本との子
鳥取　前田せい子
鳥取　小川とし子
鳥取　勝山濱子
埼玉　池田衛子
栃木　金井うめ子
千葉　山口あや子
小石川　山本徽子
北海道　波多とよ子
新潟　附島やい子
福井　〃田貞子
栃木　鈴木まちの
栃木　鮎田たい子
神奈川　脇田馨子
岡山　笹井靜野子
東京　小林よし子
本郷　武居秋子
熊本小山てじゆ子
栃木　中島閑月
長野　岡田彌兵衛
埼玉　山口くに子
靜岡　國友秀子
京都　喜多川千代子
品川　平井喜久枝子
北海道　北山愛子
愛知　森こちよ子
本郷　住田しげ子
神奈川　落合のぶ子
山梨　依田とよ子

京都　久保田とら子
門司　後藤きさ子
廣島　高垣米子
横濱　吉田古操
靜岡　小池りき子
岡山　中島總子
福岡　廣瀬志計子
宇都宮　福地たけ子
札幌　田中秀子
本所　河野しゆん子
長野　仁科あや子
埼玉　金子敏子
福井　飯田安惠子
肥前　加藤ずゞ子
東京　泉鈴子
神戸　吉田佐和子
仙臺　山岸滋子
鹿兒島　大塚たれ子
鳥取　智　惠子
名古屋　庄司文子
小石川　石井芳江
石川　細山いそ子
群馬　田島きぬ江
埼玉　酒井政子
埼玉　發智靜子
備中　太田勝次
京都　藤田たれ子
愛媛　佐々木千代子
岐阜　水野喜賀子
鳥取　福井靜子
愛媛　佐藤仲子

備中　高塚辰野
淺草　坂野よし子
牛込　岡崎ちゑ子
北豐島　益田きよ子
福岡　龍さち子
横濱　小島美子
福島　大橋きん子
岩手　菅原ぎん子
青森　秋野こと子
横濱　山口常子
廣島　八木政子
秋田　畠山たま子
千葉　澤田勝子
小石川　村田秀子
福岡　喜久田すみ子
奈良　藤井きぬ子
長崎　藤原久子
愛知　谷口とし子
長崎　平野龜子
茨城　桃谷彦枝子
山口　堀木不二子
佐賀　於保しづゑ子
京都　木原美代子
茨城　柴原さく子
新潟　樋口ひろ子
新潟　澤村なへ子
大阪　田川ひろ子
大分　加賀きつ子
鹿兒島　天達つえ子
淺草　小山ふさ子
茨城　針替かつ子

栃木　細川くに子
牛込　川浦美代喜子
奈良　稻葉いく子
京橋　東地辰子
新潟　西村春子
京都　畑山その子
茨城　植木りゑ子
岩手　三浦すが子
京橋　山田ひで子
豐橋　堀越不二子
福井　三上つれ子
福岡　上野つる代
丹後　村田しげ子
青森　佐々木千代子
樺太　矢野たまよ子
大阪　細川鱗生
山口　三奈木總子
芝　榊原うめ子
水戸　藤村靜枝
本所　秋山みれ子
芝　建部もと子
芝　建部かな子
大久保　中島保武
靜岡　土屋みな子
麻布　岡田きよ子
本郷　松本やす子
北海道　北條光子
廣島　波多さだゑ
栃木　君島喜代子
千葉　小山松江子
靜岡　山本みつえ

麹町　牛山よし子
本郷　橋多賀子
新潟　澤海とし子
東京　山極美喜子
青森　濱中つき子
滋賀　村田文子
岡山　成平龍太郎
臺灣　信藤和子
金澤　中野より子
山形　奥平わか子
富山　渡邊ゆき子
八王子　大久保富士
福岡　後藤元吉
臺灣　大谷のぶ子
靜岡　渡邊千代子
北海道　寒河江ゆう
岩手　松瀬すわ子
京都　山本とし子
陸奥　相馬たき子
臺灣　林孝子
大阪　村上藤衛子
新潟　吉田せつ子
朝鮮　佐脇捨尾
富山　山岡ひろ子
小樽　山本多計代子
大分　杵築幼稚園
神奈川　金井みさご
佐賀　入田照子
茨城　清水かね子
佐賀　石井梅喜代
福島　宍戸千代子

福島　安達しげ子
朝鮮　山田まん子
弘前　谷山なり子
群馬　鹽谷かく子
東京　秋山まさ子
兵庫　宇野さつ子
本所　森よしよ子
横濱　土肥孝子
東京　甲斐ふじ子
茨城　杉浦りう子
北海道　岩間芳子
小石川　遊間かつゑ子
臺灣　四宮支店
大阪　富永千代子
島根　水津利喜子
朝鮮　野淵とみ子
福島　山田いく子
長野　櫻井定吉
東京　清水美貴子
東京　神崎とし子
新潟　日置直子
北海道　澤田龍美子
和歌山　佐藤節子
臺北　吉田とく子
浮羽　濱江はる子
北見　山口千代子
福島　宮石君子
滋賀　清水歌子
愛知　鈴木やす子
岡山　池上壽惠子
近江　森ます子

山梨　小池玉穗
大阪　木谷たつ子
福岡　栗田糸代子
山形　陶山梅子
廣島　今中靜子
出雲　桑原
島根　中尾悦子
朝鮮　平山よし子
滋賀　林こと子
伊豫　林すゑ子
臺灣　牧島八重子
長崎　佐伯すじ子
宮城　山本はな子
横濱　櫻井せい子
岡山　原貞子
群馬　古屋しな子
陸奥　川村てつ子
長野　大和田ちかゑ子
秋田　辻八重子
新潟　和氣英子
石川　小村晴子
宇都宮　馬場三枝
東京　齋藤千代子
大阪　猪瀬幸子
千葉　黒須つとめ
新潟　阿部きよ子
青森　今村まる子
横濱　伊藤しげ子
越後　樺澤きた子
東京　橋元貴子
弘前　平野薫子

長野　萩原露子
德島　小坂梶野
兵庫　山本こさだ
長野　市村那美子
麻布　小原ふく子
熊本　川村きみ子
島根　木村すれ子
長春　久保田芳子
越中　矢部そとえ
長野　原かれよ子
北見　室備いち子
石川　篠原和子
大阪　武智貞子
長野　丸山不美子
神田　大澤だい子
伊勢　下村靜代子
秋田　土田えん子
島根　永井つれ子
岡山　藤田清香
新潟　内海靜子
福岡　渡邊たみ子
山口　冷泉ひで子
愛知　川合よし子
北海道　柴田そいイ
長野　大井喜美子
四谷　山下志津江子
和歌山　山本信惠
宮城　千葉もとき
根室　堀尾しまこ
新潟　大谷うめ子
大阪　井藤比奈子

京都　村上かづ子
千葉　成島文子
栃木　福田ふさ子
小倉　木部はろ子
大分　小野しん子
熊本　戸田協子
長野　西澤元治子
靜岡　外山きみ子
千葉　安西龜子
大阪　千満子
福島　鈴木ちえ子
奈良　岡本秀子
香川　小林卷英
仙臺　中里ますみ子
淡路　佐伯ふみ子
山口　三宅梅能子
德島　榎本ゆき子
靜岡　山本あや子
新潟　押見たしち子
山形　松浦ちか子
奈良　向山きよ子
横濱　岩間こう子
山形　佐藤せえ子
新潟　小柳愛子
秋田　三浦みよ子
大阪　金地政子
群馬　椎名しん子
和歌山　杉山かつ子
愛知　大木延子
山口　神田そめは子
三重　出口ふさ子

四谷　加藤おつ子
東京　砂山きく子
鹿兒島　旗島滿子
東京　坂本重雄
熊本　間部とみ子
鹿兒島　久留清夫
東京　井上澄子
青森　川島まさ子
北海道　青木たか子
清國　伊東いれ子
四谷　須田壽美子
廣島　木原政子
茨城　栗田まつ子
兵庫　荻野まさゑ
岐阜　國江りか子
茨城　廣田あさ子
新潟　早田まさ子
新潟　高見滋代子
愛媛　富永梅野
福岡　岸原てい子
岐阜　鵜飼あや子
米澤　佐藤淑子
滿洲　靜江子
福岡　行武ゑい子
茨城　莊野えつ子
福岡　黒澤さい子
米澤　我妻なが子
伊豫　能田勝惠子
兵庫　いそ子
岩手　三浦さかき子
肥前　隈部芳子



神田　笹野銀子
新潟　熊倉ゑき子
清國　西田禮子
和歌山　堀内みどり子
牛込　加藤花子
新潟　加野ふみ子
宮城　遠藤芳子
香川　長尾芳子
新潟　岡田とみ子
愛媛　豐島おふさ子
兵庫　谷口ちよの
石川　讃文子
群馬　村上ふみ子
山形　高城常子
肥前　鹽塚つたゑ
京都　本多千鶴子
横須賀　德廣みさゑ
長野　牧野つめ子
大阪　足立末子
兵庫　沖鹽花子
朝鮮　小野遠子

新潟　姉崎桂子
奈良　杉澤千榮子
芝　柴崎種德
熊本　富田たか子
日本橋　山田ちかえ
佐賀　江口たつ子
北海道　赤坂靜子
山形　池田まさ子
靜岡　勝亦ひろ子
麴町　笠ふく子
岐阜　柴田すう子
北海道　西村壽子
熊本　松尾芳枝子
横濱　平田きく子
伊豫　鷹田松乃子
大阪　島仲ひら子
京都　千代子
愛知　藤村たか子
東京　浮田たき子
麻布　戸田光子
宮崎　内田きか子

島根　高橋喜代加
北海道　菅原幸子
北海道　松田なほ
新潟　山内みさほ子
靜岡　大橋於英子
岡山　富山千登勢子
大阪　新もろえ子
清國　三條喜代子
伊豫　織田やす子
山梨　渡邊さち子
栃木　手塚貞子
八王子　金子たれ子
名古屋　堀くに子
大阪　毛利高子
府下　唐松みつ子
佐賀　石井まろ子
千葉　宮田むめ子
新潟　梅澤なみ子
愛媛　秋山惠美子
山形　福田しづ子
横濱　岩上富美子

愛知　山田しく子
大阪　西澤かつ子
廣島　加藤俊子
淺草　井桁すゞ子
根室　齋藤よし子
長野　荻原誠子
長野　平林乙女子
横須賀　藤岡好江子
埼玉　永田濱子
三重　豐田秀代子
大阪　原田さく子
群馬　佐藤佐千子
大阪　村西衣子
越後　小坂さく子
福岡　牛島澤子
沼津　山崎ふみ子
宇治　濱夕美子
靜岡　本間きろ子
根室　六郷きよ子
大阪　安井つれ子
岩手　工藤ゆき子
山口　山下はつ子

募集（三月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる寄書は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊	（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊	（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八冊	（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六冊	（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二冊／增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四中頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●増目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十五年二月廿三日印刷納本　第拾貳卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　市川七作

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番／千十八番

本局　二千六百二十番／三千二百二十九番

シーズン漸やく到れり矣

野球界

三月一日發行　第二卷第四號　定價十五錢郵稅一錢

改題以來頓に部數を增加して、今やスエズ以東、ゴールデンゲート以西、正確に野球を說くもの獨り本誌あるのみと許せらるゝに至れり。

春風氷を吹いて遠山の雪やう〳〵斑也。健兒起たずや、鐵棍閃めく處、熱球雲雀を驚かす。あゝ快なる哉、

本誌三月號は百尺竿頭更に一步を進めて、大いに內容を更めたり、野球界諸名家の寄稿は勿論、各野球團消息、逸話寫眞等を滿載す。

來れ！來れ!!來りて十五錢を投ぜよ

發行所　東京日本橋本町三ノ十　野球界社　□　大賣捌　東京本町　博文館

（後付の一）中

英語世界

第六巻第三號（三月一日發行）　正價金十錢　郵税一錢　●前金一ヶ年十二冊一圓廿二錢

（後付の二）

東京　博文館　本町

中(後付の三)

英語が出來ぬと大きくなつて困りますよ

英語少年

第二巻第三號 三月一日發行

樂しみ乍ら英語の勉强の出來る世界一のやさしい面白い書入雜誌

○西洋お伽武勇傳
○リーダーの研究
○發音と符牒の話
○新講義英語小話
○太郎のアルバム

○書ばなし……
○和英諺合……
○新式日記……
○英語笑記……
○號令英語……
○英語顧問……
○懸賞新題……

初等英語の理想的雜誌

四六判二倍大判●紙數五十二頁
●六色凸版畫及寫眞銅版畫數ヶ個入
正價金十錢郵税一錢

○ひとり會話
○外國切手談
○和英珍聞集
○ABC新聞
○語句の諳解

△フランクの葉書……
△教場外の英語解……
△英和交り馬泥棒……
△讀本に在る熟語……
△新案乘合飛行器……
△順番數の讀み方……
△書讀本と書會話……

每號●英文和譯●和文英譯●書作文●英習字●滑稽英和問答●英語考へ物●語句の諳誦等各種の懸賞新課題

東京 博文館 本町

(後付の四)

實業少年

第六巻第三號

□四六判二倍大紙數七十二頁□
□光澤寫眞版四頁色刷挿畫滿册多趣味□
□正價金拾錢□郵税一錢□

三月一日發行

△人生の萬事を豫測すべき道具……幸田博士
△吾輩の十五六歳の時は朱子學に反抗した……大隈伯爵
△珍畫ばけ物の行列手を打つて笑はずには居られない……
△胃腸を強くする法……後藤國手　△誰にもできる紙の顯微鏡
△最奇抜十二大商店客扱の新研究……

たった拾錢で立身の道を教へる實業雜誌

△岩手縣の後家に大奮闘大成功をした及川もと子
△日本に只一人と言はるゝ銃身矯正の名人國友氏
△荷車の後押新聞配達少年今は博進社専務取締役なり
△小賣商店に注文して改良を乞ひたい點……澁澤男爵
△口繪と彩色中繪の多趣味は本誌の大得色

東京日本橋本町
振替東京二四〇

博文館

（後付の六）

(後付の七)

文藝倶樂部

三月一日發行

第十八卷第四號

○菊判本文紙數三百廿頁
○原色寫眞版一枚○寫眞版光澤紙刷
八頁、普通四枚、二色刷光澤紙二頁
○木版彩色數十度刷錦繪一枚
正價廿五錢　郵税二錢五厘

春寒料峭我れ人ともに炬燵にうづくまらんとする際美しき咲みを洩らすもの、世に梅花と文藝倶樂部と在り、三月號の卷頭には生田葵氏作雄篇『重荷』を掲ぐ。氏が一箇年に亙る薀蓄と修養とを傾注せる者なるを以て刮目に値す、次ぎに飜譯界の重鎭ことさらに無名氏と署してコナン、ドイル氏傑作の『秘密の扉』を譯述す。此の篇果して如何なる秘密や藏する？讀んで其の興味の無盡藏なるに驚かれむ。第三の中村吉藏氏作脚本『爭』は、河合武雄氏に嵌めて書き卸せるもの作者が澄瀾たる新味を見るべし、尙新講談は前號を受けて寶井琴窓氏愈進んで『梅忠』の粹を口演す活社會演藝界長廣舌花柳界等愈出でゝ愈ゝ面白きものゝみを以て充つ梅花の芳香を愛づるもの又此の誌を愛せずして可ならんや



東京　博文館　本町

中（後付の八）

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界　第拾貳卷第四號　(毎月一回廿三日印刷納本)

明治四十五年二月廿三日印刷納本



監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑳
明治45年2月（第12巻第3号）、3月（第12巻第4号）

2011年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4003-9　C3321